

城之介非情剣

—一人ずつ順々に—

早乙女貢



城之介非情剣

—一人ずつ順々に—

早乙女貢

新潮社

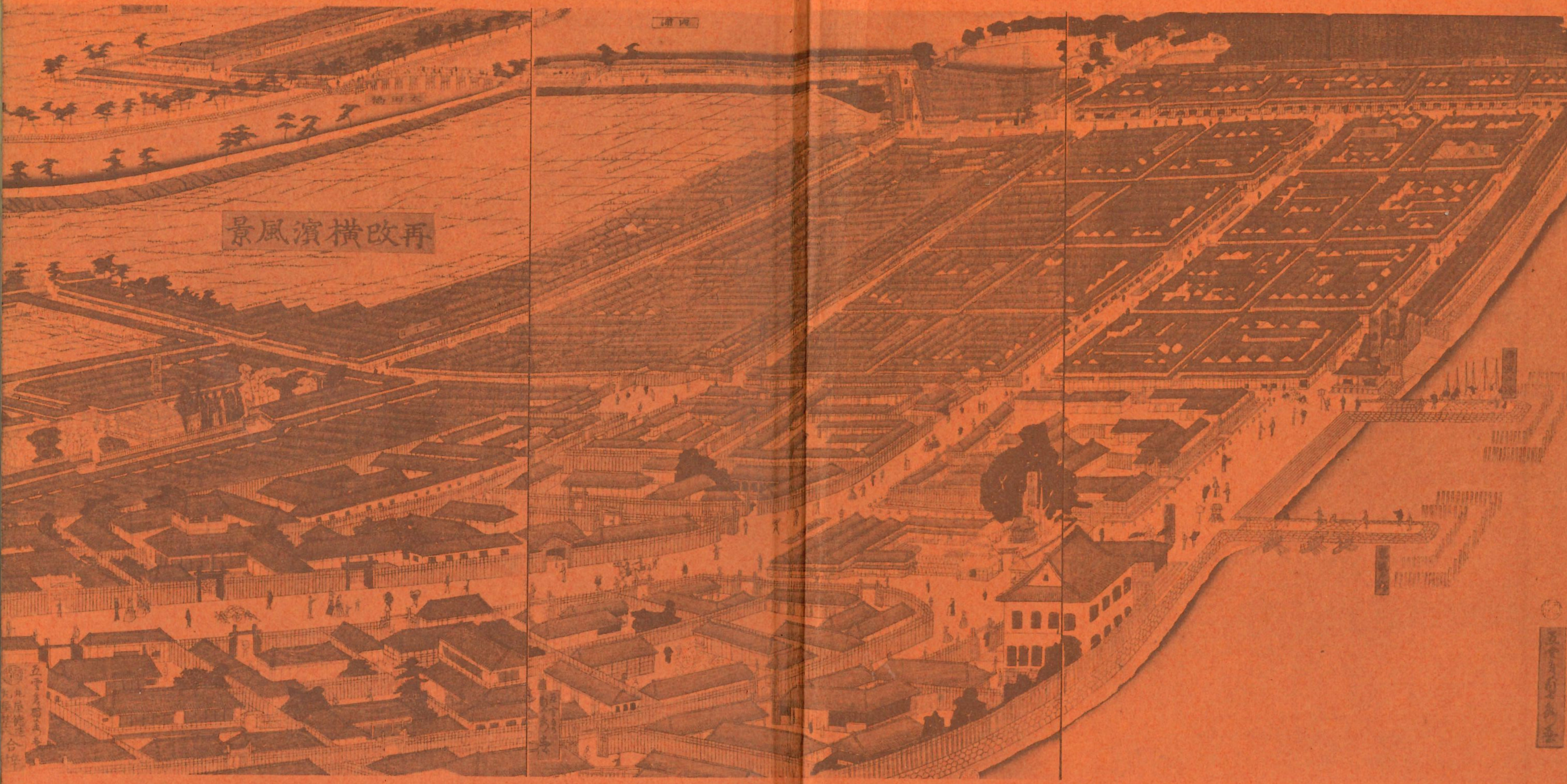


城之介非情剣

―一人ずつ順々に―

早乙女貢

新潮社



再改横浜風景　五雲亭貞秀画 丸屋甚八版

城之介非情剣

——一人ずつ順々に——

早乙女貢



新潮社

異人館の女

海上へ出ると、思ったより風があった。暗い沖合に碇をおろした船の灯が、潮風にまたたいて星屑のように見えた。蒸気船や三本檣の外国船は夜霧におぼろな影を見せているだけである。

葦の間からすべり出た小舟は、へさきを沖に向けて、忍びやかに櫓を軋ませた。

布告にあるようなカンテラもつけず舟篝火も焚かず、夜にまぎれて漕いでゆく。ギイギイッと櫓の音だけが、やけに高く聞えるのだ。

突然、ボーッと霧笛が聞えた。

「ちぇッ、驚かせやがる」

船頭は思わず、からだを固くして、

「心臓が凍ったぜ、おかげで寿命が三年はちぢんだようだ。旦那、酒代ははずんで下さるんでしょうね」

「無事に着けば、だ」

孤舟には船頭だけと見えたのだが、浪人者が一人、蓆を敷いて寝そべっていたのである。

「捕まれば酒どころじゃなくなるだろうぜ。それとも打首になったあとに樽ごと注ぐか」

「ちょちょッ、縁起の悪りい冗談はよしておくんなはい」

船頭は、またあたりを見廻した。

「わっちの友達の源という野郎も、攘夷浪人を乗せたってんで、百叩きの上に入墨追放でさあ、あんな目にゃ逢いたくねえや」

「心配するな、おれは攘夷浪人ではない」

「へえ?」

そうとしか思えなかったのだ。船頭は口を噤んだ。

ここ数年来、異人斬りが流行っている。横浜の居留地には関門を設けて、幕府の警備隊が一々通行を調べ、条約国でも居留民の保護を名目に、それぞれの軍隊を駐屯させて示威の調練など派手に行なっている。

居留地は寒漁村に埋立てして波止場をこしらえ、英一番館、米一番館など洋館が櫛比する新開地だけに、大岡川に渡した吉田橋を閉じてしまえば、完全に孤立していた。

幕府では長崎の出島に似た隔離政策をとったのである。したがって、海上からの潜入者を警戒する役人の眼は深夜も光っているはずだった。

（おかしな浪人だぜ）

と、船頭は肚裡の中で思った。

禁をおかすのだから、過分に船賃は貰っている。

(異人斬りでなきゃァ、ちゃんと関門を通りゃいいじゃねえか)

何も、危険手当を過分に払ってまで、潜入することはない。

「へえへえ、そんなふうには見えませんがね、ですが……」

「なんだ」

「いえね、見っかりゃ、申しひらきは利かねえんで」

「そのときはそのときだ」

浪人は突き放すようにこたえて眼を閉じた。

ひと眠りするつもりか。

この若いくせに、妙に腹の据わった浪人者には、何処か不気味なところがある。端正な顔立ちだけに、かえって、翳が深いのだ。

(イザとなったらよ、飛びこんで逃げちまえ、知ったこっじゃねいやな)

船頭は腹をきめた。

舳先を沖へ向けたのは、神奈川に近い洲干弁天のあたりが、もっとも警戒の眼がきびしいからであった。

神奈川の宮之河岸に横浜と往復の渡船場があるが、ここには番所役人がいて、厳重に取調べをしている。むろん、居留地側にも番所があって、さらに取調べるのである。

居留地は扇形の変形で、東波止場、西波止場がそれぞれ外国貨物と、内国貨物の揚卸場になっていた。中央から神奈川寄りの方が、日本人街で、商賈が軒を並べている。

番所のある渡船場は、吉田橋から真っ直ぐ来た突端だから、役人の目を憚って潜入するには、異人館の多い海辺通りの方が、むしろ安全であった。

浪人者はどこで調べてきたか、船に乗るとき、そっちへつけろ、と言ったのである。

船頭は驚いて、

「菜ッ葉隊は少のうござんすがね、その代りに、短筒が狙って来まさあ、どてっ腹に風穴あけられちゃァ……」

「そのほうが、楽でよかろう。狙われたら心臓にあてて貰うことさ」

この男と話していると、世の中に難かしいことはないような気にさせられてしまう。度胸がいいというのか。船頭が、やはりとんでもない御法破りだと気がついたのは、沖合へ出てからだった。

(こうなったら、一蓮托生だあ。それにしても、呆れたお人だぜ)

ひとまず沖へ出て、異国船の間を縫って居留地へ近づいた。

「旦那、旦那……」

「着いたか」

「へえ、間もなくでんがね、旦那、ちょちょいと、眼を貸してやっておくんねえ、ひょっとして、役人の船が潜んでるかもしれねえンで」

波止場のなかには、ひっそりと大小の船が浮んでいる。

「波止場は危うござんすからね、石垣ンとこへつけまさ、気をつけて上っておくんなさい」

幸い、眼はないようだった。

浪人者は紙にひねったものを、ひょいと船頭に投げて、

「酒代だ」

「へえへえ、こいつァ有難うさんで。あ、旦那、この居留地で何かあったら、太田部屋の要蔵親分を頼みなさるがいい、居留地じゃァ大した顔なんで」

その語尾をぶち切るような銃声が聞えた。

時が時だけに、船頭は仰天した。

自分たちが撃たれでもしたように悲鳴をあげた。

「逃げろ、役人がくる」

武士は刀を腰に落すと、石垣にとりついた。

隠れるのではなかった。道にあがって平然と海辺通りを歩きだしたのである。まるで、通い馴れた道を歩いているような悠然たる足どりだった。

ばたばたと、走ってゆく数人の乱れた足音が聞えている。

怒号がその方で起った。番所から飛び出してきた役人が誰何したのであろうか。

道を曲った。少しでも海辺通りから遠ざかったほうがいい。次の四つ角に来たとき、

「もし、お救け下さいまし」

女の声がした。

白い顔がこちらを向いていた。誰か地上に横たわって呻いている。

「いまの銃声か、やられたのだな」

「はい、どなた様か存じませぬが、手を貸して下さいまし、怪我人を……」

倒れて呻いているのは異人だった。武士は肩を貸すと、女の導く方へ連れていった。この二人は、人目を憚っているらしい様子で、裏通りの洋館へ入った。

ここがどこの国の何番館か、わかりようはない。

「有難うございました。お蔭さまで……」

と、女は礼を言った。

黒襟のかかった黄八丈を着ているのは、こんな時刻に起きていたのか。十七八であろうか、細おもてに、黒眼のはっきりした美しい女である。

(洋妾かもしれぬ)

と、思った。

怪我した異人を寝台に寝かせたあと、女がしたことは、財布をとりだして、数枚の洋銀を差し出したのだった。

「ほんの心ばかりにございます」
「要らぬ」
「いいえ、御礼でございますから……あのままでしたら、難儀なことになっていました」
　表の通りで大勢の声がしている。役人たちは下手人を捕えたのか、逃がしたのか。
　どんな事情があるのか。その詮議を恐れているようだった。礼金をやって追い払ってしまいたいのだろう。
「受けとって下さいまし、そして……」
「それさ」と、かれはうすく笑った、
「役人と顔を合わしたくないのは同じなのだ」
「……」
「どうだろう、ここで一晩、寝かしてくれぬか。明日になれば出てゆく」
「困るんです、あたし……」
　女は眉を寄せてかれを見た。近寄って洋燈をかかげるようにして、あ、と声を洩らした。
「あなたは!?……」
　女の驚きが何を意味しているか、かれには、その表情だけで充分だったようである。白い端正な面に怒りに似たものが、走った。
「眼の色が違うようで驚いたようだな」
「……」
「日本人だ、安心しろ」
「ええ……でも」
「今夜のことはおれは何も聞かぬ、おまえも聞かないでくれ。それから、今夜泊めてくれると有難いのだ」
　端正な顔立ちといい、白すぎるほどの白面が、一見混血を感じさせた。
　ただ、それにしては、黒の紋服に博多の白献上という着流し姿が似合いすぎたことである。
「わかりました、こちらへお出でになって下さいまし」
　連れてゆかれたのは、階段を上って二階の裏の隅にある小部屋であった。
　女の部屋らしい。寝台があって桐簞笥が置かれ、天井から極彩色の洋燈が吊り下げられて、ごちゃごちゃの調度だったが、居留地の異人館と黄八丈の娘というだけでも、アンバランスなのだ。その不調和が、不調和のままに、なんとなくおさまっている感じだった。
「ここなら、誰も入って来ませぬ。お休みになって下さいまし」
「――そなたの部屋か」
「女くさくって、おいやでしょうけれど」
はじめて、女は微笑った。陰のある笑顔だった。
「病人を見て来ます。どうせ、お医者を呼んで朝までかかると思いますから」

　洋燈を持って出ようとして、扉のところで振り返った。
「あたくし、雪乃と申します」
「おれは、城之介だ。異人はジョーと呼ぶ」
「ジョー?」
ちょっと小首をかたむけ、出ていった。あとに笑顔が残った。
　城之介と名乗った武士は、帯を解こうとはせずに、寝台に横になった。
　刀は放さぬ。
　あの女は何者なのか。単なる召使いだろうか。洋妾にしては、崩れていない。
　異人が鉄砲で撃たれたのを救けるときも落着いていた。あの年ごろの女なら、もっと恐怖や狼狽が多いはずであった。
　あの様子から見て、怪我人は、誰かを追って出て、あの辻で撃たれたのだろう。二人の仲をしかし穿鑿するのは、いまの城之介には、無用なことに思われた。
「――眠ることだ」
　城之介はつぶやいた。
　かれには、役人の目をぬすんで潜入してくるだけの、目的があったのだ。城之介ははじめて帯を解き、下帯だけの裸になって寝台に入った。刀を手の届くところに置いたのは、むろんのことだった。
　どれくらい眠ったろうか。
　城之介は、音楽を聞いていた。夢の中で聞いているようであった。遠い昔、幼いころに聞いた記憶がある。夢の中で、城之介は少年のころにもどっていた。
　母が笑っている。何か言っている。笑顔が近づき、口を吸った。そうした風習にはさほど驚かない境遇ではあったが、母の唇の感触が甘く、情欲の匂いがした。
「あっ……」
「好き!」
　女の声は、母のそれではなかった。城之介の顔を両手にはさみ、唇はねっとりとかれをもとめてきた。
　それが、雪乃だと知ったのは、濃厚な舌のまじわりののちに、大胆にも、夜具をはねのけて、しがみついてきたとき、
「ジョー!」
と、うつつに叫んだからだった。
　まだ、部屋には夜の色が残ってはいたが、カーテンの隙間から洩れる空は明るい紫紺に染まっていて、ほそめにした洋燈のいろが夢幻のように淡い。
　夢ではなかった。あの音楽は聞えていた。それがオルゴールだと気がつくまでにちょっと間があった。
　雪乃は全裸だった。若いからだが、しなやかに、かれに

まつわりつき、その手は夢中で下帯のものに触れようとしている。
　こうしたことを望んで泊ったわけではなかったが、城之介にはそれを拒む気もない。女の手が、情念をつたえるほど、白絹を破るばかりに強く硬くふくれて、熱を帯びてくるのがわかった。
　女の手が、その思いだけが、あふれて、なかなか下帯から目的のものをつかみ出せないのは、六尺の白絹を用いた下帯を解くのは、はじめてだからではないかと思われた。
　はじめてなのは、それだけではない。ここまで大胆に挑んできたのに、男のものをつかむと、その手が、はっきりと初めての怖れを伝えてきたことであった。
「……」
　その疑惑は、城之介の指が女のほうに触れたとき判然とした。
（はじめてではないか、この女は!?）
　城之介がこれまで相手にした女は、数えきれぬ。若い娘もいたし、後家もいた。むろん、何ほどかの銭で一時の慰めを売る女もいた。それらの多くの経験からしても、明らかに、雪乃は、未通女だった。
「そなた！」
　おどろきに応えて、雪乃は狂ったように顔をふった。
「いいの、いいんです、お願い！　女にして下さいまし、早く……」
　狂ったような熱情の中に、城之介は引きずりこまれた。
オルゴールは止んでいた。
　この洋館が蘭四十九番館で、傷ついたのは仏人のディブスキという男だった。
　誰に撃たれたのか、どういう事情があるのか。被害者のくせに隠そうとしているのは何故なのか。複雑なものがあるのかもしれぬ。が、詳しい事情を知る気はない。その朝、城之介は四十九番館を出た。
　かれが行った先は、唐人町であった。
　この慶応二年の秋には、まだはっきりと、のちのいわゆる南京街は出来上っていない。ただ、清国人が多くいて、百番以上の番地の一角に関帝廟が出来たりして、なんとなく清国人の姿を多く見かける程度だった。
　それらの清国人の大半は、料理人や異人館の使用人などで、小さな店には、あふれるばかり清国人が群がって、食べたり飲んだりしていた。
　関帝廟のわきの屋台に首を突っこんで、
「徳はいるか」
　と、聞いた。
　大きな鍋を長い箸でかきまわしていたひょろりとした男が、眼をあげた。泥鰌髭に湯気が光っている。

「長崎から来たのだが、徳に逢いたい」
　日本語がわからないのではない。そういう性格なのだろう。黙って、火の前を離れると、歩きだした。
　そのとき、ふいに呼びとめた者がある。
「おい！」
　と威嚇的な声で、
「見かけないやつだな」
　菜ッ葉隊と、悪口をいわれている、浅黄の羽織を着、足ごしらえを厳重にした役人だった。
　城之介は聞えなかったように振り返りもせず、行こうとした。別に急ぐふうもない。その様子が、攘夷浪人に神経をとがらした役人には、意外な感じで、言葉をあらためた。
「待ちなさい」
　城之介ははじめて聞えたように、ふりかえって、
「おれか」
「左様さ、ほかには居らぬ」
「居るではないか、人間は多い」
「清国人に用はない。胡乱なやつは、おまえ一人だ。姓名を聞こうか」
「忘れた」
「なに！」
　かっとなった。役人は小者を連れていたのである。これほど、蔑みを受けたことはないのだろう。小者のてまえもある。みるみる真っ赧になった。
「きさま、上役人を愚弄するか」
「いや、本当のことさ」と、その激昂に乗ろうともせず、冷たく答えている。
「姓は忘れた」
「な、名は……」
「――城と呼ぶ者が多いな」
「なんじゃと！　ジョーだと、こやつ、日本人のくせをしおって」
　刀の柄に手をかけた。その袖を、小者がそっと引いて、何やら囁いた。どことなく混血じみた顔立ちに気がついたのだ。
　が、それくらいでは、この短気な男のひとたび煮えかえった腹はおさまらなかった。
「なんじゃァこやつ、怪しいやつは番所へしょっ引くのだ。来い」
「よせ」
　灰色がかった眼が、冷たく、深い哀しみの色を湛えて役人を見た。
「おれのからだに手をかけるな」
「黙れ、上役人を愚弄するか」
　抜き討った。
　攘夷浪人の跳梁は、不審な者の斬り捨てを黙認していた

のだろう。朝の陽の中で白刃が奔った。黒紋服の城之介のからだが一瞬、動いたと見えるや、こころよい金属音とともに、白刃は頭上たかく舞い上っていた。
　その次に人々が見たのは、脇差を半ば抜いたまま、地上に転がった役人の姿である。
　城之介は刀を拭いもせずおさめると、屋台の男を促して関帝廟の裏手へ歩きだしている。
「——斬ったのかしら」
　こう呟いた女がいる。
　近くの洋館の二階から、白い顔がのぞいていた。襟と袖口にレースのついた洋装であるが、髪は黒く、顔立ちも日本人に変らない。
　観音開きのガラス窓をあけて、一部始終を見ていたらしい。
　彼女は、鈴を鳴らした。清国人の阿媽が階下から上ってくると、
「馬車の用意を」
と、命令した。
　それから、机の引出しをあけ、拳銃をとりだした。掌の中にすっぽりと入りそうな銀製の小さなものである。握りに派手な蔓模様の象嵌がある。弾丸を二発込めてから、手提袋に入れた。
　フリルの多い帽子をかぶりながら辻へ視線を投げると役人が、何やら喚きながら、苦しそうに身を起すのが見えた。峰打ちだったのか。もう、城之介の姿はごみごみした露地の奥へ消えていた。

牛乳風呂

　陽があがったというのに、その部屋には闇が残っていた。明るい戸外から入ってきた眼には、突然、奈落へ落ちたように、とまどいを感じるのである。
　仄暗いのは、この部屋に窓が無いからであった。倉庫のようにはじめから窓を作らなかったのか。僅かに、火皿の火がちろちろと幾つか燃えているだけで、その微光が照らす範囲が、おぼろに見えているだけだ。
　奇妙なものがうごめいていた。
　男か女かわからぬ肉塊であった。外は秋だというのに、全裸なのだ。
　部屋の中は異様な臭気に満ちていた。戸をあけたとき、すぐにそれと感じたのである。分厚い絨緞のようなカーテンが二重に重く遮っていて、かきわけて入ると、強烈な臭いが鼻腔を刺し、澱んだ温気が顔を搏った。
(阿片だな……)
　城之介は、はじめてではない。長崎で何度か、こうしたところを見ている。
「来了」
　お出でなせえ、と椅子から立ち上った男がいる。
　背は低いがずんぐりして首がうずまり、腕力に自信がありそうな男だった。
　案内の屋台のおやじは口早に、玄徳を捜していなさるのだ、と言い、城之介を引き合わした。
　それから、こいつは楊だ。万事こいつが知っているから、と言って出ていった。
　長崎で育った城之介は日常の会話ならさして不自由ではない。
　楊が地下室へ降りていったあと、城之介はその汚ない椅子にかけて待った。
　この場ちがいな武士など、歯牙にもかけず阿片癮客たちは、それぞれに陶酔していた。
　ジージーと虫鳴きさせてねっとりと青黒い膏薬のような阿片のかたまりを器用に練って長い煙管で吸いつけている老人や、煙管を投げだして、裸身を悶えさせている女などさまざまだった。
　その女の一人が、とろんとした眼を城之介に投げて、手をのばした。
「哥々……哥々……」
　甘い声で呼んでいる。阿片に恍惚となった眼には恋しい男に見えるらしい。
　蒼白い肌が男を待てずにうごめいているのだ。その妄想

に浸りきって、時も場所も、すべてを忘れているようであった。
「——いるよ」
楊がもどってきた。
地下にも室が用意してあったのである。城之介がおりてゆくと、上よりもさらに暗いところに、何やらうごめいていた。
玉すだれがかけられ、帳台には、二つのからみあったからだがあった。
さだかではないが、逞しい男と、嫋々とした女体のようである。うすい紅絹をたっぷりと襞をとって四方柱にしぼって、ゆるやかにそれがゆれているのは、空気窓があるからではなく、天井にとりつけた大きな団扇がひとりでに動いているからだった。
「ああ……もっと、もっと強く、あ、あ……」
絶え入らんばかりのかぼそい声と、それにかぶさる男の火を吐くようなぜいぜいした喘ぎが、淫らで熱っぽい情景をくり展げている。
女か男かも判然としない暗さなのだ。これが明るいところなら、城之介も正視出来なかったろう。
楊は話を通じたはずだ。これが済むまで待っているほど閑人ではない。
「——徳か」
城之介は、その闇にうごめく豚のようなからだにむかって声をかけた。
喘ぎがやんだ。まるで、城之介の存在にはじめて気がついた如く。
「徳？……ははは、わたし、玄徳」
「長崎から来た城之介だ。丸山の王に紹介されて来た」
「……」
「以前、長崎にいたそうだな。いろいろ訊ねたいことがある」
「ちょとまて」
「上で待っている」
城之介は階段をのぼろうとして、上り口に立ちふさがった男の影に気がついた。
その影に殺気を感じた。はっとしたのである。地下室という不利な立場を一瞬に理解した。危険を冒してこのヨコハマへ入ってきた身なのだ。
殺気には敏感だった。城之介は、たたっと階段を駆け上った。
その眼に、立ちはだかった影が、何やら刃物をふりあげるのが見えた。
その男が、あの楊であり、肉切り庖丁を叩きつけてきたのだと知ったのは、駆け上りざまにガッと抜き合わして、そのままもつれるように入れかわったときである。

身をひねっての捨身の掬い斬りだった。
股間から、腹を撫であげるように、逆割りがきまった。
血の尾を鋩子にひいて、城之介は飛び上っていた。
場所が場所だった。城之介には永居は不利だった。阿片は対英通商条約でも禁止ということになっているが、国内での吸飲にはまだ幕府はさほど気をつかっていない。というよりは、土台がぐらつきはじめているときに、阿片どころではないのだろう。
城之介のような風来坊は、〝攘夷浪人〟と目されたらそれっきりである。居留地では、この連中ほど、怖れと同時に憤怒の対象になるものはない。
異人館はいうまでもないが、日本人の商家が軒を並べている本町、弁天町すじでも、血に飢えた狼と同じに見られている。
清国人たちは、ことに異郷にゆくと結束が固いのだ。
城之介は、阿片窟を飛びだした。
（彼奴は、ほんとうに玄徳だったろうか？）
その疑問が胸に来た。
城之介は、玄徳と一面識もない。丸山の王秀峯という男が、かれに逢うことを奨めた。
城之介の目的に、寄与することができるというのである。
ヨコハマには清国人の集まるところがある。関帝廟の前で聞けばわかるということだった。
その通りにしたところが、この危難に遭遇したのだ。
（王は人を瞞す男ではない）
城之介は信じていた。
（だが、あの男が玄徳としたら、どうして楊がおれを襲ったのか？）
昨夜からわからないことだらけだった。
このヨコハマへ潜入したとたんに、鉄砲騒ぎがあり、事件に巻きこまれた。
仏人ディブスキを救けていったばかりに、雪乃との情事があった。
（なぜ、雪乃はおれに処女の肌をくれたのか？）
泊めてもらうだけでも有難かったのに、雪乃はすすんで、かれに抱かれた。
（女にして下さいまし、早く……）
その声が耳にある。
もの狂おしげに、思いつめたような表情と、かれを入れて、黒髪を乱れさせた女体の情熱が、まだ肌に烙印のように残ってはいたが、あまりにも疑問が多すぎた。
一夜の客に、気まぐれの情事とは思えない。
たしかに、彼女自身の言う如く、未通の肌だったのである。
ディブスキがピストルで撃たれて、軽傷ともいえないの

に、表沙汰にしようとしないのも、尋常ではないのだ。
城之介は、人通りのない路へ出てから小さくたたんだ絵図をひろげてみた。
ここへ潜入する前に、ヨコハマに関する出版物には、たいてい目を通してきた。懐中の絵図は、去年出た〔横浜明細全図〕の改訂版であった。
「——おう、どちらへお出でなんで？」
声をかけた者がある。
眼つきの鋭い若い男だった。藍微塵に小倉帯をしめて、海風が寒いのか、弥蔵をこしらえ、
「ハマのことなら、なんでも聞いておくんねえ、アメ一の誰ァ何丁目の何てえ娘に気があるか、港崎町で遊ぶにゃ格子が幾らで、何楼の誰ァ蛸壺で誰が開けっぴろげで……」
「親切だな。だが、今は頼むことはない」
「へえ、そうですかねえ。関帝廟の辻じゃァ大騒ぎしてますがねえ」
じろりと、掬いあげるように見る。
(知っている！)
城之介が思わず顔色を変えると、男はぱっと、飛び退った。
「ととと、抜いちゃいけねえ。唐人を真っ二つにした刀でこちとらまで、ばっさりとは気が早え」
「きさま……」
「剣呑だねえ、旦那、そんなふうでハマを歩いていちゃァ、一刻たたねえうちに御用ですぜ。ま、どうせ他人様のこった。どうでもいいですがね、その二本差はどうで目に立ちすぎる。役人に聞かれたら、請人は末広町の豚鉄だと言いなさるがええ」
「豚鉄……」
「豚屋鉄五郎でさ、いえ、わっちじゃねえんで……あ、いけねえ」
何を見たのか、身を翻した。
「その豚鉄とやらの身内か」
「へえ、メリケン参次、てのが、わっちで」
それきり、そそくさと姿を消した。
役人らしい男がくるのが見えた。逃げたのはそのせいだろう。役人に顔を見られてまずいのなら、その身内になるのは考えものだ。
案の定、役人は誰何してきた。
今朝の奴とは違うが、うさん臭そうに、探りを入れる目つきは、大差はない。
「おい、おぬし、鑑札がないな」
と、早くも、そこへ目をつけた。扇子でひたと、鍔元をさした。
関門や舟着きの番所を通って入ってくる者は、素姓を調べた上で危険がないと見た場合、帯刀許可の木札をくれる。

それを柄頭からぶら下げて歩くのである。
阿呆らしいようだが、それが法律ならしかたはない。城之介はそのことはむろん知っていた。
「鑑札のことか」
と、余裕を見せて笑った。
「あれは、ここへ所用でくる者の為であろう。拙者は、居留地にいる。住人はその必要はないはずだ」
「住所を承ろう」
調子が変ってきた。
「蘭四十九番館だ。請人はディブスキ。問い合せてくれればわかる」
何がそう大胆に言わせたのだろう。
ディブスキなら、昨夜、秘密を保つのに手伝ったのだから、下手なことは言うまい、と思ったのは、多少の疑いを残しながらも、役人が立ち去ってからである。
馬車が止っている。
太田町八丁目の牧場の前である。今の山下町加賀町警察署付近だが、このあたりに当時牧場があったといっても、理解に難いであろう。方二町ほどの、牧場といっても、放牧するのではない。乳しぼり場、と世間では呼んでいる。
さっき、城之介の姿を見て馬車を仕立てた洋装の似合う女である。
「弥太さんは？」
馬車から転げ落ちるようにおりると、女は駈けこんで言った。
「ああ、弥太なら、三番小屋でしぼっているわな」
煙草を喫かしていたおやじがにやりとした。房州から出てきた留吉という男で、さきごろ乳牛六頭ではじめたばかりだが、外人たちの需要が多く、アメリカから三十頭ばかり買入れて、有卦に入っているところだった。
「あの用なら、裏の家で待っていなさるがええ」
「……」
「お前さまが、今朝は一番早いがの」
なんのことかわからない。
牛乳買いに来たことはない。雑用は清国人の阿媽がしてくれるのだ。
「——弥太さん」
待っていられなかったのだろう。その裏の家へはゆかず、牛小屋に入った。
中年の肩幅の広い男が牛乳をしぼっていた。桶の中へきゅっきゅっと絞るたびに、面白いように白い液体が奔り出る。
「——なんでえ、お仙さんか」
じろりと見上げた男は、眉をしかめた。
「ここへ来ちゃいけねえ、ひょっとして見られたら」

「あいつが来たんだよ」
「え?」
「長崎から」
それだけで充分だったようである。
弥太は顔色を変えて立ち上っていた。
「まさか!?」
「本当だよ。関帝廟のところに来ていた。若いくせに、凄腕だよ。お前のことを嗅ぎつけたら、ここにくるかもしれない」
「……」
「だから、あれを……」
そういう間も、お仙はそわそわしているのだ。弥太は牛乳しぼりをやめ、手桶を下げると、
「ここじゃ人目に立つ。向うで話そう」
と、促した。
裏の家というのは新しい洋館だったが、中へ入ると、意外にも舶来物らしい風呂桶が据えてあるのが見えた。
竈の大釜へ牛乳をあけて沸かしている。
「へえ、知らねえのかね。いま、ハマじゃ評判じゃねえか、牛乳風呂さ」
「ああ、聞いたことがあるけど、牛乳の中に入ってどうするのさ」
「肌に艶が出るってな毛唐は大喜びよ。女ばかりでよ。とんだ眼の保養が出来るってものだ。どうだ、お仙さんも入らねえか」
「いいよ、あたしゃ」
「たっぷりあるぜ、牛乳は。こんな贅沢もたまにはしてみるものさ。若返るぜ」
「結構だ。これでも十七八に見てくれる旦那がいるのだから」
「こいつに入ってみねえ、あんな爺じゃねえもっといい旦那が見つかるぜ。長崎のときのような」
「そんなことはいいから、あれをおくんなさいな。こうなったら、おまえに預けておけないもの」
「十両のかたに預かったものだぜ、奴が来たからって、そう簡単にゃ戻せねえ」
「だから、ありったけ持ってきたから」
小判や洋銀や、それでは足りないのか、腕輪もはずして、
「これだけあれば、十両以上になるよ」
「さあ、どうかな。物ァ売らなきゃ銭にはならねえ、売る手間をさっ引きゃ、それだけじゃ足りねえな」
「そんな、足もとを見て」
お仙は、手提袋の中のピストルを握った。小型だが銀製の象嵌のある精巧なものである。
そのとき、窓のカーテンの隙間から外をのぞいた弥太が、
「いけねえ、おやじがくる。さ、早く、脱ぎな」

「え!?」
「脱ぐんだ。牛乳風呂に入るんだ」
急かされて、お仙は洋服を脱ぎはじめた。
「急ぎねえ」
しかたはない。あわてて脱いだ。コルセットをしていなかったのは、お仙は細身だし、苦しいからだ。しなくても恰好はいいのだ。牛乳風呂に入ったお仙は、気味悪さに耐えながら、
「弥太さん、あたしの幻燈を早く渡しておくれな」
「待っていな。洗ってやるぜ。牛乳風呂には洗い方があるんだ」
おやじがくる、と言ったのは、出まかせだったのか。かっとなってお仙は出ようとした。
「瞞したのね。ちくしょう、あたしをどうしようってんだい」
「どうもしねえ。可愛がってやろうというだけさ。え、おれァ、長崎ンときから、おめえを好きだったが、おめえは洟もひっかけなかった」
「何を言ってるのさ。仲間じゃないか、色恋よりも、密貿易のなかまで、儲け仕事が第一じゃないかえ。長崎くんだりまで流れていったのに、色恋なんて」
「そうでもねえや、人間、金と色さね」
弥太はゆっくりと、お仙の裸を撫でまわしている。
「いやだよ、堪忍して」
「いやなこたァねえだろう、いい気持だろう」
「いい気持だけど……幻燈を」
「博奕好きなのが、お仙の泣きどころだってな。一人頭三百両にもなるやつを、十両のカタにするのも、ツイてなかったな」
「お前を信用したからじゃないか」
弥太は又、外を見た。足音が聞えたような気がしたのだ。
弥太はお仙の手提袋をとると手を突っこんだ。
「あ、それは……」
「ははは、おめえがいつも持っているのを見せびらかされているから忘れねえさ。コルトの何とかっていったな」
「触らないで」
「こいつァ、燧石式みてえな、古物じゃねえから、水ン中でも撃てるって自慢していたっけな」
弥太はピストルを手にとると、お仙の手つきを見て憶えていたのだろう、安全弁をはずした。
「あ、危ない。何をするのさ」
「ちょいとな、験してみるのさ」
銃口をお仙の咽喉にあてた。
「二発きりだったな」
「やめて、弥太さん……後生だから」
「ヘルプ、とかって叫びねえな。え、そうすりゃ、助かる

かもしれねえ」
「お願い……あっ」
銃口が咽喉から乳房の谷間に線を引くようにすーっとおちてきて、かたちのいい乳房を嬲り、乳首を、すぽっすぽっと銃口で捺した。
「はははは、こいつァ面白ェ……おい、立ちな。立つんだ」
「助けて、弥太さん……もう幻燈はいらないから、お願い」
「面白えな。真っ赤な血が吹きゃなお面白えがな……」
女が牛乳風呂の中に立ち上ると、弥太は銃口を臍にあて、それから、さらに下の方へとおろしていった。
そして、白い乳液にまぶされた草むらを分けて、さらに下におり、ひたと、花芯におしあてた。
ひいーっと女は咽喉で悲鳴をあげた。
「お仙、おめえのからだの血は赤かったかな、黒かったかな。見せて貰うぜ」
戸が開き、城之介が躍りこんできたのはそのときである。
「弥太！」
刹那、轟然と銃声がし、小さな煙が吹いた。弾丸は、花芯から真っ直ぐ女体を貫いて駈けのぼったにちがいない。
赤い花片が溶けて流れたような鮮血が内腿に伝わると同時に、お仙は牛乳の中に滑りこんでいる。
弥太が二発目を向ける一瞬に城之介の刀は振りおろされていた。的確に、脳天から顎の下まで割っていたのである。
「お仙……」
呆然たる城之介の眼に、下から噴きあがってくる血の色が鮮烈なまでに牛乳風呂の水面を染めていくのが見えた。

幻燈の肌

新鮮な牛乳に光った女の肌には、一見どこにも傷らしいものはない。
小さな銃弾は、下から上へ貫いて、頸骨か頭蓋骨に食いこんだのではないか。
多勢の男に愛されたであろう女陰も、銃口を奥深く突っこんでの発射で、陰唇のあたりには、それほどの破裂も見られない。
もしも、夥しい出血がなかったら、お仙は牛乳風呂に浸っているとしか見えなかったろう。
ただ、その表情は、恐怖と驚愕で、かっと瞠目し、口を半ば開いたまま、硬直して即死を物語っていた。
城之介は一たん女体を引き上げたが、死んでいると見ると、あきらめたように、もとへ戻した。
両手をだらりと出して、女の表情は変らない。
「幻燈をかえせといっていたな……」
むろん、この城之介の言葉は独り言に終る。
部屋に飛びこむ前に、二人の会話を聞いていたのだ。
城之介は刀の血のりを拭って、ガラス窓から外を見た。
銃声は戸外には洩れなかったのだろうか。広い敷地だし、一発きりだったので、それを聞いた者も、おやっ、と思っただけであろう、騒ぎ立てる者はいない。秋の午前の静かな乳しぼり場である。
弥太もまた一刀でこときれている。
そのからだから溢れ出る血が床を染めていた。
弥太の着衣を調べたが幻燈はない。
〃幻燈〃といっていたのは器械ではなく、ガラスの幻燈板のことであろう。
城之介は弥太の部屋を捜した。奥の小部屋がそれだった。持物といってはべつになく、夜具と着替えが何着かあるだけだ。行李が一個。その中に無造作にほうりこんであった新聞がある。
当時は日刊ではない。週刊か十日ごとで、それでも速報だった。ジャパン・ヘラルドやジャパン・コンマーシャルの翻訳転載である日本毎日新聞から、ほかにも翻訳新聞は、日本新聞や横浜新聞などが発刊されていた。
城之介の眼を引いたのは、中の広告である。朱でまるく囲んであった。
その広告は、
〃驚異の写真術、美しき姿を永遠に残さんとする方は来れ！　弁天通りに富士山写真館あり、元祖下岡蓮杖 撮影仕る〃

和英両文である。

城之介はそれを懐中にして出た。ほかには幻燈に関する手がかりは全くない。

弁天通りで富士山写真館を聞くとすぐわかった。日本人ではじめて写真屋をひらいた男で、当時有名だった。もともと狩野派の絵師だったという。城之介もその評判を長崎で聞いていた。

「乳しぼり場の弥太のことで来たのだが」

と、城之介は言った。

明らかに蓮杖は動揺を見せた。尊大な顔に急に困惑が浮んだ。が、さぐるようにかれを見て、

「まだ、出来ませんのでねえ」

「幻燈のことを聞きたいのだ」

その確信があったわけではない。ただ写真というものの新しさが、そこに関聯を感じさせたにすぎない。

それが的中った。蓮杖はてっきり弥太に頼まれて来たと錯覚したらしい。

「あれはですな、ちょっと難かしいのでね、もう二三日お預りしていないと、何とも申し上げられないのですがねえ」

「……」

「まあ、アメリカにでも送れば出来ないことはないと思うんだが、二カ月や三カ月はかかることだし、へたをすると半歳かかるかもしれないし、それで……」

「とにかく、引きとる。今だ」

蓮杖の饒舌で確信を得た城之介はずばりと切りこんだ。

「それが、どうも、弱りました。手許にはないので」

預けた、という。

仏蘭西公使館だという。

その一言で城之介がひき退ると思ったのか。実は弥太の依頼に応えての処置ではなかったのだ。

「よかろう、おれが受けとりにゆく。委任状を書いて貰おう」

それで漸く白状した。

「実は幻燈会が今夜ありましてねえ、何か変ったものはないかと、知り合いの仏蘭西人に聞かれたもんで、つい……」

幻燈板は、弥太に複写を頼まれたのだと蓮杖は言った。

写真術を習得してから、まだ数年にしかなっていない蓮杖には、幻燈板を複写することなど、思いも及ばない。

考えてみるといって一応預かっていたという。

（そうか、弥太は、複写が出来たら、一つを自分のものにするつもりだったのだろう）

幻燈板に秘密がある。どうしても入手する必要があった。

お仙と弥太は死んだが、まだ連類は多い。

「公使館には、紹介者なしには入れませぬ。私が参りましょう」

蓮杖は責任を感じているようであった。

幻燈会はいうまでもなく、日が暮れてから行われる。蓮杖としても、しかし、会で使わないうちに引取るのは、気がひけた。一度でも映写したあとなら、言い出し易い。

夕方になって蓮杖が出かけたときは、本町一丁目の仏公使館前には、馬車が何台もとまり、着飾った男女が入ってゆくところだった。

居留地に商館がどんどん建っていたが、諸国の領事館ははじめ神奈川の寺院などに仮住いして、なかなか横浜に移ろうとしなかった。攘夷党の焼打ちや異人斬りがはげしくなって、幕府では護衛に手を焼いていたのだが、阿蘭陀の領事が、まず洲干町の埋立て地に移った。

宏壮な新領事館が出来ると、幕府の外国奉行やその他役人をはじめ、諸外国の公使領事などを集めて、大夜会を催した。国旗台の頂点から四方へ張った綱へ、阿蘭陀の国旗を描いたのや、紅白の提灯を数千と吊り下げて、その煌々たる灯は横浜中へ輝いたという。

この仏蘭西公使館が建ったのは去年である。その一周年の記念をかねての夜会だった。

ちゃんとした招待状を必要とする男ではない。

宵闇が庭の植込みの陰を暗くしてから、城之介は公使館に忍び込んでいた。

明るい室内では、それぞれお国ぶりの盛装をした男女が笑い興じていた。日本人の姿も見える。羽織袴でこちこちになった武士や商人が、その数は決して少なくはないのだが、外人たちのようにおおらかに談笑するのではなく、やたらと、ぺこぺこして、一隅にかたまっている。

洋装の夫人や令嬢などにまじって、日本の女性も見えた。ダンスをしている男女もいる。オルガンの音が、一層、この夜の浮かれた空気を華やいだものにしているのである。

その群れから離れて、露台に出てきた女がいた。

（あの女は!?）

あやうく叫びを洩らしそうになった。

思いがけなかった。あの女——蘭四十九番館の雪乃ではないか。

どういう人々が招かれているのか、見当もつかないが、ディブスキが傷を負っているので、代りに来たのか。

雪乃は光線の工合か、沈んで見えた。

夜更けに、城之介にしがみついてきたときの、大胆で情熱的な行動とは別人のように、陰のある表情だった。

もっとも、昨夜のその記憶は鮮烈であり、雪乃の動作の一つ一つまでが思いだされるのだが、どこか自棄的な行動だったのも疑えない。

それにしても、このヨコハマに潜入して最初に言葉を交わした女であり、向うから持ちかけられて抱いた女なのだ。

ここで逢うのは偶然であろうか。
それともディブスキの一件と何らかのつながりがあるのだろうか。
茂みから顔を出して、城之介は呼ぼうとした。
そのとき、グラスを手にしたフロック・コートの男が出てきて、小腰をかがめ、何やら話しかけるのが見えた。
雪乃は弱々しく微笑して拒んでいる。そのもの柔らかな態度が、フロックを益々増長させたようである。図々しく手をとろうとしていた。
幻燈がはじまる、という囁きが伝わってこなければ、もっと積極的に出たかもしれない。
男は残念そうに、大仰な手ぶりで首をふって、それでも腕を貸そうとした。
雪乃はまるで、そんな風俗に馴れないように、それも断わって、重い足どりでみんなのあとから入っていった。
露台とそのつづきの広間に、人影がなくなると、城之介は身を起した。
「おい、こんなところで何をしている」
背後で声がした。公使館に傭われている警備の者であろう。
「庭をな、散策していた」
城之介は落着いた声音で振りかえるや、やにわに、拳を突きだした。拳ひねりに水月を一撃。利いた。うっ！　と言葉にならず、その夜番は海老なりに、身をまげて、のめっている。
的確だった。まず一刻ほどは正気づく迄、間がある。
城之介は露台の欄干を飛びこえた。
広間の隣室ではすでに幻燈がはじまっていた。
幻燈の光源はランプである。光は淡い。が、当時としては、最高の明るさだ。室内の一切の灯を消した暗闇の中に、極彩色の絵が浮び上った。
秋の夜で、戸外はうすら寒いがこの暗闇はむっとするほどの温気がこもっていた。これだけ詰めこめば体温だけでも高い。適当に酒が入って上気していたし、感激と昂奮がさらに温気を高める。腋臭の強い異人の女たちは香水をふんだんにかけてきているとみえ、各種の匂いが混然として異様に動物的な臭いが充ちていた。葉巻をやたらと、男たちがふかしているのは、それらの臭いをまぎらすためかもしれなかった。
女性たちはアクセサリーにすぎなかった羽根扇や象牙の扇子などをつかいはじめた。
『殿方に申し上げますが、葉巻はほどほどになさいませぬと、ノートルダム寺院が火事になってしまいますよ』
きんきん声でこう言うのが聞え、葉巻の煙が笑いに揺らめいた。丁度ノートルダムが写っていたのである。
その仏蘭西語がわからなかった人々も、傍の者から通訳

して貰って、遅まきの笑いを洩らした。
きんきん声の女性は今夜のホステスの一人で、白豚のように肥満している。マダム・ショーメットと呼ばれていた。ショーメット商会は生糸を主に扱っている貿易商だ。さっきから得々として場面ごとに解説している。
セーヌ川が写ったり、フォンテンブローの宮殿が写った、かと思うと、突然、ロンドン塔が写ったりした。
『おやおや、世界がばかに狭くなったようですね、いっそ、こんどは亜米利加に参りましょうか、鳥にでも連れていって貰いましょうか』
幻燈機に幻燈板を入れる方では、ろくに聞いていなかったらしい。写ったのは、長崎の風景だった。
丸山遊廓にゆく道のせいか、思案橋と名づけられた有名な石造半円型の橋で、俗に眼鏡橋と呼ばれているものだった。
『ナガサキ！　おう、私もよく知っています、これはヨシワラの入口です。殿方が、〃私は行くべきか戻るべきか〃と思考するところでございます』
人々は笑った。
が、その笑いは、名解説の故ではなかった。
眼鏡橋の上に七八人の男女が写っている。
その中の女の顔が削られていた。その部分だけがランプの明りを透かし通したのである。
（あれだ、弥太が複写を頼んだのは！）
城之介は、はっきりとそれを感じた。
その写っている人物の中に、見憶えのある顔が入っていたのである。
白く削られた顔の女は、お仙に違いない。
お仙が自分で削ったのか、はじめからそういう約束でやったのかわからない。ともあれ、この幻燈板が、かれらのなかまの証拠であることは間違いなかった。
ひとしきり笑いとざわめきが起ったなかで、場面はマルセイユに変った。
『同じ港でもナガサキとは違いまして、マルセイユは大仏蘭西国の数々の光栄をその華麗な風光に秘めて……』
ショーメット夫人の声がかん高くひびくなかで、日本の商人たちの間で、囁きが交わされていたのである。
「あの中に、遠州屋さんによく似た人がいましたね」
「へえ、私もそう思ったんですよ、そっくりで」
「左様、右から三番目にな。そういえば、そっくりでしたな。もっとも少し痩せているが」
「遠州屋さんが夏痩せしたということで」
「たしか、遠州屋さんは、長崎に行ったことがないという話でしたがね」
「そうですか、だが、案外長崎のことはよく知っていまし

たよ」
「そうすると、御兄弟かの、あれは弟さんでも……」
「聞いてみましょうか、さっきお出でになっていたようだが……」
この暗さでは、どこにいるのかわかりようはない。終ってから、ゆっくり酒の肴にしようという気持でかれらは幻燈に見入った。
そのとき、幻燈機に近づいた男がいる。
「いまの写真だがね、少し調べたいことがあるので、お貸し願えませんかな」
『……何ですか』
幻燈機の操作をしていた男は、けげんな顔を向けた。日本語がよくわからないらしい。若い館員である。
「いま写したやつ、長崎の、ナガサキ」
遠州屋は焦ったように言い、手をのばした。
「もし、遠州屋さん、ちょっと」
と、写真屋の蓮杖が口をはさんだ。
かれはこの幻燈会が済むのを温和しく待っている心算だったのだが、この脇から出てきた男に、持ってゆかれそうになったので、あわてたのである。
「その写真は実はね、私がある人から頼まれていたもので、お貸しできませんよ」
「いや……それァ知っていますさ、お仙でしょう。噂では死んだそうですな。死人と約束があっても、それは……ま、金は幾らでも出すから」
このひそひそ話は、近くにいた者にも聞えている。遠州屋は、揉めていては損だと気がついて、財布から数枚の小判を数えもせずつかみ出すと蓮杖の手におしつけて、
「ま、あとはまたゆっくり御相談しましょうや。その写真を、とにかく……」
ナガサキと聞いて館員は何やら面倒だと思ったのだろう、それをとりだした。
遠州屋が摑んだとたんである。
「その写真はこちらに貰おうか」
こういう声が聞えた。
遠州屋は胆が冷えたように、立ち竦んだ。
人々もざわめきをやめ、一せいにふりかえった。ドアを開けた者があり、広間のシャンデリヤの明りが流れこんだ中に、一人の浪人者が立っているのが見えた。
「ローニン!?」
恐怖の声が起った。
月代をのばして大小を横たえた着流し姿は、居留地の異人にとって悪魔よりも恐ろしい存在であった。
ほかの部屋からも、数人がランプをつかんできた。明るくなった中で、しかし、城之介は静かに見わたして、
『私は攘夷党ではない。余人には危害は加えぬ。騒がぬこ

とだ』
流暢な英語だった。人々はほっと息をつくと同時に、あらためて、その白皙の顔を見、意外に端正な風貌にさらに安心した。
攘夷だ異人斬りだと狂躁的な連中の険悪さは、遠くから見ても、それとわかったのである。
「遠州屋、その写真をよこせ」
「ふん、話したいことがあったら、外で聞くぜ」
憎々しげに吐き捨てるように言い、ぱっと逃げ出そうとした。
刹那、城之介の長身が一跳した。シャンデリヤの明りをたち切るような、凄絶な白光が奔り、ぎえっと、遠州屋が棒立ちになってのけぞった。
すぽっ、と音がした。
幻燈板を握ったままの片腕が、宙に勢いよく飛ぶのが見えた。
幻影ではない。はっきりと目の前で起ったのである。血しぶきが遠州屋の幅の広い顔にしぶくのを見て、卒倒した女もいる。
こうした時勢だけに、拳銃を懐中にしていた者もかなりいたはずだが、城之介に気を呑まれて、取り出すこともできなかったようである。
ぱちりと、冴えた鍔音がした。かれらの恐れるサムライの白刃は朱鞘におさめられていた。
遠州屋の巨体が音を立てて倒れ、号泣してもがいているのに目もくれず、城之介は片腕を拾うと、指をこじあけて、幻燈板をとりだした。ガラス板である。
写真のタネ板は陰画だが、これは陽画で、白黒の上に何色か絵具で彩ってある。
幻燈板は当時手描きの絵が大半で、陽画はまだ珍しい。反転現像なので高価だった。
「お騒がせした。浄め代だ」
これは日本語でいい、城之介は洋銀を数枚、卓子の上に投げて、部屋を出た。雪乃には、むろん慮ったうえで、声をかけなかったのである。
城之介が立ち去ると、室内は騒然となった。医者を呼ぶ者、血を拭かせる者、片腕を拾うのは誰もが尻ごみするし――その騒ぎの中で、あのショーメット夫人だけは妙に落着いて、うろたえ騒ぐ女たちを鎮め、男たちを叱りつけた。
『さあさあ、私たちには関係のないことですよ、怪我人を診るのは医者ですよ、血を拭くのは掃除人ですよ。私たちはシャンペンを飲んでキャビアを食べて、殿方はラムを飲んで葉巻を……』
肥りたいだけ肥ったこの老女には、今夜の楽しみは、これからが本命なのであった。
いままでのは前奏曲にすぎなかったのである。これから

というときに、とんだハプニングで、むしろそのことのほうが興が削がれた思いだった。老人になると、今日の楽しみは、明日にとっておく余裕がない。貴族と自称するこの白豚の初老夫人は、ごてごてと飾りたてた宝石を見せびらかすことにもすでに飽きて、動物的な食欲と色欲が、むしろ墓場が近づくに従って亢進しているようであった。こうした欲望は正常を欠き、変態的であるほど、満足感が大きくなる。

『さあ、幻燈をはじめましょう、今度は風景ではありませんよ。大いに楽しい日本的デカメロンですよ』

それで漸く、人々は、この出来事を忘れようとした。まだ血の匂いは残っていたが、腋臭と香水と葉巻で、それはすぐにかき消されるだろう。

ふたたび、映写幕の上に、ぱっと、絵が写った。これはなんと歌麿の春画だったのである。写真ではなく、そっくり模写したものだけに、あざやかな色彩が強烈に目を射た。忍び笑いとささめきが妙に淫らに揺れて、人々は完全に、血しぶきを忘れた。

カタリとガラス板をとり替える音がして、歌麿は消え、代りに写真が出た。一瞬、人々は笑いを止めた。

それは、色はついていなかった。が、あまりにも迫真的だった。全裸の日本の娘が横たわっていて、下肢をあげさせた男が、秘所に唇をつけている写真であった。

苦しげに眉を寄せているその女の顔は、雪乃だった。

顔のない女

春画は、一名、笑い絵ともいう。

この邦では、古来性の交わりを、おおらかなものに受けとめる風習がある。浮世絵の類いもそうだ。陰茎を誇大に描くことによって淫靡な男女の交媾を笑いで柔らかくくるんでしまう。女陰の描写もリアルではない。綺麗な下腹に柘榴のように弾けた裂け目を描いてあるものが多い。

淫猥な感じが少なくなるから、笑いのゆとりで鑑賞できるのだ。その歌麿の幻燈がそうだった。

満場の異邦人たちは、娘も夫人も、傍の男の眼をさして意識することなしに、楽しく眺められた。

が、その笑いを打ち消すような男女の写真が出たのだ。あまりにも現実的なベッド・シーンだった。

画面いっぱいに女の白い肌が写され、下肢を片手で持ち上げて、秘所に唇をつけた男はしたがって背中が見えるだけで、横顔だった。

秘所を写そうとする構図だけに、男の顔はいささか無理に、ねじ歪っている。栗色の柔らかそうな髪で三十代であろう。

その鉤鼻ともみあげに特徴があった。

女は雪乃であった。

雪乃が全裸で、顔もはっきりと写っているのだ。

もしも城之介がこの幻燈を見たならば、信じられなかったかもしれない。雪乃は処女だったのだ。これほど大胆な姿態が処女に出来るだろうか。だが、写真をとって幻燈板にする過程から見ても、城之介に許す前の姿だったのは疑いない。

「ユキノ……」

「ディブスキ……」

場内のざわめきは、明らかに、その二人の名を口にしていた。

男たちは雪乃の裸身に食い入るように目をむけ、女たちは、やはり自分のからだと比較するように凝視した。

商館や公使館の異人女たちが、殊に自分たちのライバルである日本女性の肌に興味と敵意を寄せたのは当然であろう。

男たちは、ディブスキを羨望し、女たちはそうした男の気持を敏感に察して、口笛を吹き鳴らした者さえいた。

『こんな写真は、居留地の女性を侮辱するものですわ』

ヒステリックな老婦人の叫びで、映写係りは、あわててカタリとはずした。

そのときはもう、雪乃は面を蔽って戸外へ駈けだしてい

た。満座の中で耐えられなかったのだ。
（羞ずかしい……）
　死にたい、と思った。
　うしろで誰か呼び止める声がしていたが、振向くこともできない。夢中で夜の街を走った。このまま、波止場から身を投げてしまいたい。
（でも、あたしが死んでも、あの写真はいつまでも残ってしまう……）
　好色な男たちの侮蔑と嘲笑の観物となるのは耐えられなかった。あの幻燈板があるかぎり、いつまでも、人々の眼に自分の裸身を曝けだしていることになる。
（あれはとりもどさなければ。そして砕いてしまわなければ）
　それまでは死ぬにも死ねない。
　雪乃は引き返そうと思った。
　そのとき、背後から、馬車が走ってきた。馬は一頭である。ふんぞりかえって葉巻を咥え、顎鬚の生えた異人が乗っていた。
「ユキノさん、お乗りなさい」
　見憶えのある顔だった。亜米一のブラウンというおそろしく肥った男だった。ブラウンじゃなくてブタさんだ、と日本人の出入り商人や仲仕の人足たちの間では囁かれている。この男も夜会にいた。むろん、雪乃の裸は見たはずだ。
「いいえ、あたしは……」
『わかっている、わかっている』だから手を貸してやろうというのだ、とたどたどしい日本語で言った。
「幻燈板はとり返してあげます。お乗りなさい」
　そう言われると断わりきれなかった。馬車は本町通りから弁天通りへ入った。店先に多勢人が群れているところがあった。
　遠州屋だった。主人の思わぬ災難で、店の者は上を下への騒ぎに夜陰を忘れている。
　ブラウンははじめ、ここへつけさせようとしていたのだが、店の前までゆくと、急にこのまま、六十九番館に向うように命じた。
　馭者は黒人である。明快に返事して、鞭をふるった。
　そのとき、店の近くの露地から走り出てきた者がある。
「待て」
　あっとブラウンは咽喉が詰ったような声を出した。
「ノウ、いけない、ローニン」
　いけないといったときは、その影は飛び乗ってきていた。拳銃をとりだしたのだが、脇差の抜き打ちが、容易にこれを叩き落していたのである。
「待っていたのだ、ブラウン」と、城之介は刀を突きつけたまま言った。「遠州屋を見舞わないのか。薄情だな」
「あなた、知りません。降りて下さい」

「思いださせてやる」
「……」
「六十九番館に着くまでに思いだすことだろうな」
　襟飾がしゅっと裂けた。城之介の刀の鋩子が馬車の震動でわずかに触れたのだ。
　ブラウンは真蒼になった。城之介の手並のほどは、目撃したばかりなのだ。
「城之介さま！」
「雪乃さんは黙っていて貰おう。私は怨みを霽らすために、長崎から来た」
「……」
「ブラウン、その胸におぼえがあるだろうな、いまさら、言を左右にしても、誤魔化しおおせぬぞ」
「ノウ、ノウ、人違いだ、わたしじゃない」
　ブラウンは葉巻を口からおとして、わめきたてた。
　六十九番館は居留地の東南のはずれである。堀川に臨んで、浅間山と向きあっている。昼間なら墓地にしている岡の中腹の十字架が見えるはずであった。安政の御開港以来、この土地で死んだ者は多い。むろん、攘夷ローニンに斬られた者も含まれているのである。
　六十九番館に着くとブラウンは度胸を定めたように、先へ上っていった。
「あなた、人違いです。私、怨まれるおぼえない」
　さかんに言い張るブラウンの赧ら顔は、雪乃の眼にも、狡猾な連中とは違っているように見えた。
　その雪乃の胸に兆した疑いを払うように、
「母を殺した」と、城之介は言った。
「父も殺した」
「ノウ、ノウ、私ころさない」
　椅子から立ち上って、両手をふりながら、喚くブラウンの言葉に耳を藉そうともせず、
「店の品物を奪い、火をつけた」
「まあ！」
「十年前のことだ。おれも焼き殺されるとこを清国人に助けられた。そうだな、ブラウン」
「知らない。人違いだ」
　顔を真っ赧にして否定しているが、馬車の中ほど強くはない。
「雪乃、そこらを探してくれ、長崎の幻燈板があるはずだ」
「ノウ、いけません、許しません」
　ブラウンの制止も、いきりたてばたつほど罪業を裏書きするようなものだった。それに気がついて、力を落してきたとき、雪乃は机の引出しの奥から、紙にくるんだ幻燈板を探し出した。

大きさと重みで、厚ガラスの絵板だとわかった。
「あけてみてくれ、多分、これと同じ図柄のはずだ」
幻燈は自慢げに飾ってあった。ランプを入れて用意をすると、すっかりブラウンは青菜に塩になった。なまじ肥満体で鼻柱が強かっただけに、その変りようが、あざやかなほどだった。
「ブラウン、ゆっくりと見物したらどうだ」
ランプに火を入れ、他の灯を消すと、矩形に区切られた明りの中に、あの長崎風景が浮び上った。
そっくり同じだ。同じものだ。
が一カ所、違った。一人だけ顔がない。お仙の顔ははっきり見えているが、一人、顔がなかった。
異人らしい。そちらの顔が削ってあったのだ。
「雪乃、おもしろい絵になるだろう、重ねて入れてみるのだ」
二枚の幻燈板。
少々無理だったが、重ねると、二枚が一枚になった。お仙の顔も、そして、ブラウンの顔も、はっきりと浮び上っていたのである。
「ブラウン、あきらめて貰おうか」
ちょっと意外だったのは、ブラウンの体型が、中肉中背だったことである。十年の歳月がこんなにも変えるのか。髭もそのころは瀟洒な口髭だった。
ふいにブラウンが立ち上った。英語でおそろしい勢いで饒舌りはじめた。
『そうだ、この男は、私だ。が、それがどうしたというのだ、たしかに私だ。私もかれらとなかまだった。が、それだけだ、私は手を下しとらん、殺したのは、私じゃない』
『いまさら未練だぞ』
『殺したのは……』
追いつめられた鼠のように、ブラウンは首を振った。言い澱んだ。立ち上ってそこらを歩きはじめた。
『私じゃないのだ、私も、計画を聞き、強いられたが、そうだ、秘密の洩れるのをおさえるために、参加はしたが、手をかけたのは、私じゃない』
『誰だ、いま言いかけた名は?』
城之介の流暢な英語がかえって、ブラウンの昂奮に水をかけることになったようである。
かれは立ち止り、それから、うすく笑った。
『忘れた』
椅子を摑んで、叩きつけてきた。強い力だった。
身を躱しざまに、城之介は抜刀している。
ガラスの割れる音と、銃声が同時に起ったのはその瞬間である。
ブラウンの巨軀が、くるっとまわって、どうっと床に倒れた。

雪乃の手には拳銃がある。さっき馬車の中でかれが叩き落し、雪乃に渡したものであった。
「撃たずとも……」
と、見た城之介に、雪乃ははげしくかぶりを振った。
「いいえ、あたし、撃ちません」
硝煙がたちこめている。ブラウンは虫の息でもがいている。
正しく雪乃の手の拳銃ではなかった。銃身も冷たい。外から撃ったのだ。
城之介は、窓を蹴破って飛びだした。露台から屋根へ移ろうとしている影を見つけた。
「逃さぬ」
露台から勾配の急な屋根へ。城之介は大刀を咥え、敢然と追った。証拠になるブラウンの口をふさいだのだ。
城之介は露台から、屋根へ出た。相手は誰だかわからない。背が高い。屋根の端から拳銃をむけた。ひるんだ一瞬に、敵は身を翻している。軽い。
隣家の屋根へ。城之介も深く考えているひまはなかった。刀を咥えて、同じく闇の中を飛んだ。
「ジョー!」
雪乃の案じ声など、風の音くらいにしか感じなかった。
屋根から屋根へ飛び移るなど、昼なら考えもしないことだ。闇は若者に、異常な自信を与える。仇を目の前にしながら、兇弾に仆されてしまったことが残念だった。もっとも、あそこまで言い張るのは、同類ではあっても下手人ではないかもしれぬ。その口から洩らされるほうが困るやつ。
(下手人はそいつだ)
目の前の影。それはあくまでも〝影〟でしかなかった。城之介は大刀をふりかぶって近寄ると見せ、脇差を素早く抜きざまに投げた。がちゃッと、音がしたのは、拳銃で払ったのだろう。
同時にまた身を翻している。あざやかに飛んで、露台に、おり立つのが見えた。
追い詰められた揚句の侵入だろうか。城之介には、その影が隣家に入った以上、遠慮することはなかった。危険ははじめから覚悟の上なのである。
露台から部屋につづいたガラス戸には鍵がかかっていなかった。そのことが疑惑を招いた。いまの狙撃者がこの館の住人ではないかということだ。
暗い部屋の中に、人の気配はなく、次の部屋との扉の下から灯が洩れていた。
城之介は抜刀したまま、扉に手をかけた。
意外なことに、これも、軽くひらいた。
「……」
そこに展開された情景は、思わず、目をたじろがせるも

のだった。
　全裸の女二人。寝台の上でからみあっているではないか。一人は十六七歳と見えた。一人は二十歳前後。豊満なからだを、火照らせている。二人とも東洋人だが、年増のほうは髪が豊かで、背中には雀斑がぱらっと浮いて見えた。
　突然、侵入してきた城之介を見てもそれほど驚いたふうもなく、ものうい眼でふり仰いだ。
（まさか、この女が？……）
　あの影の記憶が急にぐらついた。男だったと断定できなくなったのだ。それだけ、暗かったともいえる。
　女たちは、棒立ちになった城之介を見ても少し眉をしかめただけで、肌を蔽うのでもなければ、行為をやめようとするふうもなかった。
　いや、男に見られたまま、行為をつづけようとしている。
　女たちの秘所と秘所をつないで、何やら器具が見えた。それはよく男子禁制の大奥女中などの使用するといわれる互先と称される男根を象ったものらしかった。
　二人ともすでに陶酔しているのであろうか。だが、その恍惚感は、男にはわかり難いほどの法悦にせよ、突然の闖入者の眼も意識せずに済むほどのものであろうか。
　城之介は、清国人の阿片窟を思いだした。阿片にはたしかに、その薬効がある。夢幻のうちに在れば、他人目など気にしないで済む。
　それほどの陶酔が、この女たちをとらえているとすれば、狙撃者の容疑は、この二人を除外するしかない。
　そこまで陶酔するには、少なくとも四半刻前から、ここに臥せていなければならないことであった。
　城之介は部屋の中を見渡し、男が潜んでいる様子もないことを見きわめて、部屋を出ようとした。階下へ降りてゆこうとしたのである。
　扉のノッブに手をかけて、振りかえったとき、凝っと少女が見つめている眼に視線がからんだ。
（醒めている……）
　その瞳は決して呆けたものではなかった。
　城之介は寝台のところにゆくと、
「女同士が好きか」
「……」
「女には男だ。男のほうがいいぞ」
　これにも返事がなかった。とろんと虚ろな女の瞳。唇は半ばひらいて、涎が垂れそうであった。この年増女は、たしかに陶酔の中にある。これが演技とすれば、とうてい男では真似のできないものだ。
　だが、年少のほうはそうではなかった。醒めた眼を発見されてしまったあとは、虚ろを装っても、やはりぎごちないものだ。
　城之介は、女同士の肉体をひき離した。濡れた性具は年

増のほうに挿入されたままである。
「かような道具では、肌に傷がつこう」
「……」
「ほんもののほうがいいはずだ」
　城之介は少女の手をとって、おのれのものに触れさせた。明らかに少女は反応を示した。その瞳に好奇と憧れが浮び、着物の上からではもの足りないように、前をかきひろげて、中に手をさし入れようとする。
「いい？」
　無邪気なまでの表情と甘い声は、少女が菓子をねだるようなおおらかさがあった。
「よいとも」
　城之介もその部分に昂りを感じてきている。同性の淫に濡れた少女に抵抗がないことが、城之介の情感をも煽ったことは疑いない。
　かれは、おのれの勃起に、むしろ少女が驚倒しないことを希った。少女の手が確実にその熱く硬いものを、おそれと喜びで摑んだとき——。
　背後の扉があふられたようにあき、男の声がした。
「動くな、城之介」
「……」
「刀を捨てろ」
「——捨てなければ」
「撃つ」
　レースのカーテンのかかった窓ガラスに男の姿がうつっていた。手に拳銃を擬している。
　その顔に見憶えはない。が、敏捷そうなからだつきは、さっきの男にちがいなかった。
「ブラウンのようにか」
「撃つ」
　男は繰りかえした。
「やむを得ぬ。撃て」
「なに!?」
「撃つがよかろう。さむらい城之介は刀を捨ててまで生き延びたくないからな」
「きさま……」
「殺す前に一つ、教えて貰おう、地獄への土産だ。この女たちは何だ。いい女だな、きさまの何になる？」
　死を前にして、城之介の言葉には、殺人者の意表を衝くものがあった。相手が気勢を削がれて、ふっととまどうのが見えた。
　その一瞬を見逃さなかった。城之介は身を転じざまに、たけ一ぱいにうしろ薙ぎしている。
　銃声と、弾丸が頬を掠めるのと、そして、白刃が確実に肉を裂いたのが同時だった。
「——ジョー……」

「誰に頼まれた？　遠州屋か、それとも」
男は断末魔の苦悶のなかで無理に笑いを浮べた。
「ジョー……おまえを、狙うやつは、この、居留地に……百人も二百人も」
それきり、こときれた。笑いに歪んだままの顔で、男は死んでいた。
城之介は少女の手によって硬くされたものが、まだ萎えようともせず、熱く息づいているのを知った。少女を抱くことで男の背後関係もわかるのではないか。城之介は、刀の血糊を拭いながら、少女の裸身に近づいた。

媚薬

血の臭いが、女たちの情感を一層煽ったようであった。正常な者にあっては、その鼻をつく異臭は堪え難いものであったにちがいない。が、阿片にでも冒されたような女たちの放恣で淫らな行為には、あたかも、火にそそぐ油のような効果を齎した。
少女はうっとりと目をむけた。虚ろではあったが、その底に無邪気な清純さがある。それは、まだ男を知らない稚さのみの持つ蒼い果肉の清らかさだった。
「――男は、はじめてか」
城之介はふたたび女の手をとって、おのれに触れさせた。おずおずと少女の手は、おとこをつかんだ。
最初のときよりは、怖れがうすれ、親しみが加わって、やわやわと揉みしだいている。
まるで珍奇な生き物に触れた喜びを、率直にあらわしているのだった。それは、必ずしも、女に悦びを齎す男の性器という概念ばかりではないようであった。
鹿の角や護謨で象ったものとはちがい、自在に伸縮し膨張する生き物の可愛らしさを感じたように、頬をすりよせ、

唇をつけた。
「あ、あたしも！」
年上の女は、それを見ると、漸く眼がさめたように、押しのけて、唇を寄せてくる。
「急ぐことはない」
城之介はその女をひきよせ、唇を吸った。下半身は少女の方にまかせたまま。
十六七と見えたが、その稚い手付や、男のものに異常なほどの好奇と憧憬をあらわにしたさまは、その皮膚の未成熟ぶりから見ても、十三四ではないかと思われた。
唇は柔らかく、紅を塗るまでもない赤いそれをもって、ためらいがちに、かれを含んでいる。
繊手はゆるやかに動き、唇と舌とが、いとしげに男の肉をしゃぶるのだ。それが赧らみ緊張の度を増すほど、女の小さな唇いっぱいになり、一層、少女の昂奮と好奇を高めたようである。
全裸の美女二人を擁しながら、なお、城之介は冷静だった。かれが、冷静を欠く一瞬があるとすれば、それは精を放ち果てるときにちがいなかった。
成熟した女の裸身をひきよせ、そのみごとな乳房や、春草の陰阜のかげに泉をまさぐりながら、おのれの秘所は、少女の唇にまかせているのである。
この快楽は城之介にとって望外のものであったが、また、ある人物にとっても、思わぬ拾いものであった。
五台の洋燈の灯がやけに明るく、豪華な調度といい、この部屋を飾りたてている雰囲気には当世風の快楽主義の豪奢と淫猥と、嬌羞と賛美が、満ちていた。
成熟した女と未成熟の女と――対照的な裸女の悦楽もまた、淫情図を構成するものだったのである。
二人をとらえていた情念のどこかけだるいさまも、企図した者には必要だったのであろう。それは五燈を一室に集めて、如何に明るいとはいえ洋燈の灯であることとも無関係ではない。
カタッ、と音がしたとき、城之介は身を翻している。
脇差が飛んだ。
だらりと重く垂れた緞子の合せ目に、白刃は突き刺さり、悲鳴が奔った。
「……」
意味不明の声が、苦痛の呻きに変った。脇差は突っ立ったまま、緞子をタテに裂くようにして、ゆっくりと落ちた。
緞子をつかんだ手が苦しげに房をひき千切った。
凄い音をたてて、倒れたのは、ひそかに立てられた写真機と見たこともない赤毛の大男だった。
「たわけが、おれの写真をうつしたのが命とりだ」
城之介は、写真機から乾板をひきだし、灯にさらした。
大男の胸毛に蔽われた胸に脇差はふかぶかと刺さったたま

まだった。五十がらみの無精髭には白いものがまざっていた。まだ息があるらしく、手を動かしている。
『助けてくれ……』
男は呻いた。英語だった。脇差は右脇に刺さっているのだ。城之介は肩のあたりを踏んづけて、無造作に引き抜いた。
『助けてやってもいい』と、かれは正確な発音で応えた、
『おれの問いに答えれば、だ』
『助けてくれ、何でも、言う……』
『きさまの名は？』
『スミス』
『ありふれた名だ。まあいい、さっきの奴はきさまの子分か』
『ハンス・フォン……』
『それだけでいい、どうせ死人だ。こんな写真を撮って好事家に売るのが商売か』
『た、頼まれたのだ……』
『誰に!?』
スミスは唸った。猛獣のような唸り声を出した。それから、血を止めてくれ、血を止めないと死ぬ！　と騒ぎ立てた。大声をだして、起き上ろうとするたびに、鮮血が噴き出て、ゴブラン織の華麗な絨緞の上にどろりと流れた。
「誰に頼まれたの？」
いつか、雪乃が入ってきていた。
拳銃を男のこめかみにあて、引金にかけた指が怒りでふるえていた。
「あたしの写真を写したのも、おまえなのね。誰に頼まれて、あんなことをしたの」
雪乃の言葉を、どうにか理解するだけの日本語馴れはしていたようである。スミスは呻いて、血を止めてくれたら話す、と吠えた。
『話せば、血を止めてやる』
ガッデム！　息たえだえになっているくせに、罵って、ついに口にした。
『マダム・ショーメット……』
血を止めてやるだけの約束は守った。城之介は洋燈の油を注いで、傷口に灯を移した。たしかに血は止った。ジュジュッと肉の焦げる音がし、紫いろの煙が一すじ立ちのぼった。猛獣の咆哮を聞かせて、スミスはそれきり動かなくなった。
「たしかに血は止めてやったぜ。生き還るだけの気力があったら、生き返るがいい」
それから雪乃の拳銃をとった。雪乃はなお、発射したい気持を圧えかねていたのである。
雪乃ははじめて、あの夜のことを話した。

ディブスキはこの六十八番館で小さなパーティに呼ばれて、雪乃を伴った。パートナーを必要としたからだ。
雪乃は洋妾ではない。ディブスキの秘書として傭われていたのである。その夜、酒を飲まされて、かれに抱かれた。
雪乃も嫌いではなかったので拒まなかったのだが、ディブスキは不能だった。どこかの戦争で腰に負傷して不能になっていたのである。その夜はただ愛撫するにとどまったのだが、雪乃はそれなりに燃えた。
飲んでいたし、うつつとなって音は耳に入らなかった。シャッターは蓋の開閉である。機械音ではない。それも光量が少ないほど、レンズを開放しておく時間が長い。
蓋を開閉する音は慎重にやれば、殆ど聞えないほどのものである。
強請ったのはハンスであった。
ディブスキは怒って撃ち合いになり、逃げながらのハンスの一発がディブスキを傷つけた。
城之介のヨコハマ入の夜のことである。
ディブスキの負傷をひた隠しにしたのも、公にすれば、恥が明るみへ出るからであった。
「なるほど、すると、ハンスを斬ったのは怪我の功名ということか」
その羞ずかしい写真が、さっきの幻燈会で公開されたと聞いて、城之介は怒りをおぼえた。
「マダム・ショーメット……あの牝豚か」
「あたし、あの幻燈板をとりかえさなければ、もう横浜に住めませぬ」
とりかえしたところで、ひとたび衆目にさらされた裸身と痴態は、人々の記憶から消すことはできない。
だからといって、そのままにしておくのはなお、堪えられないことだった。
同じ横浜から去るにしても、幻燈板だけはとり返して砕かねば。
「一つわからないことがある」
と、城之介は言った。
「あのハンスという男は、なぜ、ブラウンを撃ち殺したのか」
たんにディブスキと雪乃のことだけではない。それならブラウンを殺す意味はない。
(やはり長崎の……)
ブラウンにあれ以上饒舌られると困ることがあるからに違いない。
ブラウンは長崎にいた。城之介の父母を殺し、店を焼いたなかまの一人だったことを白状している。が、あくまでも、
(手をかけたのは、私じゃない)
と、言い張っていた。

その否定の真偽は、ブラウンの口が噤じられた以上、謎だが、その口を噤じさせる必要があったということが、陰の存在を物語っていたのである。

（ハンスだろうか？　だがハンスを、おれは知らぬ……）

この十年の間に、手を尽して下手人と一味を探した。ハンス・フォン何とかという名前は一度も浮ばなかった。あくまでも、ハンスは、殺し屋でしかない。

（ハンスに命令した奴がいる！）

そいつが、ブラウンの口を封じる必要があった。

雪乃の痴態写真は、もはや問題ではない。

元兇が動いている。

（楊に命じたのと同じ奴に違いない）

阿片窟で、階段の上から斬りかかけて来た清国人の楊もまた、その陰の命令に従った一人であろう。

（誰だ、そやつは？……）

まず、その男を突き止めるのが先だった。

城之介はその手がかりをハンスにもとめた。

「この男の友人でも知らないか」

女たち二人は、漸く、虚脱からさめかけていた。

何か薬でも飲まされていたのであろうか。さめてくると、羞恥を感じたように、二人はあわてて着物をひきよせた。

媚薬の作用は、それが効いている間は大胆になり、日常では考えられないほど情痴に狂うが、さめてくると、逆に、羞恥が人一倍強くなり、嫌悪感で、いたたまれなくなる。

まるっきり、自分が何をしていたかを知らないし、記憶にない。それだけに、不安が濃いのだ。

「このひと……」

と、年上の女が言った。

「豚鉄のおかみさんと……いい仲なんですよ」

「豚鉄？」

そんなことを聞いたのではない。

ハンスは死顔こそ歪んでいたが、言われてみれば苦味走って、やくざ好きの女の惹かれそうなタイプだ。金髪だし、もみあげが絹糸をふわふわとむらがらせたようで、細面に合っているし、うすい唇など、年増がふるいつきたくなるようなかたちの良さであった。

だが、いまさら、死んだ男の情事の相手など知っても意味はない。

問題は十年前にある。〝豚鉄のおかみさん〟との不倫は、どうせ近年のことであろう。ハンスは見たところ、二十五六。

このヨコハマの居留地に多い流れ者の一人にすぎない。

「情婦のことではない、男だ、ほかにどんな男と交際している」

男のことになると、女たちは、まるきり思い浮ばないようであった。

「時々、阿片を吸いにくるよ」

そういわれて、はっとした。

この女たちは、日本人ではなかった。一応の日本語が、舌たらずで、それもあの房事のせいかと思っていたのだが、衣裳をつけたところを見ると、清国人なのだ。居留地は長いのであろう。もっとも、長崎で生れ育った場合には、土地の者と変りなく話す。

（道理で色が白い……）

肌もなめらかで均整がとれていたことを、城之介はあらためて思いだした。

「送ってゆこう、家はどこだ」

年長のほうは鳳琴、少女のほうは莉花と名乗った。驚いたのは、鳳琴の家はあの関帝廟の傍だというのである。

（ふむ、これはいよいよ、因縁が深い）

二人ともハンスにだまされて連れてこられたのだった。

西洋の戯（踊り）を見せるからといって、二人を連れてきたのだ。赤い酒を飲んでいい気持になっているうちに、もやもやしてきて何もわからなくなってしまったという。

この二人の女にそれ以上の説明をもとめるのは、無理であった。

いささか城之介もうしろめたい気がしないでもない。一緒に歩いていると、この二人の肌をすみずみまで見たり愛撫したことが、知らぬこととはいえ、いささか、気になった。犯さなかったのがせめてもだ。

うしろから馬車が来た。

「ミスター……」

呼びとめたのは、あの黒人の馭者だった。

ブラウンの馭者である。

「乗る、早く、送るよ」

闇の中で、白い歯が笑っている。

「ブラウンの馬車ではないか。お前の勝手にはなるまい」

「旦那、死んだ。馬車、トムのもの」

そんな勝手なことができるのだろうか。黒人の使用人と主人の関係はどうなっているのか、ヨコハマの事情に暗い城之介にはわかりかねた。

が、白い健康そうな歯を見せて、しきりに乗せたがっている黒人を見ると、断わる意味もないように思った。

「乗せて貰おうか」

「墨銀一枚ね」

ぬけ目なくトムは言った。ひゅっと鞭をふるった。

鳳琴と莉花を送りとどけた城之介は、末広町へやってくれ、と言った。

「ヨシワラかね」

淫らに白い歯が涎を浮べた。

「港崎町ではない。末広町」

「ヨシワラに近いね」
ブラウンはよほど遊廓に行ったらしい。
末広町は運上所わきの道を真っ直ぐ来て太田の埋立て地に入ったところで、いうなれば港崎町の遊廓のために出来たような街だった。
遊廓は江戸の新吉原のように、田圃の中にある。
もともと低湿地で、大岡川に近く、田圃の中に土盛りして出来た遊廓で、ハリスの希望で、幕府が公許したものだった。
この港崎町の遊廓に至る道すじに街が出来、旅籠や料亭やちょっとした食べ物屋など、軒を連ねていた。
この末広町の角に豚屋がある。鉄五郎というのは、素姓がよくわからないが、目先が利いた男で、居留地が出来ると、みんな尻込みするのを、
「異人は豚や牛を食べるそうだが、そんなら一丁、豚や牛を商って儲けるとすべえ」
と、乗りこんできて、はじめは、二、三間の間口が、どんどん広げて数年のうちに、大変な大店になり、豚肉を一手に商って、大した顔役になっていた。
ヨコハマの顔役といえば、人入れ稼業で、埋立てなどもして、のし上った鈴村要蔵というのがいる。
沖仲仕や、埋立て普請など、荒仕事を一手にひき受けているので、何かことがあると、すぐ顔を出す。
太田部屋とも要蔵部屋ともいって、人足たちが百や二百、指一本動かせば集まるので、これも大した顔だが、この両者は何かにつけて仲が悪いという噂だった。
豚鉄のほうは食物を扱っているから、居留地の洋館に直接出入りしているし、鈴村要蔵の方は、幕府の役人の後押しがあるという。
こうした居留地の特殊な事情を知らぬ者には、店を開くのも難かしい。どちらかに挨拶しなければならないのである。
その豚鉄の女房。
お咲という名でどこかの女郎上りという噂がある。
「――あたしに逢いたいんだって？」
博奕場の見える部屋で、鉄五郎とさしで盃をやりとりしていたお咲は、不審そうにふりかえった。
「蛸八、何を寝呆けてんだい。こんな夜中にあたしを訪ねてくる奴がいるはずがないじゃないか、親方の間違いだろうよ」
「へえ、あっしもそう言ったんですがね、へえ、一本差で」
「ふうん、攘夷浪人かい。よく居留地に入ってこれたね」
「全くで。浪人者ですが、色の生っ白い、ちょいといい男で」
「何いってやがんだい」
と、剣突く喰わせながら、ふっと、気が動いたようである。

ちらりと鉄五郎の顔を見、それから、わざとゆっくりと盃をあけた。
「そいつァ、きっと、親方に草鞋銭をねだりに来た風来坊だろうよ。ここへ呼んだらいいだろう、ねえ、おまえさん」
「そうだな、ここへ呼んでこい」
鉄五郎は、こう大様に言い、皿の酢豚をつまんで大きな口へほうりこんだ。
「何てえ野郎だ」
「へえ、ジョー、と言ってますがね」
「ジョーだと？　そいつの服装は浪人風だというじゃないか」
「さいで」
「浪人者のジョーか……ふうん」
何か思いだしているようだった。
博奕場から、それを聞いて立ち上った者がある。壺振りだった。からりと骰子を投げだして、誰か代ってくんな、といって、閾をまたいだ。
「あいつだ。親方、昨日話したじゃござんせんか、城之介というやつだ」
「城之介……南京の楊を斬ったやつか」
「へえ、大そう腕の立つ浪人者でさあ。それに度胸がいいやね。役人なんざァ逆に竦み上っちまう。それが別に大仰に武張るってんじゃねえんで、こう、黙って立っているだけで、うかつには斬りかかれねえ。あんな腕利きがいりゃァ百人子分養うよりも力になりますぜ」
「大層な惚れこみようだな参次、そいつの面を見ようじゃねえか」
そこへ城之介が案内されて来た。
「豚鉄とはおぬしか」
「鉄五郎はおれさ。ジョーといいなさるか。まあ一盞飲みなさるがいい」
「せっかくだが、酒を飲みに来たのではない。お内儀に用があってきた」
「えっ、やっぱりあたしにかえ」
「おっと、ジョーとやら、真夜中に人の女房に用があるとは、横浜の仁義に背くことだぜ。話はおれが聞かあ、まず盃を受けたらどうだ」
豚鉄が盃を投げた。かっと宙で音がした。盃は二つに割れてメリケン参次の前に落ちた。

手練であった。ほとんど、城之介のからだは動かなかった。白光が豚鉄の眼前に閃いた、と思うと、盃は二つに割れてからりと落ちたのだ。

豚鉄は愕ッとして、口を半ばひらいたままだった。お咲も立て膝して長煙管に煙草を詰めようとしていたのが、そのまま凍りついたように動けなくなっていた。

子分たちも多勢いたのである。閃光を見た者は少なかったが、親方の表情に、博奕の手を休めてふりかえった。

「ジョー、いやさ城之介さん、大した腕前だね」

やっとこう口をきいたのは、メリケン参次だった。

「ねえ、親方、あっしが言った通りでげしょう、大したもんだ、清国人が阿片窟で真っ二つにされたってェのも、これでわかりなすったろう」

参次としては、この場をとり繕わねばならないのだ。なまじ、以前に口をきいただけに、下手をすると、豚鉄から裏切者と見られるのを恐れた。

「うむ……」

と、漸く衝撃から醒めたように、豚鉄は大様にうなずき、動揺を誤摩化した。

「大した腕さ」

「……」

「そいつァ間違いねえ。だがね、城之介さんとやら、このハマでは、その剣術の腕も、あんまり通用しねえんじゃねえかねえ」

茶簞笥の抽斗をあけると、無造作に拳銃をとりだした。六連発の弾倉をあけてカラカラとまわしてから、ガチャリともとへもどした。長火鉢の猫板へ置くと、

「ハマの人間は、こういう便利な飛道具と無縁じゃねえ。いくら、おまはんが抜き打ちで速いといっても飛道具にはかなわねえ道理だ」

「そうか。なら、撃ったらどうだ」

「なに！　なんだと」

「やってみることさ、その便利な飛道具でな」

城之介の言葉は冷たく、静かなのである。このどこか哀しげな翳を漂わした若い浪人者の姿も、声音も、ひっそりと静かながら、相手の出方しだいでは、どこまでも非情になれる鋭さを秘めていた。

豚鉄が言葉を失うと、城之介は、それが虚勢でなかったことを、さらにはっきりとあらわした。

「やるがいい」

「……」

「望むならば、だ」

豚鉄は目ばたきも忘れた。いや、出来なかった。一瞬の目ばたきと同時に、城之介の腰間から飛び出した凄剣が、自分を真っ二つにするであろう恐怖に慄然とした。

メリケン参次の膝前に転がった盃がそれを証明しているのである。

相打ちになる可能性すら、なかった。

鉄五郎の手が猫板に動いたとたんに、白刃は冷たく、かれの頭頂に奔っているだろう。

この緊迫の空気を柔らげたのも、参次である。

「ま、まあ、そんな物騒な話ァ……親方、そいつァ蔵っておくんなさいまし、城之介さんも、わざわざ喧嘩を売りに来なさったわけでもありますめえ」

「――聞きたいことがあって来た」

と、城之介は、視線をそらさずに言った。

「それだけだ」

「へえ、へえ、そうでげしょう。親方まず、拳銃をおさめなさって」

「そうか、おめえがそういうのなら」

鉄五郎はハマの豚鉄としての威勢で構えているだけである。ひっこみがつきさえすればいいのだ。

拳銃に手を伸ばそうとしたのを、ぴしっと、また城之介の言葉がおさえた。

「左手でやるのだ」

完全に主導権を奪われていた。

鉄五郎はこの不遜な若者に鼻面をとられるのを意識しながら、どうすることも出来ないのだ。

「それでいい」

と、城之介は言った。

「お咲というのは、あんたか」

「え、ええ、あたしだけど……」

「聞きたいことがある。ハンスという男のことだ」

「……」

「ハンス・フォン何とかいう、普魯西人だ」

お咲は蒼ざめていた。

咄嗟に糊塗する言葉も出ないようだった。鉄五郎への慮りと、突然、浮気の相手の名を持ち出されたような、その困惑が、はっきりと表情にあらわれていた。

「――し、知りませんよ、あたしゃ」

漸く、お咲は言った。

「知らないやね、そんな毛唐はさあ」

「そうか、さっき、死んだ」

「え!?」

「それはいい、ただ、ハンスと親しかった者を知りたい。心当りがあったら教えてくれぬか」

お咲の面に、ほっと安堵の色が流れた。

不倫の相手が死んだのなら、死人に口なしだ。

「ほほほほ、そうですかえ、そういえばどこかで聞いたような気がするけど、ねえ……でも知りませんねえ」

うっかり饒舌らない方がいい。そういう心の動きが、手にとるようにわかる。

こういう女の口をひらかせるのは、岩にへばりついた牡蠣より難かしいだろう。

「そうか、わかった」と、城之介は立ち上っていた。「邪魔したな」

表へ出ると、あのトムという黒人の馭者がニッと白い歯を見せた。

「今度は、どこ行くね」

「もういい」

少し歩きながら考えようと思ったのだ。

「そうかね、いらないかね」

強要するわけでもない。そのくせ、城之介が歩きだすと、数間あとから、コトコトとその歩調にあわせて、従いてくるのである。

衣紋坂の中ほどにかかったとき、向うから役人らしい侍がくるのが見えた。

と、馬車は急に速度を増して、傍へやってきた。

「乗る。役人、面倒ないね」

城之介の立場を見ぬいているように、トムはニヤリとした。

居留地の役人たちは、異人に対して、まるっきり尻腰ない。したがって異人でも公使とか商会の偉い連中に対しては、まるっきり頭が上らない。馬車で往来するほどの者は、流れ者とは違うのだ。

「よかろう」

「墨銀一枚ね」

まったく抜け目がない。城之介は苦笑した。

だが、やはり馬車に乗ると、明らかに役人たちには効果的だった。浪人者には敵意に近い猜疑心を持つ連中が、あいまいな微笑すら浮べて会釈したのである。

「行ったよ」

トムは馭者台から振り返り、それから港崎町遊廓の灯を見た。

「ヨシワラ、行くか」

よほどブラウンは遊廓通いしていたようだ。

「おれはゆきたくはないが……おまえはどうだ」

「グッド」

その大きな口をあけての、嬉しそうな笑いが、ふと城之介にあることを考えつかせたのだ。

「ショーメット商会へやってくれ」

何番館か知らぬ。トムはしかし心得顔に返事をして、次

の角から右へ馬首をむけた。

「ヨシワラは、万事が済んでからだ」

安穏な立場ではなかった。城之介は四面楚歌といってよかった。居留地そのものが誇張ではなく、危険に満ちた場所だった。どこの窓から狙われるか、突然、道がぽかりと穴をあけて馬車を呑みこんでしまうかもしれぬ。危険が八方から、かれを窺っている。

極端にいえば、この黒人トムだって、まだ正体が知れぬのだ。人の善さそうな白い歯と微笑も、そのまま素直に受けとっていいのか？　単にブラウンのような横柄なアメリカ人の奴隷的な従者だったというだけで、城之介に好意を持ってくれるとは考えられなかった。

ショーメット夫人はそのときベッドに横たわって、葡萄酒を飲んでいた。

うすものを着ているが、絹が透けて肌が見える。よくもこれだけ肥れるものだと思うくらい肥っている。

首などほとんどなかった。腕が盛りあがり、顎が二重顎などという程度のものではなく、上下がくっついていたし、肩から腕への丸みも、ふとももと同じくらいあった。

彼女が夜会が好きなのは、夜会服が、胸や肩をあらわにできるせいかもしれなかった。

その胸や腕にごちゃごちゃと宝石を飾って、お饒舌りするのが、この異郷での唯一の楽しみのように見えた。

多くの者がそう信じている。

女ながらショーメット商会を切り盛りして生糸の取引などで、手腕を見せる一方、教会の設立に熱心だったり、慈善バザーをひらいたり、かと思うと、英仏語の私塾をひらいて、日本人の子女へ、欧米事情を教えるなど、その活動は、自ずから居留地の中で、〃偉大な夫人〃としての尊敬と声望をかち得ていた。

何よりも、金持ちであった。金持ちで独身の女実業家といえば、そこに一つのタイプが想像されるが、ショーメット夫人の場合は、さらに、一廻りも二廻りも大きい。

三十歳からは歳をとらないと自称しているから年齢はわからないが、五十にはなっているはずであった。

が、金と閑にあかせての手入れのよさが——れいの牛乳風呂の常連であり、また推奨者でもあったのだが——目尻の皺や、乳房のたるみをなくしていた。

「でも、あれで、男がいないなんて」

と、教会にくる夫人連は、そんな目つきをしたが、ショーメット夫人がこの横浜に来てから十年近くなるのに、誰もまだ、彼女の男を知らない。

派手好きで社交好きだけに、噂は二三にとどまらない。米英仏のいろんな公使や領事たちとも噂があったし、英国の赤隊と呼ばれる士官などとも、何かと酒の肴にされた。

が、いずれも、派手な行動と、金持ちの未亡人にありがちな噂の域を出なかった。

「彼女は男ぎらいだ」

とすら噂が流れた。誰それは玄関払いを食わされたとか、ハムレットよろしく窓をよじのぼりかけて、犬に吠えられ転落したとか、そんな埒もない噂だった。

まさか、こんな牝豚のような夫人のところへハムレットを気取る男があらわれるとも思えない。あるいはショーメット夫人自身が創作して流した噂かもしれなかった。

その夫人の、誰ものぞいたことがないといわれる寝室で、いましも洋燈の灯蔽いに赤い布をかけて、煽情的な照明にした夫人が、ひとり、葡萄酒グラスをかたむけては、何やらケーキをつまんでいた。

この居留地のこの豪華な洋館の寝室にあるかぎり、全く東洋という感じはしなかった。

絨緞から壁掛けから、寝台や卓子、椅子、グラス類一切が欧米の品々であった。

東洋のヨコハマに来て、十年近くも住みつきながら、これほど、土地のものを除いた生活をしているのは、郷愁を癒すというよりは、このくにを嫌っているからではないか。

たとえ軽蔑を含んでいるにもせよ、植民地の生活には、その土地の工芸品を敢えて使ったりすることで、むしろ優越感を感じることができるものなのに、ショーメット夫人には一切、それがなかった。

飲むものから食べるものまで、全部欧米風なのである。いや厳密には故国フランスのものばかりといっていい。

いや、一つあった。

犬であった。

「ルー」

と、ショーメット夫人が呼ぶと、部屋の隅から、のっそりと巨大な犬があらわれた。

これは、なんと褐色の土佐犬だったのである。

『ルー、こちらへお出で』

優しく呼ぶ。五十幾つかになっているはずだが、声だけ聞けば、まるで十二三の少女だった。いや、もっと幼い愛らしい声だ。

『淋しかったでしょうね……さあ、そろそろ、食事にしましょう』

夫人がサイドテーブルから、バターの罐をとり出すと、土佐犬は甘えるように唸り声をあげた。

夫人がしたことは、これを犬のための皿にあけてやるのではなく、刷毛をとって掬いとると、おのれの下肢をひらいて、そこにべっとりと塗ったことであった。

『さあ、お食べ』

膝を立て下肢をひらいて、仰臥したのである。

それだけではなかった。

テーブルの抽斗をあけると、数冊の本をとり出した。仰臥したまま、下半身を犬にまかせておのれは、その本の上に目をさまよわせる。

土佐犬は二十貫はあろうと思われるほどの巨大なものであった。

が、ショーメット夫人の巨軀にのしかかるようにし、咽喉を鳴らせて、舐めているさまは、愛らしいペットにちがいない。

そしてショーメット夫人の視線をとらえて放さないのは、なんと日本の春画だったことである。

この尊大で驕慢で偽善家で好色な牝豚のようなヨコハマの女貿易商が、日本の万物のなかで（人間も含めて）もっとも気に入ったのは、土佐犬の舌と、春画でしかなかったようである。

他のすべてに日本品の一切を排除することによって、最大にこのくにを軽蔑するこころよさを味わっているのかもしれなかった。

土佐犬はベロベロ音を立てて舐め終ると、また低く唸って催促した。

『あらあら、もう済んだの。あたしのほうはちっともよくならないのに』

そんなことを言いながら、また刷毛で掬いとって、べったりと塗る。刷毛は腰の強いものであった。ショーメット夫人は、時にその嚙み煙草ほどの大きさの刷毛で、そこを愛撫したり掃除することがあった。浴室で用いたりする。

何度かそうやっているうちに、しだいに、夫人のからだは紅潮してきている。

「あ……、あっ……」

しぼりだすような声をあげて、はたりと春画帖を落すと、両手が蒲団の端を握って、その巨大な白いからだが悶え動いた。

『もっとよ、ルー、もっとよ、もう足りないのかい』

くるりと寝返りを打つと巨大な臀部を土佐犬に向けた。

それだけでは、思うように舌をのばしてくれないのか、もう刷毛をとるひまも惜しいように、おのれの四指で、べっとりとバターを掬いとるや、そこにあらあらしく塗りたくるのだ。

うつ伏せになり、小山ほどの大きな白い肉塊の下で、手が動いている。

ショーメット夫人の顔は枕に伏せられ、その甘美さのあまり、口から洩れる声を必死におさえているようであった。

すると、その自らの手で慰めるのを、あたかも、けがらわしいもののように土佐犬は、歯を剝いて、吠えた。

ううう、と唸り、前脚で臀部を小突きよじのぼろうとし、脚がすべると、首を振って、鼻面をその部分にもぐらせる

ように、突っこんでくる。
犬が白い小山に戯れているだけのことだといえばそれまでだが、もはや、土佐犬のほうも、牡であることの証拠を、あらわにその肉体の変化に見せているのだった。
ショーメット夫人の臀部の巨大さは、寝台の上という条件では、この土佐犬が後脚で立ち上っても、容易に行えるものではなかった。
そのことは、すでにどれほども経験済みであったのであろう。
犬の硬くなって赤らんだものが、その部分をはげしく打つだけでも、充分に恍惚は得られたように、ショーメット夫人は喜悦の声をほとばしらせた。
巨軀がはげしく震え、動くたびに寝台は軋み、テーブルの上の洋燈がぐらぐら動いた。グラスが転がり、重なり落ちたために割れたが、もはや、ショーメット夫人にとっては、それがベネチュアグラスであろうとも、省みるひまもない恍惚感の中で、呻いて悶えているのであった。
しかし、これほどのからだは、恍惚の陶酔もまた、人並みではないのであろうか。
ふるえる手が、枕元の、ヘッド・ボードに掛けられた赤い房紐をつかんで強く引くと、どこかで、りりん、と、鐘の音がした。
階下の方であった。やがて誰か上って来た。

一人の逞しい体軀の黒人であった。若い。二十歳前後であろう。
かれはこの部屋へ入るのに膝まずいて入って来たのである。
『早く、ルーをどかせて！』
と、この狂乱の白い豚は喚いた。
『それから、お前が犬になるのよ』
犬が人間の代用ではなかった。犬は前戯のためであり、そして、この黒人はまた犬の代りであって、人間のうちには入れられなかった。
『さあ、その赤い口と舌で……するのだよ』
土佐犬ルーに命じたように、黒人に命じると、ふたたび、夫人は白い肉塊を悶えさせるのだ。
黒人はその白い肌の昂奮のためにうす赤く染まったあたりを、眩しげに見入り、涎を垂らした。すでに、かれはその体軀にふさわしい存在を誇示している。
はじめて、ショーメット夫人が歔欷したころ、裏の通りに馬車が止った。
おりてきたのは城之介である。
「ここか、大きな屋敷だな。どこか離れたところに馬車をとめていてくれ。そうだ、あの角のあたりがいい」
どうせ、まともなかたちでは送り出されない。逃げだすことになるのだ。角をまがってから馬車に乗れば、走跡も

くらませる。
雪乃の幻燈板をとりかえすのが先であった。あれをスミスに写させたのがショーメットだと聞いただけでも、侵入する意味があった。
あの幻燈会で見た白豚のようなからだつきを思いだし、
(あいつを斬ったら、刃が鈍くなるかもしれぬ)
と、城之介は思った。
裏庭の塀もたいてい簡単なものが多いが、この洋館をとり囲んでいる塀はやけに高く、上に釘が逆植えしてある用心深さであった。
金持ち女の住いだからであろう。だが召使いなどもいるはずだ。
城之介は身軽く乗り越えた。庭の茂みの間をわけてゆくと、そこに、潜んでいた者がいたのである。ふりむきざまに、刀を閃かして斬りこんできた。

白い爪

まさか、そんなところに誰か潜んでいようとは思いもしなかったのである。
城之介は咄嗟に身を躱した。文字通り間一髪であった。躱しざまに、抜刀しようとしたが、そのひまを与えぬ第二撃が来た。
「……!!」
無言である。
火のような息だけが、烈しい気合となって、顔を搏つ。
城之介の侵入を、あらかじめ予測して待伏せしていたわけではあるまい。それなら、無言で斬りかかってくるはずはない。
叫べば隣近所も眼をさます。それを恐れているようであった。気合すらおしころそうとしているのだ。
「よせ」
低く、するどく叱咤して、城之介は植込みを小楯にとった。
「おれと知ってのことか？」
この余裕のある態度が、はじめて、相手を、昂奮から醒

めさせたようであった。
　ふいに刀をひくと、走りだした。
　これも無言なのである。闇が忽ちこの男を包みこんだ。もとより城之介には、何者ともしれぬその男を追う気はない。はっきりわかったことは、この洋館の者ではないということだった。
　むしろ、殺意を持って潜入していたのではないか。城之介が入ってきたので驚いての行動だったろう。
（攘夷浪人かもしれぬ）
　だとすると、この家のショーメット夫人は、居留地の異人の中でも狙われる存在なのであろうか。
（あんなやつに斬られてしまっては、雪乃の幻燈板をとり戻せなくなる）
　とりかえして砕いてしまうまで、雪乃は安心できないだろう。
　城之介は明るい二階のガラス窓を見上げた。
　そこで何が起っているか、むろん知る由もない。
　ただ、まわりが寝鎮まったなかで、その桃色に見えるカーテンの灯が嬌めかしく、快楽的に見えた。
　あるいは、あの攘夷浪人も、ショーメット夫人の斬殺を目あてにして来たのではなく、居留地を物色中に、その灯を見てのことかもしれない。
　城之介は裏口のそばに、大きな物置小屋のようなものを見た。犬小屋だとわかって苦笑したのは、あまりにも大きかったからである。
　ただ、それが空なのが、不審を起させた。
　裏口の戸に鍵がかかっていなかったのも、したがって、迂闊に踏みこむことをためらわせたのである。
　異人屋敷で気をつけなければならないのは、拳銃だった。豚鉄が言ったように、異人は男女を問わず拳銃を持っている。ライフルもある。
　居留地を上海の租界と同じように心得ていて、中には植民地の心算でいるやつもいるから、発砲するのに、気がねしない。
　自分の恐怖心やたんなる不安からの発砲でも、幕府の役人たちは、御無理御もっともで、日本人の方が悪いことにきめてしまう。
　異人を腫れ物あつかいしているのだ。
　何かというと、黒船をずらりと並べ、大砲を揃えて威嚇して、〝演習〟と称する示威射撃をやられるから、竦み上ってしまう。
　俗謡にも、
〝異人に蹴られ、聞けば理由はないそうだ〟
というのが流行った。庶民の精一杯の抵抗である。
　況や、不法に侵入したのだから、これは一分の理屈も成り立たない。

階段が見えた。仄かな明りが上から落ちてきている。
　その階段が二階に通じるのであろう。
　台所が近いとみえ、油が匂った。かれは、近くで低い動物の唸り声を聞いたように思った。
（犬だ。あの犬小屋のやつだ……とすると、大きい）
　大人くらいの大きさはあるに違いない。城之介が感じたのは、やはり異郷での女の住いから、警戒のための番犬としての存在である。
　静かに階段をあがる。
　一層、唸り声が高くなった。明らかに犬のそれだった。
　扉のところまで来たとき、突然、吠え声とともに、扉がぱっと開き、犢ほどもある大きなやつが、飛びかかってきたのだ。
　身をそらしての抜き討ち。階段を上りつめたところである。抜刀するだけの余裕が、かれを救った。
　巨犬の鼻柱から、かっとひらいた口を顎まで割って、竜吐水のように飛沫いた血汐から逃れて、城之介はその部屋に飛びこんでいる。
　あまりにも明るい灯が、城之介の眼を一瞬、眩ませた。
　洋燈が幾つも置かれ、贅沢な壁紙には銀粉が散らしてあったせいかもしれない。豪奢な衝立や卓子や椅子や、そして鏡台と寝台が、いかにも女やもめの寝室らしく、どこか幼稚でけばけばしく派手な色彩で飾りたてられていた。
　城之介が血刀をひっさげて飛びこんだのは、もとより、拳銃が乱射されることを予想してのことである。
　が、その華麗な寝室に展開されていた情景は、あまりにも、そうした殺気とはかけ離れたものだった。
　ショーメット夫人は、その肥満体をピンクに染め、土佐犬の舌とバターによって、かきたてられた情感のさめぬうちに、黒人を誘っていた。
　黒人はもとより奉公人としての忠誠を誓わせられていたのであろう。
　アメリカに於ける黒人奴隷の解放は行われていたが、極東の島国では相対的な契約が成り立っているのである。
　人格を認められず、金銭で束縛されているのであろう。
　そのかぎりに於て忠実であった。
　ショーメット夫人は、大きな枕を抱いてうつ伏せになり、両膝をついて巨大な臀部を高々とあげていた。
　いまや、土佐犬に代った六尺豊かな黒人が、背後からおいかぶさるようにして、その白い肉塊を抱きしめている。
　いうまでもなく、黒人も全裸である。
　洋燈の光を受けて、その裸身は、あまりにもみごとな彫像をなしていた。
　肩や腕や臀の盛り上った筋肉は、あたかも、黒い油を塗ったかのように、てかてかに光り、それは異様なまでに情

欲の塊を感じさせた。

たんに黒人という種族の肉体がそこにあるのではなく、情欲のための、おとこの肉体が、そそり立っていた。ひきしまった長身が、それ自体、すでに男の性器だった。

少なくとも、熟れた空気の中で上半身を折りまげ、白い牝豚の肉塊におおいかぶさっていたのが、犬の咆哮と悲鳴につづいて、飛びこんできた男の気配に仰天して身を起した……そのばねのように弾んだ動きと、無駄のない肉体の発散する性欲の匂いは、男のそれ以外の何ものでもなかった。

黒人も驚いたろうが、突っ伏していたショーメット夫人は尚、驚いた。

不審な者の侵入を訴える愛犬の唸りや、扉をひっかく異常な騒ぎぶりに、ショーメット夫人が留意しなかったのは、黒人を背後に受け入れた快感で、うつつになっていたのと、こうした際には、土佐犬ルーは、いつも騒ぐからだった。

嫉妬であろう。

前戯にのみ利用されて、おあとは黒人にとって代られる――犬にしてみても、いきりたった牡の血をどう鎮めてくれるのだといいたいのだろう。

いつも、こんなときには、ルーは憎しみの炎を〝おとこ〟に燃やして、唸りたてる。

ときには嚙みつくことすらある。ショーメット夫人は、そんな情痴に狂う牡犬のさまが、またうれしく、情感をそそられるのだ。

彼女は決して、黒人を前から抱いたことがなかった。

常に背後からのみ行わせる。六尺豊かの背丈をほしがるのは、小山のように巨大な臀部を超えて、背すじや、耳たぶまで、愛撫の舌を這わせてくれるのが、最高だからである。そして、いうまでもなく、白い爪の赤い掌が、強くもなく弱くもなく、執着におののくほど、湿り気を増しつつ、乳房をやわやわと、揉みやわらげ、乳首を愛撫しなければならない。

身長が低いと、この小山を乗り超えた上半身が、そうした活動をするのに不足だからであろう。

――まだ、ショーメット夫人は、満足を得るまでに至っていなかった。

いま、黒人が全身の機能のすべてを発揮しての奉仕で、情感は漸増し、喜悦の涙で枕を濡らし、かつ、布をひき裂くほど歯で嚙んで、淫らな肉塊を悶えさせているところであった。

後背位ということは、黒人にとっても、願ってもないことだった。

かれらの心の中に牢固として拭い難く滲みこんだ奴隷根性は、この驕慢な牝豚と顔を合わせれば、自ずと、眼を伏せてしまう。

況や、正常の体位で恋人？のように抱けるものではなかった。

またショーメット夫人のほうも、巨大で強靱な黒人のそれを欲しながら、正面きっての抱擁は、彼女のプライドが許さない。

せっかく大量のバターを塗りつけ、愛犬ルーの舌の奉仕で盛りあがった情感も、まっ黒い顔、ひしゃげた鼻、めくれた赤い口などを見ると、冷水をかけられたように、さめてしまう。

この両者のために、神は至極の方法を人間に許している。男女の性の結合に於て正常とされる行為が、お互いの顔を見ないで済む体位で行えることを。

全く、人種の平等を神は望んでいる。人間が信仰や思想を超えて、美醜の恣意に左右される感覚を所有する以上、相互にそれを避けつつも、種の保存が出来るように出来ているのだ。

ショーメット夫人は、ただ、黒人のそれを欲するという点では、充分だったし、黒人もまた、やはり白人の肌を怨みと憎しみをこめて蹂躙できることからくる荒々しい欲望の充足を得ることが出来るのだ。

そのかぎりではこれほど、完璧な体位はなかった。

白いぬめぬめとした肌を眼の下に見、その甘酸っぱい匂いを嗅ぎ、頰をすりつけ、鼻をすりつけ、唇をべたべたにして舌を這わせるほどに、快感が筋肉を昂揚させて、黒い肌は益々、艶を帯び、ねっとりと粘液が滲み出るのだった。

黒人はおのれが、女の中で、破れんばかりに膨張したのを知った。

城之介が飛びこんできたのは、そのときだったのである。

「あ、あっ……」

白い肌がもがいた。その、男をいれたまま、枕にしがみついたままの恰好で、からだをねじまげたショーメット夫人は、驚愕とともに、恐怖に顔を歪めた。

快楽が一転して、激痛になったようであった。

突然の衝撃。それは居留地の男女にとっては、もっとも恐ろしいローニンとカタナをそこに見たからであった。

豊満そのもののからだが、情熱でピンクに染まっていたのが、一瞬、ぎくっと硬直したように見えた。

呻きが、そのとき、夫人の涎にまみれた唇から奔ったのである。

同時に、仁王立ちになってふりかえっていた黒人の長身もまた、びーんと雷にでも打たれたように、のけぞった。

二人の結合した部分ははなれない。

いや、その部分に、異様な変化が起ったようであった。

黒人のよく締って突きでた臀が、ぶるぶると痙攣し、両手が宙を掻いた。

『助けてくれ、離れない』
大仰な叫びで、赤い唇が唾を飛ばしながら喚いた。
『助けてくれ、離してくれ、し、締る、締る！』
てらてら黒光りする臀が、すさまじい痙攣を見せている。それとはあまりにも対照的な、白い豊満な肌が、ばたばたともがいていた。
『引っ張っておくれ、こいつを引き離しておくれ、あたしを犯すやつを、引き離しておくれ』
その呻き声は、しだいに泣き声に変り、やがて、その白いからだから、脂汗が噴きだしてきた。
黒人も同じであった。もがけばもがくほど、それは離れず、全身から噴きだす汗が、ぬらぬらと黒い肌を流れた。
「膣痙攣だな」
城之介は冷たい眼で見やり、ショーメット夫人の傍へ寄っていった。
「幻燈会では邪魔をしたな……」
そう話しかけて、日本語がよく通じない相手だったと気がついて、
『雪乃の幻燈板はどこにある』
ずばりと聞いた。
『雪乃の写真だ。それを貰いに来た。出してもらおう。命に危害は加えぬ』
「ユキノ、ユキノ……」
混乱してしまって、何を言われているのかわからないようであった。
「おう、ユキノ……」
漸く気がついたショーメット夫人は、もう、いまはこの状態から解放されることがすべてであると気がついたようにふるえる手で、衣裳箪笥をさした。
『早くして、死ぬ、あたしは死んでしまうよう』
プライドも何もなく、ただ、脂汗を噴かせてもがいているのだ。
城之介は箪笥をあけた。
そこに宝石箱があり、その中に、幻燈板がぎっしりと詰っているのを見た。
一々見ているひまはない。
『預かっていこう、ただし、返してやるかどうかは、こちらの気分しだいだ』
そのまま、階段をおりた。
あとに、白と黒の動物が、泣き声をあげたが、もう城之介は振りかえりもしなかった。
血刀を拭って外へ出る。さっきと同じ裏口からである。
(医者を呼んでやるか)
そう思ったとき、この場所で、ふいに斬りかけてきた男のことを思いだした。
(攘夷浪人だとすれば、意気地がないな。それとも、ただ

の盗人だったろうか)
トムの馬車で、雪乃のところへ向うあいだも、不思議にそれが気になった。
雪乃が幻燈板の中から、自分の痴態のそれを探し出して、砕いたあと、残りのものも、煖炉にほうりこんだ。
いずれも、男女のそれだった。雪乃のように苦しんでいる者がほかにもいたのではないか。
「抹殺してやれば、喜ぶだろう」
ところが、その宝石箱の底から一冊の手帖のようなものが出て来たのである。
「はてな、これは、なんだ？」
それは、和洋両方で書かれた住所録だった。
本町一丁目佐原屋甚兵衛妻、　きん、二十二歳。
弁天通三丁目甲州屋多助妻、　たか、二十五歳。
などと書いてある。そして、何気なく目を通していったのだが、意外だったのは、いずれも、人妻であって、その中にあの豚屋鉄五郎の女房お咲の名もあったことだった。
「——言っていいかしら」
と、雪乃はためらいながら、こんなことを言った。
「なんでも、ショーメット夫人の肝煎で異国のことを勉強する集りがあるそうなんです」
「人妻ばかりでか」
「ええ……毎月、きまった日に集まるのですって」
好奇心を起したわけではない。
あのお咲とハンスの仲も、それに関聯したことではないかと思った。
それは明夜らしい。
「行ってみようか」と、城之介は笑いながら、雪乃をひきよせた。「どんな顔をしているか見てやりたい」
膣痙攣がうまく治ったかどうか、いっそ引きあげるときに、水さしの水でもかけてやればよかったな、と言った。
雪乃は羞じらいながら、城之介のからだに手をのばしてきた。
「あたくしも、いっそこのまま、離れなければいい」
息をはずませてそう言い、紅葉を散らした顔を城之介の胸に埋めるのだった。
城之介によって、はじめて男を知った雪乃には、ほかの男のことなど考えられないようであった。
痴態の写真を、城之介自身も見ていないということが、彼女の心を安らかなものにしたのではないか。
それはたとえ、ディブスキが不能だったとしても、その寸前までの行為では同じことなのだ。細かく砕いてしまったあとの、雪乃の放心は、まるで一生負っていた借財を完済したあとのような、安らぎに満ちたものだった。

二人の倖せの刻がふいに破られたのは、窓ガラスの割れるけたたましい音であった。
愕然として、城之介は飛びおきている。
大きな西瓜ほどもある包みが、投げこまれたのである。
「何者だ」
刀を摑むや、城之介は飛びだした。
下帯一つの裸だった。居留地であることも自重しなければならぬ身であることも、そのとき、念頭になかった。
男の影が逃げてゆく。塀を乗り越えるとき、傷つけたらしい。びっこをひいている。
追いすがった。川へ突き当ると、左へ——谷戸橋のほうへ走ってゆく。
その影が、なぜか、さっきの、暗がりに潜んでいた男のような気がした。あのときもよく見えなかったのだ。
城之介が追いついたのは、オランダの舟大工師の屋敷の外。潮入りの小橋が架っているところだった。
もはや逃げきれぬと思ったのか、その男は、ふりかえって、斬りかかってきた。
「やっぱり!」
無言で斬りこんでくる刃風に記憶が生々しかった。
城之介の刃は、ひるみなく、これを邀えている。凄まじい斬りこみは、すでに何人か斬ったことがあるにちがいなかった。
「名乗れ、きさまは、何者だ」
「……くそ!」
「何を投げこんだ」
がっと刃がからんだとき、その男はにやっと笑った。
「帰ってみろ、驚くだろうぜ」
その表情もわからない。が、この言葉が致命傷になったのである。橋の埋め木に足がすべった。城之介の一刀が、拝み討ちに、肩を裂いていた。
「しまった」
あまりにも深く入りすぎた。手加減する心算だったが、意外に致命傷を与えてしまった。一瞬、脚を踏んばって耐えたが、ばったり屛風を倒すように倒れた。もう、刀を握る力も失い、眼はガラス玉のように焦点を失っていた。
「おい……いったい、何者だ、きさま」
「——か、帰って、見ろ、城之介。いいものが、待っている……」
笑ったようであった。
急いでひきかえした城之介はその笑いの意味を知った。
あの投げこまれたものを開いて見た雪乃が、呆然と立ち竦んでいて、おびただしい血の中にショーメット夫人の生首が転がっていたのである。

唐人巫女

生首は笑っていた。
いや、いまでも笑いだしそうであった。
ショーメット夫人は金髪である。すでに白髪が混っている。その髪にも血は飛んでいた。
この泣き笑いの表情は、どんな瞬間に斬り落されたものか。
黒人の奴隷をして背後から愛撫させ、悦楽に歓喜の声を洩らしていた夫人は、突然、躍りこんできた城之介に仰天して膣痙攣をおこしてしまったのである。
白豚のような巨大な臀部と、黒人の下肢のつけねが癒着してしまったように、離れなかった。白と黒の肌が脂汗を流して悶えているのを見捨てて、城之介は、雪乃の幻燈板をとり戻して来たのだ。
「水をかけてやればよかったかもしれぬな」
つるんだ犬のように扱ってやった方がこんな首になってしまうこともなかったろう。
「こんなムゴイことをしたのは、恨み霽らしだろうが……おれたちに罪をなすりつける心算で、投げこんだのか」
「そうかもしれませぬ」
雪乃は目をそむけている。
憎いと思ったショーメット夫人だが、血だらけの生首になってしまったのを見れば、やはり哀れがこみあげる。
「とすれば、すぐにも、菜ッ葉隊がくるかもしれぬぞ」
「でも、城之介さまが斬ったのではないのですから」
「犬の血がついている」
と、城之介は、土佐犬を叩き斬ったときの快感を思いだしていた。
「刀の血は拭ってもとれぬ。犬か人間の血か、区別もつかぬやつらだ。それに、侵入したのは事実だからな、申しひらきはきくまい」
その話のうちに、多勢の足音が聞えてきた。靴の音である。何やら喚き声も聞える。
「来た、やつらだ」
窓から見おろすと、道すじに銃剣が光った。
「赤隊だ」
意外だった。英吉利の駐屯軍である。まさか、かれらが来ようとは思わなかった。
利権のためには、諸国間の仲は険悪になるが、いざ居留地の事件となると、利害を超えて結束するのが、かれらだった。
生麦事件以来、居留民保護を名として各国の軍隊が駐屯

している。時々大砲をぶっ放したり、演習したりして、示威を行なっているのだ。

本牧山に横浜警衛役所があり、太田新田に幕府の歩兵練習場が出来ていたが、いずれも英国兵が駐屯していたのである。英国兵といっても、黒人兵もまじっていたが、その軍服が緋ラシャの派手派手しいやつで、〃赤隊〃といささかの尊敬と軽蔑を含めて呼ばれていた。

およそ一個分隊。軍靴の音が居留地にひびいてきたのだ。

「奴らに一斉射撃やられたら、蜂の巣になってしまうぜ」

城之介はショーメット夫人の生首をもとのように包むと、ぶらさげて階下へ降りた。隣家の塀は低い。雪乃にも乗り越えられるものだった。

隣家の者が起き出さないうちに、庭を横切って、裏口から出た。

赤隊の連中は、表門のところで怒鳴っていたが、一部を裏に廻るよう命じている。

「何処へ行きましょう」

「こうなったら、南京のなかしかあるまい。暫くひそむのだ」

露地から露地を抜けて、あの関帝廟のところへ辿りついた。ショーメット夫人の首は途中で、よその庭に投げこんだ。

そこがどこの国の奴か知らぬ。

「同じ居留民なかまだ、天主堂でお祈りくらいあげてくれるだろう」

また振り出しへもどったわけだ。

一日延びれば一日だけ、城之介の身辺の危険度は増してくる。

一日も早く、目的をはたして、この横浜居留地から出るしかない。やはり、初めの計画通り、清国人の玄徳を捜しだす。父母の仇の居場所を突きとめることだ。

屋台のおやじは、玄徳を知っているはずだった。楊に引き合わしたのが間違いだったのである。なぜ、楊のところに連れていったのか。

しかし、どちらにしても、雪乃を連れていることは足手まといだった。

「だれか匿ってくれる者はないのか、この土地には」

「ありません」と、悲しげに首をふって、

「港崎町に、ちょっとした知り合いがいますけど」

「遊廓にか」

「芸者をしているんです」

小蝶という廓芸者だという。自前なら女一人匿うことは出来るだろう。遠くで銃声がした。二人の脱出に気がついた赤隊が腹だちまぎれに発砲したのかもしれない。

「川沿いに廻っていった方がいい。赤隊の奴らは何をするかしれぬ」

「大丈夫です」

雪乃は気丈に微笑んだ。帯にはさんだ拳銃を軽くおさえて、

「だめなときは、こめかみにあてて引金をひけばいいのですわ。でも、またお逢いできることを祈っています」

闇の中に振りかえった白い面が胸に残った。

関帝廟のわきで酔いつぶれたように倒れていた男がある。城之介が近づいたのを見ると、むっくりと起き上った。

「ローニン、玄徳を捜しているかね」

達者な日本語だった。見るからに清国人の五十がらみの枯木のように痩せた男だった。

城之介は警戒した。ほかに人影はない。

この男が何を考えているのか、こうした初めての土地では、用心に越したことはない。

「だとしたら、どうだ」

「玄徳の居るところ、知ってるよ」

「何処だ」

「三弗ね」

男は枯枝のような指を三本立てた。

「案内しろ、ほんとうだったら、くれてやる。だが、どうして、おれが捜していることを」

「聞いたよ。あのとき、麵条食べていた」

そうか、あの屋台に首を突っこんだとき客がいたが、こいつだったのか。一応の納得はいったが、安心はならなかった。

「名前を聞いておこう」

「楊文卓」

「楊だと」

「ああ」けろりとして答えた。「ローニンが斬った楊は、弟だよ」

さすがに、城之介は足をとめた。

あまりにさばさばと答えたので耳を疑ったくらいだった。在留清国人の数はそう多くないにせよ、あの男と兄弟だとは。

「ふむ、おれが憎くはないのか」

「三弗、儲けるね」

僅かな小遣銭稼ぎが出来るだけでもいいというのか。

清国人たちが、爪に火を点すようにして、小金を貯めている話は、長崎でもよく聞いている。かれらの吝嗇は、いずれも大きく商売するようになるまでの資金蒐めで、そのためには、どんなことでもするという。

居留地で異人斬りが頻繁に行われていたころ、どこそこで斬られたと聞くと、飛んでゆく。弥次馬根性の見物ではない。

死体の始末をする手間稼ぎだ。日本人は、手を汚すのを嫌う。死体の始末は、特別な者がやることになっている。

が、居留地は日本的習慣の入らないところだから、清国人たちは、野良犬でも猫の死骸でも、とりかたづけて、幾らかにする。それはせっせと貯めているのだ。

　そうした気質を考えると、短気なアメリカ人や、執念深い露西亜人のように、兄弟の怨みよりも、一文でも金になるほうをとるというのもわかる。

　だが、それはまた、容易に金で人を売るということにもなる。安心はできなかった。

「楊も……いや、おまえの弟も、金のために、おれを斬ろうとした」

「そうかね」

「やつをそうさせたのは、誰だ」

「知らないね」

　楊文卓は、黄色い欠けた歯を剝きだして、ききき、と奇妙な笑い声をたてた。

「おれ、麵条、食うてた」

　案内されていった先は、かなり大きな屋敷だった。洋館なのである。こんなところに、清国人の玄徳がいるとは思えない。

「たばかると、命はないぞ」

「たばかる、ないね」

「三弗か、その首か、だ」

「首がないと、麵条、食えないね」

　どこまでとぼけているのか。

　表門は開いていた。来客がある様子だった。楊は玄関に立つと、何か早口に言った。のぞき窓がカタリと開き黒人の眼がぎょろりと光った。

　楊の早口は聞きとり難かったが、

「瞧香的の客だ」

と言ったようであった。

　それなら、城之介も知っている。長崎にもいた。占い師だ。王朝時代にも砂占いとか、星占いがあったように、この占い師は、香で占う。

　香を視る者、という意味で、一種の巫女なのだ。香の燃えかたで、吉凶運勢を占う。

　たとえば、香の燃えかたが早くて、高く香煙がのぼれば、吉であり、低くたなびくときは凶という。真直ぐのぼるのは天上の霊が加護を与えるの意だという。

「楊、ここに玄徳はいないのか、占いを見て貰いに来たのではないぞ」

「占い、間違いないね」

　ずんずん先へおりてゆく。どうやら占い師は地下にいるようであった。

　地下室というのは警戒しなければならなかった。梯子段をはずされてしまえば逃れることが出来ない。

　黒人の大男が腕組みして、無表情なのも、あまり気持の

いいものではなかった。

「どこだ、楊」

　暗いところに、一カ所だけ、ぼんやりと、洋燈が点されていた。

　重い織物のカーテンが左右にわけられた下に、装飾の多い六角卓子を据えて若い女が坐っていた。

『瞧香的、この人は玄徳を捜していなさる、占うておくれ』

　楊は馬鹿丁寧に言った。

　占い師が勿体ぶった手つきをして、香を燻べ、両手をあやしげに動かして、ぶつぶつ呪文めいたことを呟いているのも、城之介には馬鹿馬鹿しいかぎりだった。

「ふむ、それで玄徳の居所がわかるか」

　それなら、いっそ仇の所在を捜して貰ったほうがいい、と思った。第一、占い師が、若すぎる。三十歳にはまだ手が届かないのではないか。

　両手がとまり、香煙のゆくえを見上げてから、

「玄徳、いない。ヨコハマにいない」

「なに！　どこにいる」

　横から楊がぬっと手を出した。

「一弗ね。いるかいないか、一弗、どこにいるか、一弗」

「わかった。一弗よりももっと欲しいものをやろう」

　城之介の抜刀が、ぴたりと、瞧香的の胸もとに擬された。

「この方がききめがあるだろう、ことわっておくが、威しではないぞ、嗅いでみろ、血がまだ匂うはずだ」

　突然、楊が身を翻した。こいつに片手擲りの一刀を浴びせ、占い師が逃げようとした鼻先に、またその刀がもどるまで、一弾指の間にすぎなかった。

「一弗二弗と、きたない稼ぎをするやつらだ。おれをカモと思ったのは、間違いだったな。玄徳はどこにいる。知っているはずだ」

「……」

「知らないなら、それでいい、おれを瞞した罰だ、閻魔のところに行ってもらおう」

　ひたと、白刃が女の頸すじにあてられた。

「玄徳はどこだ」

「上に、います」

「上に？……」

　そのとき、楊がむくむくと起きだした。したたかに峰打ちを浴びせられて、からだを歪げたまま、大きく息をついている。

「楊、玄徳のところに案内しろ、たった一弗二弗もうけるために、おれをここへ連れて来たのか」

「へえ、へえ、一弗が百で百弗だよ」

「——きさまの首は一つだ。すげ替えはきかぬぞ」

時間の無駄をさせられたことがいまいましかった。
この暗がりの中に、洋燈の乏しい明りを下から受けた女占い師の顔が奇妙に欲情を感じさせた。こうした類いの女は、一方では売春をしているのかもしれぬ。
「立て、先へ上るのだ」
あのときの楊の弟のように、上から兇刃をふるわれるかもしれぬ。
刀の先を背中につきつけられた楊は、まだ痛みに顔をしかめながら、梯子段を上ると、
「悪いことしない。カタナ要らないね」
「今度抜くときは、その首が飛ぶときだと諦めろ」
何をしている家なのか。黒人はにこりともせず、顎をしゃくった。
かなりの広さを持った家だった。廊下が長く、そこにはびっしりと、絨緞が敷きつめてあり、動物的な強い香料が漂っていて、しだいに桃源郷に入ってゆくようであった。
廊下を幾つ曲ったか、扉を黒人があけてくれたが、その中に入ると、一層、その花の精のような強い匂いがし、そこまでくると、どこかで話し声が聞えてきた。
それも一人や二人ではない。何人かの声が――はっきりとは言葉をなしていないが、あきらかに男女のそれだった。
まるで、病院のように、患者の苦しみの声と聞えたが、近づいてみると、あの喜悦のあまりに、無意識に奔る快楽のそれだということがわかる。
「ここは、どういう家だ」
「楽しむね」
と、楊は顔中を笑いにして、
「男も楽しむね、女も楽しむね」
ききき、と笑った。
「ここに玄徳がいるのか」
「玄徳がいるね」
ここまで来て、まだ嘘を吐くとは思われない。が、玄徳に逢うまでは、放心できないのだ。
得体の知れない家というだけでも、城之介の立場は、危険に一歩近づいているのである。
その次に通された室内は真っ暗だった。
「灯はどうした」
「暗いのがいいね」
楊は馴れた足どりでとんでいって、何かしていたと思うと、カタリと音がし、仄明りが洩れてきた。
のぞき窓を開けたのである。そこにはギヤマンがはめてあり、向う側の明りがさしこんできた。
それは、もうのぞくまでもなく、何がそこで起っているかを物語っていた。
男女の喜悦の声は一層、はっきりと聞えていたし、物音までした。

肉と肉の重なりあい、打つかりあい、絨緞の上で転々する音であり、寝台を軋ませ、あるいは、安楽椅子の絹に爪をたてる音だった。
「あ……いやっ、もっと、あれっ」
女の声は、日本人であることを物語っていた。
これは意外だった。そのときまで、城之介は、あのショーメット夫人のような異人の牝豚じみた肉欲の塊を想像していたのだ。
「なんということだ、異人どもではないのか」
「面白い」
と、楊はぞくぞくからだをふるわせた。
城之介も、その窓に目を寄せた。広い部屋がギヤマンの向うにあった。幾台かの洋燈の明りのもとに、数十人の男女がからみあっていた。
女たちは、長襦袢を着た者もあり、半襦袢の者もあり、あるいは真赤な腰巻だけの者もいたし、一糸まとわぬ裸もあった。
いずれも、日本人の体型だった。髪もそうだ。もはや多くの者が乱れている。ただ、顔はわからない。
女たちは、お面をかぶっていた。
ひょっとこや、おかめや、狐や、いろんな仮面で、顔を隠している。この明るい室内で多勢で行う乱交には、やはり、顔を見られたくないのであろう。
顔さえ見られなければ、どんなことでも大胆にやれるというのだろうか。
男たちは、素顔だった。
その髪のかたちから、清国人とわかる者が半数を占め、半数は紅毛の異人だった。
いずれも若い。若すぎるほどだった。少年といってよかった。十四五に見える者もいた。とっても二十四五であろう。
その若々しいからだが、女たちの飽くなき情欲にこたえて、いろんな姿態を演じている。
かれらの方は、冷静な様子が窺えるのはしかたがない。女たちの顔は見えないのだし、その肉体の、たとえば乳房の工合や、腰や脚などから見ても、少年たちとは、十歳もそれ以上もひらきがあるようであった。
これは男女の双方の好みによる乱交というよりは、女性が少年たちを買って、ひとときの快楽に狂っているだけのことであった。一人一人行うよりも、乱れた、こういうかたちのほうが、刺戟が強いのは事実であろう。
その行為に惑溺するあまり、おのれの洩らす声には気がつかないのであろう。
少年たちの奉仕も、しかし、異常なほどだった。日本の陰間とか色子とか、そうした少年たちには、とても考えもつかないであろう奉仕ぶりは、このひとときの代価が、か

なりのものであることを思わせた。
「ああ、もうたまらない、あ、あ、死ぬるよう」
ひいィッと叫んで、亜麻色の髪をつかんで悶えている肉体の、背中に灸のあとまで見えた。あるいは、五十くらいになっているのではあるまいか、しなびた肌もあった。
昂りのあまり、仮面をずらして、少年たちの唇を貪っている女もいた。かと思うと、少年の股間に、顔を埋めている者もいた。中にはあまりの歓喜で肩に歯を立て、少年たちのほうで痛みの悲鳴をあげる者もいた。
女の情欲のすさまじさを目のあたり見て、城之介は、呆れたが、それよりも、この楊がなぜ、ここに連れて来たかを疑った。
「玄徳に逢うために来たのだぞ」
と、楊の肩をつかんでいったとき、あっと、女の声がひときわ高くひびいた。
ひょっとこ面をずらして、少年の唇を貪っていた女が、昂奮して、面をかなぐり捨てた。あらわれたのは、豚鉄の女房お咲の顔だった。

紅い部屋

異様な光景だった。ヨコハマの異人館である。ペルシャ絨緞やレースのカーテンや豪華なロココ風の寝台、卓子など華麗を極めた室内を幾つもの洋燈が照らし出した中で、異常な情景が展開されていたのだ。
たんに男女の乱交図といえばそれまでのことだが、城之介を驚かせたのは、女性がいずれも年増であり、男が若く美しいことであった。
清国人か異人で、日本人はいない。居留地の特殊性があからさまに出ている。男女とも全裸で、情欲に濡れた裸身は、ストーヴの暖気で上気し、狂ったようにもとめ合っているのだ。
誰もが裸ということで、羞恥心がなくなるのであろうか、若者のほうは、報酬に見合うだけの奉仕のつもりであろうが、情感というものは、制限し難い。
女性の方の熱狂度が、そのまま少年たちを昂奮の坩堝に誘いこみ、加減を知らない情炎地獄にひきずりこんでゆくらしかった。
「呆れたものだ」

城之介は、のぞき窓から見ながら、楊に言った。
「毎晩、こんなことやっているのか」
「——はじめてね、このハウス」
ここではじめてだという意味だろうか。城之介が意外だったのが、その女性たちが、髪かたちや体型から言っても日本人にちがいないことだった。むろん、仮面から洩れるうつつの痴語も、それを裏書きはしていたのだが、少し前にショーメット夫人の白豚のような肉体の悶えを見ただけに信じられなかったのである。
胆汁質で、羞恥心の少ない異人の男女は、街頭で抱きあって接吻したりしている。愛情のあらわれには違いないが、日本の伝統は、つつましさ、こまやかさを美徳とし、夫婦の愛情を他に見せることで、一層、快感を味わうという性質のものではなかった。人目のないところでは、どこまでも濃密な交歓を行う夫婦も、他へはそれを見せつけて喜ぶということはない。他者への思いやりであろう。露出癖が少ないところに、二人だけの感動があった。
居留地で展開された欧米の風俗は、したがって、千年の伝統美を破壊し、性をあからさまなものにした。この土地では、露出と見せつけが、日常であり、それは性を感動ではなく、快感として独立させたともいえる。
この日本の婦人たちは、二十歳過ぎから五十歳前後までと見えた。かなり崩れてはいるが、それらの髪かたちは人妻であることを物語っている。
燃えるような緋縮緬の腰のものや、梅花散らしの長襦袢などをまとっていた女たちも、情火の燃えるにまかせ、帯をとき、あるいは脚にまつわりつかせたまま、蒼い少年の肌を愛撫するのに夢中になっていた。
肥ったのや、痩せたのや、色の黒いのや、白くて娘々したのや、多様ではあったが、人妻のからだにちがいなかった。
少年たちのからだには、どこかに蒼い葱のような新鮮さが残っており、それは報酬に対する奉仕としての割り切った態度に、むしろかわいたものが窺えた。
女たちが、人妻の身でこうした行動に出ているのも、性を享楽しようとするヨコハマの風潮に参加しているのであろう。
その意味では、たしかに、彼女たちは居留地の女にちがいなかった。
(亭主どもの面が見たいものよ)
城之介は皮肉な気持になっている。
ひとりの、殊に美しい清国人の少年を抱いて、いのちのかぎりとばかり貪っていた女が、ひょっとこの面をはずしてしまった。そこに、豚鉄の女房のお咲の顔を見て、城之介は、さすがに息をのんだ。
もっと平凡な生糸問屋とか、その他雑貨の売買をしてい

る店の女将か御寮人などかと思っていたのだ。
（豚鉄の女房が……）
　鉄五郎は、豚屋というだけではない、多勢の子分を持って、太田新田の要蔵部屋の親分と、居留地を縄張りに勢力が対立している無頼漢だ。その女房が、こんな遊びをしていると知ったら、豚鉄は黙っていない。
　女たちはみんな仮面をかぶっている。お咲のだけがはずれたのである。つまりほかの女たちに、顔を見られたのは、お咲だけということになる。
　むろん、少年の下腹部に顔を埋めていた女もいるし、もう何も見えないほどうつつになっている者もいた。が、一人でも顔を見た者がいるということは、お咲の秘密は明るみへ出たことになる。
　城之介はそのとき、漸く、あの秘密の手帖の意味を悟った。
（そうか、ショーメット夫人の住所録はこの組織だったのか）
　ショーメット夫人が、この組織の鍵を握っていたのだ。
　人妻たちは、どういう経路かわからないが、
「異人の少年たちを抱ける」ということで加入していたのであろう。お互いの顔さえわからなければ、亭主に知れる心配もない。
　その安心感が、好き心を煽ったのは否めない。
（その住所録はおれの懐中にある）
　本町や弁天通りなど、商家と女房の名と年齢が和洋両方で書かれてあった理由も判明した。
　お咲がわれにかえって、あわててひょっとこ面をつけるのが見えた。
　そのとき、城之介は背後に殺気を感じたのである。
　きえーっと、頭の頂天から噴き上るような奇声とともに、白刃が走ってきた。
　一瞥するより早く城之介が身をひねって抜刀したのは、孤剣におのれを托す者の本能的なものであろう。
　ぼすッと、板壁を槍が貫いた瞬間、城之介の一刀は真っ赤な口をあけて眼を剝いた男の額から鼻柱を真っ向唐竹割りに断っていた。
　二人、同時に斬りかかってきたのだ。
　槍の方が、その長さだけ、早くかれの胸に届く勘定だったろう。身をひねるのが一秒の何分の一か遅れたら串刺しになっていたにちがいない。
　二人から同時に攻撃されたときの咄嗟の判断は理屈ではない。直感だ。どちらに先に対応するかを考えているゆとりはない。
　もしも、いま、城之介が、この判断を誤っていたら、すでに死んでいたろう。槍を躱して、刀の奴を斬る。殆ど本

能といってよかった。
　拝み討ちに、双手でサーベルを振りあげた異人は、鼻柱まで断ち割られて、そのまま、剣を握りしめたまま、仰向けに倒れた。
　板壁に突きこんだ槍も、このくにでは見かけないものであった。ひき抜くひまがないと見たか、槍はそのままに、ぱっと放して、腰に刺した短剣を抜こうとした。その眼前に血刀が走った。
　男の表情が一瞬、恐怖に歪み、顔をよけた。からだがよけるには遅かったのである。血刀は逆袈裟に肩から胸へ走っていた。
　凄まじい血煙りが噴いた。その血のしぶきが嫌な臭いを残して、断末魔のもがきの上に点々と落ちたあとに、思いがけなく、こういうのが聞えた。
「みごとだな、ジョーとやら」
「……」
「二人に背後から狙われたにも拘らず、かくもあざやかに仆すとは……人に話しても信じられぬ腕前だ」
「おぬし？……」
　暗がりに、その男は立っていた。
　扉があき、隣室の明りがさして、城之介の姿は仄かに浮き上っている。が、その男は、武士の姿というだけで、表情はまるっきりわからなかった。
　仄明りが陣笠に光っている。羽織を着て袴を穿き、足ごしらえは厳重である。やはり金属のせいで光ったので見えたのだが、大刀の鍔は、珍しい角鍔と見えた。角鍔は実戦むきである。幕末の風雲急な時勢とはいえ、この居留地に出入りする役人などは、いつか文明の風潮に染まって、瀟洒なものを好むようになっている。
　それを異様と感じたのも、やはり、その武士の姿が、関門を守り、居留地を時々巡回して治安に当っている役人風――いわゆる菜ッ葉隊に見えたからであろう。
「大した腕前だ」
　と、感歎を洩らしながらも、闇の眼はかれからそらさぬ。
「大和田を斬ったときから、感心はしていたが」こう言ってしまってから、はっと、気がついたようである。「ははは、言わでものことを吐いてしまったようだ。まあいい、奴は死んだ」
（大和田とは？……）
「しかし、その腕前も、今夜限りだ。きさまは死なねばならぬ。すべての秘密を知った者は、死ぬ」
「斬れるつもりか」
「ショーメットの牝豚よりは、首がほそいだろう」
　やはり。大和田というのは、あの生首を投げこんだ浪人にちがいない。この男と一味だったのか。
　だが、不審は残っていた。

（役人がこの組織に一枚嚙んでいるとは？）
その疑惑を打ち消すように、影は言った。
「飛道具が狙っている」
「なに！」
「死なせたくないやつだ。きさまの腕が惜しい。わしは人を見る眼がある」
「……」
「この世に無用な奴と、有用の奴のちがいさ。その腕をムザムザと闇に葬るのは惜しい」
「おれを知っているのか」
「聞いた。いろいろとな。この土地へ潜入してきた度胸も大したものさ。それに、頭がいい。えげれすもふらんすもべらべらとはな、役に立つ。どうだ、その腕、生かさぬか」
「むろん……死にたくはない」
闇の中にかれを狙う銃口を捜して、城之介は眼を走らした。
「が、おぬしの情けを乞うこともないようだ。おれの生死はおれが決める」
「出来るか」
「やってみたらどうだ」
その眼の前で、役人は腕組みをといた。左手に拳銃が鈍く光っていた。
「わかるか？」
「……」
「おまえのワザが素早くても、わしにはかなわぬ。左手の拳銃が火を吹き、右手の刀はお前の首に走る」
「御大層な講釈だ。やってみるがいい」
「その前に、相談がある。あの手帖だ。ショーメット夫人の。これだけ言えばわかるだろう。あの手帖さえ、渡してくれれば、これまでのことは忘れよう」
それほど、必要なものか。人妻の名前ばかり書いてあったようだ。人妻たちにとっては、明るみへ出されては大変だが、この役人には、特別の意味があるようには見えぬ。
「よかろう、渡してやってもいい」
「おう！」
「一つ、条件がある」
相手が、ほっと緊張をといた隙にぐさりと、城之介は条件を突きこんだ。
「──言え」
「なぜ、あれを欲しがる？」
「……」
「そいつを聞かしてくれれば、手帖は渡す。むろん、おれには関係のないことだからな」
「われらのなかまに加わるかどうかだ。秘密はうかつに洩らせるものではない」
「そうか、いやならそれでいいことさ。おれのほうから持

ち出した話ではないのだ。左様さ、あの手帖は、おまえにくれてやるよりは、豚鉄にでも渡したほうが面白いかもしれぬ」
「待て、それは！」
「やっぱり始末したほうがよさそうだ。ぶっ放すがいい、そら、ここだ」
城之介は一跳した。身を翻すや、片膝つきざまに槍を抜いて投げた。早わざである。誘われたように拳銃は火を吹いた。陣笠が大言壮語したのではなかったことは、ぶるーんと飛来した槍を、抜刀して打ち払ったのでわかった。が、その間隙に、サーベルが飛んできた。これも打ち払った。
「くそ！　死ね」
拳銃をむけたとき、城之介の姿は眼前から消えていた。
すでに隣室の情痴の部屋では混乱が起きていたのである。銃声と怒号と悲鳴が、さしもの情艶を現実にひきもどしたのだ。
火事場の騒ぎと違う。もっとひどい。顔を見られてはならないという思いが女たちを狂乱させた。
悲鳴をあげて、逃げまどい、
「着物は、あたしの着物は」
「どこだよう、サラバベッチ、あたいの着物を出してよう」
「ゴウディミョウ！　早くしないか、帯を、帯を！」
ハマ言葉というのがある。居留地特有の無国籍語は、居留地の体臭そのものの、気忙しく、癇癪を起さずにはいられない内外人の、罵詈の調子をあらわしている。
女たちも、いまのいままで、鼻声を出し、男のからだを貪り、羞恥を忘れて艶めかしく悶えていたことも忘れて、着物だ帯だと騒いだ。
こうした時代のこうした場所だったが、彼女たちは、まだ異人の服は着ていなかった。
もっとも、コルセットまでしていたら大変なことだが、全裸に着物をまとうということも、大変なことだ。細紐一本あるなしで、着物姿は、よくも悪くもなる。
命からがら火事場から逃げるには、恰好なぞ構っていられないが、それぞれ、口実かまえて、亭主を啞聾にしての浮気の夜なのだ。
この場から飛び出す、となると、一番先に考えるのが亭主の顔で、そのためにも腰紐や帯がなければ、帰れない。
そのための混乱だった。
血刀をひっさげて飛びこんできた城之介は、出口を捜した。
はじめて入った洋館である。どっちが表か裏か、まるきり見当はつかなかった。

城之介のからだの返り血や、血刀が、一層、女たちの恐怖をかきたて、不安の混乱を煽った。
「ジョー、こっち」
不意に近くで声がした。
それを誰かたしかめるひまはなかった。
身を翻して、扉から飛びだした。先に立ったのが清国人の少年であり、裸身に素早く青い長衫をまとった姿が、
(見たような……)
と、思った。
むろん、いま女たちの相手をしていた少年の一人である。どうして、その少年が、かれの名を知っているのか、疑問を感じながらも、城之介は導かれるままに走った。
「どこだ、外へ出れるのか」
「駄目」
「なに?」
「隠れるね」
少年が走りこんだのは、別棟の煉瓦建ての納屋だった。
そこに小さな部屋が出来ていた。少年は、城之介を促すと、中へ入って鍵をかけ、それから、外の気配を窺った。
「——大丈夫」
にっと笑った。
「ここ、誰も来ない」
美しい少年である。城之介は、洋燈の明りの中で、眼を瞠った。女にもこれほどの美貌は少ない。走ったせいか、ハアハア息をきらしていて、頬が上気している。面白い鬼ごっこをしたあとのような邪気のない表情だった。
「ジョー、お茶飲むか」
「うむ……だが、どうしておれの名を」
城之介は刀を拭った。血がこびりついていた。研がねばならぬ。どこで研いだらいいか、追われる身では、難かしい。
「ジョー、二度目だもの」
「二度目?」
意外だった。城之介には、はじめて見る顔なのである。
「どこで逢った? この居留地でか」
まさか、長崎ではあるまい。
「いい、そんなこと」
何処で逢っても大したことじゃない、と、いうふうに、小首を傾けて、にっと笑う。
いままで、あんな女たちに弄ばれていたとも思えない。年のころは十五か六か。そんな見当だが、少年の頬や手の美しさは、まだ少女の清純ささえ感じさせるものだった。
「——知りたいな」
と、城之介も微笑をかえして言った。
「奥歯にもののはさまったようなことはいやだからな」
と、言ってから、この少年には難かしかったか、と思っ

た。
「ジョー、見たの」
「……」
「見たね」
のぞかれていたのを知っている。城之介は返答に窮した。
そうだと答えれば、少年を傷つけるような気がした。
「あんな、女の人、きらい」
眉をしかめ、異人がよくやるように、鼻を切る真似をした。
そのとき、城之介は思いだしている。この少年の、西施の顔を顰めるにも似たその表情が、昂奮した年増女に、股間を乱暴にまさぐられて、うとましく、顔をしかめた、その表情を、思い出させたのである。
そして、その女が、お咲であったことも。
お咲を狂乱させるような情けの手管をこの少年が弄していたのだろうか。男を知り尽したあの女を狂喜させるほどの逸物が、この少年の股間に存在するとは、その表情や優美な肢体からは考えもできないほどなのだ。
が、ことは、いま行われたのである。
疑いもなく、この少年の肉体が、男に狎れた年増女を惑乱させていた。
「——大分、静かになったようだな」
城之介は戸口に立って耳を澄ませた。
これ以上、いまの思案を押し進めたくなかったのだ。美少年とはいえ、あんなお咲のような女の玩具になっていたことを思うと、やはり不潔感は拭えない。
「大丈夫」
と、また少年は言った。
乱れた弁髪が気になるように、手をあげて、編みなおそうとしているが、お咲に引っぱったり、かきまわされたりしたのだ。ほどいて編み直すしかない。少年は、手をおろし、仕方がない、という顔で微笑した。
「寝るか」
と、言った。
寝台は、かれのものにしては大きい。清国人の寝牀ではなく、欧米ふうのものである。この家の主のお古だろうか。
少年は長衫を脱いだ。あのまま、急いで着たのだ、下は何もつけていない。
「寝るか」
と、また言い、寝台に上った。そして城之介が身を横たえるだけの空間をつくって、誘うようにこちらを見た。女のように嬌めかしい視線であった。
城之介の反応を充分、認識しているように、涼しげに名乗ったのである。
「わたし、玄徳……寝るか」

「——玄徳!? お前がか……」
城之介は瞠目した。今まで、こんな少年とは考えもしなかったことである。
長崎の丸山の王は城之介に、玄徳に逢うように奨めた。仇の居場所を知っているという。新開地の居留地のことで、玄徳といえばわかるといわれて、それ以上は聞く必要がないと思ったのだ。
城之介が父母を殺されたのは十年前のことである。そのころ玄徳は五つ六つではないか。
(どうして、こんな少年が知っているのか?)
城之介は信じかねた。
その疑惑に応えるように、玄徳は微笑して言った。
「寝るか」
蒼白い裸身を寝台に横たえる。十五六と見えたが、あるいはもっと下かもしれない。少年の下腹部は翳りがなかった。ちらと見えたところでは胸やふとももと同じ肌合いで滑らかだったことだ。
お咲を狂わせたものが、その幼い凸起であろうとは。あの紅い部屋での情痴図が、遠い昔に見た異様な曼陀羅図のように妖気に包まれたおぼろな記憶となって、城之介を混乱させた。
妖気は玄徳の肌から発散しているようであった。
寝台に蒼白い肌を横たえて、女身のように身をくねらせながら微笑を投げかけてきた玄徳には、妖艶といっていい、魔性の媚があふれ、男も女もとらえずにはいない奇妙な魅力があった。
「——寝るか」
と、また玄徳は微笑した。
おのれの肌の美しさを充分知った自信が、少年の優しさを支えている。寝台に裸身を横たえて、城之介の入る分をあけているのも、自信がさせるのだろう。
ねるか、と爽やかな少年の声には、それが拙いだけに、嫋々としたものがあった。
城之介は、女色以外に興味はない。如何に美貌であっても同性の誘いに乗る気はなかった。
「何か勘ちがいしているようだ」
と、城之介は視線をそらして言った。
「お前に逢いたかったのは、そんなためではない」
「……」
「長崎の王を知っているだろう、奴がお前に逢うようにと言った」

「王?……」
「丸山の通弁だ」
そう言われても玄徳には、記憶にないようであった。
この若さでは十年前のことを知っているはずはない。城之介は、王に嘘を吐かれたのか、玄徳という名を聞き違えたのかと思った。
(聞き違えということはない……王に悪意がなければ、奴が何か間違ったのだ)
どちらにせよ、城之介が手がかりの一つを失ったことに変りはなかった。
居留地へ潜入した翌日、阿片窟へ案内されたのは、どう解釈すべきだろうか。
楊が階段の上から斬りかかってきたのから見て、罠におとそうとしたのだと、当初は考えたが、城之介を案内したのは屋台のおやじなのだ。
玄徳という名も、こちらで言ったことで、罠は設けられていたわけではない。
"見えぬ敵"が楊を指嗾したとすれば、関帝廟の裏の細民街へ入ってからのことである。
(あそこに玄徳はいた)
城之介は、この少年をはじめて見たが、少年の方は、「二度目だョ」と、言った。
あの阿片窟に居たのではないか。だから案内されたのだ。
城之介は、異様な地下の闇を思いだしている。暗く臭気に満ちていながら、ふしぎな安らぎを感じさせるあの闇の中のうごめきを。奇妙な笑いを。
奥に寝牀があった。うす絹の帳を垂らしたそこで二つの肉塊がからみあっていた。闇を幸いと、城之介の眼前で、けものじみた行為で呻き声すら洩らしながら、
「玄徳はおれだ」などと揶揄した男の声もまだ耳にある。
その男は、よくは見えなかったが頑丈な体軀の壮者だったようだ。
居留地の清国人の街といっていいこの一角で、殊に阿片窟に入ってきたローニンに敵意を抱いたのは、不思議ではない。
闇に目が馴れ、阿片をやわらかくする小さな石油の炎の助けで、おぼろな二人の姿の動きがそれと察しがついたのだが、男は、嫩い肌に背後からおおいかぶさっていた。
阿片による陶酔が、女体の愛撫を執拗にさせていた。短い時間のおぼろ闇は城之介にそれ以上のことは教えなかったのだが、いま、寝台に横たわって妖しい微笑を投げてくる少年を見ると、阿片の臭いと煙に閉ざされた闇のなかでうごめいていた肉塊が、女ではなかったことに、判然と思い当ったのである。
(玄徳だったのか!)
そうだ。屋台のおやじは、だから阿片窟へ連れていった

のだ。あの男に背後から抱かれていたのは、この玄徳少年だったのだ。
城之介は、常識的に男女のからみあいと思っていた自分の迂闊を自嘲した。
そのこわばった笑いを、玄徳はどううけとったのか、
「女きらいね、男すきね」
といい、枕元の洋燈に手をのばした。灯が消え、闇が城之介を包んだ。

その闇の中に、少年が寝台からおりて近づく気配がした。
「よせ」と、いささか狼狽して、城之介は声を荒げた。
「おまえが、女をきらいなように、おれは、男をきらいなのだ」
「——ジョー」
すがるような声である。闇がうす紅く染まるようであった。美しい少年のその年齢の持つ妖しい雰囲気には、男性とも女性ともつかぬ、それでいて、両性の美を併せ持った妖しさがある。
これまでも城之介は、色子や陰間などに興味を抱いたことはない。
清国人という血が、玄徳の肌を異様な美しさに育んでいたのではないか。四千年の悠久の大陸が、その歳月を費やして作りあげた美といえるかもしれなかった。

「ジョー」
少年の息吹きが背後へ迫ったのを、荒々しい声で、かれは打ち消した。
「玄徳、おれが逢いたかったのは、長崎の王を知っている玄徳だ。どうやら人違いだったようだな」
「ジョー、わたし……」
玄徳が熱い息づかいで何か言おうとしたとき、庭で多勢の足音と騒がしい声が聞えた。
「女どもは何処へ隠した」
横柄な声だった。役人らしかった。
「人妻が集まってよからぬことをしているという知らせを受けたのじゃ」
威たけ高にそう叫んでいるのにまじって、英語と仏語も聞えた。駐屯の兵隊たちであろう。幕府の役人と雖も、居留地ではかれらの先導がなければ、役人風は吹かせない。
通商条約を結んでいる国とその国民には、まるっきり頭が上らない連中だが、それだけに、その反動を弱い清国人や日本の商人に向けている。清国人たちは、上海や厦門や澳門などから、異人の使用人として帯同されて来た者や、それらを請人として渡日して来た者、あるいは長崎に長くいて、新開港地のほうが儲けが大きかろうとあてこんでやってきた一旗組などであった。
公使や領事などの肩書と、最新の武器とよく訓練された

兵隊、そして数門の大筒で武装した軍艦などに弱い幕府当局の態度が、そのまま下級役人たちに反映していた。
語学に弱いせいもあったし、体格の相違もある。その上、言葉がわからないとあっては、ただ、事なかれ主義で、紅毛人にはさからうな、という気持になるのもむりはない。
「誰かがさしたのだ」
闇の中で城之介は刀をつかんだ。
英国の赤隊が、銃剣を手にしているのを想像した。一個分隊はいるかもしれない。この連中を相手にして、何人斬れるかわからないが、捕まれば、無事には済まないのだ。
(ショーメット夫人の生首で、気が立っているのだろう)
虱つぶしに探しているのにちがいなかった。
あの下手人は大和田(城之介が斬り捨てた)という攘夷浪人らしいが、すでに死人に口なしで、申し開きは難かしい。
(さっきの役人が一味とすれば、いよいよ城之介は救われないな……)
この淫蕩な洋館にかれが入ったのを見ていたやつが密告したのかもしれない。
そうでなくても、城之介の姿は目立つのだ。敵の目は、要所要所に光っている。かれの行動は逐一、見られていると思わねばならなかった。
『開けろ、開けろ』

赤隊の罵るような声がし、扉が靴で蹴られた。銃床で叩いているようであった。
いよいよだ。仇を討ち洩らしたまま、斬り死するのは残念だが、しかたはない。
城之介は抜刀しようとした。その手を、そっと、玄徳がおさえた。
「わたし、大丈夫」
囁いて、さっと、耳に唇と舌を触れた。
着物をつかんで、
『誰？　玄徳がいるよ』
いかにもいま起きたような声で、だらしなく着ながら、扉をあけた。
『ほかに誰もいないよ、ここは使用人の部屋だから』
そう言っているのを、城之介は扉のかげで聞いていた。
何人かが洋燈や角燈を手にし、その明りの中に浮んだ美少年の妖美な姿に、赤隊や菜ッ葉隊の者も、まぶしく感じたようであった。
「くるか、あなた」
玄徳はその自信のある流し目を菜ッ葉隊の与頭にむけた。
与頭は狼狽した。女から誘われることはあっても、こうした美少年と口をきいたこともないのだろう。
「いや……」
と、いかつい顔を赧らめて、間誤間誤しながら、

「見るまでもあるまい」
と、龕燈提灯で、ちらっと、部屋の中を照らしただけであった。その正面に、玄徳の裸身の移り香が残っているような寝台が見え、さらにあわてた。
「女どもは逃げたようだな。それにしても二人を殺った攘夷浪人は凄腕のやつだ、一日経てば、一日だけ死人が増える……」
ぶつくさ言いながら、洋館へもどっていった。
洋燈や角燈の間で旧態依然たる龕燈などを持って夜の捜索をしているというのだけでも、恰好が悪いのだ。そのくせ手がらはたてたい。この土地の警備に就いている以上、攘夷浪人を捕えるか斬るかでもしなければ、出世はない。
あとは密貿易だ。幕府の大屋台がぐらつきはじめていて、役人たちも漠然とした不安から、私利を追う者が増えてきている。
(――長崎もヨコハマも変りはない……なまじの地位のあるやつが悪心を起すのだ)
城之介の父母の死も役人の不正と無関係ではなかった。
兵隊たちの靴音が去っていったあと、はじめて城之介は、刀から手を放した。
隙を見て、この異人屋敷から出なければならぬ。いつまでも居れる場所ではない。夜が明けたら、いよいよ、隠れ辛くなるし、第一、あの玄徳に迫られてはたまらない。
しかし、それは杞憂にすぎなかったようである。
洋銀を稼ぐために、好きでもない男や女にからだをまかせる生業だけに、できるなら、そうした行為から遠ざかりたいのが、こうした少年の気持だ。
城之介へ微笑みかけたのも、修羅場から逃れ得た一時の昂奮がさせたものだろう。
庭へ出たことで、ある考えが浮んだらしかった。暗い部屋へもどってくると、
「出る、大丈夫」
と、眼を輝かせた。
「死ぬと出るね……」
庭には死人が運び出されていた。城之介を襲おうとして斬られた二人の清国人である。
一人は逆袈裟に斬られ、一人は頭頂から鼻柱まで唐竹割りにされている。
蓆の上に並べた二つの死体を見て、玄徳は考えが閃いたようであった。
「暁方に、外へ出る」
玄徳は言った。
「死人になる、いいね」
この洋館は一体、誰の持ち物なのか。誰が主人なのか。奇妙な館だった。誰の名義になっていようと、城之介は脱

出しさえすればいいのだが、国情によって風習もちがい、脱出の可能性もちがってくる。
「死人は、夜出るね」
太陽のもとでは死体は出せない風習だという。
寝棺が運びこまれ、死体がおさめられた。斬られた連中は、金で傭われた無頼者らしく、寝棺を与えられただけでも過分なように、誰も葬送する気はないらしいのが、むしろ幸いだった。
一人の死体をひきずりだして、城之介は入れ代った。死体は馬小屋の藁の中に突っこんだ。夜が明ければばれるにしても、そのころには、城之介は安全なところへ逃げ出しているだろう。
一度死体をおさめた棺は血の臭いが鼻を搏った。外には赤隊が巡回しているし、菜ッ葉隊もフランス兵も血眼になっている。ショーメット夫人はフランス人だという話だから、真剣になっているはずである。
(何処へ運ぶつもりか?)
担ぎ人がやってきたのは夜明け少し前で、漸く東の空は紫いろにうすれはじめたころであった。
異人には川向うの丘に墓地がある。後の外人墓地で、ここはペルリがはじめて来たとき、檣から落ちて死んだ水兵を埋めたのが最初だった。
異郷の空で不慮の死は痛恨事であろうが、丘の斜面を墓地にしてあるので、海の眺望がよく、想いを故国にはせることもできよう、という思いやりからであろう。
だが、この景勝の地は条約国の連中で占められているとも聞いた。すると、使用人にすぎない清国人は、どこに埋めて貰えるのか。
(清国人は土葬のはずだが……)
とにかく、玄徳がなんとか、やってくれるだろう。
火葬にさえされなければ、生きるすべはある。揺られてゆくうちに眠気がさしてきた。鼾さえかかなければ少し眠ったほうがいい。
――どれくらい眠ったろう。ほんの僅かのようであるし、随分経ったような気もした。
玄徳が気を利かして、錐であけてくれた三つ四つの穴から、朝の光が見えた。
(清国人は葬いが大仰だからな、線香ぜめにされるのはたまらぬぞ)
がやがやとまわりで聞える言葉がどうやら清国語ばかりになっている。
案じた通り線香の臭いが流れてきた。どうせ身寄りもない無頼者だから、いわゆる泣き女などもいないし、坊主のお経もあるまい。そう思っていると、意外にも日本語が聞えてきたのである。
「――こいつか、新ぼとけは。二本だな。まだ一日経って

いないそうだ」
「ほんとうのことをいうと半日うちのほうがいいのだが、まあいいだろう。その代り、値が落ちるぜ」
「いいってことよ。どうせ元ァ只だ。あとの料理にちょいと手数が要るだけでな」
そんな話し声がして、寝棺はまた持ち上げられた。
一体、どういう意味なのか、城之介にはかいもく見当のつかぬことだった。漠然と感じられたのは、死体が、幾らかで取引されたらしいことである。
(誰が買うのだ？　死体を……)
むろん、中に横たわっているのが、城之介とは知られていないはずだ。玄徳が洩らさない以上は。寝棺の中で刀を抱いているが、外から一突きされたら、それまでの話であった。城之介は、その危険は覚悟の上で、玄徳にまかせたのである。
玄徳に邪な気持があったとすれば、城之介は、その運命に従うしかなかった。
(——半日なら、高い……一日たった死体は安い？)
どういう意味だろう。新仏にその値段の差があるということが、納得できなかった。
が、長崎育ちの城之介である。揺られてゆくうちに、あることに思いあたった。
(腑分けではないか？)
蘭医学の勉強に長崎へ来ていた連中は、囚人の死体を下げ渡して貰って解剖する者が多かった。世間には秘密にしてのことだが、それが表沙汰になって、長崎奉行の立場が困ることになると、墓地から盗み出して解剖した。
漢方にはそういうことがないが、阿蘭陀医学ばかりではなく、先進国はどこでも、そうだという。とすれば、このヨコハマの医者の卵など、さしずめ、新仏を欲しがるわけだ。
(死んで半日と一日では、細胞の変化が大きいのだろう、それで値もちがうのかもしれぬ)
城之介は、かれなりに納得した。それが自分のことだと思うと苦笑した。
(生きているからだの腑分けなら、値は一番高いはずだぞ)
だが、その仲介をしているやつらはどんな奴だろう。医者の卵だと、これは人助けにもなることだから、新仏も浮ばれるというものだが、間に立って一儲けするというやつは、人間の風上にもおけない。
「さあ、着いたぜ」
さっきの声がした。どすっとおろされた。死んだと思っているから、乱暴な扱いはしかたがない。
「二人前だな」
「中は見ないでもいいのか」

「どうせホトケだわな。脳味噌を貰うだけだから、どうってことはないわな」
「ホトケの脳味噌を何にするんだえ」
「おめえ知らねえのか、労咳に、あんな効く薬はねえとよ」
城之介は苦笑がこわばるのを知った。
(おれの脳味噌を……)
そこへ足音が聞えた。数人のものだった。雪駄らしい。ドスの利いた低い声には、記憶があった。
「こいつが新仏か。斬ったのはジョーらしいというが、一人は脳天を唐竹割りにされているというぜ」
豚鉄ではないか。豚屋がこうした死体買いに一枚嚙んでいるのは意外だった。
「唐竹割りじゃ、脳味噌はふっ飛んじまっているんじゃねえかい。せっかく銭を出して買っても、中身がなしじゃァ、おめえ、餡ころのねえ大福餅をつかまされるようなものだ」
「へえ、じゃァ豚屋の親方、ホトケさまを御覧になりやすかい」
「見せて貰おう。豚でも牛でも品物を見て買うのが、おれの流儀さ。なァに心配しなさんな、脳味噌がなくても、肝を貰うぜ、半日一日なら、生肝のうちさ。まだ役に立つ」
釘抜きをさしこんだようであった。ギイッと釘が軋んだ。

豚屋敷

寝棺の中の寝ごこちは悪くはなかった。城之介にとっては、はじめての経験だったが、火葬場に運ばれるのでなければ、これはかなり気楽な乗り物といえたのである。
だが、豚鉄とその身内がとり囲んで、
「脳味噌が出ているかどうか、調べさせてもらうぜ」
と、釘抜きをさしこまれたときは、さすがに、どきりとした。
蓋が一気に開けられたら、とび出しざまに抜き討ちにできる。が、釘をぎしぎしと半抜きにしてのぞかれたら、それきりだった。
釘抜きがぐいと差しこまれ、ギイッと釘が軋んで、棺の中にうすい光がさしこんだ。
そのとき、玄徳の声がした。
「あ、そっち、違うね」
「何が違う」
豚鉄が嚙みつくように喚いた。
「そっち、脳ミソあるね、こっち調べるといいね」
「なるほど、手間だってェのか。やい、常、こっちのやつ

をオープンしな」
まさか、こうしたことになろうとは思わなかったのだ。運がよかったというほかはない。二人のうち一人を隠して城之介は入れ代るとき、そこまで考えたわけではない。逆袈裟に割った男を馬小屋の藁に突っこんできた。
玄徳も、それを咄嗟に思いだしたのだろう。
「――なるほど、きれいに脳味噌が出ちまっているぜ、こいつァ生肝しか売れねえ。まあいいやな、じゃあ、すぐに運んでくれ」
殺ったのがジョーの奴だとすると、脳味噌の儲けの分は、野郎に払わせなきゃなるめえ、と、歩きだした豚鉄の罵りを城之介は寝棺の中で聞いた。
開きかけた蓋は、金槌の一撃でもとへもどされたのでほっとした。
(どこへ連れてゆかれるのか……)
焼場でないことは確かなのだ。
暫くして、街中に入ったことが、騒音でわかった。水の音がし、大岡川に沿っているらしいことを感じたくらいで、あとさきはわからない。
着いたのは、それからほどなく、二丁とゆかぬうちだった。
(川からの距離からすると、ここは、豚鉄の家の近くではないか？)
これからどう料理されるのか、まるっきり見当もつかない。死人の脳味噌や生肝を摘出したり、それを薬用として売る商売があるなどとは、はじめて聞くことなのである。
(かけがえのあるものなら、脳味噌を売ってやってもいいが……)
暗い中で城之介はにやりとした。
「さあ、着いたぜ。手早く腑分けをさせるんだ」
「医者がまだ来ねえんで」
「何をしてやがる。首ねっこに縄をかけて曳いてこい。生肝ァ、死人の腹からすぐにもとり出さねえと、生肝じゃねえ、死肝になる。殺られたなァ昨夜だから、これまでだって時間が経ちすぎているんだ」
「へえ、へえ、そう言ったんですがね、なんでも野郎、昨夜はヨシワラで遊んでやがって、宿酔のへべれけで」
「ガッデム。役に立たねえ赤ひげだ。おい、誰か、ドクに代って、生肝をえぐるやつはいねえのか」
返事がなかった。急に、しんとした感じだった。
「だらしのねえ奴ばかりだ。豚の腹を裂くのと同じじゃねえか、辰、どうだ」
「堪忍……」
「ちぇっ、弥ァ公、どうだ。一分くれてやらあ」
「一両でも、わっちには出来ねえ」
「置きゃあがれ、女のあそこには手を突っこんでよ、三月

の餓鬼をひきずり出したのァ誰だ」
「旦那、餓鬼と生肝は違わあな」
その騒ぎのうちに、やっと赤ひげの医者が連れてこられた。赤いのは髭だけでなく、尖った鼻から頬から、額までそうなのだ。迎え酒を飲んでいたようであった。
『どっちだ。急ぐ方から先に手術をするぞ、早く箱をあけろ』
ドイツ語で喚きはじめた。吼えるような大声なのである。
ここは豚鉄の納屋であった。豚が何頭もぶら下っているし、血が流れて、土間の色は変り、頑丈な調理台は血と油でぬるぬるしているし異様な臭いがあたりにこめていた。壁にかかっている大鉈のような庖丁など、気の弱い者なら、一目見ただけで、気を失うかもしれない。
寝棺から出された死体は、裸にして横たえられ、赤ひげ医者の執刀で、肝臓がえぐり出されて、大皿の上に乗せられた。脳味噌は大型のスプーンで掬い出されて、これは鍋の中に入れてゆく。
正視出来ない凄惨さだ。さすがに、豚鉄はいつか姿を消しているし、子分たちも、一人消え、二人消えして、いなくなった。
医者は鼻唄まじりだ。半裸の胸には、女の裸の刺青があるし、腕にも碇や、ハートや海賊旗など、おきまりのものがごちゃごちゃと彫ってある。かれも流れ者の一人なのであろう。
「用意、するね」
一人残っていた玄徳が、城之介の寝棺に手をかけた。
気丈にも、血と死肉の異臭の中で、まだ玄徳は残っていたらしい。
城之介のことが気がかりで、助け出すまでは、出てゆけなかったのだろう。
他の連中が姿を消すのを待っていたらしい。
焦っている様子が、釘抜きの使いかたでわかった。細い手で、ギイギイこじあけているのだ。赤ひげ医者が、脳味噌と肝臓をすっかりとりださないうち、蓋を開けて、城之介を逃がさなければならない。その焦りであった。
『どうした、そっちは』
やっと半ばあいたところで、医者がふりかえった。
玄徳が細い腕で苦労していると思ったのか、大股にやってきた。
そこは昏かったし、疑いもせず、釘抜きをつかったのが幸いだった。
『こうやって開けるのだ』
言葉がわかろうとわかるまいと、頓着しない。ぽん、と釘をぬいた。
そのとたんに、蓋が中からはねあけられたのである。

わっと、のけぞった目の前に、城之介の一刀が、突きつけられていた。
『死人が甦ったのだ』
と、城之介は笑った。
『唖になって貰おう、それから盲にも、だ。医者はつまらぬものを見ないがいい。豚鉄に聞かれたら、脳味噌が逃げだしたといえ』
『はははは、こいつは面白い。わしのナイフを恐がって、脳味噌が逃げたか』
『そうだ、代りに入って貰おう』
赤ひげは両手を血だらけにしたまま、青い眼が飛び出すかと思われた。
『入っていろ、騒ぐと、こんどはお前が脳味噌を提供することになる』
白刃の前には、命令に従うしかない。赤ひげが寝棺に入る。蓋をしめる。そのとき、戸が動いた。
「――玄徳……」
女の声がした。
城之介は寝棺のわきに身をひそめると、無言で、ぶすっと、箱に刺した。中で、ひッと、叫びをころした声がした。示威であった。これで赤ひげは城之介の言葉が、単なる威しではないことを知ったにちがいない。
「玄徳……お前だって?」
お咲だった。
この異臭と血の豚屋敷に、お咲が顔を出したのは、玄徳に未練があったからだろう。
「逢いたかったよ、あんなふうに、途中でやめてしまって、昨夜は、眠れなかったんだよ」
玄徳は狼狽した。咄嗟に何といったらいいか、答えに窮した。
お咲は駆けよってきて、少年を抱きすくめた。
「あたしに逢いたくて来たんだろう、ね、ね、うれしいよ。さあ、あたしの知っている家があるのさ、そこへお出で」
「……」
「港崎町に出入りの三味線屋でねえ、さ、早く」
お咲は玄徳を抱くようにして、裏の戸口から出た。
そんなところに出口があろうとは思わなかったのである。豚の骨などを搬び出す不浄口であろう。広く大きいこの納屋から、すぐに小川になっていて、下には小舟がもやってある。
「さあ、お出で、ここから一丁ばかりゆくと、やたらと菊の鉢が置いてある家があるからね、そこで、あたしの名前をいうといい」
お咲は急いでひきかえした。城之介が納屋から出たのは、その直後である。
「送ってやろう、玄徳」

と、城之介は竿を手にして言った。
「せっかく、お咲があそこまで惚れこんでいるのだ。慰めてやれ」
「あのひと、きらい」
「まあそう嫌うな。お前も商売だろう。豚屋は金を持っている。随分絞りとってやるがいい」
濠割りは、町の裏を走っていた。洗濯をしたり、炊事をしたりするのにこうした小川がないと不便な時代だった。またヨコハマは急速に埋めたてられて、次々と町作りが出来ていっただけに、常に必要が町を伸びさせていき、この港崎町遊廓に至る細長い町が発展していた。
この時刻、朝餉の炊事も済み、洗濯には間があるのであろうか、誰も人影がないのが幸いだった。
「棺を開けたら大騒ぎするだろうな。死人ではなく、赤ひげが入っているのだからな」
「――おもしろい」
玄徳は、はじめてにっと笑った。
朝の明るい光の中でも、その肌は汚点一つなく、輝くような美しさだった。
昨夜は色に狂ったような中年女たちに散々弄ばれた上に、あの騒ぎに巻きこまれ城之介の逃亡に一役買った。その苦心も並大抵ではなかったし、とうとう一晩中、眠らなかった。
それなのに、少しも眠そうな顔もしていないし、つるりとなめらかな皮膚にも疲れがなかった。涼しげな眼や、唇の紅いのも、異様なほどなのである。
(魔性のような……)
この少年に惚れたお咲が、豚鉄の恐ろしい眼を盗んでも、逢いびきしようとする気持がわかるような気がした。
その家はすぐにわかった。たしかに、菊好きらしく、一文字や、厚物や、大乱れなど、みごとな菊の鉢が、自慢げに勝手口に置かれ、川から上る雁木の両わきにまで置かれていたのは、少々偏執的なほどだった。
玄徳がお咲の名をいうと、すぐわかった。
「そうかえ、お入りなさいな。ちゃんと掃除してあるからね」
いかにもわけ知りのような顔の、中年女は、二人を招じ入れた。
玄徳の顔を穴のあくほど眺めたのは、お咲がこの少年を抱くことを想像したのであろうか。
「お前さまは」
と、城之介は聞かれて、
「さあ、何と答えようかな。ともかく、連れだ」
「へえ、お連れさまで」
「お咲はおれに逢えたら喜ぶだろう」

「はあ、左様でございますかねえ……」
納得いかない様子だった。
部屋はやはり、この川に面した裏部屋の六畳ほどで、出窓になっていて、ここにも、懸崖など菊の鉢が並んでいた。
「菊と猫と、どんな関係があるのか」
城之介は苦笑した。
ほかの部屋には、猫の皮が干してあったり、鞣しの途中らしく、明礬に浸してあったりした。三味線の皮ばかりでなく、太鼓にも貼るらしい。
そんな仕事が、この新開地にどうして必要なのか。港崎町には芸者がいるらしいから、そのためだろうか。しかし繁昌しているなら、何も、逢いびき部屋まで貸すことはないのである。
「お咲はすぐくるといっていたな」
「はい、すぐ」
「来たら、おれは出立する。おれの顔を見せておいた方がいいだろう。弱みになるのは、向うだからな」
もともと、お咲はハンスなどと通じていたのだし、あれは証拠がなかったから、シラをきったが、今度はそうはいかない。
豚鉄の身内は多く、勢力もある。お咲の弱味を握っておくのも、この際悪くないと思った。
そのお咲がくるのが遅れたのは、寝棺から医者が発見されただけでなく、異人館の馬小屋から死体が発見されて、フランス兵などが、豚屋に押しかけてきたからである。
寝棺二個を豚屋敷に運んだと、清国人の人夫などが証言したのだから、城之介の行方を、豚屋が知っていると見られたのは、やむを得ない。
「冗談じゃねえ、何も知っちゃいねえ」
と、鉄五郎は、怒りと口惜しさでわなわな顫えながら、喚き散らした。
「あのジョーって野郎ですかい、わしが、あんな奴を匿うわけがねえじゃござんせんか」
「じゃが、寝棺がここにあるのが、証拠だ」
と、昨夜の役人は意地悪く、あたりを見まわしながら言った。
「知らぬと言い張っても、通らぬな。それとも、役所にくるか」
「へえ、どこにでも行きまさあ、天下の豚鉄だ。攘夷浪人を匿ったといわれちゃァ、万国の旦那衆に対して面子がたたねえ」
「万国の旦那衆とは大きくでたな。浪人者の詮議となると、フランス公使も貰い下げには来てくれないぞ」
豚鉄には胸算用があった。どうせ向う半年の豚肉をただで届けてやるといえば、どんな公使だって、商会だって、請人になってくれらあな。

豚鉄が引き立てられて行ったあと、お咲はやっと、人々の眼をぬすんで、外へ出た。
赤ひげ医者がジョーにこんな眼にあわされたと騒ぎ立てたことで、兵隊たちは近所を虱つぶしに捜しはじめている。
お咲のそわそわした様子に気がついたのは、役人だけだった。
この男は、先日、城之介が牛乳しぼり場に行ったとき、刀の鑑札がないのはなぜだ、と不審訊問してきた男だったのである。
蘭四十九番館のディブスキが請人だというのを聞いてあのときは引き下ったのだが、
「くそ、やっぱり、あのとき、しょっ引いておけばよかった」
と、地団駄踏んだ。
翌朝、ディブスキは、いかにも身元は保証すると、言った。
居留地では、かれらの証言があれば、役人は何も口出しできない。居留地は条約国の連中の治外法権だから、それは当然だった。
が、殺人ということになれば、これは、保証もくそもないのだ。
(この手でひっ捕えてやる。見ておれ)
お咲と城之介の関係は知らない。が、一寸混血をおもわせる城之介が、女なら振りかえりたくなるほどの美貌であることも、その推測を容易にした。
豚鉄は、その名のように、ずんぐりむっくりに肥満して、赤ら顔で、あまりにも城之介と対照的存在なのだ。
お咲が、浮気の対象には、城之介のような端正で長身の浪人者というのは恰好の存在だ。
(この眼にはずれはねえ)
かれはわくわくした。手柄をたてることが出来るのだ。
お咲は、家から出るときは、さり気ない微笑を浮べていたが、四五間離れると、前裾をおさえるようにして、小走りになった。
フランス兵がこの末広町界隈を一軒一軒調べている。その前に三味線屋に行かなければ、と思うと、どうしても、足が急いでしまう。
寝棺を運んできたのは、玄徳なのだ。城之介の脱出に一役買っていることは、誰でも想像のつくことだったのである。
「——いるかえ、お辰さん」
お咲は、はァはァ息をはずませながら、
「いつもの部屋だね」
返事も聞かずに上った。
「ああ、でも……」
あの清国人だけでなくて、浪人者は何なのだえ、と聞こ

うとしたのだ。それに返事を与える余裕も、お咲はなかったろう。
「玄徳、待ちかねたでしょう、でも、こ、ここは駄目なんだよ、さ、別の……」
ところへ、と言いかけて、あ、と語尾はのみこんだ。
悠々と寝そべった城之介をそこに発見したのだ。
言葉はとぎれ、真蒼(まっさお)になった。
「どうした、お咲。遠慮することはない。ここで玄徳を抱いてもいいぜ」
「……」
「はははは、昨夜はいいところを見せてもらった。ひょっとこのお面が、はずれてな」
「まあ！　あれを……」
「今度から、もっと暗いところでやるがいい。それでなきゃァ、覆面してやることだ。洋燈(ランプ)の明りァ明るすぎる」
お咲は身を翻そうとした。
「動くな！」
城之介は大喝した。
「動くと斬るぞ」
「……」
「遠慮するな、と言っているのだ。ゆっくりと玄徳を抱くがいい。おれァ、これでアデュウというわけだ。お前が密告しない以上、お前の邪魔はせぬよ」

お咲は、もう意志のない人形と同じだった。城之介が、顎(あご)をしゃくって、上るように言い、おのれは土間へおりると、ふらふらと、座敷へ上った。
城之介は、フランス兵が近づいていることは知らなかったのである。もう、そろそろ、出てもいいだろうと思った。
が、外へ出る前に、ふいに、裏口に立ちはだかった影があった。
「ジョーか」
その影を菜ッ葉色浅葱(あさぎ)の羽織を着、袴をはいて、足ごしらえの厳重な役人と見て、城之介は、思わず、お咲の方をふりかえった。
「違う、あたしじゃない、あたしゃ知らない！」
お咲は、一瞬に、密告したのではないことを釈明しようとして、金切声をあげた。
「あたしが連れて来たのじゃない、城之介さん、あたしゃ、ほんとに知らないんだ」
「ジョー、居留地を荒す不逞(ふてい)浪人として逮捕する。来て貰おう」
「生憎だな。おれは役所と焼場はきらいなのでね」
城之介は軽くいなした。
「嫌いなやつにもっそう飯を食わせるのが、わしらの役目さ」
「名を聞いておこう」

反対だった。が、城之介はこのとき、役人を斬らねばならぬと見ていたのである。
「小田切源内……」
その言葉が最後だった。城之介が表へ駆けだす素振りを見せたのへ、源内が追いすがった。無造作な小手返しの一刀が源内の袴の中心、股間から、胸へ、血飛沫(ちしぶき)を天井に描かせて、走っていた。

廓(くるわ)芸者

血の臭いは消しようがなかった。土間は表から裏へ風通しがよくなっているが、まだ血がこびりついているせいか、臭いは消えていない。
フランス兵たちがその臭いに気がつかなかったとすれば、この三味線屋全体にしみついている異臭のせいだったろう。
どかどかと這入(はい)ってきた兵隊たちは、いずれも銃剣を手にしていた。そのするどい剣尖(けんさき)が、昂奮のあまり、障子でも襖(ふすま)でも切り裂きそうだった。
この家が猫の皮を剝ぎ、三味線作りをしていると知ったフランス兵たちはあきらかに眉をしかめた。
豚屋にはじまって猫屋では、あまりいい気持はしない。だが、それだけではなかったのである。
裏の部屋をのぞいた青い眼は、そこにあらわな白い肌のからみあいを見て、一瞬ぎょッとなったが、すぐに笑いにゆがんだ。
お咲は、ほとんど全裸に近かった。
品の悪い長襦袢の緋色は、しかしそれだけに異人の男たちの情欲を刺戟したし、白い肌は羞恥のために仄かに色づ

いて、フランス兵たちには、イメージの中の女が動きだしたような錯覚をおこさせた。
『ウタマロだぜ、見ろよ』
『昨日買ったウキヨエそのままだ』
狂い狼のようなローニン捜索も忘れてしまった。
たしかに、かれらの眼前に展開された情景は、枕絵の一つにふさわしい条件が揃っていた。それもヨコハマ絵のジャンルとしても不足はない。調度にもこの土地らしい舶載物があるし、それでいてあいびきに提供する部屋としての嬌めいた雰囲気がある。
玄徳も裸になって、お咲に応えているのは、むろんフランス兵の眼を瞞着するためだった。
きらいなお咲でも、城之介を匿うために、渋々演技しているのであろう。だが二つのからだは、どこから見ても、演技とはいえない結合を示していた。
お咲はむしろ、城之介の刀におびえてしたがうと見せながら、玄徳を抱ける喜びで、はじめから濡れていた。女の恐怖は、時に情欲とひとしい陶酔を齎すのである。
屏風のかげの城之介の刀も、青い眼の銃剣も、お咲は忘れ、玄徳の唇を舐め、舌を吸い、少年のすべてを貪り尽すように派手な動きをつづけていた。
咽喉の奥からしぼりだすようなその呻きは、白昼であることも、忘れさせた。

五六人のフランス兵たちが立ち竦んだように瞠目していると、漸く、分隊長が駈けこんできた。
『豚ども、何を愚図愚図している。ほかの場所も探すのだ』
みんなを追いだしてから、はじめて、その男も気がついたように、にやりとした。まさか自分だけ残っているわけにはいかなかったのだろう。
靴音が遠ざかった。が、お咲は玄徳を放そうとはしなかった。尻のはげしい動きで、軽く羽織った長襦袢がすべりおち、完全な裸になっているのも気がつかない。
城之介はその傍を黙って通った。
二人の熱をさますのも哀れだった。仕事場では、この家のおやじが、ぶつぶつ言いながら猫の皮を片づけていた。
小山のように積んであった猫の皮は、情け容赦ない銃剣ではね散らかされていたのである。
「ゴウディミョウのサナカパンめ、こんなに傷つけられて、使いものになりゃしねえ」
役人の横暴には馴れきっているのだろう。寒漁村の横浜村がもっとも近代的な居留地としての市街を現出させたとしても、権力構造には変りはない。
むしろ、各国の領事などがめいめいに暴戻を通す上に、日本の役人も、異人に威張られた分だけ、八つ当りするから、日本人は立つ瀬がない。

それでも徳川幕府という絶対的だった大屋台がゆらいできていて、江戸では物価高と不景気が人心を不安に陥れているというのに、この居留地ばかりは、洋銀がけたたましく踊っていて、景気がいい。そうしたことが、居留地を離れ難くしているのではなかろうか。
開港当初は物の値段もいい加減で、生糸を包む油紙を一枚一両で三百枚も売ったなどという話もある。実際の値段は一朱を出なかったというのだから、二十両たらずで三百両儲けた計算になる。甲州の水晶がよく売れて屑のようなものまで、百斤幾らで飛ぶように売れた。
これは異人も使いものにならぬと気がついて小砂利代りに倉庫などを建てるとき土台づくりに埋めてしまったという。
異人も渡り者の悪いやつが多かったが日本人もボロい儲けをした。そんなことが誇張されて世間の話題となり、日増しにヨコハマは繁昌してきたわけだ。
開港以来五六年経ってみると、さすがに、相互に物の値段もわかり、べらぼうなことはなくなったが、それでも景気のいい開港地という幻想が、世間に根強く、それはこの土地で暮している者たちも又、同じだった。
ボロい儲けが、近いうちに転がりこんでくる、という想いが、土地から離れさせないのだ。まるで石だたみの隙間に利久下駄の歯を咥えこませたように。

「おやじ、三味線を遊廓へ届ける用はないか」
城之介は微笑を含んで言った。
（――たしか、小蝶といったな）
城之介は橋を渡りながら、雪乃の言葉を思い出している。
廓芸者をしているといった。長崎の丸山にも廓芸者がいた。遊女とはちがい、からだを売らない。遊廓は一種の社交場だから、三弦太鼓などで騒ぐ。したがって男芸者もいる。遊女とは全然別になっている。おかしく感じる向きもあるだろうが、遊女の方がずっと格が上だったのである。
ただ、芸を売るが、からだは売らない、ということで、誇りがあった。弁天の祭礼のときなど手古舞で出るが、遊女は出ない。
（廓芸者などに、雪乃はどうして知り合いがいるのか？）
三味線の入った袋を抱えて、城之介は悠然と歩いてゆく。髪は色手拭で包み、縞の着物の尻端折り股引を穿いて、どこから見ても、三味線屋の手代という恰好だ。袋の中には大小をちゃんと入れてある。
この恰好では、役人たちも気がつかない。
あくまでも、不逞ローニンというイメージが強いから、こう窶してしまうと、よほど顔をおぼえている者でなければ指摘できない。
豚鉄の身内でも徘徊しているとおぼえているやつが中に

いるかもしれない。

そのときは斬りまくるだけだ、と思っているから城之介、背すじをしゃんとのばして大門をくぐってゆく。

職人や商家の者は、いつとはなしに、小腰をかがめる習慣がついているが、一匹狼の城之介。誰にも頭を下げることはない、人生をおくってきた。寠しても背すじをまげるということをしらない。

役人の中に目のあるやつがいたら、怪しんだにちがいない。

が、幸い、それほどの男はいなかったと見え、城之介を誰何する者もなかった。

城之介は大門外の高札なども平気な顔で視線を投げて入っていった。

(さて、見番はどっちか)

真っ昼間の遊廓など、およそシラけたものだが、この港崎町の遊廓は宵を待たずに、祭りのような人の往来だった。

もともと、ここは埋立て地で、"みよざき町"と呼んだのだが、港崎の字をそのまま、"こうざき"と呼ぶ者が多くなって、いまではそれが本当らしく罷り通っている。異人の中には、江戸の新吉原を遊廓の名称と思って、ヨシワラと呼ぶ者も尠なくなかった。

大門を入ると、真中の大通りが仲ノ町で、突き当りに金比羅の社がある。入ってすぐの左側がお茶屋で、それについて左へまがると富士見楼というのがあり、突き当りのが局店で、左側には金石楼、出世楼など、それから五十鈴楼がある。

この五十鈴楼が港崎町の開拓者神奈川の鈴木屋の店で、これに手を助けたのが品川の岩槻屋である。がんきを当て字にして岩亀楼を通りの中ほど、左側に立てた。

これ二つが大まがきで、そのほかは、大門際の右側に王川楼、それについて右へまがると泉橋楼、通りには伊勢楼、新岩亀、岩里楼などあったし、その裏に甲子楼、金浦楼などが軒を並べていて、奥のほうに格子店、局長屋が安女郎の嬌声を聞かしていた。

局長屋では、朝も夜も客をひいている。化粧を落すひまがないほどだ。日本人の客も多いが、異人は上陸すると真っ直ぐに、運上所からこの通りを衣紋坂にやってくる。

遊廓のまわりはぐるりと堀川で囲ってあってその外側は広々とした沼地だった。

こうした作り方が江戸の新吉原にならっているのはいうまでもない。茶屋のほか芸者長屋なども独立している。ぜんぶで八千坪といわれた。

「小蝶さん?」

見番で聞くとすぐわかった。

「岩亀楼の左側の長屋でね、そう言や知らない者はいやしません」

「芸者が多いようだな」

「へえ、百組あまり、幇間が三十人もいますかねえ。小蝶さんは気っぷのいい姐さんで、売れっ妓でさ」

三間間口の見番だったが、急しそうだった。異人は流連する者が多い。どうせホテルや商館に泊るのなら、女郎屋のほうが都合がいい。

女郎屋で商談する者も少なくないので、大門を出入りする者が必ずしも、遊冶郎ではないし、おのぼりさんの見物でもない。

岩亀楼わきの芸者長屋に小蝶の家がある。自前で出ているという。

「雪乃さんだったら、お風呂にいっているよ」

小蝶は、城之介が何もいわないでも、深い穿鑿をしようとせず、

「そうかい、お前さんかい」

「……」

「男の人で訊ねてくる人があるって言ってたから」

三部屋きりの狭い家だが、ここなら、雪乃を安心して預けておけると思った。

「三味線屋さんにしては、お前さん、剣術の心得があるようだねえ」

「……」

「面ずれ、肘ダコ、掌だって、普通じゃないよ。どう? 図星じゃない? 客商売しているとね、男のあれこれがわかるようになってくるのさ」

「御時世だからな」と、他人事のように城之介は言った。「お店者でも職人衆でも、剣術の一手二手知らなければ剣呑で暮せぬこのごろだ」

「一手二手かしら」

揶揄するように、小蝶は上眼づかいに見ながら、

「とてもそんなふうに見えないけれど」

「何に見える」

「何かしら」

また、くすっと笑った。

遊廓内ということもあるが、これまで知らなかった世界に来たような感じであった。

「眠い」

城之介はごろりと横になった。

「一眠りさせてくれ」

この居留地へ来て、ぐっすり寝たことはなかったのである。

「幇間に新入りがいるか」

その侍は言った。

五十鈴楼の孔雀の間に傲然とふんぞりかえった男である。還暦には、まだ四五年あるだろうが、髪はすっかり灰色に

なっている。鷹のような鋭い眼をしていた。鷹のような感じがするのは、その嘴を思わせる鼻梁のせいもあった。
「いえ、幇間に新入りは居りませんです。へえ、芸者には何人か居りますが」
「するとあいつは……」
何かを思い出そうとするように、老武士は、眼を閉じ、首をかしげた。
「どこかで見たようなやつだ、記憶がある、あの顔……思いだせん」
「如何なされました、三輪さま。日ごろの貴方さまらしくありませぬ」
葡萄酒を舐めてはにこにこして、女の膝をさすっていた商人らしい男が、機嫌をとるように、口をはさんだ。
「そう申しては何でございますが、私などより常々御元気な貴方さま、まだ耄碌なさるとも思えませぬが」
「わしもそのつもりでいたがな。ははは三輪重左衛門、これから大いに楽しもうという矢先に、耄碌してはたまらぬ」
「さ、もそっとお過しなさいませぬか、この葡萄酒は長生の秘薬ということで」
「それ以上、長生きしてどうする気だ」
「御冗談を……」
三輪も笑おうとしたが、どうにも気になることだったらしい。
「実は大門の近くで見た奴がいるのだ」
と、話しだした。黙っていると、ますます気になってしかたがなかったのだろう。
「若い奴でな、三味線らしい包みを抱えていた」
「ほう」
「そいつの顔だ。どこかで見たことがあるのだ。それが思いだせん」
「ははは、居留地の者なら、どんな小者でも二度や三度……」
「それが、そうではないのだ。この土地ではないな、と申して、はっきりしないのだが、縞の着物で、三味線屋の番頭か」
「それなら、ちょっと聞きにやらせましょう、すぐにわかることでございます」
「いや、わざわざ問い合せて、もしもということがある。都合が悪くなる場合もある。こちらのことを知られては、ならぬ」
「そりゃァ、御安心下さいまし、この楼の者を一っ走りさせます。こちらのことは何も」
「三味線屋というだけでわかるかな」
「へえ、横浜には三軒しきゃありません、三弦てェわけで」

自分の駄洒落が大いに気に入ったように、にやにやしながら、主人を仲居に呼ばせた。
肥前屋勘兵衛という商人で、鉄砲から生糸、昆布まで、何でも儲かる仕事なら商う、この横浜では十指のうちに入る旦那衆の一人だった。
三輪重左衛門の言う人相風体をそっくり伝えると、若い衆が、飛びだしていった。
「人間、年齢をとりますと、思いを残していてはいけませぬな。思いたったが吉日、と申しますのも、今日のことは今日済ませてしまえということで、かたをつけることが大事だと悟りましてございますよ」
「酒を飲みたければ、浴びるほど飲むか」
「はい、そのほうが、からだによろしいようで」
「女のことではないか」
はじめて、三輪の唇がほころんだ。
「淫の気を内に秘めておくと、五臓六腑に大患を生ずとな」
「ははあ、なるほど」
「これは古い唐人の書いたものにある。黒船が運んできた知識ではないわ」
「ははあ」と、これにも肥前屋勘兵衛は感心して見せた。
「その伝でいきますと、なんでございますな。つまりは、今日惚れた女は、今日のうちにしろ、というわけで」
「そういうことになる」
「なるほど、淫の気でございますか。私など、毎日、淫の気で。表を歩いていて美い女を見ますと、もうたまりませぬな、殊に、小股の切れ上った女が、裾から蹴出しをちらちらさせながら歩いてゆく、その腰の振りよう、ああたまりませぬて」
勘兵衛は傍の花魁に抱きついて、
「さあ、行こうかいな、夜具のところへ」
「ま、肥前屋さんの気の早い」
と、台の物を運んできた仲居が止めた。
「まだ、芸者衆がこれからですよう」
「おう、そうじゃそうじゃ、肥前屋としたことが一代の不覚。三輪さま、美い玉がまいります」
「芸者か」
「さ、そのようなお顔をなさってはいけませぬな。芸者でも、そこはそれ……おっと、ここでかようなことを口にすると恐ろしい、あわわ」
花魁が長煙管の雁首をひょいと勘兵衛の腕に近づけたのだ。
「実を申しますと、てまえが、昨日見初めましてな。ずぶの素人で。はい、それが小蝶のところの居候で」
「ほう」
「芸者に居候して、芸者にならねいのはチト面妖だ、芸者も美い玉でなきゃ、御機嫌の悪いお客様もいる」

「わしのことか」
三輪は聞き咎めた。
「いえいえ、ま、男は誰でも女が好きで、女も美い女を好きなのは当り前で」
「美いか悪いかは、この眼で見てきめるから、きさまが講釈することはない。名は何という」
「お雪で」
そのとき、障子の外で、それらしい声がした。
小蝶と雪乃だった。
いや、お雪と名乗っているのか。口説かれて芸者として出ることを承知したのか。女ひと通りのことが出来るだけでは一人前の芸者とはいえないが、小蝶ははじめから、気にもかけなかった。
「どうせ異人の取持ちだァね。あいつら何もわかりゃしないよ。三味線の調子が狂っていようと、踊りの手が途中で抜けようと、わかりゃしないのさ。なんでもいいから、ぴんしゃん弾いて騒いでいれば、御祝儀くれるからね。ちんぷんかんぷん、何を言っているのかわからなくても笑って唄ってりゃ、お座敷はつとまるのさ」
そんなお客ばかりではあるまい。幕府の外国奉行とか、偉いお役人衆が来たら、芸のなさは、一ぺんで見破られてしまう。
「馬鹿だねえ、おまえさん。お江戸の柳橋たァわけが違うんだ。この廓へくる客は、花魁を抱くのが、目あてさ。芸ごとなんざ、つけたりだよ。ろくろく唄なんか聞いていないし、踊りだって、せいぜい色っぽくやりさえすれば、オーケーなのさ」
それが居留地の特殊性だろう。日本語もろくにわからぬ連中に、しぶい咽喉を聞かせてもはじまらない。陽気な騒ぎの相手をしていれば、それでいいのだと聞くと、雪乃にもやれそうな気がしたのである。
「おお、来たか」
重左衛門は、ぎろりと、もう酔いの発した眼を光らせて、
「お前か、芸者の新入りは」
「あれ、お披露目といって下さいな。殿様、お目見得お許しを」
小蝶がたくみに座をひき立てようとしているのだが、雪乃のお雪は、あたしには出来そうにない、と思った。いやなお客の御機嫌をとり結ぶのは辛い。
「こっちにこい、お雪」
「いいえ、恐れ多うございますから、こちらで」
芸者は末座で、と尻込みするのを、重左衛門は立って来て、手を掴もうとした。
そのとき、さっきの若い衆が、息せききって戻ってきたのである。

色の街

城之介、と名を聞いて三輪重左衛門の顔色が変った。丁度肥前屋は小用に立っていたのである。
「彼奴か！」
思わず膝を起した。
三味線屋が城之介の名を洩らしたのではない。いまさき遊廓に入ってきた手代らしい男は、こちらの者かと聞かれて、お咲が余計な口出しをしたのだ。お尋ね者さ、赤隊が追っている奴さ、お縄にしたら恩賞金が出るだろうよ。憎憎しげにお咲は言い放った。
お咲は玄徳のからだに堪能したあとの、けだるい充足感を全身に見せていた。白昼の行為は、異常に情感を煽った。障子を透して拡散する明りのなかで、のろのろと着物をまといながら、これで城之介もおしまいさ、と呟くように言った。
「あいつが打ち首になったら、一緒に見にゆこうじゃないかえ、玄徳」
「……」
「戸部のくらやみ坂で曝しものになるよ、あの顔に唾を吐いてやろうよ」
そんなことを平気で言うお咲の顔はうっすらと汗ばみ、髪がみだれて凄艶だったと、五十鈴楼の若い衆は、まだ熱っぽい眼をしていた。
「豚鉄の女房か、そいつがはっきりと言ったと言うのだな」
重左衛門は、あわただしく、連れを呼ぶように言い、ギヤマンの酒盃を口に持っていった。
(そうか、彼奴だったのか、道理で見たような気がしたのだ)
十年前の長崎が思いだされた。重左衛門が思い描いた顔は、城之介の容貌をもっと老けさせた男、城之介の父弥右衛門だったのである。
連れは運上所の下役で、前田忠三郎。片眼が白い。別の部屋で女を抱いていたのである。
「岩亀の佐吉を呼ぶのだ、急ぎだ。待て、その前に大門を閉めさせろ、神奈川奉行所支配組頭たるわしの命令だと言え。お尋ね者がまぎれこんだのだ」
小用から戻ってきた肥前屋勘兵衛にはこの五十鈴楼の楼主を呼ばせた。
二人とも、とんできたが、そのときは城之介の名は伝わっていた。居留地取締りの方からも、廓内の捜索の要請が来ていたのである。

「攘夷浪人とかいうことですが、三輪さまは御存知なので？」
「いや……」
言葉を濁して重左衛門は、
「とにかく、不逞の輩じゃ、見つけ次第斬捨てるがよかろう」
遊廓の大門を閉じるということに、楼主たちは難かしい顔になった。
「いかようにもお手伝いはいたしますが、大門を閉めるのはどうも、なあ岩亀の」
「へえ、御当所廓びらき以来、大門を閉めたことは一度もありませぬので、そのことばかりは」
岩亀楼の佐吉も、頭を抱えた。
このヨコハマという特殊性のため遊廓の〝引け〟はあっても、廓内では時間の制限がない。〝大引け〟は芸者が客のお供で外出したときの制限時刻であるが、昼遊びも夜遊びも一切、自由な遊廓は、日本中でここだけだった。だから沼地を埋立てた急造の、いうなれば掘立て小屋に近かった遊廓が急速に発展して、豪奢な不夜城を現出するようになったのである。
異人たちに媚びた奉行所では、歓楽の時間の制限をしなかった。出船入船の時間いっぱい遊びたいという連中の要請にもこたえ、またホテル不足の穴埋めという含みもあったのだ。どちらにしても居留地内の沼地を埋立てて作った八千坪の遊廓は、周囲に濠を穿ってたった一つ大門の橋だけで娑婆と通じているだけで、これは大門さえ閉ざせば、一つの檻になる。役人たちが寛大だったのは、この地勢のせいもあった。
「大門を閉めるときは、遊廓の灯が消えるときでございます。たった一人の悪党のために、そんな真似は出来兼ねます」
言葉は丁重だが、居留地の顔役らしい図太さが、語気の端々に窺えた。
「出来ないというのか、ここへ入って来たのは、はっきりしているのだぞ。もしもとり逃がしたら何とする」
「お手伝いはいたしまする。大門を閉めるかわりに、人を張らせます。出入りの客を一人一人御詮議なさいますれば同じことでございましょう」
「……」
「城之介、と仰有いましたね」
「そう、名乗っておる」
「名前と、そして人相風体がわかっているのなら、苦労はございますまい。直ぐにもお縄となりましょう」
はたして、そう簡単にいくか？ 大門を閉めるのを嫌うくらいだから、見世の客を一々人別改めも拒むだろう。異人の客が大半だという特殊性は、従来の行政の隘路となっ

ている。何をするにしても、権柄ずくではいかないのだ。
「とにかく、捕えるか、斬るかするのだ。不逞浪人なのだ、領事たちからも賞金が出るだろう」
そんな金など、楼主たちには鼻糞でしかない。佐吉は肚の中で嗤いながら、表面は恐懼して見せた。
「小見世から局まで、相達しますでございます」
そう言明はしても、しかし、逃げ道だけは作っておくのを、忘れなかった。
「その男が、大門を入ってくるのを、御覧になったのでございますな」
「そうじゃ」
「それから、私どもへ御命じになるまでどれほどの時間がございました？」
「直ぐだ、何ほども経ってはいない、そうさ、せいぜい半刻（一時間）、だろう」
「半刻、ねえ、その間に、遊廓から出てしまったかもしれませぬな」
「いや……それは」
「そういうこともあるかもしれぬ、と申し上げたまででございますよ。はい、早速手配させます、潜んでいれば、逃げようはないことで」
「直ぐにお知らせしてくるのよ、雪乃さん」
と、小蝶は廊下へ出るなり言った。
「ええ、でも……」
「何を愚図愚図しているのさ、廓役人がお長屋に行ったら、それっきりじゃないか。見番で、あたしの家を聞いて来たと仰有ってたから、そっちから足がつくかもしれないんだ」
「行ってきます」と、雪乃は身を翻してから、「お座敷のほうは、いいかしら、お姐さんが困りはしないかしら」
「いいってことよ。任しておきなさいな、どうせ阿茶さん（清国人）だよ、なんとか誤魔化しておくから」
売れっ妓の小蝶である。新米の雪乃も、次のお座敷がかかっていた。ここの芸者は一本二朱で、昼夜二十四本というから丸一昼夜が稼ぎどきで、寝るひまもない。それくらいお客があった。
花魁との寝間の遊びは流連といっても夜昼べったりしていて楽しいものではない。異人相手が承知の上で花魁になった女たちだけに、江戸の吉原とちがってもともと格式はない。
神奈川の鈴木屋が五十鈴楼を、品川の岩槻屋が岩亀楼を造ったのが大まがきだから、およそ性は知れている。もともと岡場所の宿場女郎を主体としたものだ。何も芸はない。ヨコハマの女郎に芸は要求されない。
それだけ、芸者や幇間が、遊興の方は受け持って、夜昼なしのどんちゃん騒ぎだし、料理屋の仕出しも盛んで、一

事が万事、しきたりの窮屈な江戸の吉原よりも、好きなだけ遊んで騒げる港崎町がいいといわれた。
　こんな遊興天国でも、将軍薨去などの鳴物御停止には、大工の槌音まで禁じられたということはあったが、その他のときは、大ぴらに騒いでも、まわりから苦情は出ない。
　太田新田の沼地の真中だから、その夜を彩る灯は、文字通り不夜城だった。
　小蝶が別の清国人の座敷に行っている間、雪乃は家へ帰った。
　もう道すじには役人たちが、ものものしい目で、往来の男を見ていたし、大門のところには英国の赤隊の制服が右往左往していた。かれらも、遊廓の捜索には興味がある。半分楽しんでやっているのだろう。
　雪乃が小走りに帰ってゆくのを、
「お姐さん」
　呼び止めた声がある。
　少女のような声だった。
　思わず立ち止ると、清国人の少年が桜の樹の下にいた。少女かと思ったくらい美しい少年である。
「小蝶さん？」
「いいえ、あたしじゃないけれど」
「どこ」
「……」
「小蝶さん、どこ？」
　なぜ、こんな清国人が小蝶を探しているのか。時が時だけに、雪乃は素直に答えられないものを感じた。
「小蝶姐さんの家を探しているの？」
「ああ」
「何か御用？」
「――逢いたい」
　雪乃はあたりを見廻した。この美少年の真摯な目差しも、この場合、裏を考えねばならなかった。誰か陰で糸を引く者があるのではないか。
「だから、どんな用？」
「――」
「あたしから、取次いであげる。小蝶さんならよく知っているから」
「どこ？」
「だから、伝言してあげるって言ってるじゃないの、いま急ぐのよ」
　少年は、小首を傾げた。いうまでもなく玄徳であった。
　玄徳の方は雪乃に城之介のことを言っていいものかどうか心配だったのであろう。
　そのためらっている様子が、雪乃には不審を感じさせて、
「小蝶さんなら、そこの五十鈴楼さ、いまお座敷に出ているから、逢えませんのさ」

　あたしは急ぐから、といって、雪乃は振りきるようにして、小走りに、戻った。途中で気になって振りかえると、少年はぼんやりと立って、こっちを見ていた。その抜けるような色白の顔と、つぶらな瞳が妙に胸に残った。
　嘘を吐いたわけではないが、冷たくあしらったことが、気になったのだ。
　小蝶の家へ帰ってみると、城之介は搔巻をひっかけただけで、まだ眠っている。
　これだけ心配しているのに、と雪乃は憎らしいような気持になった。
「もし、城之介さま」
「――うむ」
「起きて下さいまし、大変です」
「なんだ。もう少し眠らしてくれ、ゆっくり眠ったことはなかったのだ」
「ええ、でも……お役人が来ます」
　そう言う間も、雪乃は表に足音がしないかと耳を澄ましているのだった。
「役人が？」
「大門はすっかり赤隊が囲んでいます。もう遊廓から出られません」
「これだけの広いところだ、一軒一軒調べるわけにはいかんだろう」
「そうだといいのだけれど、城之介さまのことを見番でおぼえているかもしれませぬ」
「――なるほどな」
　三味線屋の手代にばけたのを、誰か知っていたとすれば、これは魔手が迫るとみていい。
「誰が、おれをさしたのだ」
「――お咲というひとです」
　そうか、それなら、しかたがない。と城之介は苦笑した。
「あの女は、おれを恨んでいる」
「それから、お奉行所のお役人が……三輪さまとか」
「三輪？」
「はい三輪重左衛門さま。お顔を見たことがあるとか仰有って」
　城之介が咄嗟に思ったのは、あの乱交の異人屋敷で、ショーメット夫人の手帖を要求してきた役人だった。
　陣笠に菜ッ葉隊の浅葱羽織を着て、袴に切緒の草鞋穿き、角鍔が印象的だった。
（あの男か？）
「なんでも、お奉行所の支配組頭とか」
　そのとき、どこかで城之介の名を呼ぶ者があった。
　微かな声だった。気のせいかと思ったのである。急に雪乃は聞耳を立てた。が、これは、その声のためではなかった。

「来ます！」と、迫った声で囁いた。「赤隊ですわ」
靴音が入り乱れて近づいてきた。

城之介は刀を摑んではね起きた。ここへ来てから、あの縞物は脱ぎ捨て、三味線と一緒に包んできた紋服の着流しに戻っていた。万一を考え、そのままの姿でごろ寝していたのである。

「見番で教えたようだな」

城之介は苦っぽく笑うと、

「逃げろ」

と、顎をしゃくった。

「おれは斬りまくる。心配せずと、逃げろ」

「いいえ、あたしは大丈夫です。お役人は城之介さまだけを探しているはずです」

芸者姿になった雪乃は、ディブスキの屋敷にいたときと変っている。ちょっと見ただけではわかるまい。

「それもそうだ。だが、用心せい」

刀の目釘にしめりをくれたとき、

「ジョー、ここ」

あの声がした。

カタリと天窓が開いて、するすると、荒縄が数本おりてきた。

天窓の四角い空に、玄徳の顔があった。

「ここ、ジョー、早く」

もう躊躇することはなかった。城之介は荒縄をたぐるようにして、柱を蹴って天井の穴へ飛び上っている。

天窓の蓋をしめるのと、表の格子戸が開いたのは同時である。

「城之介はどこだ」

嚙みつくように役人が言った。

これは下っ端の手先である。

雪乃は、髪に手をやりながら、ゆっくりと入り口のほうをふりかえった。

女ものの搔巻をわざとのようにたたみながら、

「え、誰のことかしら」

「いるはずだ。風来坊の城之介だ。匿まおうってもそうはいかねえぜ。攘夷浪人だ。大分、異人も斬っている」

廓役人もいたし、奉行所の者もいた。そのうしろから赤隊が銃剣を光らせていた。

「さあ、とんとわかりませんねえ。男の方なんて」

「嘘を吐け、ちゃんと見番で、ここを聞いたのを……」

「ああ、三味線屋さんねえ」

けらけらと雪乃は笑って見せて、

「すぐ帰りましたよ、ええ、御存知のように、芸者長屋には男衆は上っちゃいけないことになっているんです」

「見せて貰うぜ」

どかどかと上ってきた。

幸いだったのは、この連中が勢いこんだあまり、城之介の草履が三和土にあるのを見過したことである。

押入れをあけたり、水屋の裏口から見まわしたり、広くもない家の中を散々に見てまわった。

赤隊も上ってきた。これは靴を脱ぐのに手間取ったのだ。それだけ礼儀を心得ているのかと思うと、銃剣でぶすぶす天井を突き刺したりした。

雪乃は度胸を決めて坐りこんでいる。

天窓を刺されたときは、さすがにはっとなった。銃剣がこれを開けた。長身の者が一人を肩車にして天窓から首を出した。

『居ない』

と、栗色の髪をした兵隊はおどけたように肩をすくめて、

『天国へ消えたのだ』

と、言った。

そのころ、城之介は玄徳に案内されて五十鈴楼の裏露地から、塀の中に入っていたのである。

「また助けられたな」

苦笑してあたりを見廻した。

「玄徳、きさまはよくいろんなところを知っているな。こんな遊女屋に遊びにくることもあるのか」

「お客、連れてくるね」

幇間や芸者を連れて得意顔をするように、玄徳を連れて歩く物好きな男もいるのだろう。

「どうするか、夜になりさえすれば、濠を渡って出られるが」

「お客、知っている」

玄徳は賢しらに合点すると、どこかへ姿を消した。

五十鈴楼の裏庭である。主の好みで、石が多い。掃部山から出てきた石を沢山配して庭造りした。これが岩亀楼に比べて五十鈴楼の特色になっている。

この巨岩の陰に隠れていれば、どこからも見られない。

ところが、玄徳が、庭から勝手口のほうへゆく姿を見た者があった。巨大な体格をした清国人である。

「──玄徳」

と、呟いて首をかしげると、庭へおりてきた。小用を足して戻ろうとしていたところだ。岩石の庭を足音をぬすんでやってきた。

「城之介！」

そう叫んだ言葉が、城之介にあの阿片窟の闇の中の声を思いださせたのだ。

「きさま……」

玄徳を抱いて、嘲りの淫靡な笑いを洩らしていた男ではないか。

「阿片、喫むか」

男は上着の下に手をさしこんだと思うと、阿片の長煙管(きせる)ではなく、黒く光る拳銃をとり出したのである。

「城之介、役所、来るね」

まっすぐに銃口を向けた。

三弦の音や太鼓の音や女たちの嬌声がかん高く響いているし、この巨岩の陰の声は、誰にも聞えることはない。が、銃声はいかに甘美な夢を貪(むさぼ)っている者の耳をも驚かすだろう。

「よかろう、飛道具にはかなわぬ」

城之介は両刀を両手で鞘(さや)ごとぬきとった。

男の面(おもて)に、勝ち誇ったうすら笑いが浮んだ。城之介の手から脇差が鞘ごと飛んで拳銃に当ったのは次の瞬間である。

同時に大刀が鞘を捨てて、白光を走らせていた。

拳銃が火を吹き、岩の表面に火花を散らした。その弾丸に削られたあたりがぱっと鮮血の飛沫(しぶき)を浴びていた。首をはねるように、薙(な)いだ一刀は皮一枚を残して、斬り放していたのである。銃声はさながらこの巨漢の叫びのように、あたりに響き、歓楽の世界に一瞬、水をさした。

銃声に耳ざとい兵隊たちの中にはこの音を的確に聞きとった者もいる。

『五十鈴楼の中だ』

『銃声だぞ、たしかに聞えた』

いや、爆竹ではないか、と言う者がいて、そのほうが自然に聞えた。清国人の中には、酒宴の席に爆竹を持ちこんで、女たちがあわてふためくのを楽しむ品の悪い連中がいる。

城之介は血刀を拭いおさめると、拳銃をもぎとった。五十鈴楼の中は、またもとの馬鹿騒ぎに戻っていた。

廓(くるわ)で死ね

銃声は、むろん五十鈴楼の客ぜんぶに聞えたはずである。が、この昼も夜もない歓楽の町は、弥次馬根性をおこすにはあまりにも華美で費用がかかりすぎた。

女を傍へ引きつけておくだけで眼の玉が飛びでるほどふんだくられる。そのため時間を吝(お)しまなければならない。外をのぞいたり、やりて婆ァに様子を聞くひまがあったら玉代たっぷりに楽しまねば損だ。そうでなくても銃声や爆竹に一々驚いていては居留地に住めない。

その〝孔雀(くじゃく)の間〟で清国人と一緒に登楼(あが)った客は殊に、横着で貪婪(どんらん)だった。

「わいはまともなやり方ではあかんのや」

と、最初に言った。楼主にそう断わっている。

「どや、それでもええのんか。その辺のところをはっきりさせといてや。せやけど銭は払うで、払うだけ楽しみとうまんね」

いろんな客がくるが、こうはっきり断わる客はいない。いかにも上方商人らしいけじめのはっきりした態度だった。

こんな客に指名された花魁(おいらん)のほうはたまらない。

「わいのは、ちっとやそっとでは、骨が通らんよってに」

杯洗に並々と酒をつがせると、それを股(また)の間に置いた。おのれのものをだらりと出して、これを酒に浸した。

大きい。並より大きい。がそれはおのれの重みを支えきれぬように、だらりとして、頭を上げることがあるとも思えない。

たっぷりと酒に浸して、

「いろうてや」

と、禿(かむろ)に言った。

禿は、その呼名のように、髪をお河童(かっぱ)にして袖には鈴をつけている。七つ八つの子が多い。

ほんの少女だが色街育ちだけに、ものおじしない。

「あら、重い」

小さな指で、持ち上げたり、ばしゃばしゃ水遊びのように酒をはねさせたりする。半刻(はんとき)もそんなことをさせながら、客は、別に酒を飲み、料理を食べたり、清国人と商売の話をしたりしているのだった。

本町二丁目の河内屋惣七というのが、この五十がらみの蟇(がま)のような男の名前である。容貌もからだつきも、雨の中で平気で咽喉をひくつかせている蟇の感じだった。それは商売でも、商談が成立するまでは、一歩も退(ひ)かずに、自分の要求を通す、その粘りをあらわしていた。

商売で粘るように快楽でも、どこまでも目一杯に貪(むさぼ)るの

であろう。自分から積極的に女をもとめようとせず、気分が盛り上るまで、何時間でも待つ。禿が二人で、左右から手をのばして、酒浸しの男のものを弄んでいるのも、他人事のように、近ごろは生糸も儲からへんよってに、などと饒舌っているのだった。

　銃声がしたとき、禿たちは、

「あれェ、てっぽうよ」

と、立ち上ろうとした。

「あかん、てっぽうは、ここにあるやないか」

と、おのれのものを示した。

「その、てっぽう、ぐにゃぐにゃね」

　清国人がほたほたと笑った。この男は七福神の布袋さまそっくりに肥満していて、太鼓腹をぴちゃぴちゃ叩いて、看々踊りを唄ったり、臍に酒を注いでは、花魁に啜らせたりしていた。

「せやけどな、張、硬うなったら、宵から明方まで、凋まへんのや。せやさかい同じことやな。急ぎいうても間に合わんさかいに、ちょくちょくやれへんけどな」

　たっぷり酒を吸わせたあとで、こんどは、敵娼の花魁に、いろうてや、と言った。

「いやですよ、人の前で」

　花魁は銀の手打の煙管を異人のパイプのように咥えて、扇子で顎の下を煽いだ。晩秋だったが、部屋の中は炭火で温気がこもって打掛を着ている花魁は汗ばんでいた。

「人の前やさかい、ええのや、人目がなかったら、死ぬまで、こない風や、可哀想やないか」

　禿の可憐な手で、どんなに弄んでも、日ごろのままなのだ。これではたしかに遊廓に遊びに来た意味がない。

　花魁は煙管を咥えたまま、ふてくされたように、手を伸ばした。

「あかん、口でしてや」

「まあ」

「なんぼ手ェ使うたかて、あかん、口でしてェな、そのぽってりと柔らかそな唇と、甘っちい舌でせな、目が醒めんよってな」

　大真面目な河内屋だった。

「清国の相公も、口つかうよ」

　張は面白そうに言った。

　これは花魁や芸者たちにはわからなかったが、役者のことを言ったのだ。清国では陰間色子の類いは歯を上下とも抜いて歯ぐきを使うことを教えられている。

　花魁はあきらめたように、いざりよって、顔をさしのべた。

　そこは酒くさかった。花魁は思いだした。その客が、酒の強い花魁でないと敵娼になれないといったことを。

　やがて河内屋は、

「ええ、ほんにええ、せやけど、もっと情をこめてや」

と言った。しかたがない。花魁はその行為をもっとも早く、短く切り上げるようにつとめた。

　あきれたことに、どんなに技巧を凝らしても、なかなか骨が通らないことだった。まるっきり、効かないのなら、それきりのことだが、しだいに効果が見えてきたのだ。ただ、それが、きわめて遅いというだけのことである。

　その行為は、見ているほうが、早く勃起した。張はへらへら笑っていたが、何やら、鶏の鳴くような声をあげると、敵娼を抱いて、

「行こ、行こ」

と、部屋を出ていった。

　興が至れば寝台の部屋にゆき、ひと通り済むと、また座敷にもどってきて拳をしたり、酒を飲んだり食べたり、唄ったり踊ったり、そして、また抱きたくなったら、寝台の部屋に入る、というのが、清国人たちの、港崎町遊廓での共通した遊び方だった。

　前に述べたように、流連の客も多いが、短い遊びでも、半日はたっぷりかかる。昼遊びは夜まで、夜遊びに来ると明方まで遊んでいる。したがって、かれらが敵娼をきめると、廻し、はとれない。もっともそれだけ払うし、殊に芸者には、踊りがうまいからと一朱、唄がうまいと一朱、笑い方が可愛いと一朱、おひねりを、ぽんぽんくれるのだ。だから、清国人の座敷と聞くと芸者たちは喜んだ。

　漸く、河内屋のものがつかいものになりかけたときである。

「もし、河内屋さんに、お客さんが見えましたが」

と、やり手が取次いできた。

　そのお客というのが、玄徳だったのである。玄徳は衣紋坂で河内屋を見かけたことを思いだして、探したのだ。河内屋は横浜の商人の中でも大店だし、港崎町で遊ぶ先はたいてい岩亀かここにきまっている。

「なんや、せっかくのところを、なんで邪魔するねん」

　河内屋はほどよく酔った顔を赧くして玄徳を見た。

　玄徳は花魁を見た。花魁はやめることを許されずに、かがみこんで、河内屋の下腹部に顔を伏せている。

　その口いっぱいに含んだ頬の動きを玄徳はちらちら見ながら、

「あの手帖、あるよ」

と、言った。

　その一言は、河内屋にとって、何よりも効果的だったようである。

「ほんまか！」

　叫んだとき、むっと、花魁が咽喉が潰れるような声を洩らした。ふいに河内屋は勃起したのだ。それが硬く、咽喉

を突き上げた。
「あれ、花魁が」
と、小蝶があわてて、花魁を抱き起した。
「花魁大丈夫か、かんにんしてや、こいつが驚かすさかいに、ひょんなところで大きゅなりくさって、せやけど、商い以上に大事な話になったによって、ちいっとここで辛抱しといてや」
河内屋は玄徳を促すと、寝所へ入った。この座敷とは、襖一つの隣室である。
突然勃起したそれは、また突然の何かが起らなければ、凋むことはないかもしれないが、河内屋にとっては、それどころではないらしい。
「あいつか、城之介ちゅう男かいな」
玄徳の耳を嚙むようにして、河口屋は囁いた。
「ほんまに、城之介か」
「うん」
「手帖は持っているのやな、なんぼで売る言うてんのやねん」
「不明白」
「さよか、わからへんのか、せやけど、持っているのは、間違いないのやな。よっしゃ、なんぼでも出したる」
「お金、不要、助けるね」
玄徳は、城之介の立場をなんとか説明した。
追われる城之介が、この五十鈴楼の庭に隠れているとは、あまりにも意外すぎることだったが、げんにそこに居るとすれば、これは河内屋惣七にとっては、願ってもないことだった。
「よっしゃ、ここへ連れてきたらええ、裏の階段があるによって、あの細廊下を通ってくりゃ、誰にも逢わんと、くること出来るよってに」
「約束ね、約束ね」
玄徳は、眼を輝かして、出て行った。そのあと、河内屋は落着きなく、立ったり坐ったりした。そして、依然として、おのれのものが、屹立した状態にあることを知った。これは、射精するまではどうにもならないのである。河内屋は花魁を呼んだ。
「早よ来てんか、始末せんと、どむならんわ」
花魁にとっては、全く面倒な客だった。
(何が役に立つかわからぬものだ……)
城之介は、手帖のことを言いだされたとき、ショーメット夫人の生首を思いだして微笑した。
ショーメット夫人の寝室にあった手帖は、雪乃の裸体写真の幻燈板を探した際、偶然、発見したものである。
数十人の女の名と住所が日本字とローマ字で書いてあった。豚鉄の女房お咲の名前もその中にあったように、人妻

たちが居留地の異人の若者と遊ぶ、秘密のパーティの名簿だった。
横浜の商人たちは忙しい。生糸の相場が上っても下っても、忙しい。言葉のわからぬ異人たちを相手の商売は、どだい気骨の折れることだし、この港崎町の遊廓での遊興も半ばは取引のための交際だから、それが異人に合わして流連ということも珍しくはない。そんなことが、金は儲かるが、女房たちに夜の淋しさを訴えさせることになる。
「旦那衆が遊ぶのだから、あたしたちも息抜きしなきゃあね」
と、誰が言いだしたのか。あるいは、ユダヤ商法で、ショーメット夫人が考えだして誘いの手をのばしたのかもしれない。
人妻たちは、お互いの顔がわからぬように仮面をかぶり、若い異国の肌を楽しむようになった。
おそらく、一たん名前を記されたら、途中で逃れようと思っても、ショーメット夫人が逃さなかったのにちがいない。
「居留地中にばらしてやる」
と、脅やかされたら、もうオリることは出来なかったろう。
お咲のように、玄人上りの女は、良心が咎めるということもなく、豚鉄に知れたら生きておれないというだけのことだが、まともな商家の若女房ともなれば、この秘密パーティは、店の看板にも影響する。ちょっとした好奇心で、足を踏みこんだまま、逃れられず苦しんでいる女も居るはずだった。
「あの手帖や」
と、声をひそめて、河内屋は言った。
「いま持ってるやろな」
「……」
「なんぼ出したら、売ってくれるのかいな。それだけやない、役人に追われとるのやったら、どないしてでん、逃がしたるがな」
「礼を言おう」
「礼などええがな。手帖や。なんぼ出したらいいのや、二十両か、三十両か」
河内屋は真剣だった。
どうして、この男が、大金を出してまで欲しがるのか。
それが城之介には疑問だった。
「あの手帖が、おぬしには、何の役に立つ?」
「そないこと、どうでもええやんか。それ持っちょるなら、見せてんか」
「ここには、ない」
「さよか」
それほど大事なものだから、持っているはずはない、と

河内屋の方で、早呑みこみして、そうやろな、と肩を落した。
「どこに置いてあるのや。銭はいま出したるよってに、わいに譲ってもらえまへんか」
「金のことはよい」
冷たく城之介は言った。本心だった。ああした際に入手した手帖だ。強請るようなまねはしたくはない。人妻たちが、異人の若者に興趣をおぼえたことに就いても、別段罪悪とは感じない城之介である。
「なんやて！」
「金のことはよい、と言っているのだ、売るつもりはない」
「へえ、売らんのやて」
「欲しければ、くれてやる。この場を脱出できたら、おぬしにやってもよい」
「ほんまか、ああよかった」
「待て、なぜだ？　その理由を聞こう。その次第では、渡せないかもしれぬ」
「なんや、そら、ムゴイ」
「あれには、多勢の女たちの名が記してある。一つ間違うと、何十人という人妻が路頭に迷わねばならん」
「へえ……そらそうや」
「御法度からいえば、曝しものにされても文句はいえぬ。人手に渡すことは、軽々にはできぬ」
「へえ、へえ、全くでんね。わいもそない思いまっさ」
河内屋は蟇首を大仰に合点させて、
「ええ御方に拾われたもんや。どれだけの人助けになるかしれしまへんで」
「人助けか……左様なことは考えたこともなかったな」
苦笑がかたちのいい唇からにじみ出た。自嘲である。父母の仇を討ち怨念を霽らすことばかり考えて過してきた歳月を、ふとかれは振りかえった。
「そないお考えなら、事情をお話しまっさ。実をいうたらな、あの手帖には、わいの……」
と、言いかけたとき、座敷の方で、役人たちの荒々しい声がした。女の悲鳴も聞えた。
「来よった」
河内屋は首をすくめた。かれは花魁を抱き寄せると、着物を半ば脱がして、
「へへ、そこの屏風のうしろで休んどいとくなはれや」
と、言い、蒲団の上に横たわった。寝台のあるところと、日本人用のただの座敷とがある。屏風なども春画が四つ五つ貼ってあって、艶麗な調子なのである。
役人たちは、芸者や禿たちが残っていた座敷に踏みこんできて、やり手の説明を聞いていたが、
「その二人の客に出て貰おう、面体を改めねばならぬ」
と、威たけ高に言うのが聞えた。

城之介はその声に聞きおぼえがあるような気がした。
（あのときの……）
お咲や玄徳たちが乱交していた異人館で、城之介を拳銃で撃った男だ。陣笠をかぶった役人だった。
（あの男も手帖を欲しがっていた）
あれが、ほんものの役人かどうかはまだ明らかではなかったが、ともかく、城之介に異常なほど、憎しみを抱いているように思えた。
（そうだ、阿蘭陀舟大工の屋敷の前で斬った大和田とかいう浪人者となかまだったような口吻だった……）
その男だ。
芸者たちはおろおろしている。
「そう仰有っても、お客さまは、いま寝んでいなさるところで……」
「起せ」
と、あの声は、怒鳴った。
「顔を見せればいいのだ。そのあとで、また花魁となにすればよかろう」
「でも……」
「役目で調べるのだ。拒むと、この青楼も商売御停止になるぞ」
ずかずかと入ってきた。
が、途中で、何を見たか、ふと足をとめて振りかえった。
玄徳を見たのだ。どこかで見たような清国人の少年だと思った程度だったが、荒々しく襖を開けて、張と花魁が全裸でからみあっているのを見ると、
「おい、寝台の下をのぞけ」
と下役を促した。
陣笠はかぶったままなのである。魚の鱗のように、白っぽく底光りする眼が、凝っと瞶めている。その帯にはあの拳銃をさしているのだ。右手で刀を抜き、左手で、拳銃を操る。すぐにひき抜けるよう臍のあたりにさしているのである。
「なんにも、怪しいところはありやせんが、へえ」
と、手先が、寝台の下から、身を起した。
「戸棚の中も見ろ、鼠のように隠れているかもしれぬ」
そこまで執拗なくせに、なぜか次の部屋をのぞいて、河内屋惣七の顔を見、調度を一瞥すると、ふん、と鼻を鳴らして、廊下へ出た。
「旦那、ここは……」
「よい」
と、面倒くさそうに言い捨てた。
その様子は、手先たちにも不審を感じさせたのである。案の定、暫くすると、一人で戻ってきたのだ。岡っ引や、手先たちには知られたくないことがあったのだろう。
「さっき見残したところを、いま一度取調べる」

つかつかと踏みこんできた。
そして、寝ている二人の蒲団をぱっと蹴って剥いだ。
「わっ、何をさらす。この餓鬼……いや、旦那、そら殺生やで、遊廓で遊んでいる最中を、そらあんまりやないか、お奉行様へ、恐れながらと訴えまっせ」
「ふむ目安でもなんでもしろ、獄門首を免れたらな」
何の確信があるのか、役人は、部屋の中を見廻し、屏風のところまでくると、やにわに抜刀して、
「城之介、隠れても無駄だ」
言いざまに突き刺した。
一突き、二突き、三突き——手ごたえはない。このアテ外れに、かっと逆上して、屏風を蹴倒した。
「うぬ……くそ、風を喰って逃げたか」
切歯した。この男が、確信を持ったのは、玄徳の姿を見たからである。あの寝棺を運び出した際、玄徳もついて出た。
「おい、そこの童！」
捕えようとした手をくぐって玄徳は身を翻している。裏階段の方へ走った。ただ逃げたと単純に解釈したのが、いのちとりになったのだ。
裏階段のところに、黒い影が立っていた。
「執拗だな……」
「あっ、城之介！」
「名前を聞いておこうか、名前も知らぬ奴を斬っては、胸くそが悪い」
「うぬ！」
拳銃が火を吹いた。両方である。どっちが早かったろう。うす暗いなかで、火は鮮烈に奔り、白煙が視界を掠めた。
そのなかで一方の影がゆっくりと倒れた。

雨の中

「またメリケンどもが暴れているのか」
吐き捨てるように言って盃を口へ運んだ男がいる。五十がらみだが恰幅がいい。肩幅も広く胸の厚みも若壮のころから鍛えてきたらしく、常人の倍近くある。
この客は、港崎町の廓では、
「珊瑚大尽」と、呼ばれていた。ずっと以前は、
「鼈甲さま」
というのが通称だったとか。
横浜御開港直後には、鼈甲の売買で大儲けをし、数年前からその扱う品物が珊瑚に移っている。太っ腹な商法で、幕府や諸大名方にも顔が利き、商い高も一度に数百両数千両という工合でその利益も大きく、一時この男が生糸に手を出すという噂が流れただけで、相場が狂ってしまったほどだ。
この男が、そうした渾名で呼ばれるのは、本名を知る者がないからだった。
商いをするのに、名前が不詳では取引が出来ないが、かれの息がかかっている商店は多い。異人の商会でも代理業務をやる。顔が通り、いざというときに大金を動かす実力がありさえすれば、この居留地では、〃人別帳〃（戸籍）の生国姓名も必要としないのである。
名前がわからないだけではなく、この〃お大尽〃は、容貌も衆目の前に曝したがらない。
いつも頭巾をしている。
その頭巾も凝ったものだった。たいてい金襴のつづれ錦などで、夏場はうす絹が多いが寒夜には呉絽の頭巾で、芸者たちを瞠目させたこともある。このころ呉絽といえば一寸幾らというほどで、金のうす板にも比較されるほど高価なものだった。
「寒がりじゃでの」
と、お大尽は言う。
夏でも冷えている、と言う。冷たいのは肌ではなく、その眼だった。頭巾の中で光っている双眸は、どんな場合でも柔らぎ和むということがなかった。酒が入るほどに、蒼く光を帯び、宵闇の叢から瞶める蛇のそれのように、陰険な光を放った。
攘夷浪人の横行したころ、かぶり物御禁止だったが、この〃鼈甲さま〃だけは別だった。居留地の者は内外人ともよく知っていたし、亀甲紋のぶら提灯を持った手代や屈強の者がいつも四五人従っている。
このお大尽は、港崎町に来ても、岩亀楼や五十鈴楼など

の大まがきでは遊ばない。

　大まがきの方が格式がきびしいせいもあるが、所詮、金がものをいう場所だけに、大金払いさえすれば、頭巾でも罷り通る。金さえあれば泥棒でも人殺しでも大切なお客なのだ。だが、やはり気詰りなのであろうか、遊ぶのは専ら、小見世だった。

　小見世といっても、前記の大まがきに比較してのことで、金浦楼、出世楼、金石楼、戸咲楼などが、このお大尽の行きつけの所だった。

　気が向けば、見世を買占めて女たちを総揚げすることもある。遊びが好きだった。二日も三日も流連する。

　ただの商人上りではない。両刀をさしているところを見ると武士なのだろう。主家の名は言わないから、浪人か郷士。もっとも幕末になると、たいていの大名が財政窮迫で、僅かな献金で苗字帯刀を許したりしている。

　この男が、ヨコハマへ乗りこんでくる前は、何をしていたか、一時、不審の噂が立ったが、急がしいハマのことで、すぐ忘れられた。一旗組が多い新開地のことで〝金貨は金貨だ〟（不浄の金でも金に変りはない）というユダヤ的な箴言が肯定されていた。

　この男は、もう流連して二日目になる。芸者の芸も尽きた上に、幇間も踊りまくって、みんないぎたなく寝こんでしまっても、この男だけは、普段と変りなく、酒を飲み、花魁と戯れていたのだった。

「さあ、みんな、どげんした、もうくたばってしまうとは、弱すぎて、話にならんばい」

　花魁のほうがうつらうつらしてしまうと、別の花魁をひきよせる。こんなことは花街として御法度なのだが、このお大尽は、一向に気にかけない。

「こりゃ藤市、チョンキナは揃ったか」

「へい、次の間に控えさせております」

「眠気ざましにはチョンキナが一番よいわい」

　お大尽は脇息によって大盃になみなみと酒をつがせている。打ち殺しても死にそうもない動物的逞しさであった。

　芸者やお囃子方など、目をこすりながら、締太鼓の調子を見たりしているうちに、間の襖が開けられて、

「チョンキナ、チョンキナ、ホイ！」

と、踊りがはじまった。

　女たちは四人。いずれも芸者であった。若い美形揃いだ。三弦の調子に合わせて優美な踊りをはじめたが、お大尽が盃を三つあける前に、するすると帯を解いてゆき、前に置いた。

　帯から着物というふうに、しだいに脱いでゆく。一枚脱ぐごとに、女たちは細身になってゆき、髷が重たげになってゆく。嫋々たる姿態が展げられてゆき、燃えるような長襦袢になった。

「よか、よか、みんな抱きたかごたるぞ、それ、チョンキナ、チョンキナ」

　箸で小鉢を打ちながら拍子をとっている。

　締太鼓と笛が、一層、早調子になった。四人の女たちは伊達巻を解いて、前襟を片手でおさえ、するするとすべるように、客の前にくるや、ホイ、ホイ、と声を合わせて、ぱっと脱いだ。

　腰のものははじめからまとっていなかったのである。全裸があらわれた。白い肌であった。普通芸者の白粉首は襟から首の下までで、裸になると素肌とのちがいが目立つが、この女たちにはそれがなかった。

　顔や首すじと同じように五体、全部を塗りこめてあったのである。下腹部まで白粉がべったりと塗られて、そのちぢれた丘が白粉をまぶしたところは、奇妙なほどだったが、それはかなりに異常で刺戟的といえた。

　二発の銃声が殆ど同時に聞えたのはそのときである。

　アメリカの水兵や流れ者の無頼漢たちは、この日本国の横浜も、南洋の蛮地も同じつもりで、拳銃をぶっ放したり、暴行をはたらいたりする。店先の品物をかっぱらったり、夜の一人歩きの女が手取り足取りされて、暗がりに連れこまれるのは日常茶飯事のヨコハマだった。

「無粋な音に負けぬように、こっちはどんちゃかやらにゃたい、さあ、こんどは、チョンキナ、本番でゆきんしゃい」

　もともとチョンキナは、ジャン拳で負けた方が脱いでゆく遊びだ。それを舞踊化したのが、港崎町でうけていた。この客は、それを逆にして楽しもうというのだ。ありふれた遊びに飽きると、何か目先を変えてみたがるものだ。

「よかな、勝ったら一枚ずつ、着てよか、負けたらいつまでたっても裸のまんまばい。そら、はじめ」

　チョンキナ、チョンキナ、チョンキナ、と紙に鋏に石と、闘わせはじめた。

「もし、お大尽さま、もし」

と、亭主が顔を出した。

「なんだ、この最中に」

「実は、お調べなので」

「なんじゃと、泥棒でも入ったか」

「それが、人殺しでございます。攘夷浪人の城之介とかいうやつが、お役人衆を斬りまして、はい、そやつピストロを持っておりましてな」

「さっきの音は、それか。ピストルをふりまわしていたのは、メリケンどもではなかったのか」

「はい、それで五十鈴楼は、もう上を下への大騒ぎでございますよ」

「このけちな小見世まで騒ぐことはない」

「へへえ、けちな小見世とは痛みいります。そいつが五十鈴楼から姿をくらましたそうで」

「こっちへ潜りこんだというのか」

五十鈴楼とは目と鼻の近さだから、このあたり一帯を調べるというのらしい。

「迷惑なことだ、断わる」

「へ?」

「断わる。わしが断わると左様に申せ」

「へえ、ですが……」

「誰が来ている?」

神奈川奉行所から、出張って来ている者の名を聞いたのだ。

「はい、五十鈴楼には、三輪さまがお出でとか」

「三輪重か」

奉行所の支配組頭たる三輪重左衛門をそのように呼び捨てにするとは、この男の勢力は底が知れない。

「そうか、五十鈴に来ていたのか、ここへ呼びなさい」

「へえ……三輪さまを」

亭主はそんなことをしてもいいのかと半信半疑だったが、珊瑚の大尽の頭巾のなかの眼は、もう裸の女たちのほうを向いていた。

〃珊瑚の大尽〃の名は効果があったようである。三輪重左衛門はすぐにやってきた。

「こちらにお出でしたか」

「意外という顔だの」

「いや……時が時ゆえに」

「わしはいつでも遊んでいるさ」

そんなやりとりを小耳にはさんで、亭主は、こいつァまるで主従のようだ、と思った。

「ピストルを持った浪人だというの」

「なかなかの腕前じゃ、組の者が撃たれましてな。心ノ臓を一分とそれてはおらぬ。向坂逸蔵と申し、腕の利いた男であったが、惜しいことをした」

その話の間、チョンキナはつづいていたのである。四人の中の一人は、まだ長襦袢もつけることができずに、べそをかいている。

踊りのうちは羞恥も忘れられるが、いつまでも負け拳ばかりだと、だんだんいたたまれなくなってくる。

そんな姿に、女の恥じらいがあふれて、女遊びに馴れた男にも、ふと欲情させるものがあった。

「——城之介、といったな」

別のことを思いだしたように、珊瑚大尽は言った。

「左様……てまえも、まさか、と思いましたが、彼奴、弥右衛門に似ております。まず、弥右衛門の遺児に相違ありますまい」

「ふむ、話は聞いていた」

頭巾が頷いた。

「では、すでに……」

「数日前からな。いろいろと、耳にしていた」

「それは、お速い」

「そっちが遅いのだ。それでよく奉行所づとめが出来る。いや、奉行所づとめだから、お茶をにごせるというわけか」

「笑いごとではございませぬぞ、珊瑚殿。これは、よほどに用心せぬと」

三輪重左衛門は、話のうちに、焦々してきて、女たちのほうをむいて怒鳴った。

「そのほうどもは、もう退れ、要談がある」

「これこれ、そう薄情なことを申すまいぞ、女どもが哀れではないか」

だが、三輪には、それどころではないようであった。

「これまでの彼奴の仕業を数えあげるとともに容易ならぬ腕じゃ。尋常な手段では捕えることもできぬ。だが、捕えるか斬るかせねば……」

「その首があぶない」

笑いもせずに珊瑚大尽は言い、また盃をとりあげた。

「これはしたり、何も、てまえだけが怨みを買うことは……」

「せいぜい用心することだ。幸いと、おぬしの役目は、胡乱な奴を問答無用に斬り捨てることが出来る」

「……」

「そいつを利用することだ。お役目大切でな、一石二鳥というところだ。何も左様にびくつくことはない」

頭巾をかむっているので、そういう本人の表情はわからないが、盃を口へ運ぶ手つきにも、態度にも、動揺は見られない。

「話は済んだ。逃さぬよう、気張るがいい」

もう帰れ、という口調だった。

「わしは、まだ用があるからな。ただしこの部屋の調べは済んだであろう、無粋なことをせぬようにの」

と、花魁を促して立ち上った。

城之介が五十鈴楼を出たのは、やはり同じ場所からであった。向坂逸蔵を撃ったとき、相手の弾丸も袖を掠め、二ノ腕を少し傷つけたが、殆ど痛みも感じなかった。

小見世の裏露地を辿って、廓の塀を破って濠に身を沈めた。濠のはばはおよそ五間である。これくらいを泳ぎきるのは誰でも容易だ。ただ白昼ということと、かれ一人を捕えるために、数十人の役人や兵隊が動員されているということが、緊張を強いた。

この遊廓をとり囲む濠は、八千坪の敷地の地固めに掘り上げられたもので、むろん、廓としての必要上から、濠は

さらに浚って深くしてある。
城之介の背丈でも届かない深さだ。
むろん舟一艘浮んではいない。城之介は水に潜って裏手のほうへ辿っていった。
幸いだったのは、まだ日暮れには間があるが、一雨くるらしく、空が曇って、あたりが薄暮のように昏くなってきたことだった。
（さて、どうするか……）
この土地へ侵入してくるからには覚悟はできている。危険なのは当初から百も承知だったのである。
仇のうち目星がついているのは、一部にすぎなかった。仇を討つには、まず探さねばならない。その手がかりは、清国人の玄徳だったのだ。が、尋ねあてた玄徳は、少年にすぎない。十年前の長崎のことを知っているはずはない。長崎で、かれに〝玄徳〟の名を教えてくれたのは王といい、嘘を吐く男ではなかった。何かの間違いとしか思えない。
とにかく、玄徳が仇を知らない以上、昔を辿って、捜り出さねばならないのだ。
繁栄の一途を辿る、この居留地で浪人城之介はすでに狙われている。役人と、そして仇から狙われている。孤身を容れるところがなかった。
（おれの姿が目立ちすぎるのか）
着流しの浪人姿というだけで、ヨコハマでは異風なのだ。
サーッとしぶきが顔を搏った。雨が降ってきたのだ。天佑だった。空には黒い雲が異様な形で渦巻き流れて、大粒の雨が叩きつけてくる。
このしぶきでは、数間離れると、もののかたちもおぼろになる。
城之介は向う岸へ泳ぎついた。土止めの杭が打たれ丸太が重なった土堤を、よじのぼった。
周辺はずっと横浜新田である。所々、まだ沼地になったままだ。
その新田のところどころに人影があった。二三人ずつ、組になって歩いていた影である。
「——城之介さんかえ」
こう声をかけてきた。
土砂降りになった雨の中だ。相手も笠や合羽の用意をするひまがなかったのであろう、ずぶ濡れだった。
町人風だったが、腰には刀が見えた。
「城之介さんだね」
別の男が念を押した。
ほかの影は、もう視界にない。声も聞えまい。相手はたった二人なのだ。
「城之介だとしたら、どうだというのだ」
すると、相手は、ほっとしたように、
「よかった。そうじゃァねえかと思ってね、おまはんのこ

とだ、てっきりこっちへ出て来たんじゃねえかと思ってね」
「……」
「なあに、心配しなさんな、岡っ引や手先じゃねえ、わっちらは」
「御安心なすって」
と、もう一人も言った。
「お救けにめえりやしたんで」
「——知らぬぞ、救けは呼ばぬ」
「へえ、さいで。ま、どうでもいいが、人の好意は素直に受けるもんですぜ」
「そうかな」
城之介が歩きだしたとたんだった。前を歩くと見せた男が、ふいに、身を翻した。抜き討ちに叩きつけてきた。
「いたぞ！」
その声は雨にかき消された。雨は、さらに悲鳴をもかき消すのに吝かではなかった。城之介の一刀が胴を薙いで走るや、男の苦痛に歪んだ顔が、眼前に大きくひろがり、どうっと泥の中に倒れている。
「いたぞ！　こっちだあ」
もう一人の方は、手練におぞ気をふるったように、刀をひいて逃げだしている。
その背へ、血刀を叩きつけた。が、泥が足をとった。わずかに鉈子が、背すじを裂いただけだった。
「畜生！」
振りかえって、盲滅法に横に払う。その表情も雨の幕が霞をかける。城之介は、身をそらして相手の刀を流したあと、片手打ちに叩きつけた。ざくっとしたたかに、肉が裂けた。
眼もあけられないような篠突く雨の中を、城之介はおよその見当をつけて歩きだした。幸いと、かれらの悲鳴はなかまに聞えなかったようである。
少しでもこの場所から遠のくことだった。この雨は、かれには幸運だった。泥田の中の足あともかき消してくれる。
このまま、居留地の外へ出ることは可能だった。だが、逃亡したのではせっかく潜入してきた意味がなくなる。
城之介は、その雨がもたらした黄昏が、時刻に早い洋燈の灯を異人館の窓々にともさせるころ、あのショーメット夫人の屋敷に忍びこんでいた。
ここだけは灯がついていなかったし、あんな惨劇のあったあとだけに、誰も入居はしていないだろうと見込みをつけたのである。
案の定、空家になっていた。フランス領事館であと始末をしたものか、意外に掃除などもしてあったが、さすがに、冷え冷えとした家の中だった。
城之介は長椅子の上に横になった。ここを〝巣〟にしてもいい、と思った。

手帖の謎

人死があった家というのは、当分、誰も近寄りたがらない。夜は無気味だし、まだ誰しもが亡霊の存在を信じている。たとえ開化の居留地でも、そのことは同じなのである。

(ショーメットの幽霊が出るか？　そいつも面白い。あの牝豚には、もっと聞きたいことが沢山ある……)

紋服からすっかり脱いで、城之介は下帯一すじになっていた。刀だけは、そこらのかわいた布で何度も拭いた。鞘の中も濡れていたので、白刃のまま、置くことにした。

拳銃も分解して拭った。弾丸は二発しか残っていない。洋燈の灯のもとでふと、城之介は眼を光らした。どこかで音がしたように思ったのだ。

人の足音だ。幻聴ではない。足音だった。誰かが、階段をのぼってくる。城之介は、刀に手をのばした。

その足音が聞えたとき、城之介は刀を摑んだ。

水を潜り血に汚れた刀はありあう布で拭ったばかりであった。まだ柄糸は濡れている。ひたと掌が吸いつく。

(誰だろう？……誰も住んでいないはずだ)

ショーメット夫人が黒人の奴隷と醜行の最中惨殺されて生首になって以来、誰も寄りつかない。

居留地の異人屋敷である。外はもうすっかり暗くなって、洋燈の灯りが、窓ガラスを彩っている時刻である。雨の日は黄昏を早く齎すのだが、居留地も雨の夜は静かであった。階段をのぼってくる足音は途中まで来て、ふと止った。

(気がついたのか？……)

洋燈は消しておくべきだった。

悔んだが、もう遅い。いまから、芯をほそめても、かえって怪しまれるだけだ。

足音はまた上ってきた。

この部屋には入って来ずに、廊下の向うの部屋に入ったようであった。城之介は洋燈の芯を細めると、四曲の衝立の陰に身をひそめた。

何かゴトゴトと探し物でもしているらしい音がしている。

やがて、淡い灯りが近づいた。かぼそく芯を細めた室内の洋燈ではもののかたちも判然としない。

階下で見つけて灯を入れてきたのであろう、洋燈を持った手があらわれ、人影が浮び上った。

(おんな!?)

城之介はあやうく声をあげるところだった。

異人の女だった。赤毛でスカーフを肩にしている。表情はよくわからなかったが、若い女らしい。

女は、洋燈を卓子の上に置くと、室内を見廻してから、簞笥の引出しなどをあけて、何かを探しはじめた。

城之介はそのうしろから、静かに声をかけた。

「何を探している?」

そのときの女の驚愕は言い現わしようのないほどはげしいものだった。まるで突然、亡霊に声をかけられたような、恐怖で、失神しそうになったほどだ。

「あなたは……」

きれいな日本語だった。そのあとで、あわてて英語で言い直した。動揺は、自分自身が変装していたことすら忘れるほどだった。

「聞くのは、こっちだろうな」

と、城之介は微笑した。

「赤毛のかずらをかぶって、異人の服を着こんで来たとは、なんの茶番だ」

「……」

「そのなりで入ってきて、家探しか？　何を探している?」

ふいに女は身を翻した。同時に洋燈を倒した。灯を消そうとしたのか、故意に倒したのかわからない。

ホヤが割れ、石油が流れて、絨緞がぱっと燃え上った。女は腰籠をいれてスカートを大きくひろげた洋装だったのである。裾に燃え移って、めらめらと炎があがった。

「あれっ」

「あわてるな」

枕をとって絨緞の火を叩き消すと、スカートの火もついでに叩いた。枕が破れ、羽根が四散する。女は転がって火を消そうとしていた。焼けて破れたスカートをひき裂くと、殆ど下着だけの姿になってしまった。

「ついでに、その肌着も脱いだらどうだ」

「いやです」

「せめて、かずらだけでも、はずせ、そなたの顔には赤毛は似合わぬ」

そう言われて、はじめて赤毛をかぶっていることを思いだしたように、女は、それを脱いだ。下から艶やかな黒髪があらわれた。くるくるとまとめて押しこんでいただけなのだ。ばさっと肩にかぶさるように長い黒髪がおちてきた。

見たところ十七八の娘である。熟れたからだつきだった。

城之介は一目で、すでに男を知っているからだと見ぬいた。きりっとした目鼻だちには、気性の烈しさがあらわれている。薄情な感じを与えるうすい唇を、きっと結んで、女は膝を揃えた。

異人娘の下着を着て正座した姿は、いささか滑稽だった。

「悪いところに来た」

と、歎息するように、城之介は言った。

「せっかく、おれが休もうと思っていたところを邪魔されたな」

「……」

「あまり手間をとらせないで貰おう」

城之介の刀は、女の背すじにすっとすべりおりた。かたく胴を締めたコルセットの紐が音を立ててはじけた。

「あれ！」

ぽかりと前がずりおちて、女はあわてて乳房をおさえた。

瞬間的にちらりと見ただけだったが、小さいながら、かたちのいい乳房のふくらみだった。

「何をしに来た？　探しものを言って貰おうか」

「……」

「黙っていてもわかる。この手帖ではないか」

と取り出して見せたのは、ショーメット夫人が隠していたれいの黒皮の手帖だった。

「あ、それを」

思わず手を出すのを、城之介は冷たく見て、

「そなたの名を聞こう」

「——緋紗」

ぽつりと洩らした。

「お緋紗か……なぜ、これがほしい？」

また、沈黙がきた。

「言わぬでも、およそはわかる。中を見ればすむことだ。お緋紗の名があるだろうな」

「ああ、やめて！」

お緋紗は恥部を見られたように悲痛に叫んで、すがりついてきた。

若い娘が羞恥と屈辱で身をふるわしているのを、城之介は冷たい眼で凝っと見た。この手帖に書かれているとすれば、その不安も理解できるのだ。

ショーメット夫人の企画した異人との乱交に、最初は興味半分から加わった女が多かったにちがいない。素姓を知られてしまっては、足を抜こうにも抜けず、ずるずるに、乱倫を重ねてきたのではないか。

そうした女たちは、殆どが、居留地の異人を相手の貿易商の女房たち、箕ではかるほど小判や洋銀が踊るといわれた居留地の商売で、贅沢と欧風の遊びを知った堕落した人妻たちかと思っていた。

お緋紗はどう見ても娘であり、その挙措や言葉づかいにも、商人の風がない。

(武家の娘ではないか？)

と、思ったのである。

どちらにせよ、娘までが加わっているとは思いがけなかった。

丁寧に読んだわけではないが、店や亭主の名前から、本人の年齢まで記された手帖には、娘や武家の名はなかったような気がした。

城之介は、片手めくりにぱらぱらと手帖をひらいた。すると、お緋紗は狂ったように身を揉んで、

「見ないで！　見ないで下さいまし、お願い、恥をかかせないで」

とても耐えられぬように、ぱっと面を蔽って、嗚咽しはじめた。

おそらく、父親の名も記されているのであろう。あるいは身分ある男かもしれない。父親の名が公になれば恥の上塗りだ。それが生首事件のあとだというのに、大胆にも彼女を侵入させたのに違いない。

「それほどに言うのなら、見ないでおこう」

「有難うございます」

「だが、所詮、記されているとすれば、臭いものに蓋をしただけで、何の意味もない」

「でも……」

お緋紗が顔をあげかけたとき、思いがけなく、双眸に涙が光って見えた。

「そのまま、その手帖を焼いて下さいと申し上げても……駄目でございましょうね」

「……」

「あたしで出来ることでしたら、何でもいたします」

娘にとって、男というものは、その角度からしか眺めることは出来ないのだろうか。

お緋紗は寝台にあがると、残りの下着を脱いだ。一糸まとわぬ姿になって、横たわったのである。

そこまでいさぎよい行動も、意外すぎたのである。若いからだを、長々と仰臥すると、さすがに下腹部にそっと蓋をするように両手をかさね、眼を閉じた。

きっと歯を食いしばっている。眼をあけると、おのれの羞ずかしい姿を見なければならないのか。その肌の上を嵐が吹き過ぎるのを必死で待っているという悲壮な表情だった。

たしかに、その肌は美しかった。汚点一つない白蠟の肌は羞恥と、そして洋燈の笠の色を拡散して、桃色に染まり、どんな男でも情感を湧きたたせずにはいない若々しさと、温かさが感じられた。

事実、城之介もそのまま、のしかかりたい衝動を受けて

いたのである。それを抑えたのは、城之介の武士の誇りだろうか。
「せっかくだが」と、城之介はその肌から眼をそらして言った、「その馳走を受けるわけにはいかぬ」
「……」
「おれは、人の弱味につけこんでまで、愉楽を貪ろうとは思わぬ」
「いいえ、あの……」
「そなたの名前が、この手帖に載っているとすれば、破ってもよい」
「有難うございます。あたくし、こんなお恥ずかしいところを」
あわてて、お緋紗は裸身を隠そうとした。
だが、下着だけしかないのだ。コルセットも紐が全部断られてしまっている。城之介は、間誤間誤している女を見て箪笥の中から、手当りしだいに、ドレスをつかみ出して投げた。
「ショーメット夫人は肥り過ぎていたから、寸法は合うまいが」
「いいえ、どうせ夜ですから」
肌を隠せればいいというのだ。
お緋紗がドレスを選んで着ている間、城之介は手帖を見た。何人かの女の名前が記されている。だが、そこにお緋紗の名はなかった。
こんな思いまでして、抹殺に来たのは、よくせきのことだ。思いちがいなどではない。手帖は破りとられた個所もなかったのである。
無い、と聞くと、お緋紗ははげしくかぶりを振って、
「そんなはずはありませぬ」
と、言い張った。
「ちゃんと、住所も書いてあるはずでございます」
「無いのだ。みんな屋号がある。これは商人だろう、それから、齢も二十歳以上だ。そなたは」
「十八歳でございます」
どういう理由かわからなかった。
「面妖だが……無い。安心していいぞ」
「いいえ、必ず記されているはずでございます。そうすると、もう一つ手帖が」
「ほかにもあるかもしれぬ。探すか」
そこまでは考えつかなかったことであった。
そう言ったとき、突然、夜気をふるわせて、窓ガラスが割れた。銃声はつづけて起った。
「気をつけろ」
城之介はお緋紗を抱き寄せると、洋燈を吹き消した。
「怪我はないか」
「はい、あなたさまは」

「大丈夫だ……だが、誰が?」
その疑問は、しかしこの場合、愚問だった。
人気のないはずのショーメット夫人の空屋敷なのだ。そこに灯が動き、影が動いたとすれば、近所で騒ぎ出すのも、当然かもしれない。
幽霊だ、と騒いでいる声が聞えた。
「しまった、役人が駈けつけてくるぞ」
灯を点じたのが迂闊だった。城之介は手早く着物を着た。
ここもまた休むことすら出来ないのか。
「出ましょう」
「表も裏も、人がくる」
まだ宵の口だったのである。幽霊騒ぎは、夕食後の腹ごなしに丁度適当だったのであろう。
雨の中にも関らず、近所から出てくる男女が見えた。
「ぬけ道があります」
お緋紗は囁き、階段をおりていった。

ショーメット夫人の屋敷に抜け穴があったのは、さして不思議ではない。身分を隠さねばならない男女の、秘密を保つために造作されたものであろう。
地下室の壁が仕掛になっていた。
お緋紗は先に立ってその暗い道を抜けた。隣家の下を通り抜けて、天主堂の下へ出るようになっていた。

ショーメット夫人の空屋敷に幽霊が出たと騒いでいる声をうしろに、城之介たちは、居留地から山ノ手へ向っていた。大岡川の橋を渡って、元村へ入っていった。この橋袂にも、木戸があって、夜間の通行は殊にきびしく調べられるのだが、お緋紗の顔を知っている番人は、木札を調べるどころか、
「これはお嬢さま、いまお帰りでございますか」
と、揉手して、連れの城之介へ不審の眼を向けようともしないのだった。
木戸を抜けて右へゆけば、すぐ元村である。
山ノ手といわれる丘陵が長く連なっているが、金比羅の社が山腹にあって、弁才天、薬師堂などがある。その深い樹々に囲まれた静かなところに、堂守の家がある。
お緋紗が案内していったのはそこだった。
「わたくしの住居でございます」
「ここが……」
意外だった。
一体、この女は何者なのか。美しい娘が、ショーメット夫人の乱倫の群れに加わっているだけでも、不思議なのに、世捨人のような暮しをしていると聞けば、尚更、不審が増した。
「おあがり下さいまし、ほかに誰も居りませぬ」
招じ入れると、お緋紗は葡萄酒を出してきた。

雨はまだ降っていた。この場所は石段の数からいっても、丘の中腹になるから、昼間なら居留地が一望のもとに見晴らせるのではないかと思われた。
「すぐあちらにペルリのお墓がございます。それから、下田で亡くなったメリケンの水夫のお墓も」
「メリケンのことはよい」
と、城之介は遮った。
「そなたのことが知りたい。一体、かようなところに一人で、どうして暮しているのだ」
「――女一人、別段のことはありませぬ」
「おれには不思議でならぬ。父御のことを聞こう」
ふっと、お緋紗の顔が曇った。無言にかえって、ひとりで酒盃をあけた。
「おすごしなされまし、赤いお酒を飲んでいると、何もかも忘れることができますもの」
「父御のこともか」
「はい……」
「忘れるためか、ショーメット夫人の家での行為もか」
「――仰有らないで」
お緋紗は、突然、身をふるわせて、がばと、城之介の膝に泣き伏した。
「なんにも、なんにも仰有らないで」
「……」
「抱いて下さいまし」
泣きじゃくって、すがりついてくる。
「お願い、城之介さま！」
城之介の眼に、寝台に横たわった裸身が浮んだ。その若い肌は、乱倫の娘とは思えぬほど、美しかった。
城之介はお緋紗を抱きよせた。唇を吸った。唇を吸われたまま、お緋紗の手はおのれの帯を解き、城之介の帯を解いていた。
葡萄酒がほどよく廻ったのか、お緋紗の肌は火照っていた。その情炎が、城之介をも溶かすように、熱くしみた。
この部屋の中に一基の洋燈は、いかにも不釣合いであったが、お緋紗の肌を愛でるには、行燈よりもふさわしいような気がした。あるいは葡萄酒に火照った肌には合っていたのであろうか。
お緋紗は、酔っていた。が、酔いだけが、城之介の抱擁をもとめさせていたのではない。
城之介に抱かれると、あられもなく、白い脚を宙に泳がせて、いじめて、と、あえいだ。いじめて、もっといじめて、と口走った。
日頃は慎ましやかな娘としか思えない肌が、ひとたび男を容れると狂ったように、呻き、歯を軋らせて悶えた。城之介の方は、まさか、この娘がそれほど、性に熟れているとは思っていなかったのである。

何かの事情で、家族と離れた淋しさから、男をもとめる気持はわかる。が、お緋紗の激情は、そうした単純なものではないようであった。
そこには、狂わずにはいられない、性を感じさせるものがあった。十七や十八の娘で、そこまで成熟しているということも、意外すぎたが、それだけに、彼女の肌は男を喜ばさずにはいない、柔らかく、ひき締って、若い血を脈打たせたものだった。
いつもだったら、この情熱の中に溺れながらも、城之介には、危険への慮りがあった。この娘には、それがなかった。
向うから挑まれたとき、まず、その裏を考えるだけの冷静さがある。この娘のひたむきさには、その男の冷静さのヴェールをひき剝がし、いのちの炎のすべてを燃焼し尽さずにはおれない、激しさがあった。
お緋紗は、城之介に抱かれて輾転と白い裸身をのたうたせながら、もっともっとと叫び、声が出なくなっても、唇は、なお叫びつづけていた。
そして、すべての気力を費消して、その五体が動きを失ったとき、城之介も我にかえったのである。
静かな雨の音だけが、夜の静寂に聞えている。この雨夜の底に、城之介が感じた殺気は何であったろうか。
お緋紗は一切の虚飾のない裸身をぐたりと投げだしていた。呼吸もしていないように、気力を出し尽していて、ただ、鼓動だけが、生きている証拠に、微かに音を立てている。殺気は、お緋紗から洩れるものではない。この雨夜、そのものに城之介を取囲む刃が感じられた。
城之介は女の肌から身を起すと、着物を着た。その殺気は、かれの気のせいばかりでなかった証拠に、軒下で啼いていた虫の音がひたとやんだことでも知れた。

父と娘

殺気を払うのに躊躇はなかった。
降りかかる火ノ粉は払わねばならぬ。
何故、という疑問は、その火ノ粉を払っての後に考えればいいことであった。
(何人か？……)
それだけが、この闇の中で城之介を案じさせた。
人数の多寡によって、殺法も変る。城之介は静かに刀を掴んで腰におとした。
お緋紗には、四辺に迫った殺気は感じられないのであろうか。そのぐったりとなったからだは、いのちの炎を燃焼させたあとの抜け殻のように、五感のすべてが鈍痺しているかのように見えた。
洋燈の炎をほそめかけて、城之介は思いなおした。
その灯のもとに、白い肌が長々と伸びている。
さながら死体を思わせて、羞恥を忘れた四肢であったが、生きている証拠のように胸が喘いでいた。
情熱に溺れて、そこまでいのちを投げ出せる女の性が、ふと羨ましくさえ感じられたのである。
城之介には、そこまで、おのれを失っている時間がない。このヨコハマの居留地は、かれにとって地獄の針の山にひとしかった。
居留地から一歩外へ出たはずの関門の外の山ノ手、元村であったが、危険は同じであった。
脱ぎ捨てられた女の着物を、裸身の上にかけてやるだけの余裕が、城之介にはあった。
その間も、殺気はじわじわとせばまってくるのである。
雨夜をこめて、虫の音が聞えていたのが、ふいに熄んだのが、その接近者の存在を教えた。
虫の音が絶えると、あとは雨の静かな囁きだけである。
これから起ろうとする修羅を前にして、あまりにも静かだった。
その静寂を破ったのは、雨戸の音だった。誰かが、雨戸をこじあけようとして、無器用な音を立てた。
お緋紗は、その音で、余波のうねりを残した陶酔から覚めたようであった。
「——だれ？」
音が熄んだ。
また音がした。
お緋紗はのろのろと着物をまとった。
「——どなた？」
戸外の者は、明らかに、不意打ちを狙っていたのである。

雨戸を静かに開けて、一気に飛び込む。その順序が、崩れたことをさとった。
「お訊ね申す、そこに不審の者がいるはずだ。てまえは神奈川奉行所の湯浅甚五郎……」
お緋紗が何かこたえようとした。城之介はこれを無言で制した。
何を言っても、お緋紗には不利になる。後のことを慮った。この場は城之介が自由を奪ったことにすればよいことであった。
この沈黙は、役人たちに闖入の口実を与えることになった。
「開けろ」
お緋紗に怒鳴ったのか、配下への命令か。
もはや遠慮なく、がたがたといわせて雨戸をはずしにかかった。
「おれのことは知らなかったことにするがいい」
城之介は囁いて、
「いのちがあったら、また逢おう」
「あの……」
お緋紗には話したりぬものがあったのであろう、未練を眉にうつろわせて、すがるように城之介を見上げたとき、がたっと、雨戸の一枚がはずされた。
とたんに、城之介は障子を開けた。手にした洋燈を前面の奴に叩きつけていた。
けたたましい音とともにガラスの火屋が割れ飛び、手先の男の悲鳴がつんざいた。
石油を浴びて、炎が吹きあがる。この奇襲に役人たちは、出鼻を挫かれてひるんだ。
その真っ向に城之介は躍りこんでいった。
役人たちは抜刀している者もいたが、半ばは六尺棒を手にしていたのである。棒が群れてきては、斬り抜けるのに困難だった。城之介は咄嗟に、陣笠に、雨合羽の同心を見わけると、これに斬りかかった。衆を恃んでくる敵に対しては頭株を斬るのが、良策であった。
提灯が飛び、笛の音が、幾つか同時に、鳴りひびいた。
絶叫と血しぶきの中を、城之介は走り抜けた。何人斬ったか、どこを斬ったかも、こうした際には、記憶にとどまらない。前後左右がすべて敵の場合、悲鳴と手ごたえと、返り血のしぶきがおよその判断をさせるだけであった。
城之介は走った。
雨夜なのが、せめてもであった。それと樹立ちの多い丘の中腹。薬師堂や弁才天のお堂や、増徳院というお寺などがあるのが、行方を晦ますには幸いだった。
「逃げたぞ」
「寺のほうだ、寺を固めろ」
「裏山へ逃げこまれるぞ、金比羅の方へ誰か廻るんだ」

そんな声を聞きながして、城之介は丘を駆けのぼると、異人墓地の上へ出て、丘の稜線を南へ走った。
　このあたりの地理には暗かったが、およその見当はついている。南へ走れば、役人たちもあきらめる。すでに居留地ではないのだし、根岸のほうへ逃げられたら、もう手の尽しようがないのだ。
　雨はまだやまない。追手をマイた安心感とともに城之介の胸に浮んだのは、
（あの役人たちは、誰の密告で来たのか）
と、いうことだった。
　ショーメット夫人の家から、お緋紗に伴われて、元村まででくる間に、かれの姿を見た者があったのだ。
（夜だし、一寸離れると、おれだとはわからなかったはずだ。だが、役人たちはおれを目ざしてきた……）
　居留地の中でのことなら、浪人者というだけで分は悪い。が、一歩外へ出てしまえば、容疑の程度では、ああまで人数は揃えない。城之介と知っての闖入であることは明らかであった。
（おれを見た者は……関門の番人しかいない！）
　そこに思い当った。愛想よくお緋紗に挨拶をした男の卑屈な態度と、粘っこさを城之介は思いだした。
　関門が四ヵ所に出来たとき、その番人になるのを、誰もが嫌がった。
　異人相手ということが、まず面倒が多いし、べらべらと自国語で勝手に喚かれては、お手上げになる。
　神奈川奉行所としては、仕事の大部分が異人相手なのだから、しかし好き嫌いは言っておれなかった。
　下役たちに命じ、泥縄だが応急に蘭語や英仏語を習わせた。手真似足真似ながらも、何とか用が足せないと困る。
　弁当を食って仕事は与えられただけを何とか誤魔化して、給与にありつきさえすれば、それで一日が終るという惰性で役所づとめをしている者たちには、妙なかたちの数字や、ＡＢＣを覚えるのは、余分なことでしかなかった。
　御開港となって、続々入りこんできた一旗組の商人たちは、儲けにつながることだし、それが大きいから必死に勉強もするが、下役人や小者などは、
「この歳になって横文字なんて」
と、諦めて、怠惰が先にくる。
　ところが、少しずつ慣れてくるにつれ、関門の番人というのは、意外な収入があることを知った。
　それが異国の習慣であろうが、異人たちは、ちょっと面倒なことがあると、すぐ、洋銀を出す。
　なんでも銭で片付けようとする。
　関門はもともと居留地と居留民の保護のために設けられたのが表向きで、裏には、やはり鎖国主義の残滓が尾を曳

いている。
　異人たちは、攘夷ローニンの跳梁に怯えながらも、居留地の外へ出たがる。
　馬を飛ばして遠乗りを楽しんだり、神社仏閣などに興味を持っている者も中にはいる。
　そうした連中にとって、関門の一々のお調べや出入りの時間の制限などはわずらわしい。
　それを洋銀でお目こぼし願おうとする。かれらにとっては常識だった。低開発国ほど、金の威力がある。かれらの眼から見れば、日本国も、野蛮な東洋の小島にすぎない。食い詰め者が多い異人は日本人の精神などを考える頭脳に欠けていた。
　日本人の親切心や、思いやりや、他国人への好意などは、それが無償の行為であるところの美しさなど、まるきりわからない連中が多かったのだ。
　また、小役人などの卑しい性格は、賄賂にも馴れていて、この洋銀の効果は顕著だった。
　また、日本人が持ちこむ品物にも、関門では一々文句をつけて、袖の下にありつくという、悪い習慣も出来あがっていた。
　異人の中には洋妾を囲っている者もいたし、遊廓での遊びより、近在の農家の娘などと交情することを楽しむ者も多く、それらの出入りは、的確に役人たちの懐ろを潤した。
　異人は、効果的に居留地を使う。たとえば、根岸や本牧のあたりの娘と仲良くなると、その気持がつづいているうちはいいが、他にいいのが出来たり、鼻についてきたりすると、ふっつりと逢いにゆかない。
　居留地という囲いが、縁切りの都合のいい柵になる。
　女のほうではどうしても逢いたいから忍んでくる。それらの負い目が、卑しい下役人たちには、恰好の餌であった。
「——何番館の誰に逢いにゆくのだ」
　詳しく聞いて、書きとめさせる。異人の方では、鼻薬を利かしていて、これこれの女が来たら、通さないでくれと、頼んでいるから、追いかえす。
　女の方は必死で、ひそかに夜陰に駈けこもうとしたり、舟で入ろうとする。そんなのを見つけたら、これは煮ても焼いても食える立場になる。
　もともとたてまえとしては、一般の往来は自由であり、不逞浪人の殺傷沙汰が取締りの対象なのだが、品性下劣な連中が、こんな権限を与えられるとろくなことにならない。
　本筋もたてまえも、きれいに消されてしまって、〝お上〟の権力ばかり振りまわすようになる。
　その日——城之介の事件が起った二日後だったが、この元村口の関門では一人の女がやはりこっそりと渡ろうとして捕まっていた。
　もう役人たちには馴染になっている本牧の多兵衛娘おき

わ、という十八歳の女だった。

これまでも何度か追いかえされている。

おきわは、異人の子を妊んだ。それっきり、エドという異人は姿を見せないので、何度も逢いにゆこうとして、追い返されていたのだった。

「エドだって、出まかせを言うんじゃねえ、お江戸のエドという名前の異人なんていねえぜ」

「いいえ、エドワードとかいうアメリカ人なんです。逢わせて下さいまし、後生だから」

「エドよりキョートかナガサキに行った方がいい。いやさ、そんなことより、木戸脱けの罪は重いんだぜ、なあ、御同役」

「そうとも、御法度だ。打ち首遠島だ」

女はその冷酷な言葉を聞いて、わっと泣き伏した。

着物の上からでも、妊み工合が、それとわかる。三月ほどであろうか、痩せ型の美しい女だけに、下役人たちの好奇心を唆るのに充分だった。

「まあ、罪に陥すかどうかは、まずわれらが吟味した上だな、御同役」

「そうじゃ、こっちへ来い」

おきわは詰所の裏部屋に連れ込まれた。

その部屋のすぐ裏が柵の囲いで、裏山になっている。

「ここなら、どんなに泣いても、誰も来はせぬからな。たんと泣くがよい」

「さあ、事情を申し述べよ。左様さ、まず、そのエドとの馴れ初めからだ」

女に秘め事を饒舌らせた上で、たっぷりと目を愉しませ、それ以上のことにも及ぼうと、胸算用しているのだ。夕暮れを選んだのも、その目的のためだった。

暮六つ過ぎると大門を閉じて、耳門だけになる。通行人もぐっと減っていた。

エドの子を妊んだと告白するだけでも娘には大変な羞ずかしさだった。泣きじゃくりながら、やっと一部始終を語るのをにやにやして聞いていた役人は、

「ほんとうかね、妊んだというのは」

と、同輩に、目で合図した。

「はい……」

「三月だって？」

「——はい」

「そうは見えねえ、なあ角平」

「全くだ、田淵の申す通りだ、わしにも見えぬ」

「……」

「妊んだとは見えぬ」

「——でも」

おきわは、もじもじして、それ以上は言えないが、そっ

と腹部をおさえた。

「われらとしても」と、田淵が勿体つけて、鹿爪らしく言った、「妊んでいないものを妊んだなどとは言えぬ。居留地に、よしんばエドと申すメリケンが居たとしても、だ、な」

「左様……その方の申すことが、ほんとうなら、罪も軽くなる」

「えっ」

「お上にも御慈悲がある。妊んでいるかどうか、わしらの眼で見ないことには」

「帯を解くがよい」

田淵はかすれた声で、

「裸になれ」

おきわは真っ蒼になった。

役人たちはせいぜい難かしい顔付きをつくったが、好奇心がその眸をきょときょと落着きなくさせていた。

「裸になるのだ、おきわとやら」

「そんな……いやです」

「罪が軽くなるのだぞ」

打ち首、遠島とおどかされているだけに、娘は弱かった。眸にいっぱい涙をためて、あきらめたように膝を起した。

うしろを向いて、帯を解いてゆく。その耐え得ぬげな動作も、男たちを欲情させずにはいない。

羞恥が全身をなよなよとさせて、それだけでも、男にはたまらない。

帯がしゅっしゅっと音をたてて、解かれてゆき、伊達巻や腰紐の一つ一つが男の眼の前で哀しくこぼれ落ちてゆくと、若い女の匂いが、炭火に温められた部屋の中に、むっと立ちこめるのだった。

とうとう、最後の一枚を脱ぎ落すとおきわは、面を蔽って、しゃがんでしまった。

白い背中から、豊かな腰を、二人は生唾をのむ思いで眺めている。

二人とも、おのれの女房の腰を思いだし、頬の肉が弛んでくるのをどうしようもない。

「これ、そちらを向いていては、わからぬ。こちらを向け」

田淵があえぐように言った。

「さ、早く、こちらを」

「は、はい……」

娘は眼をあけられない。両手で蔽ったまま、いざるように、向きを変えた。

乳色の肌の腹部が、くっきりと盛り上って見えた。

腕の細さ、頸すじの細さから見れば、奇型的なその妊った腹の膨らみが、しかし、かれらには、たまらなく唆られるのだ。

「ふむ、妊んでいるのかな」
田淵は、まだそんなことを言い、膝でにじり寄った。
同輩だが、田淵のほうが古参だ。おれが先だぞ、と眼で知らした上でのことだった。
「どれどれ」
厚かましくも、掌をあてた。
「あ……」
おきわは身をよじった。村の娘と役人の身分差が、手で払いのけることをさせない。
尻込みして、身をよじるくらいだった。
尻込みしても、すぐに壁に背中があたってしまう。田淵の手は図々しく、膨らんだ腹を撫でまわして、
「いい肌だ」と、呻(うめ)いた。「こんないい肌を、毛唐にな、勿体ないの、うむ、まことに勿体ない」
段々声がうわずってきて、脇差を素早く抜きとって捨てると、裸体を掬(すく)いあげるように抱えた。
「あれ、何をなさいます」
「可愛がってやる。な、毛唐よりわれらの方がいいぞ、ずんといいぞ、な、な」
「離して！」
「木戸脱けの罪は重いぞ、打ち首遠島だぞ」
「ああ……」
「お目こぼししてやる、な、な、よいであろうが、どうせ妊んでいるのじゃ、わしらとしたところで、また妊むわけではない。な、よいな……」
田淵の手は膨らんだ腹からすべりおりて、茂みをまさぐった。
角平は、ごくりとまた生唾をのんだ。いつか、袴(はかま)の膝をしっかりと握りしめている。
「ああ……堪忍して」
おきわはもがいた。そのからだを、抱きあげるようにして、おのれの上にまたがらせようとしている田淵は、おのれの頭の所に誰か突っ立った感じに、
「角平、汝(わ)れは待っとれ」
と、怒鳴った。
「待っておる。角平は寝こんだようだ」
立ちはだかった男がそう言った。
聞いたことのない声だった。あっと仰天してはね起きようとした田淵の胸の上に、すっと白刃がおりてきた。垂直に白刃は田淵の心臓の上に止った。
「女、着物を着ろ」
と、その男は言った。
おきわは、はっと我にかえって、着物を夢中で摑んだ。
「うぬ……だ、誰だ」
「城之介、といえばわかるだろう」
「あっ、お尋ね者の……」

「先夜は、見過したのか、おれを」
「……」
「お緋紗と通ったとき、おれに気づかなかったな」
「……」
「あとで気がついて、報告したのか。さしたのは、きさまだな」
「ち、違う、角平じゃ。おりゃ気づかなんだ。角平が、窓から見て、おぬしだということを……」
「それで、同心どもを呼んで来たのだな」
「か、角平じゃ。おれは、お嬢さまのことしか、知らんゆえ」
「お緋紗のことか、あの娘は一体、誰の娘なのだ?」
田淵は口を噤(つぐ)んだ。城之介は容赦ない。刀に少し力をこめた。切先がずぶっと着物を貫いて、胸を傷つけた。
「痛っ！　救けてくれェ」
「申せ、誰の娘だ」
「さ、珊瑚(さんご)大尽……じゃ」
じわりと胸から血が噴き着物を染めた。

赤い手帖(てちょう)

一度きりの女でも、そのまま忘れてしまう肌もあれば、強烈に記憶が残る女もいる。
女のからだの条件のこともあるが、情の深浅の差と、その時間の持つ意味の差であろう。
お緋紗(ひさ)は、その意味では、城之介の記憶に鮮明だった。
(あの女が、珊瑚大尽の……娘だとは)
意外すぎた。
洋装をしてショーメット夫人の寝室に侵入したことから、すでに尋常ではなかったが、雨夜の、静かななかで裸身を悶(もだ)えさせて、城之介に挑んできたお緋紗の哀しさもわかるような気がした。
底の知れない大分限を父に持ち、その故に、乱倫に自己放棄をした一時期があったにちがいない。
あんな山ノ手の堂守のようなところであたら青春を孤独におくっているのも、そうした過去の衝撃が大きすぎた故であろう。
傷心の身を洗い潔(きよ)めるためだったのか。とすれば、それがかえって、城之介の事件に巻きこまれることになってし

まっている。
　城之介はそれから三日経った晩、れいの関帝廟裏の阿片窟にいた。
　ここなら、まず司直の手は入らない。危険なのは、ここの連中だったが、玄徳が口をきいて誤解をといた。最初に城之介に不意打ちをかけた男――楊文卓の弟は、誰かに頼まれて殺そうとしたことで、城之介は清国人に憎まれる理由はない。
　それに〝鳳琴と莉花〟のことも、城之介には幸いした。
　阿片窟の空気の悪さにも馴れた。
　玄徳は、この暗さと、強烈な異臭にとり囲まれると、まるで水を得た魚のようになって、活々としてくる。
　現世の快楽を追いもとめる清国人たちには、事実、快楽ゆえに快楽を追うという点で、あまりにも、日本人と違っていた。
「ねえ、ジョー、好き」
　ホームグラウンドという安心感と、その闇が玄徳を大胆にして、何度か城之介は執拗に誘われた。
　城之介にはその趣味はない。むしろ、玄徳の妖しい微笑が、莉花を思いださせた。
「珊瑚大尽のことを知りたいのだ」
　城之介は、玄徳に言った。
「難かしいネ」
　玄徳は、大人のように小首をかしげて、
「これと同じ」
　瓢箪をなでた。
「外、誰でも見る、知っている。中誰も知らない」
「……」
「誰も知りたい、誰も知らない」
　玄徳は、瓢箪の口から、中をのぞくようにして、笑った。
「ふむ、人の知っていることくらいしか、知ることはできないというのか」
　三輪重左衛門が、珊瑚大尽とは、特別な間柄らしいということは、玄徳がさぐってきている。
（お緋紗に逢って、話を聞かねば）
と、思っている矢先だった。あの馬車のトムが来た。
　お緋紗をあるところに乗せていった。それっきり出てこない、というのである。
「お緋紗を……どうしておれが」
　逢いたいと思っていた矢先だ。なぜ、胸のうちがわかったのか。
　トムはにやりと皓い歯を見せて、
「耳があるね」
と、耳朶をひっぱって見せた。
　お緋紗は馬車からおりるとき（すぐ戻るから）待っててくれ、と言い遺した。

いつまで待っても、戻ってこないので、執拗に問い合わすと、
「そんな女は、見たことがない」
と、突っぱねられたという。
「その屋敷は？」
　それがフランス公使館のそばの洲干弁天の境内だという。
（お緋紗がさらわれた！）
　城之介は、まるで、自分が疫病神のような気がした。行く場所、知る女――いや、抱いた女が、次から次と不幸に陥ってゆくようであった。
「今夜、乗せていってくれ」
「幾らくれるね」
　トムの顔は、笑うと半分くらい口になる。かれは、自分が笑われているようないらだたしさをおぼえた。
（お緋紗が……なぜだ？）

「――面白いものが来た、見にゆこうではないか」
　珊瑚大尽は、こう言って小蝶を誘った。
「面白いもの……何でしょうかしら」
「はははは、それを明かすと面白くないな。見るまでの楽しみじゃ」
　行こう、と気軽く立ち上ったが、こちらはそうはいかない。
　小蝶は雪乃と顔を見合わした。
　廓芸者の外出のことについては、遺説がある。
　――少し流行りっ妓になりますと、ろくに寝む暇も御座いません位、その節は芸妓でも容易に大門を出ることは出来ませんで、尤も芸妓の方は娼妓より少し寛やかで、十二本の玉を付けて手続をしますれば、お客さまのお伴位は出来ました。
　それも大引までには是非帰らないと大変でしたが、廓内では十二時限り鳴物御法度などと云う事もないでお客さえおれば三時でも四時迄でも、夫れに其節のお客さまは、何れも陽気な全盛遊びをなさったものですから、ヤレヤレ是で一休みと思う間もなく、それ誰さんの朝直し、何娼さんのお客が、と呼び起され、それも済んで十時半頃になりますと、商館帰りのお客さまが麻の大財布に銀貨などザクザク容れたままで、勢いよくお繰込みという有様で――夜昼絶間なしの上々景気……。
　というふうだった。
　芸を売る芸妓には、こんなところでは枕を稼がせない。かえってきびしいのだ。小蝶と雪乃は、ちゃんと帳場へ届けてから、珊瑚大尽のあとの駕籠へ乗った。
　ヨコハマ港崎町の遊廓を出てから、このお大尽のつらね駕籠は衣紋坂を下って、本町通りをねり歩くようにして洲干弁天の森へ入った。

「おや、何かしら」
すでに奇妙な笛の音や、ぽこぽこという打楽器の音がしていた。
〈西洋軽業の一行来る〉
と、長い旗に染め抜いてある。
ほかにも手妻使い申し候など、れいれいしく書いてある。
黒人白人混血の雑多な一団だった。評判を聞き伝えた町の者たちが押しかけている。
珊瑚大尽の取巻きたちは、わいわい言いながら境内に入って行った。
それは曲芸に曲馬などの珍奇な見世物で、従来の日本にはないものだった。
英国の赤隊と呼ばれる赤い軍服の兵隊や、異人館の者も多かった。
着飾って、ぞろぞろと歩いてゆく。
幇間がお追従を叩く。
「かような妙竹林の見世物は、女子供の見るものに候えば、えへへん」
「旦那、こんなところにお出でになるなんて珍しゅうげすな」
「面白くないか」
「いえ、面白い」
「面白いなら、ごたくを並べずと、見物してゆけ」
「へえ、こいつァ一本やられやした、なァ善八」
「全くで、黒八やっつけられてべそをかいておりますよ。べそかき黒八なんてェのはさしずめ、あの辺に並べとくほうがよいようで」
幇間同士でかけあいをやっているようなものだ。
黒人たちが多いから、黒八という名前を肴にしているのだ。
もっとも、黒八の顔はお義理にも白いとはいえない。
「珊瑚のお大尽、お待ち申しておりやした。さあ、こちらへ」
平たい顔の、蟹のような男が飛びだして来た。
小蝶や雪乃には、そのとき、はじめて珊瑚さまは、招かれたせいで来たのだ、とわかった。
「お前か」
「へへ、わっちじゃありません」
珊瑚さまの眼の光に、首を竦めて、
「あっちで、お待ちになっているんで」
「呼びつけるには、それだけの……」
珊瑚さまの語気まで変ったようであった。
小屋の中に、ちゃちな魔法の道具などが置いてある。
曲芸をやったかと思うと、こうした人目をくらますもので、御機嫌をとり結ぼうとしているのが、見えすいた子供だましだが、なかなか受けているのだ。
「いまちょっと手が離せねえので、へい、ここで、御覧に

なっていて下せえまし」
一番中央の席に坐らされた。
むろん、幇間も芸者も、供の者も、そのまわりをずらりと居並ぶ。尻をおろすのは、いつも手代に担がせている大座蒲団である。
珊瑚さまは、どっかりと腰をおろすと、相変らず頭巾のうちから、冷たい眼をむけて、
「わしを呼んだのは、一体、誰だ?」
「へえ……御存じじゃねえんですか、そいつァ、ちょっと」
「どうした。人を呼びつけておいて、顔を見せぬという法はあるまい。あまり長びいては、堪忍袋の緒も切れようぞ」
「へえ、すぐ参上しますで」
「すぐだ」
どやつか早く顔が見たい。
遊廓で遊んでいるかれのもとへ、手紙がとどいたのである。
便利屋が届けて来たのだ。
差し出し人の名はなかった。内容は簡単なもので、
「お娘御のことで、大事が起きた、至急に洲干弁天の境内まで御出まし願いたい」
とあった。
〝娘〟といえば、お緋紗しかいない。
複雑なことがあるのだが、父娘の仲のことで、他人がとやかくいうことはない。
ところが、その娘のことだというのだ。
何ものも恐れるもののない珊瑚の大尽だが、娘お緋紗のことだけは、弱かった。
むろん、そんな手紙に、すぐ顔色を変えてのせられる男ではない。
腹心の文七というのを走らせた。お緋紗の住んでいるところである。
ところが、何処に行っても、不在だった。
お緋紗の姿はなかった。それと聞いたとき、はじめて珊瑚さまは、頭巾のうちで顔色を変えた。
それから、暫くして、ふいに、
「洲干に、異人の見世物がかかっているそうだな」
と、言いだしたのである。
なぜ、呼びつけられるのか。おれほどの者を呼びつける――という怒りは、しかしお緋紗の姿が消えた、という事実から、抜きさしならぬものになっていた。
ただ、空威張りしても、しかたのないことだった。
(誰が、おれに対して刃をむけてきおったのか)
不遜だと思った。怒りは、相手の正体がわからぬところにあった。

（まさか……彼奴が）

三輪重左衛門が見たという城之介のことを思い浮べた。

その城之介もまた、時を同じくして洲干弁天に来ていたのである。

トムの馬車でフランス公使館前までやってきたのだが、その曲馬団ののぼりなどを一目見ると、

（やはり、やられたのだ）

直感した。

どういう内情かはわからぬ。だが、お緋紗が、ここにいることは間違いなかった。

城之介は身なりを変えていた。

着流しの点はこの居留地ではむしろ、ふさわしいものだった。当初、どうせ異人相手だからというので、運上所（税関）詰めの者は着流しでつとめた。神奈川奉行所では裃をつける、という、居留地の特殊性が黙認されていた。いくらなんでも着流しでは権威がないというので、このころには、運上所役人も、羽織くらいは着る、というふうに変ってきていた。

城之介は陣笠をかむり羽織袴でしかるべき大名の家臣という装束であった。

これなら誰何する方も躊躇する。

同じ見世物でも、江戸の向両国にあるようなゲテモノだったら、身分ある武士が徘徊できるものではないが、居留地での異人の曲芸曲馬となると、まともな顔でもさして不自然ではない。異国のものは何でも接取しようとする時代でもあった。

城之介はなにがしの木戸銭を払って入った。

この広い小屋のどこにお緋紗が拘禁されているか、この連中にどういう下心があるのか、かいもく見当がつかなかった。誘いが来てのことであったが、お緋紗は自分から入っていったという。

『用心しなさるがええ、ここの奴らは食いつめ者の吹き溜りだからね』

トムはかれが降りるときに囁いた。吹き溜りといえば、この居留地自体がそうだ。その中でも殊に目立つくらい、ろくな奴がいないというのだろう。

一方、珊瑚さまは、面白くもない手品を見ているうちに、胸を大きくあけたドレスの女が近よって来て手紙を渡された。

「――恋文か？」

と、笑いを見せるだけの余裕があったが、一瞥すると、顔色が変った。

この豪放な男が、声を失ったのである。

「……!!」

むろん、恋文であろうはずがなかった。

〃緋紗どのの身代金として金二千両、申し受け度そろ〃

誰が書いたのか、かなり達者な筆蹟だった。

「馬鹿な！　娘を何としたというのだ」

珊瑚さまは立ち上ろうとした。が、周囲の眼を考えて、また坐った。

そのとき、舞台では魔法がはじまっていた。ペルシャ製の装飾の多い壺の前でターバンを巻いた八字髭顎鬚の男が何やら口上しながら、あやしげな手つきで壺の上に呪文をふり撒くと、黒い幕に蔽われた壁に、奇怪な顔が、浮びあがった。

それは一目で仮面とわかるものであり、お面を壁に掛けているのを洋燈の明りで浮きあがらせるにすぎないのだったが、表面のうすい黒い紗のような幕が巧みに陰の部分をなしていた。

面があちこちにあらわれては消え、その速度と、変化の妙が、結構、観客を楽しませている。

そのうちに、突然、珊瑚さまが、あっと声を洩らして立ち上った。

人々もそのときに見た。

それまでの奇怪な仮面とは違って、美しい女の顔が一瞬、浮び上ったのだ。

城之介は、はっきりと見た。その顔は、お緋紗にまぎれもなかったのだ。

悲しみに耐え、憤りに頰をこわばらせたお緋紗――。

城之介には、それが何を意味するものかわからなかった。が、そのとき、立ち上った珊瑚大尽の姿を見ている。

父に娘の顔を見せたのは、はっきりと手中にあることを示したのだ。

だけではなかった。

また、あの女が近よってきた。その手に赤皮の手帖があるのが見えた。

その手帖を示すと、女は別に書状を渡した。

きわめて事務的な行動なのである。

城之介は、それだけのやりとりで、すべてがわかった。

（あの手帖なのだ！）

黒皮の手帖には、お緋紗の名はなかった。

あの赤皮の手帖に書きこまれていたにちがいない。ショーメット夫人の寝室から消えていたものだ。

それには、お緋紗の名と住所が、彼女の筆蹟と爪印で記録されているにちがいなかった。

たんに誘拐による身代金の請求ではなく、彼女の拘禁が公になると、困るのはそちらだという、狡猾なやり方だったのである。

これではいかに珊瑚大尽たりとも、手が出せない。

金も勢力も地位もあり、男としての栄耀栄華のすべてを握って悠々たるものに見えるヨコハマの珊瑚大尽にも、泣

き所があったのだ。
それがどういう経路で、この異人たちの曲芸曲馬団――パシフィック・スネークと書かれていた――の手に入ったのかわからないが、そこには、この居留地の特殊性が作用していたのであろう。
金髪の女が赤皮の手帖を持って立ち去ってゆく背後に、轟然と銃声が起った。
女はきゃっと叫んだ。銃弾は、女の金髪を灼いて奔った。故意にはずしたのである。
「その手帖、こちらに貰おう」
城之介は叫んだ。こうしたなかで傭われているだけに、女も尋常ではない。ふいに身を翻して、走り出そうとした。
二発目が、その足をとめた。
男たちが飛びだしてきた。毛むくじゃらの赤銅の首に、青い刺青をした男たちである。七ツの海を股にかけた証明のように、腕や胸に、女の顔やイカリや、鷲や、骸骨などを刺青した連中である。
命知らずを、顔に描いているようなかれらだけに、城之介の銃口に向って、飛びかかってきた。
その毛むくじゃらの胸に三発目がぶち込まれた。
四人目は腿を撃ち抜いた。五人目は、やはり短銃をむけたのだ。その右腕を撃ち抜いた。六人目はライフルをかまえた。その眉間をぶち抜いた。
あたかも、その六発の弾丸の費消を数えていたように、ふいに女は身を翻している。
弾丸をこめるひまに逃げこもうとしたのだ。
「やらぬ」
この声は、女には理解できなかったであろう。気合におされて、赤皮の手帖だけを、投げた。
『助けて』
刹那、短銃を捨てるや、手裡剣がとんでいる。赤皮の手帖は、ぶっすりと、板壁に釘打ちされていた。

母の不倫

硝煙が小屋の中にこめ、総立ちになった群集の影が、逃げ場を捜して右往左往していた。その中で、城之介の役げた手裡剣が赤皮の手帖を板壁に釘打ちにしたのである。
珊瑚大尽がその次に城之介を見たのは、走り寄って、赤皮の手帖を摑みとった姿だった。
硝煙のたゆたうなかで振りかえった。明らかに陣笠のかげの双眸が、かれを一瞥した。
半裸の黒人が怒号しながら、襲いかかったのを、身を低めて、抜討ちに斬った。
そのまま、小屋の外に走りだしたのである。
そのとき反対側の入口から、菜ッ葉隊の役人たちが雪崩れこんでくるのが見えた。
「あっちだ、城之介を早く……」
仁王立ちになって珊瑚大尽は怒鳴ったが、すぐにおのれの立場に気がついた。
役人たちには、常づね、鼻薬を効かしてある。が、それはあくまでも、裏のことだ。表立っては命令できる立場ではない。
「彼奴を追うのだ」
と、配下に言ったが、狼狽した男たちには、その意味がわかりかねたようであった。
「娘を助けろ、何を間誤間誤しておる！」
苛立って珊瑚大尽は叫んだ。腹心たちは、舞台裏へ走った。
役人の乱入によって、曲馬団の異人もうめいめい勝手に逃げだしていた。群集の混雑がこの場合幸いしたようである。
お緋紗は、うしろ手に縛られて、宙吊りにされていた。天鵞絨の幕に穴をあけ、顔だけ出させられたのだ。珊瑚大尽から二千両、身代金として強奪するため、赤皮の手帖でおどして、お緋紗の顔を見せる。その演出だった。
目のあたり、囚われた娘を見ても珊瑚大尽を動けなくした赤皮の手帖――。
それは、すでに城之介の手に入ってしまった。
お緋紗を助け出して、本町通りの玄海屋という店に戻った大尽は、無念やるかたないふうで、葡萄酒を呷った。
「すべては、おまえの浅慮のせいじゃ、城之介に弱味を握られてしもうたぞ」
「――いいえ、あの方は……」
「あの赤い手帖を世間に暴らされてみい、わしらはおしまいじゃ」

「あの方は、そのようなことはなさいませぬ」
お緋紗はぐったりとなっていたが、そのことだけは、力説せずにいられなかった。
「何度も、あたしを救けて下さったのです」
「城之介が？……」
頭巾のうちで、珊瑚大尽は憮然とした声を洩らした。
「信じ難い……」
「でも、ほんとうなの。お父さま、あの方は決して、そんな卑劣なことは」
「わしに近づかんがための術ではないか」
「いいえ」と、これにも強く、自信に満ちて、お緋紗はかぶりを振った。「あたくしが誰かも御存知なかったのです。あるところで、偶然……」
言いさして、なお、父が疑惑を霽らそうとしないのを見ると、むきになって語をついだ。
「言ってしまいます、あの家に、手帖を探しに行ったんです」
「……」
「そこで、あの方に逢いました。あたしが誰かも知らずに……」
「きさま！」頭巾のうちの眠っているかのような細い眼が、かっと瞠かれて、
「まじわったのか、彼奴と！」
「――悪い方ではありませぬ」
お緋紗はくりかえした。恐れ気もなく凝っと父を見返した。
「こやつ！　良いか悪いかは、わしが決める。きさま、あのような奴に肌を許したのか。この淫乱めが、左様なれば、取返しのつかぬことを仕出かしてしまったのじゃ。愚かな女どもと異人の男買いをするなど、たわけたことを……」
「あなたさまの胤でございます」
冷たい眼でお緋紗は見上げた。
「申すな！　わしの娘ではない！　お芳の子だ、お芳も淫乱じゃった、そちなど誰の子かわかるものか」
「いっそ、お父様の胤でないほうがよい」
「なに！」
「そのほうが、どれだけ気が楽なことか。いいえ、恐ろしくはない。憎い口をきくと思召すならば、お斬りなさいまし」
「ぬ！」
「母様と同じように……」
お緋紗の眼には、怒りと悲しみが混っていた。
「そのほうが、いっそ嬉しゅうございます。こんな世の中に生きておるよりも母様のもとへ行ったほうが、どんなに倖せかしれませぬ」
「――お芳は、わしを裏切った」

呻くようにこの父は言った。日ごろの傲岸な男の態度にも似気ない痛恨の表情だった。頭巾をしているのさえ苦しげに、かれは錦のそれをむしりとっている。
頭巾に隠されて誰も知らないであろう、額から、左のこめかみへかけて、すさまじい火傷の痕が、無気味なほどの、ひっつれを作っていた。
「あの女は、男と通じた」
「……」
「わしの眼を掠めて、男を作った。尻軽で始末の悪いやつだ、いやさ、この織部を甘く見おった。許せるか、高畠織部ほどの男を白痴にしおった……」
かれは、久しぶりに口にしたおのれの名に、ふと、別人を感じた。
この横浜に来て以来、ずっと名を隠して来た。鼈甲さま、とか珊瑚さま、とか呼ばせて、本名を隠して来たのも、この名の持ついまわしい記憶と、そこから尾を曳いた暗い翳を断つためであった。
このヨコハマで、かれの素姓を知る者は、極くかぎられた人数である。
かれは、おもわず、あたりを見まわした。これまで隠しおおせてきたのが、誰かに聞かれはしなかったか、という恐れを感じたのだ。
「――不倫の女房は成敗する、当然の事じゃ」
と、強く言い放った。
「その相手の男もな」
――そのときの情景を、お緋紗はまざまざと思い浮べることが出来る。
母はいつになく取乱していた。雨の日だった。庭の紫陽花があざやかな紫いろに映えていたから五月ころだったろう。
母はどこやらから帰ってくると、ひどく取乱していて、着物を着替えるのにも何度か、腰紐を結び直したりした。化粧をする手がふるえていて、紅をひくのもうまくいかず、苛々して、お緋紗にあたった。
母のそんな姿を見たのは、殆どはじめてだった。
母は、父が役所から戻ってくる時刻を気にしていたにちがいない。そして、やっと支度が出来ると、出かけようとして急に、お緋紗の方をむき、
「おまえ、顔色が悪いよ」と、言った。
「どこか悪いのだろうね、お医者さまに見て貰わないと」
ひとり決めにそう言い、お緋紗を急かして外へ出た。
お緋紗が間誤ついたのは、いうまでもない。どこも悪くない、と言ったが、母は聞き入れなかった。九歳の子には、それがどういうことか、わかりかねたが、阿蘭陀坂のお医者さまに連れていってあげる、といわれて、不審感も憂い

もきれいに消えた。母と外出するなど、ここのところ、ずっとなかったことなのである。
　そのころ、父母の仲が悪く、お緋紗は寝所でのいさかいを、度々目にし、子供心にも、気兼ねするようになっていた。子供らしい素直さを失いかけていた。
　長崎奉行の下役たる長崎代官としての任地での生活はかなり派手で、不自由なことは何一つなかった。多勢の召使いにかしずかれ、唐人や阿蘭陀人を見ることも多く、かれらは長崎代官の子だと知ると、舐めるように可愛がってくれる。
　その不足のない生活の中で、父母の仲の悪さだけが、お緋紗の子供心に暗い翳を落していた。
　母の用事が、どんなことかを子供は知るよりも、とにかく、母と一緒に出かける、というだけで嬉しかったのだ。
　雨は、出かけるころには小降りになっていて、母は傘を持ったが、着物を汚したくなかったのだろう、辻駕籠を呼ばせた。
　代官といえば、長崎では奉行に次ぐ権力があったが、官位は低い。乗物を使用できる身分ではない。
「二挺にしておくれ」
　母は念を押した。
　お緋紗には、それが一寸不満だった。美しい母と同じ駕籠に乗りたかった。母に抱かれて、駕籠の上から町々を眺めてゆきたかった。だが、
「もう大きいのだから」
と、言われると、お緋紗は納得した。
（九歳にもなって、母さまに抱かれているなんてみっともない）
　自分でもそう思う。だが、母の乳房が恋しくなることも多かった。そんな矛盾に満ちた歳ごろなのだ。
　役宅を出て雨の中を、駕籠が進むと、お緋紗は右を向いたり、左を見たり、ゆっくりと流れてゆく街のたたずまいに眼を奪われていた。紫陽花が咲いているというのに、つつじの赤い色がまだ末枯れかけて残っていたりした。商家の家の軒先から、雨に滑って、青い菖蒲が落ちてきて、驚かされたりした。節句には、屋根に揚げる風習がある。ほかにも軒から下がっていて、雨しずくが、伝っては滴っていたのが印象的だった。
　阿蘭陀坂をのぼりかけたとき、おりてくる騎馬とすれ違った。
　油びきの合羽を着た侍で、すれ違うとき、馬を叱咤して巧みに馭したのだが、お緋紗は、陣笠のかげに三輪という下役の顔を見た。三輪も通りすぎてから、気がついたように振り返ったのである。
　母のお芳は、何か思い詰めていて気がつかなかったようである。医者の家に着いても、落着きがなかった。

もともと何処も悪くないお緋紗を連れてきたのだ。蘭医はひどく恐縮して、
「御一報頂ければ飛んで参りましたのに」
「いいえ、ついでですから」
と、お芳は打ち消し、形通りの診察が済むと、お緋紗を連れて、駕籠を急がせた。
　長崎の港が一望に見渡せる高台のお寺だった。丹塗りの派手派手しい楼門のあるお寺は唐人の仏さまを祀ったものであろう。その唐人寺に、一人の男がいた。
　中年の丈の高い、男であった。その風采のよさは少女の眼にも強く灼きついている。
　お芳は、娘の手をふりほどくようにして、男に駈けより、とりすがった。男の幅広い胸の中に、お芳の細っそりとなで肩の小柄なからだが埋まりそうに見えた。
　その情景は、いかにも美しいものに見えた。
　丘の中腹で、港と出島が一望に見渡せたし、静かな雨が、その遠景を靄のように包み、初夏の松林の色と唐風の七堂伽藍の調和が、少女にも、絵の中の点景に溶けこんだような感動を与えたのかもしれなかった。
　その感動をひき裂いたのは、荒々しい足音を石段にひびかせ、咆哮して駈け上ってきた者――高畠織部だった。
　足音が聞えたとき、お芳は、蝶の花弁から舞い立つように、身を離した。
　それは、娘の眼にも、不自然で、作為的に見えた。
　父の織部には、したがって抱きあっている姿は見えなかったようである。石段をあがったところに、楼門があり、瓦を乗せた塀が視界を遮っていたのだ。
　織部はまっすぐに、二人の方へやってきた。
「売女！　子供の前で、なんたる不埒な真似を」
　叩きつけるように罵ると、お芳の腕をつかんだ。
「放して、何をなさるのです」
「こやつ、白々しいことを。わしの眼をぬすんで唐人寺であいびきか」
「いいえ、あの、偶然に……あの、お緋紗を医者のところに連れてまいりまして、そのついでにお寺詣りを、そしたら、こちらの……」
　しどろもどろの弁解だった。織部は大きく口をあけて、全身で笑った。おかしさではない。笑うという行為で、おのれにふんぎりをつけたのではないか。
　逃げようとするお芳の頬に、はげしい平手打ちを浴びせると、えりがみをつかんで曳きずるようにして、山門の外へ出た。
「母さまを」
　お緋紗はとりすがった。織部に蹴放され、転がったが、けんめいに、あとを追った。
　山門を出たとき、お緋紗は、日照り雨になった光の中で、

血の虹を見た。

織部は、お芳を突き放すと同時に抜き討った。

悲鳴が奔り、お芳のからだは、肩先から噴き上った血しぶきの、鮮やかな虹のかなたに、もんどりうって転がり落ちた。

お芳のからだが石段を一塊のむくろと化して転がり落ちてゆくのを、お緋紗は山門の柱にすがって、瞶めていたのである。残んの雨を銀の糸のように光らせた南国の陽光は、また石段を染めた母の血を残忍にも鮮烈に見せたのである。おそらく、この異常な光景は、一生お緋紗の脳裡に焼きついて離れないだろう。

お緋紗はその日から、父を許していない。

城之介の父弥右衛門が、斬死体となって発見されたのは、それから一と月ほど後だった。

弥右衛門は、もと佐賀の鍋島家に仕えていたが、長崎警備の勤役中、同僚の使いこみに連座して浪人の身となった。

若いうちは、人生やり直しがきくものだ。以来、長崎に腰を据え、回船問屋に奉公し、帳付からはじめて、数年で商売のこつをおぼえ独立した。かれの腕を見込んで、もとでを出してくれる唐人がいたのである。

柊屋という屋号は、苗字をそのままつけたのだ。勘定方の伜に生れたせいかどうか、算勘の道に明るく、その上度胸がいい。むろん武士一通りの剣槍の腕はあるし、商売は順調に伸びた。

長崎という港で回船問屋をしていると、誘惑があるのは当然だが、度胸のある者が万里の波濤を越えて、南蛮貿易に手を初めたくなるのも、また自然だった。

弥右衛門が、いつごろから呂宋や安南あたりに雄飛するようになったか、伜の城之介は知らない。もの心ついたころ、すでに弥右衛門は半年も家を明けることが多くなっていた。

江戸へ行っていたとか、東北のエゾ地まで足を伸ばしているとか、母から聞かされていたが、いずれも、司直の耳を憚ってのことであろう。

いうまでもなく、鎖国時代で、海外貿易は大罪である。キリスト教の侵入を恐れるための鎖国政策が、雄飛を妨げたことは周知の通りだが、そのくせ、徳川幕府の要人たちも、大奥も、そして諸大名も、海外の珍品には目がなかった。

麝香、白檀黒檀など香木、豹や虎の皮、鉄砲、遠眼鏡、絨緞、時圭、ギヤマンの食器等々、なんでも高価に売れた。往きには、刀剣や屏風、金銀細工、漆器、武具などを持ち込んでゆく。これらは向うで高く売れる。

こちらの物を高く売って、向うの物を安く買いこみ、高く密売する。長崎には出島があって、蘭船の定期便があっ

たし、唐船も繁く往来し、珍品を輸入する。したがって、それらと混ぜて売買すれば、容易だった。

この取引に一枚嚙んだのが、長崎奉行所の役人だったのである。

長崎奉行を一度つとめれば、一生贅沢な暮しが出来るといわれたし、おおかたは、長崎で蓄財して、それを御用部屋の老中や若年寄、大目付などにばら撒いて、出世の資とする。殆ど、それは常識化していた。

金を受けとらない清廉潔白な者も、珍奇な舶載品なら喜ぶ。どちらにしても、長崎奉行というのはメリットのあるポストだったのである。

当時、六十余州で、唯一の開港地なのだから当然だった。ところが、黒船騒ぎ以来、長崎は難かしい天領地となったから長崎奉行も人物が就任するようになり、水野筑後守忠徳が、嘉永六年からずっとつとめていた。途中で安政元年に勘定奉行にのぼったが、栄職ではあるが、多事多難という理由で、安政四年には再び長崎奉行となった。

如何に、長崎が要地で、その奉行たるもの、大変な存在だったかわかる。忠徳は文久元年には、外国奉行までのぼるのだが、この長崎奉行だけは、甘い汁は吸わなかったようだ。

柊屋弥右衛門と組んだのは、下役——代官や目付の連中である。

阿蘭陀代官の高島織部は、弥右衛門の運んできた積荷はそっくり、蘭船の分として、横に流し、莫大な利益をあげていた。

お芳が、夫の悪辣さを知るにつけ弥右衛門に惹かれてゆくようになったのは、女心の自然であろう。同じ密貿易のなかまでも波濤を超えていのちを賭けた行為と、ぬくぬくと丸山の女郎を抱いて、密売の算盤をはじいては、懐中をふくらましている男では、魅力度が違いすぎる。

子供だった城之介は、むろん、お芳と父のことなど、まるきり知らない。母は筑前の博多の生れで、城之介は博多で暮した年月の方が多い。

弥右衛門が斬られたのは、丸山遊廓の入口の思案橋であった。

大引すぎで、遊客の影も一段落するころ、弥右衛門は丸山で、軽く遊び飲んで出て来たところを襲われている。

弥右衛門はそれでも、斬られながら、相手の刀をとって、何人かに傷を負わせた。

だが、相当数の敵に囲まれては、逃れようもなかった。日ごろは懐ろ鉄砲の用意があったのだが、この日は、遊女買いにピストーロでもあるまい、と言って、無手で出かけたのだ。

店の者の話では、

「五島屋さまがお誘いとか」

同業者の誘いは断わり難い。うすうすは密貿易のことは感づいているはずだった。
　その五島屋勘左衛門は、その日、丸山に行っていない。五島屋の番頭と称する者が、三ヵ月楼で待っていた。青楼の者も、はじめて見る客だったのである。弥右衛門の敵娼は小糸といった。遊んでいる間は別段のことはない。いまに、主が参りますから、と極力その番頭が引き止めていたという。
　弥右衛門が斬死して、初七日も済まぬうちに、妻のお村が死んだ。祭りの晩で、数人の暴漢が闖入し、お村を凌辱した上に、自害に細工したのだ。お村は梁から下げた扱きでくびれていた。

黒い霧の中

「——辱しめば受けたけん、生きとられんじゃったとやろ、偉か女子たい」
「後家さんやけん、何んも死なんでもよかとたい。ばってんが、自害しんしゃったと。やっぱ、お武家の御寮人さんはちがうたいね」
　お村の自害を、人々はそう噂した。
　柊屋の弥右衛門が非業の死をとげてまだ五日しか経っていなかったのだ。
　弥右衛門の前身が佐賀藩の武士であることを多くの者が知っている。
　したがってお村のことも武家の出だと早合点していたのだろう。
　だが、お村は商人の町、筑前博多の網元の娘だった。だからというのではないが、一人息子の城之介を残して自害できるものだろうか。
　城之介はそれまで博多にいた。父の横死に急報を受けて、長崎へ帰って来た翌日のことだった。
　長崎に急遽帰ったものの、幼い城之介の身を、母は案じ

て、丸山の王秀峯のところへ預けた。清国人は信頼し合えば、どこまでも力になる。
　母が清国人に倅を匿って貰ったのも、周囲の関係者が、誰も信用できなくなったからではないか。
　母の死を知らしてくれたのは、近所の人である。
「——煙の見えましたとたい、柊屋さんが火事やなかか言うて、みんなで、駈けつけたら、貴方、御寮人さんが首ば吊っとりなさろうが、たまげたいうて、あげェにたまげたことはありまっしぇん」
　くびれていただけではない。
　畳や唐紙や柱が焼けていた。行燈が燃えきっていて、もう少し発見がおくれていたら、大火事になっていたにちがいない。
　水びたしの畳の上に横たえられた母の無惨な姿を、城之介は一生忘れないだろう。
　十四歳の少年の目に、それはあまりにも強烈な光景だった。
　むろん早く駈けつけた人々で、乱れた裾など、ととのえられてはいたが、何が起ったのか、断片的なひそひそ話でも、およその理解はできた。
　母の肌が数人の男に凌辱されたなどということは、少年にとって、これ以上はない恥ずかしく屈辱的なことであった。
　ひそひそ話が、同情めいてはいても、耳をふさぎたい思いだったことを忘れない。
「一体、誰が……」
　はっきりと下手人を指摘できる者はいなかった。
　が、近所で見かけた者がある。
　肥前屋勘兵衛と高畠織部が町角で駕籠に乗る姿を見た者がある。事件の晩から手代の弥太と富次郎というのが姿を消した。そのあとで阿蘭陀通詞や阿蘭陀人を手玉にとっていたお仙という女も、消えた。王秀峯が耳にした情報で、お仙の家を役人があらためたときは、きれいに家の中が片づけられて、影もなかった。
　肥前屋と高畠を駕籠へ迎えて遠州屋の寮へ運んだのは、番頭の幸助という男だったのも、証言する者がいた。遠州屋は肥前屋と同じく回船問屋で、柊屋弥右衛門の隆盛を嫉んでいるという噂が以前からあった。
　下手人探索も表むき、つづけられた。
　が、主人夫妻の横死とともに、柊屋は、御法度の密貿易露見ということで、その持船から家財一切奉行所に収公となった。
　裁判なぞ何もない。長崎奉行は一切の権限を持っている。没収となれば、その処分方法はどうなるか、もはや下々の関知できないことであった。
（長崎奉行が……奉行所の役人が、みんな共謀になって、

父上を……）
父の弥右衛門と、代官の高畠織部の妻お芳が、不倫の仲だったことは、知るべくもない。
少年の頭では、こまかいことはわからなかったが、長崎奉行所の役人たちは、みんなが、敵に思えた。
母の死と凌辱に、関係のありそうな顔ぶれが、しかし、父の下手人とは一致しなかったことが、疑惑を残したのだった。
父母の死後も、変らずに、城之介を守ってくれたのは、父に目をかけられていた若い蘭医で、巻旗卯之助という。
卯之助や王秀峯が聞きこんだところでは、父を斬ったのは、若い侍たちだという。
当時長崎は唯一の文明の上陸地であり、進取の気象に富む青年たちのメッカだった。
たとえば幕府の伝習生なども来ていたし、土佐や長州や佐賀などからも、若い留学生たちが来ている。
官費もいれば私費もいる。が、どちらにしても、あまり懐中は豊かではないので、行動が時々長崎の土地の者の顰蹙を買うことが多かった。
そうした連中の中で意志の薄弱な者は、強請じみたことをやったり、洋妾のヒモになったり、丸山での遊女と深間になって辻斬り強盗などに堕ちる者もいる。
裕福な柊屋弥右衛門など恰好のカモにちがいない。
五島屋をダシにつかった作為がなかったら、そうした手合いの単純強盗と片づけられたろう。
だが、あまりにも、その晩のことはお膳立てができすぎていた。同業の五島屋の名をつかって丸山の三ヵ月楼に呼んで酔わせた。帰途をその連中が待伏せして襲った。
計画的であった。
書生たちが、金で傭われたであろうことは推測できたことである。
「誰が傭ったか、だ。誰かが、裏で糸を引いた」
と、巻旗卯之助は言った。
その卯之助は漸く二十歳になったばかりで、奉行所内部の黒い霧にかねがね批判的であったが、こうした若者の正義感は、権力機構の中で、甘い汁を吸っている連中には、邪魔な存在であろう。
半年ほどのちに、異人斬りの嫌疑をかけられて獄死した。これも丸山遊廓でのことである。
かりにも蘭医だ。生真面目すぎるほどの卯之助である。酔い喰って、遊廓の近くで白刃をふりまわすなどということはしない。況や異人斬りなどするはずはない。
が、証拠があった。
異人が丸山の近くで斬られた。現場に衂られた刀が遺棄されていた。

卯之助の刀だった。寝ている間のことだった。安い格子女郎を買ったむくいか、敵娼は廻しをとって、部屋にいなかった、と言い張った。独り寝ていてはアリバイが成立しない。
卯之助は御入牢となって三日目の夜、苦悶の果てに血を吐いて死んだ。魚に中毒ったのじゃろ、と牢番はこともなげに言った。
その敵娼だったのは、千代菊。まだ十六という若い女で、廻しをとった客が長州の荒井茂助という留学生だということを、王が聞き込んできた。
「驚きんしゃるな」
と、王は達者な長崎弁で言った。
「その荒井がたい、千代菊ば落籍して国へ帰りよったと」
そのことと事件を結びつけるのは、あるいは、恣意的にすぎるかもしれない。が、無関係なことと聞き流すことのできない事実だった。
とはいえ、十四歳の少年には、それはただ忘れられない名前と行為として、記憶に残っただけである。
城之介は博多に奔った。
さすがにそこまでは、魔手は追ってこなかった。網元の保護のせいもあったが、一応の目的は達せられたからではないか。
数年後に、余炎がさめて長崎へもどってきた城之介は、執念を燃やして、父母の死の真相を突きとめようとした。
高畠織部の妻お芳と父の仲がどれほどのものだったかは、知る由もない。
が、かれらがひそかに逢っていたのが、唐人寺の境内の程度とすれば、深いものではなかったろう。長崎はひらけた街だったから、情事には寛大で部屋を貸す家も尠なくない。父の弥右衛門の顔は売れている。かれらに貸したことのある家を捜すのはそう難かしくないと思われたが、そうした痕跡はなかったのである。
唐人寺のことは男衆や、町の者で二三の目撃者がいた。それとて、偶然に逢った体にしか見えなかったという。
人妻のお芳には、いのちを賭けた想いでも、弥右衛門のほうにはためらいがあったらしい。
高畠織部という夫には、耐えきれなくなっていたお芳と、お村や城之介という妻子に何の不満もない弥右衛門とでは、立場が違いすぎた。
そこまで織部が考えたならば、唐人寺での狂暴な振舞もなかったろう。
お村を犯して殺す——この兇行は誰の目にも異常な憎悪と怨恨が感じられた。動機から推せば、織部が最も、容疑が濃い。
阿蘭陀代官たる織部には、権力があった。長崎奉行も、諸外国からの強硬な開港要求など難問題を抱えていたし、

柊屋の事件をこれ以上、拡大はしたくなかった。
官僚主義に囚われた権力者の眼から見れば瑣末なことだし、腹は痛まない。高島織部も狡猾に立ちまわった。柊屋の家財の処分のさい、長崎奉行にも多分に甘い汁を吸わせた。
〈密貿易発覚〉
で、充分だったのである。
諸外国との通商条約が調印される一方で、密貿易の烙印を捺されて処分になる。夫妻の横死も、罪人となれば、それ以上下手人の追及もなくなる道理であった。民衆の人権などない時代である。お上の法網をくぐった罪が、生存の権利に優先した。
城之介の身にまで類禍が及ばなかったことをむしろ感謝するべきだったかもしれない。
切利支丹の詮議となれば一家類中に及ぶ。政府の邪教禁止令は、明治初年まで——欧米との交流が盛んになり、文物の移入から、官民の往来がはげしくなった文明開化のころまで生きていたほどだ。
そうした矛盾の中で、父母の死の真相を突き止めるのは容易ではなかった。
城之介の胸にきざした復讐の念は長じるに及び、殆ど生涯の目標になった。
感じ易い年齢の十年間の孤独と苦しみが、かれを復讐の鬼にした。
憤死した巻旗卯之助にゆかりの者が、奉行所につとめたので、その線から、書類を調べて貰ったことがある。奉行がお役替りとなり、代官なども殆どが更迭して、もう柊屋の事件など、誰も興味を示さなくなっていたのが幸いした。
杉本直二郎と称った。卯之助とは血がつながっていないが、また従兄弟になるという。かれの調べでは、柊屋の家財一切処分した記録がない。表むき収公されたはずが、幕府の国庫に入っていないというのである。
持船から家屋敷、舶載の品物など、莫大な財産は、すべて奉行所役人たちにわけどりされた形跡があった。
「踏んだり蹴ったりとは、このことですたい」
と、杉本直二郎は、怒りを面にあらわして、
「いくら、西国の涯と言うても、こらァ甚すぎます。一体、大公儀では、長崎奉行所で何が行われているのか、監査もせぬのか」
「攘夷騒ぎを鎮めるだけで精一杯なのだろう」
城之介の肚裡はきまっていた。政治に期待することはない。復讐をするだけだった。
この十年——城之介の日々は、復讐のための鍛錬に費やされた。
ヨコハマの居留地に乗りこむためには、語学も必要だった。

徒手空拳といってよかった。背景の力は何もない。柊城之介をささえているのは、憎しみがすべてだった。
十年という歳月は、かれから笑いを奪った。愛も失った。信じるものは、おのれの剣しかないのである。
居留地に潜入して来たときの城之介の脳裡には、幾人かの名前がリストアップされていた。

高島織部
肥前屋勘兵衛
三輪重左衛門
遠州屋利兵衛
番頭　幸助
手代　弥太
富次郎
お仙
長州藩士　荒井茂助
千代菊

これがすべてではない。父を斬ったと思われる数人の留学生の名も素姓もわからない。長州藩士らしいということは、推測できたが、それは、あくまでも状況からの判断にすぎなかった。
すべてを知る必要はない。歳月は、人々から記憶を薄れさせる。罪悪感をすらも。
容疑のはっきりしているところから、手をつけてゆくしかなかった。
「居留地には玄徳がいるよ、玄徳を訪ねるといい」
王秀峯は親切に教えてくれた。
唐人は、一たび信頼すると朋友となって、信義が固い。王の言葉に裏があろうはずはなかった。
が、潜入して来て、唐人の街に玄徳を訪ねた城之介は、次々と、危難に見舞われたのである。
その間、弥太を斬った。息つぐひまもないように、城之介を襲う刃は、あとをたたず、八方から迫ってきた。
その中から、父母の仇を探し出すのは容易ではない。
「斬る！」
害意を持って向ってくる以上、斬るしかなかった。
弥太がすでにお仙を殺してしまって、一足ちがいで、口を封じられたのも無念だった。
阿片窟で楊という見も知らぬ男に肉切り庖丁で斬りかけられたのも、城之介の潜入を知った黒い手を物語った。
長崎奉行所にいた連中も、何人かが、神奈川奉行所に移っていたし、隠居届で、民間に下った者もいる。
幕末の騒がしい時勢である。この十年は、泰平無事な時代の百年にも匹敵するあわただしさなのだ。昨日のことも忘れてしまう。他人のことなど、誰も穿鑿したり記憶したりしているゆとりはなかった。
こうした中から、敵を見つけるのは難かしい。だが、

「城之介」の名前が居留地にひろがることによって、かれらの蠢動を促すことになった。
自ら墓穴を掘るかのように、牙をむいて、城之介に襲いかかって来たのである。城之介の剣は何人の血を吸ったろうか。が、まだ敵の一部にすぎない。
お緋紗とのめぐりあいは、運命の悪戯といえようか。母のお芳を父の手で斬殺されたことが、お緋紗を悲しみに突き落し、ふしだらな行為に走らせる遠因となったとすれば、ショーメット夫人の遺宅でのめぐりあいも、単なる偶然とはいえなくなる。
(——斬らないでも、よかったかもしれぬ)
高畠織部は役人をやめてから、悔んだこと度々だった。お芳が、弥右衛門とは肉体のまじわりまでいっていなかったらしいことが判明するにつけ、
(軽率だった)
と、反省もした。
お緋紗が常の少女のような明るさや、愛らしさ、素直さがなく、片意地な娘にひねくれてゆくのが、織部の自認をぐらつかせていったのだ。
かれが、かれを知る者には、自ら韜晦したごとくに見せ、"高畠織部"の名を抹殺し、"鼈甲さま"と、呼ばせるようになったのは、やはり、過去を包み隠すためだったのだ。
鼈甲さまが珊瑚さまになり、かれの企みは成功したといえる。巨大な資本が、救った。顔を隠すために頭巾を離さなかったことも、この居留地という特殊地帯では、それなりの特色になった。
生糸の相場で一夜大尽が出来る居留地には、過去はない。公使や領事などの肩書のある連中だって、過去はあやしげなやつが多い。この時代に海を渡って異国へ行くということ自体が、すでに異常なのである。七つの海を股にかけるような男が、まともであろうはずはなかった。
居留地そのものが、まともではない場所なのだ。面白いように儲かった。野に下った織部の財力と、役人たちとの黒いつながりは、利権を得るのに不足はなかった。
長崎時代に、手をひろげてある。儲けの布石はととのっていたのである。巨利は巨利を産んで、珊瑚大尽と称われるほどまでに、財産はふくれあがった。
不正で摑んだ財運が、幸福にかならずしも連結するとはいえないことを、高畠織部は知らされた。
お緋紗が、ショーメット夫人の乱交パーティに加わっていると知ったとき、織部は打ちのめされた。
ショーメット夫人を斬るように、刺客を遣ったのが、裏目に出た。

乱倫の人妻や娘の名を手帖に残されていたのだ。
黒い皮の手帖には人妻の名を。
赤い皮の手帖には娘の名を。
これが発表されたら、居留地で大きな顔も出来なくなる。男が遊ぶのは、男の甲斐性で花魁に入り浸るのも、むしろ畏敬されるほどだが、女には一切、そうした放縦は許されない時代であった。
花魁遊びは、一種の社交でもあるが、娘や人妻の乱交パーティには、一分の名目も立たない。
人妻ならその亭主が、娘なら父母が赤恥をかく。居留地での商売が駄目になる。
その赤皮の手帖が、なぜ紅毛曲馬団の手に入っていたのか、わからないが、城之介の手に渡ってしまった。
「——わしはもう駄目だ。おまえのためだぞ、お緋紗」
高畠織部は、怒りを娘に向けるよりしかたはなかった。
「お芳は、わしを裏切って、男を作った。きさまは、紅毛どもに身をまかして、青い眼の餓鬼を生むか、はははは、もはや珊瑚大尽も終りじゃ」
うつろな笑い声がひびいた。それに応えるように、どこかで、声がした。
「その通りだ、織部。きさまはこれで終りだ」
あっと、織部はふりかえった。その声は柊城之介の声にまぎれもなかった。

おえんの死

頭巾をかぶりなおしていたので、驚愕の表情はわからなかった。が、高畠織部の動揺が激しかったことは、この男にも似気なく、狼狽して立ち上ったことだった。
「誰だ、うぬは……」
刀を摑んで、あわただしく、あたりを見まわした。
影も見えぬ。が、声だけは、はっきりと聞えたのである。
「おぬしの一番逢いたくない相手だ」
「……」
「名乗って貰わねばわからぬか?」
城之介の声は嘲りを帯びて、
「十年前、きさまが殺した夫婦の伜だ。これで充分だろう」
「十年前!?」
むろん、織部には、城之介だということも、当初から察知できていたことだ。過去の罪悪を隠そうとする本能的なものがはたらいたに過ぎない。そのとぼけた言葉を、城之介の容赦ない声が打ち切った。
「娘の前に死醜をさらすか」

「う……」
「それが嫌なら、出るがいい、裏口からだ」
城之介がそれだけの譲歩をしたのは、やはり元村での交情が冷えた心にも一掬の温かい滴を潤わせていたのであろう。お緋紗の前で、その父を斬るに忍びないものがあった。
「な、何を言うのだ、わしは、人に怨まれる憶えはないぞ」
頭巾をふるわせて、織部は、見えぬ影に向って怒鳴った。
「長崎など、長崎など、知らん、言いがかりをつけるな」
「珊瑚大尽で通せる気か、高畠織部、もはや隠しおおせぬことぞ。柊屋の内儀を犯して殺したことを」
「知らぬ」
織部は抜刀した。
刹那、どこからか飛んできた手裡剣がその右手を貫いていた。
「あっ」
ぽろりととり落す。咄嗟に左手で摑んだ。とたんに、その手の甲に、二つ目の手裡剣が突き立った。
異人の用いる、刃肉の厚い短剣であった。
両手の自由を失った織部は、だらだらと血を流して、真っ蒼になった。
障子が開いた。そこに柊城之介の姿を見るや、お緋紗は織部にすがりついた。懐中に手を差し入れたと思うと、鈍く光る拳銃を抜きとった。織部がいつも懐中にしていることを知っていたのだ。
抜きとったのと、轟然と発射音が響いたのは、殆ど同時だった。
硝煙の中で、お緋紗の顔がゆがみ、よろよろと崩れた。自ら、胸を撃ち抜いたのである。
「お緋紗！」
城之介もこの突然の出来事には、呆然となった。
まさか、お緋紗が自害しようとは。あやまって、早く引金を引いたものとしか思えなかった。
「いいんです、城之介さま……」
苦しげに顔をあげて、むりにお緋紗は微笑んだ。
「あたしは、あたしのような女は、早く死んだほうが……」
「わざと撃ったのか、お緋紗！」
「もっと早く、死ぬつもりでした……生きて、恥をかくだけなら……でも……」
あのひとときが楽しかった、と、その眸が告白していた。
「宥して……」
父を、織部を宥してと言うつもりだったのであろう。が、声は言葉にならず、お緋紗はそのまま、こときれた。
城之介はしかし、その場で高畠織部を斬ることができなかった。気持の上でも逡巡するものがあったし、銃声を聞

いた店の者が、どっと駈け上ってきた。
ここは本町通りの玄海屋という海産物を商う店だった。珊瑚大尽が陰で操る店の一つだ。
店の主人をはじめ番頭手代などが、部屋に飛込んできたとき、城之介の姿は消えていた。
両手を朱に染めた珊瑚大尽が、お緋紗の死体を目の前にして、腑抜けのように突っ立っていただけである。

高畠織部の家は、このヨコハマに少なくとも五ヵ所あった。あるいは、もっと多いかもしれない。
関内は、中央の運上所（現在の神奈川県庁付近）から右が商店などの日本人街で、左が異人の居留区域とわかれている。
織部の財力と勢力は、この居留地にも幾つかのアジトを作っている。港崎町の遊廓にいないとき、かれの寝所を突きとめるのは容易ではなかった。
意識的に、夜毎、場所を変える。居留地は四ヵ所に関門があって、不審な者は咎められる。不逞浪人の出入りは難かしい。
それだけでも居留地の住人の安全は保証されているといえる。高畠織部が官を退いて、この居留地に来たのも、その安全性のためであったことは、否めない。さらに活気のある開港地である点、一挙両得であったが、織部には、保護を受ける意味の方が、強かったのではないか。
織部の一見、豪放に見えても、内心の卑小さは、頭巾を終日脱がないことでもわかるが、本名を秘めているだけでも、まだ安心できないのか、二日とつづけて、同じ場所では眠らない。遊廓のうちは、廓中廓の安全性がある。殊さらに大まがきを避けるということも、リラックスのためではないか。
頭巾のかげの、織部の真の表情を誰もじっくりと眺めたことはない。が、こうした行動から見ても、かれには、常に怯えがあったことは推測できる。
表むき、妻女を持たないのも、そのうしろ暗さと無関係ではない。
「一人の女を持つより、毎日変えた方がよいではないか」
と、笑いにまぎらせるのだが、その実は、通常の夫婦生活に伴う弱みを避けるためだった。
人間は、守らねばならぬものがあると弱くなる。妻子がそれであり、財産がそれであった。
あの事件以来、お緋紗の眸に、非難の色がにじみ、それは歳月とともに、暗く、父娘の心は離れていったが、むしろ、そのことをこの父は幸いとした。
お緋紗を放任することで、心の負担を軽くしたのである。
家があちこちにあり、それぞれ女がいれば、たしかに気楽に見えるが、しかし過去から逃れるためのそうした変則

な日常も、織部の年齢からすればむしろ、苦痛の方が多い。

人間の心は不思議なものだ。先の見えて来た年齢は、安らぎを得るために、自ら拘束をもとめようとする。

女を夜毎、変える楽しみにも、飽きがくる。変えてみても、所詮、同じことだった。安息はそうしたことでは得られない。

その心が、一人の女に拠りどころを見出すのである。駒形町のおえんが、織部の心をとらえた女だった。

長崎でのいまわしい記憶を、再び甦らそうとは思わない。お緋紗の母であるお芳が、城之介の父の弥右衛門に惚れなければ、悔いを残す事件は起らなかったのだ。

妻に裏切られた怒りと憎しみほど、心を苛むことはない。織部が、いかにおえんと心を通わそうとも、妻にしなかったのは、その記憶があまりにも苦かったからだ。

（妻にしさえしなければ）

浮気をされても苦悩は少ない。

また身内なるが故の弱点にはならないのである。

織部はそう思っていた。だが、人間の弱みは、所詮傾斜する心に左右されることを忘れていた。

自ずから、おえんへの愛が他の知るところとなったとき、妻の座にあるなしとは関わりなく、心の弱みに変りはなかったのだ。

そのことを織部は、娘お緋紗の野辺送りが済んだ夜に思い知らされたのである。

おえんは、その日、金比羅様にお詣りして戻ってきた。金比羅の社は、異人街に隣接している。

おえんは、西洋かぶれの多いヨコハマでは珍しく柳腰に細おもての清信が好んで描いた美人タイプで、横浜の異人を描きに来た何とかいう絵描きが目をつけて、モデルに頼んだほどだった。

常磐津の師匠をしているが、この土地で常磐津を習おうというような粋な男は少ない。港崎町の芸者くらいのもので、それも近ごろは当世節が流行って、嫖客の好みも安直なものが多い。ひどいやつは、チョボクレを芸者に歌わせたりする。

おえんの暮しは、織部の手当で賄われている。常磐津師匠の看板をひっこめないのは、おえんのプライドだった。もっとも囲われ女が恥というのではなく、それだけの腕があるし、好きな道を捨てたくないのだろう。

おえんがもどってきたとき、表の格子戸は開いていた。炊事や掃除をするお由という小女を一人雇っている。

「旦那はまだかえ」

日和下駄を脱ぎながら、そう言う声を、表を通りかかった豆腐屋が耳にしている。小女の返事は聞えなかったという。

そのとき、小女は押入れの中でもがいていた。

突然、闖入してきた男に、殴り倒され目隠し猿轡をはめられた上に、うしろ手に縛られ、ほうりこまれていたのである。

「——おや、真っ暗じゃないか、お由、どこだえ、しようのない子だねえ、ちょっと留守をすると、すぐこれなんだから」

おえんは手さぐりに行燈をひきよせた。

居留地にいて洋燈を使わないなんて時勢おくれもいいとこさ、と、おえんのぼやきを弟子は何度か聞かされている。

織部が許さないという。椅子や高脚卓子を置いたところでならランプもランタンも映えるが、青だたみに粋な櫺子格子、その上、つぶし島田に黒繻子襟の半纏が似合う女には行燈の明りでなくちゃ味が出ないと、うるさく注文をつけるのだ。

その行燈に、こればかりは便利だから離さない西洋付木（燐寸）で火を入れた。ぽっと明るくなったのが、目隠しされた手拭を透かしてわかったから、お由は、ううう、と呻いて、唐紙の隙に足の指をかけて開けようとした。

「あれ、誰だい、そんなとこに？」

おえんの驚きの声は、押入れの音に言ったのか、それとも、別の影か。

影は無言だった。

やにわに飛びかかってきた。

「あれ、何をするの」

悲鳴がとちゅうで呻きに変ったのは口を押えられたのか。肉体の揉みあう音が暫くつづいた。

お由がこしらえていた膳のものが、けたたましく毀れた。徳利が押入れのところまで転がってきた。

「あ、いけない、いやよ、そんな、堪忍して……」

おえんの声にかぶさって、男の声がした。意味はわからない。強く圧えつけるような声だった。やがて、おえんの抵抗は弱々しいものになり嗚咽に変った。

その動きが何を意味するか、十三歳の女には、おぼろげにも理解できた。

おえんの嗚咽は、はじめのうちは、それでも、悲しみと怒りがこもっていたが、しまいには、いつも珊瑚大尽に抱かれたときと、同じような声をだしていたという。

そのあとで、音が絶えた。いや、女の声が絶えた。呻きが一段とはげしくなったと思うと、それきり、ふっつり切れたように聞えなくなった。

男は出てゆくとき、押入れを開けている。お由は（殺される！）と、思った。事実、白刃が頸すじを冷やりと撫でた。

無言だったが、その意味はわかった。

（何も饒舌るな）

刀が、はっきりと命令していた。

珊瑚大尽の高畠織部が駒形町へ来たときは、もう、おえんは冷たくなっていた。

ただ死んでいたのではない。梁からさげた扱きでくびれていた。

「こ、これは?……」

織部は呆然となった。

そのとき、何を考えただろうか。十年前の、祭りの晩が、あのときの情景が眼前に重ね写しのように浮び上ったのではないか。

織部は、

「馬鹿な、そげんことが、あるもんじゃなか、馬鹿な……夢ばい、夢を見とるっとたい」

繃帯をした両手で、その幻影をかき消すように振りまわして、織部は、よろめいた。

夢ではない。

ぶら下っているのは、お村ではないのだ。おえんなのだ。

織部の動顚は、あまりにも、その場の情景が酷似していたことである。

織部についてきた若い衆がまだ家の前にいて、驚愕を聞いて飛びこんできた。

お由は、その男に手足の縄をほどいて貰ったのである。

「どんな奴がやったのじゃ、顔を見たろ、すぐにお奉行所に話を……」

それが、何も知らないのだ。ただ、大きな男というだけだった。十三歳の少女にそれ以上、聞いても無駄だった。ろくに顔も見ていない。

番屋からも、番人が飛んでくるし、役人も来た。が、調べの手がかりはなかった。

「——ふうん、そうすると、誰かがおえんさんを手籠めにして、逃げた。で、おえんさんは、お大尽に合わす顔がないと自害したというわけじゃ」

そんな悠長なことを言う役人の頭の悪さが、織部には我慢ならなかった。

「馬鹿め、お由を助けもせんで、自害なぞするものか」

「なるほど、そういえば」

「ええい、愚図愚図せぬと、関門を閉めるのじゃ、居留地にまだいるはずだ、早く探さぬかい」

「はあ、手配はしましたがな。でも、一体、どんな奴が、かような手のこんだことをしたか、てんで人相も年齢も」

「あいつじゃ、わかっておる。柊城之介じゃ、十年前の怨み霽らしに、同じ手でしかえしをしたのじゃ」

「同じ手ですと」

織部は取乱して喚き散らした。

「わしがやったことを……いや、そんなことよりも、早く彼奴を探し出せ、柊城之介だ。これまでも居留地で何人も

人を斬っている奴だ」

城之介は居留地でお尋ね者だ。役人は捜査に逡巡はしないが、小金を盗んでいってるし、これまでの城之介の行動から見ると、この場の光景はあまりに違いすぎたのである。

衣紋坂はいつも往来の人で賑わっているが、一歩横町へ入って、裏へ抜けると、そこは水田が広がっているというふうで、その近くに太田部屋がある。人足部屋で沖仲仕や埋立て地ならしの土方たちが、煮売屋の屋台にむらがっている。

「おう、蛸助、ばかに景気がいいじゃねえか」

「へへっ、牢屋の臭いを落さんことにゃ、たまりまっせんたい」

「もう三日目だぜ、珊瑚大尽のお供で遊廓で洗って来りゃいいやな。おめえは、お大尽とは、昔馴染だってェじゃねえか」

「な、なあに、何のこともなかですばってん、ちょこっとな。そげんことよりまァ一杯、やんなさらんな」

「いいのけえ、ふわっ、こいつには目がねえ。蛸助、馳走になるぜ」

葡萄酒の焼酎ワリに、人足頭は目を細めた。

蛸助など本名ではない。宅次というのだが、数年前から異人館の馬丁をしていた。異人は宅と呼べず、タコ、タコと呼ぶので役人や旦那たちも面白がって蛸助と呼び習わしてしまっていた。もっとも赧ら顔で丸っこいし、愛嬌のある眼をしている。

ラズロという異人のお供で、鉄砲撃ちに出かけたが、根岸のあたりで、ラズロは鶴を撃った。鶴は御禁制である。ラズロは清国人のコックに料理させようとしたが御禁制だと知っているから、手を出さない。

奉行所に洩れた。ラズロは一応呼びだされたが、事情聴取だけで帰されている。役人は異人に弱いのだ。その代りに、まるで身代りのように宅次が捕まった。

御禁制と知りながら、異人に撃たせた罪軽からず入牢申しつける、ということになったのだ。

「とんだとばっちりだったな。だが、打ち首遠島にならなかったのが見っけものよ」

葡萄酒の焼酎ワリをがぶ飲みしながら、人足頭は、

「異人館をクビになっても、おめえはいいやな、珊瑚の旦那がいなさる。昔馴染で番頭にでもして下さるだろう」

「そうもいかねえのサ」と、わきで白馬を飲んでいた男が口をはさんだ。「見たぜ、本町二丁目の店先で、番頭たちにほうり出されてよ、塩を撒かれていたっけな。一昨日のことだ」

「へえ、そいつァ、全くサラバベッチだ。ゴウディミョウで火つけでもしてやらにゃァ腹がおさまるめえ」

「いいんだ、そのことァ」
「ふうん、諦めがいいんだな。おれにまかせりゃ、十両にはしてやるぜ」
　人足頭はそう言ったが、ふと思いだした。
「そうだ、駒形の師匠が殺されて珊瑚の旦那は頭にきていなさるだろうぜ」
　宅次は聞えない顔で、湯呑みを口に持っていった。
「宅次」
　すぐには、自分の名前だと気がつかなかった。もう長い間、まともに呼ばれたことはない。
「宅次、顔を貸せ」
　背後に浪人者が立っていた。宅次はふり仰いで、
「ひ、柊屋の……」
「来て貰おう」
「へえ」
　素直にあとに従った。屋台には洋銀を二三枚投げて、頭についでやんな、と、おやじに言った。
　暗い夜である。水田が拡がり、そのむこうに星が光っていた。湿地につづいて小さな沼がある。水面が空をうつしている。
　港崎町の遊廓は今夜も不夜城の灯をちりばめ、冬空を明るく華やいだものにしているのだった。その湿池の近くまでくると、城之介は黙って宅次をふりかえった。
「十年前と同じことをやったのか」
「えっ!?」
「長崎奉行所の仲間だったころのきさまだ。今日のおえんのように、お村を殺した」
　城之介はぎらりと抜刀した。

黒い組織

　宅次は身を翻した。意外に身軽い。城之介の刀がその背に走る。遠眼には、斬ったと見えた。宅次は、伸びあがるようにのけぞり、それから海老のように身をまるめて、突んのめった。
「助けてくれ」
　もがきながら喚いているのは、甚い傷ではないようであった。
「助けるかどうかは、お前の気持次第だ」
　最初の一太刀を峰打ちで倒したのである。
「長崎での一件だ」
　と、尖先を擬したまま、城之介は言った。
「お村を殺したのは、誰だ」
「お、お村さんやて……知らんばい、そげな人は知らんたい」
　恐怖が、宅次の眼を瞠かせて、歯の根が合わなかった。
「誰な、そのお村さんちゅうとは」
「たばかるな」
　城之介の一喝にびくっと肩を竦めて、
「へえ、へえ……」
　ずるずると這って逃げてゆこうとする。
その手の前に、ぐさっと白刃を突き立てた。
「うへっ!」
「こいつがその心臓に刺さることになる」
「言います、言いますけん……」
「言い易いことから言え」
「へえ……」
「おえんを殺したな」
「へえ、へえ……あ、あの織部の奴が、昔のことば忘れて、門前払いば喰わせよったとですたい」
「……」
「あいつ、昔のことば忘れとっちゃけん、思い出させようと思うて……やってこましたったとたい」
　宅次は、もう観念したように、身を起した。どっかと胡坐をかいた。ふてくされた感じである。
「すぱっと、やっちゃんなさい」
「のぼせるな、殺るときは、苦しませてからだ」
「だ、旦那、そいつァ殺生ですばい、そげん薄情なことば言わんでちゃ……」
「おえんを殺したことは、おれに関わりはない」
「……」
「お村を殺したことだ」

「へえ、あ、あれは、奴に頼まれて、うんにゃ、あげんせな殺すて言われましたけん、仕様なかったとですたい」
城之介は白刃を、宅次の顎にあてた。
ひやりと氷のように冷たい白刃は、毛がふれただけでも切れそうであった。峰が顎の下に触れている。
「奴とは？」
「あれですたい、高畠織部ですたい」
「中間がそこまでしなければならないのか」
「へえ……」
「長崎奉行の水野に訴えれば、左様な悪事に加担することはなかった」
「ですばってん……そげんいかんとですたい、私の方に前科のありまっしょうが」
長崎では、ちょっと小才の利く奴は、密貿易に手を出す。出島の阿蘭陀人から買ったり、清国人と陰の取引したり、それも丸山の遊女を通じたり、いわゆる長崎妾の手から買入れたり、色々な抜け道がある。
たいていの珍奇な品物が、こうした陰のルートで入手して転売すれば確実に二倍にはなる。うまくやれば三倍にはなる。
やらない方が莫迦なくらいだ。もっとも、見つかれば死罪。軽くても遠島は免れない。長崎は天領である。追及はきびしい。
宅次は、芋蔓式にたぐり出されたが、下調べのさい、巧弁で罪が軽くなった。
高畠織部が見こんだのは、その抜け道の巧みさである。
「罪ばお目こぼししちゃる。その代り、手先になれち言われましたとたい。私にしても、仕様んなかですもんな」
その罪をばらすといわれれば従うしかなかったと、宅次は言った。
「へえ……やりたくなかったばってんが……」
「——織部がやらせたのだな」
「その手で、おふくろを」
城之介の怒りが刃先に伝わってくる。
冷たい刃の顫えに、宅次は胆が凍った。
「おふくろを、殺したのだな」
「あ、私な、その手ば、手ば押えとっただけですたい、首に扱きば掛けたとな富次郎ですたい」
「——手代の富次郎か」
「そげんですたい、嘘な言いまっしぇん」
「勘兵衛は何をした？」
「……」
「肥前屋勘兵衛だ、汝らと組んでやったはずだ」
「へえ、ごっそり儲けよりましたばい、あいつ」
「家財のことはよい。おふくろを……自害と見せかけるのに、手を助けたであろう」

宅次は、その言葉に誘われたようにあわてて、飛びついた。
「へえ、そげんです、そげんですたい」
「何をした？」
「首ば……うん、脚ば、引っ張りよりましたばい……御寮人さんの足ば、こげなふうに」
抱きすがって、ぐいと引っ張って見せた。
「やめろ！」
正視出来なかった。母の呻きが聞えるような気がした。
足をあげて蹴倒した。辛うじて斬撃の衝動を圧えた。
「——立て」
「助けてやんしゃい、ほんの、ちょこっと、手ば押えただけですたい、本当ですけん……」
「立つんだ」
「へ、へえ……命だけは」
「おふくろを辱しめて殺した奴のいうことか」
「私じゃなか、肥前屋が……」
「その肥前屋のところに案内して貰おうか」
城之介は白刃を袖で拭って納めた。
「ことわるまでもないが、おれは仇討ちに来た」
「……」
「仇を討つのに、手のこんだことはせぬ。自害らしく装わせるような真似はせぬ。逃げれば斬るぞ」
「へえ、こげんなったら、逃げはしまっしぇんたい」
宅次は峰打ちされた肩が痛むらしく、顔を顰めて、とぼとぼと歩きだした。

三輪重左衛門は役宅に閉じこもっていた。
おえんが自害したと居留地の番人の報告を受けたときからである。
（やられたのだ）
直感した。
むろん、かれの脳裡に描かれたのは、城之介の手によって殺されるおえんの姿であった。
おえんが高畠織部の囲い女であることは、知っていた。織部の何人かの女のなかで、もっとも寵妾であることも聞いている。そのおえんが自害するなどということはない。
扱きを首にかけてぶら下っていたと聞けば、あの十年前の長崎での一件がいやでも思いだされる。
（城之介が、そこまで手を出して来たのだ！）
城之介がヨコハマに来てからの行状は、そうした陰湿なことはなかった。
かなりの人数を殺傷しているが、三輪自身熟知している一件の関係者か、その他は司直の手を逃れるための、やむを得ない殺傷であった。
（やむを得まい……捕れば、獄門だ）

捕えてしまえば、どうにでもなる。囚人には人格はない。人間の権利もない。容疑者という意味が、封建の時代では、犯人に近いのだし、白でなければ黒なのだ。灰色ということはなかった。〃疑わしければ罪〃なのである。疑われるようなことをした、というだけで罪になる。罪におとされてもしかたがない時代であった。

お白洲で饒舌らせれば、三輪や高畠ほか一味の旧悪が暴れてしまう。

他の役人たちの耳に入る。陰では何を言っても浪人者の誹りなど、単なる申掛けにすぎないし、誣告の罪もある。が、お白洲で逐一饒舌られては、影響が大きい。

捕えても、すぐに何らかの方法で殺すことを考えていたくらいだ。

巧みに捜査網を潜って出没する城之介に三輪は戦兢していた。

(彼奴は、いつかは、おれを斬りにくる！　必ず来る！)

対策を講じて、ピストルを手に入れたり、役宅の忍び返しを補修したりした。それだけでは、安心できず、妻子を江戸の遠縁の家へ預けた。

女中と老爺に小者だけの、手足まといのない身軽さである。召使いがどうなろうと、こたえない冷酷さが三輪重左衛門を、今日の地位に就かせている。

神奈川奉行所支配組頭として、三百表高に加えて御役料二百表。高禄とはいえないが、ヨコハマ居留地に対して権力がある。副収入が御役料など問題ではない額になる。

長崎奉行所でもそうだったが、ここでも、収入は莫大であった。

幕府の御代官といえば、評判の悪い者が多いが、それは苛斂誅求のゆえであって、農民の血と汗の農産物を相手にしているからだ。

大坂などの商人の街や江戸町奉行の与力などが存外な付け届けで裕福な生活をしているといっても、この居留地とは比べものにならない。

江戸も大坂も、その市場の構成と役向きとの醜関係が三百年近くつづいていて、暗愚な庶民にも、およそのところは、わかってきている。

したがって、役得も難かしい。

そこにゆくとこの新開地であり開港場であるヨコハマは、すべてに新しい。一種の租界である。

ここを奉行しているだけでも、毎日が新奇なことに目を驚かされるのだ。

役得の性質も額も、想像以上のものがあった。

三輪重左衛門や高畠織部は、自分たちの頭の良さに満足しているのだった。

(城之介さえあらわれなければ……)

十年前、禍根を断つべきだった。

城之介が博多に預けられていることはわかっていたのである。ただ、網元だけに使用人も多く、うかつに手出しすれば、藪蛇になると思って、放置していたのだ。

十年経った――十年という歳月は、いつしか城之介という遺孤のことを忘れさせていたのである。

(十年……もっと早く手を打つべきだった)

三輪重左衛門は、そのことを後悔していた。

(喬木も若木のうちならへし折れる……猛き獣も幼いうちは、ひとひねりにできる。不味ったな……)

おえんの死は、三輪をたじろがせた。

そこまで来たか、という感じだったのである。

(これ以上、織部に関わり合っては……)

織部は、金こそあるが、もはや役人ではない。

三輪は上役人なのだ。幕府権力は、その権勢を保つためにも、役人の罪悪は隠蔽する。出来るかぎり隠蔽する。高級役人の罪はなかなか曝露されない。

なかまの連累を恐れるからである。

権力は、罪を隠す。世間の眼を瞞着する。

(なるべく疎遠にすることだ。深いまじわりをせぬことだ。高畠織部のことは、ただの分限者の危難として扱う……わしは役人だ、神奈川奉行所役人として、不逞の浪人城之介を抹殺する……それでいいのだ)

三輪重左衛門が、おえん〃自害〃の報を受け、織部の要請にも黙して、思案したのはそのことだった。

織部からは何度も使いが来た。

「病気だといえ」

重左衛門は突っぱねた。

「病気なら仕方があるまい」

「ですが、どんな病気か聞いてこいと、珊瑚さまが、きついお訊ねだそうで」

「くそっ、病気だから病気だ、頭が痛くて腹が痛い、熱が高い、眼まいがする。そう言ってやれ」

重左衛門は、蒲団を敷かせて、もぐりこんだ。

これなら、使いが何度来てもいい、と思った。

だが、まさか、枕元にまで来て難詰することはあるまい。織部自身が、城之介の刃に気をつけねばならないのだ。

おえんを殺したのは、警告である。

(次はお前だ)

その予告にほかならない。

多勢の用心棒に囲まれて、どこかの土蔵にでも入って顫えているだろう。

そう思うと、急に、酒が飲みたくなってきた。晩秋の夜である。夜具の中の温かみが、人肌恋しさで、情念をかき立ててきた。

「お加代、まいれ」

女中を呼んだ。重左衛門は、さっき夜具を敷いて出てい

った若い女体のうしろ姿を思いだして、眼を光らしている。
身を慎む、というのではない。が、いまの御役から離れさえしなければ、財産は増えてゆく。自然、保身ばかり考える。
それが羽目をはずさせなかった。妻を上役から貰ったせいもある。出世の道を踏みはずさないことが、常に、かれを巧妙に立ち廻らせた。
長崎で、あの日、お芳のあいびきにゆく姿を、高畠織部に告げたのも、下役人の根性である。
ただ、織部に胡麻をするための――その一言が、お芳を無惨な死に追いやり、ひいては、お村と弥右衛門の横死と柊屋の没落を見たのである。
三輪重左衛門は後悔していない。
その一言が、織部と深く結びつけ、柊屋の家財の処分にも、おこぼれに与ったし、そのうちの幾分かの賄賂が効を奏して、この（ぼろい儲けの）役にもつけた。
すでに相当な金がある。清廉な奉行などよりも、蓄財は多いのではないか。
（柊屋夫婦は……運が悪かっただけだ。この世は、運と力だ、勝つことだ、巧妙に立ち廻ることだ、頭だな……）
とりとめなく自認する時間が楽しい。
三輪重左衛門は、夜具の中から、凝っと唐紙を見ていた。そこにあらわれる女の、若く、はち切れるような姿態を描いていた。
相模女の肉体である。妻がいる間は考えもしなかった、女中の泥くさい健康さが、渇望されてならない。
――お加代は、来た。
「御用でございますか」
唐紙の向うで両手をついている。その気配が、重左衛門には快かった。
「入れ」
はい、と静かに開けて入ってくる。
「閉めよ」
これにも、はい、と答える。うしろを見せて、閉じる。
その腰へ、ねっとりと粘い視線をむけて重左衛門は、かわいた唇を舐めた。妻は痩せている。三人も子供を産んで、もう乳房のふくらみも哀れなほどになっている。
はじめは眼を瞠るほどの器量だったが年をとってくると、どうしても色香はおちる。整った容貌よりも、若い肌に魅惑されてくるのだ。渇えているとただの水まで甘露に感じるものだ。
「お加代、こちらへまいれ」
背中か腰でもさすれというのかと、軽く聞いて、女中はにじり寄った。
重左衛門は、その手を握るとだき寄せた。

嘗てなかったことである。遊女を抱いても、家庭では、こうした面は見せたことがない。
その男が、抱きついたのだ。お加代は悲鳴もあげ得なかった。
農家の娘で、夜這いの経験もなかった。野合も知らない。話には聞いていても、実際には男の手にまさぐられたこともない。
それが、身分ちがいの主人に、いきなり抱きすくめられて、裾から手を差しこまれたのだ。
悲鳴をあげるには、あまりに素早く、娘には、まず動顛が先に来た。
そのまま、夜具に倒され、下肢をおし開かれていた。
内腿の皮膚も、若くてみずみずしく、中年になった妻の肌とは、あまりにも違っている。ただ、若さのせいか、体臭があった。が、それすらも、この夜の重左衛門には好もしいものに思われ、荒い喘ぎでのしかかっている。
お加代は、何か言葉にならない声をあげながら、首を振っていた。その唇の中で、歯が音を立てている。重左衛門の唇が、逃げる唇を追う。とらえるのに難い唇は、また少女のすがすがしく朱いのだった。
男の手が内腿の奥に、ためらいなく突き進み、確実にそこに触れると、娘の抵抗はやんだ。
男と女の仲は所詮、男の導きによってそうした夜を迎えるのだと、庶民の風習は教えている。それに抗うだけの智慧も強さも、娘は持たなかった。
御役人さま、ということも、それ以上の抵抗をさせなかったのである。
そうした争いのうちに、女体が快い昂りで濡れていたのも事実だ。重左衛門は抵抗を熄めた娘の中に、勝ち誇って入っていった。
「旦那さま、お許しを、お許しを……」
うわごとのように、お加代は言っている。
それも重左衛門には快かったのである。
「暴れるな、暴れるな、な、珊瑚玉の簪を買うてやる、な」
「い、いりません」
「五分玉だぞ、高価いやつだぞ」
「あ、ああ……」
お加代はのけぞり、枕を倒した。それから、もだえていた両手が、重左衛門の太い頸を抱いた。
そのときである。また次の間に足音がした。
「旦那さま、使いの者が参りました」
「うるさい」
「志賀さまより使いの衆が、これを持ってまいりましたので」
「なに！」

嚙みつくように、重左衛門は怒鳴った。
その部屋で何が行われているか、さして広くもない役宅のことで、小者は気がついている。唐紙をあけるわけにいかず、しかし急用とのことで、握り潰すわけにもいかない。
そっと、細目にあけて、手紙を投げ入れた。
封書であった。重左衛門は、まだ女体に溺れたまま、霞んだ眼で見た。署名は志賀延次郎。見馴れた字である。奉行所の下役であった。

刺客

志賀延次郎の身分は低い。神奈川奉行所調役並。百表高で御役扶持が七人扶持である。
軽輩のお長屋は戸部くらやみ坂の坂下にある。文字通り九尺二間の、綺麗とはいえない役宅だ。どうせ独身だから帰っても、冷えた夜具しか待っていない。
したがって延次郎は役所で宿直を買って出ることが多かった。
居留地の運上所は税関であり、異人との応対の必要から、建物は立派だったから、隙間風が吹きこむようなことはない。造作も潮風に耐えるようにがっちり作ってあるので、お長屋に帰るよりも、いっそ快適だった。
それに炭などもふんだんに使えるのである。運上所の権威は大したもので、酒の差し入れなども、酒屋へ廻すほどある。
その夜、延次郎はその酒を一合ばかり飲んで寝た。寝たばかりのところを起されたのである。
「いい気持そうに寝ていたな」
と、枕元に立った男は言った。

「叩き起して申し訳ないが、頼みがある」
「だ、誰だ!?」
「いまにわかる」
眼はさまされたが、身を起せなかった。咽喉もとに氷柱のような刀の鋩子がおりていた。
それはそのまま音もなく、咽喉笛を貫くかと思われた。恐怖の眼が、漸く、その刀の主を見きわめた。
「ジョー?」
「そうだ、柊城之介だ、お前に危害は加えぬ」
「……」
「その筆を借りたいだけだ」
「筆を?」
「書き役としてな」
城之介だけではなかった。傍に一人の男がいた。馬丁の宅次だった。
延次郎にかぎらず宅次を役人で知らぬ者はない。異人の鶴撃ち事件で、いうならば身代り入牢した男として評判になった。
先日出所したばかりだし、記憶に新しい。
「宅次……こいつが何かやったのか」
「うむ。そのことはいい。十年前の秘密を白状する。書き留めて貰いたい」
「十年前の?」
「長崎での一件だ」
延次郎は、皮肉な笑いでこわばった顔を歪めた。
「古い話ですな。それも長崎とは……ここはヨコハマだ。居留地なんだぜ、そんな古い、よその話を持ちこまれても迷惑だ」
「古いか? おれにとっては昨日のことだ」
「……?」
「おれが居留地に来たのもそのためだ。父母を殺した奴がここに居る。それも地位と権力を持ってな」
「誰だ、それは」
「この男から聞いてくれ。陰で饒舌っても揉み消されてしまうだけだ。この役所で口供書きをとれば、奉行にも信じて貰えるはずだ」
「それァ、そうだ。事実ならばな」
延次郎も事情がのみこめて来て、平静になってきた。
かれは帯を締めなおすと机の前に坐って墨をすりはじめた。
「ジョー、おぬしはお尋ね者になっている」
「――らしいな」
「何人斬った? この居留地でだ」
「おぼえて居らぬ。おれはただ、父母の仇を討ちに来た。それだけだ。邪魔をする者は容赦せぬ」
城之介の双眸にはたじろぎがない。孤剣を抱いて血の遍

歴を辿る城之介を支えているのは、ひとすじの怨念であった。暗い情念といえる。
それは復仇をなし遂げるまでは、絶えることのない熾烈ないのちの叫びであった。
延次郎はその気魄に打たれたように口を噤み、筆を嚙んで宅次を振りかえった。
「――十年前の長崎での一件、聞こうか」
「へえ……」
宅次が口をひらきかけたのを、城之介は静かに圧えて、
「その前に、組頭を呼んで貰おう」
「組頭を」
「そうだ、三輪と、もう一人、誰でもいいが、杉浦武三郎というのがいたな。あれを呼ぶのだ」
「かような夜半に……」
「三輪はいやでもくるさ、おれのことと書き添えればな」
神奈川奉行は二人。早川能登守と小笠原筑後守。高身の旗本である。この下に支配組頭が三人いる。その下に調役が四人。さらにその下に調役並が十人いる。
当初神奈川奉行所が設けられるまでは外国奉行が差配していた。神奈川奉行所が設けられた当初は奉行四人に、調役並は十四人だったが、慶応二年には、前記のように減らされている。居留地の取扱いにも馴れてきたからであろう。
城之介は武鑑で役人の異動を調べてきている。杉浦武三郎は文久二年には調役であったが、今年支配組頭に昇進している。温厚でしっかりした人物だった。
この男なら、同役という私的な感情で三輪を庇うことはあるまいと見きわめつけたのだ。
――柊城之介のことで密告があった。至急に御出動を煩わしたい……。
走り書きして、いかにもそれらしく思わせた。
この時点で、延次郎は三輪が仇の一人とは知らない。
使いを走らしたあとで、宅次の口供書きをとることになったのだが、宅次は、イザとなると、そわそわして、小用にゆかせちゃんなさい、と言いだした。
城之介に捕まって、その白刃の凄さを味わったときは、とても逃げられないと観念したはずであった。
唯々として、城之介の言葉にしたがったのだ。だが、深夜の役所で城之介と延次郎の対話を聞いていると、しだいに恐怖がのぼってきたのであろう。
「――逃げる気か」
城之介は、刀をとりなおした。
「いえ、逃げやしまっせん、ばってんが小便の……洩れよるごたるですけん」
「大丈夫だ、柊さん」と、延次郎が言った、「私も小用を

催してきた、連れ小便して来ましょう」
部屋は鍵ノ手になっていて、外廊下から、厠へ通じる渡り廊下がある。
役所だから、殆ど庭樹はない。埋立て地だし、かわいた土が剝きだしになっている。そこに動くものは、小犬でもわかる。
「あ……」
ふっと闇の戸外を見て、宅次が足をとめた。
「誰か、居りますばい」
それは延次郎の気を外らせるための思いつきだったか、実際に影を見たのかわからない。
渡り廊下にかかったとき、突然、闇の中から、黒い影が飛びだしてきたのである。
何やら叫んだ。かん高い声であった。
宅次が身を翻そうとしたまま、どしんとぶつかられて、けもののような苦悶の声をあげた。柱に摑まりかけたが、そのまま、ずるずると、倒れた。
「ううむ……やられた、お、お役人さま、あいつば……」
腹を押えたまま、宅次はよろよろと身を起しかけたが、そのまま、また崩れ折れた。
宅次を刺した影は、まるで黒豹のように素早く、また闇の中に走り去った。
それはあとから考えてみれば、驚歎すべきほどの早さではなかったにも拘らず、突然のことではあり、延次郎にとってあまりに意外すぎて、手の出しようもなかったことなのである。
その影が闇に溶けてから、延次郎はわれにかえって騒ぎたてた。
「誰だ、誰か、くせ者が！　あいつを捕えてくれえ」
役所といっても運上所は、奉行所の出先機関にすぎないし、門番や小者だけがいるだけである。その連中が起きだしてきたころには、その影は、とっくに消え去っていた。
驚愕が先に立って、腑甲斐ないことだが、志賀延次郎は、はっきりと殺人者の姿も見ていない。
「黒っぽいものを着ていたし……ただ小柄だと思ったが」
と、いうくらいのものだった。
叫びも聞いてはいる。何と叫んだか、まるっきり記憶にない。
「女のような……いや、女ということはあるまいが」
「それはわからぬぞ」
「そういえば、女かもしれん」
何とも、あいまいなのである。動顚していたのだ。調役並という肩書で運上所に出向していて筆と帳面の毎日であった。十手や捕縄を持って華々しく駈けまわる連中とは違う。
そうした役目で毎日動いていれば、目はしも利くだろう

が、こちらは帳付みたいなものだ。いざ急場になっても手も足も動かなかった。
「――女といえば女のような気もする」
翌朝になっても延次郎はまだはっきりしなかった。いや、時間が経つほど、その記憶は不鮮明の度を増してゆくのだろう。
宅次が刺された直後、城之介も姿を消している。
延次郎の叫びで門番や小者が駆けつけてきた以上、永居できなかった。
宅次の心臓に耳をあててみただけである。
「生証人にしようと思ったが……失敗だったな」
城之介の自嘲が、延次郎の耳に残った。
「ジョー……どこへゆく」
延次郎はそのうしろ姿に呼びかけたが、城之介の返事はなかった。復讐の原因が公にならぬ以上、居留地での城之介はただの殺人鬼でしかないのである。
「志賀さま、いま向うへ行ったやつが」
門番が見咎めたが、延次郎は、聞えないふりをした。
「こいつを刺したやつは、裏へ逃げたぞ、捜せ。女のように小柄なやつだ」
もう宅次は、ことされていた。
(――小便か……縁側からさせればよかったな)
塀を乗り越しながら、城之介は失敗に唇を噛んだ。
(だが、誰が刺したのか)
宅次に饒舌られては困るやつら。まずそう考えたのは自然である。
志賀延次郎は無関係だ。三輪重左衛門が、察知して刺客を派遣してきたのか。
それにしては、時間が合致しない。
城之介の疑問はそこにあった。
運上所の東には水神の社がある。塀を乗り越えた城之介は、大銀杏の梢を伝って境内へ軽く飛び降りると居留地の中を歩きだした。
(三輪がくるか?)
問答することもない。父母の仇を一人ずつ斬ってゆけばいいのだ。
颯々たる冬の夜の風が、耳もとで唸り、城之介の兇々しい血を駈り立てる。
城之介は立ち止った。
(三輪重左衛門がくる……やがてくる。斬るのだ)
踵をかえした。野毛山下の役宅からくれば、必ず吉田橋を渡ってくる。
吉田橋から本町一丁目の、後に馬車道と称われるようになった南北への大通りを来て、本町通りへ出るか、てまえの大田町か弁天通りをやってくるのが普通だ。あるいは南仲通り――。

吉田橋の通りへ出たとき、馬蹄の音が聞えてきた。
三輪重左衛門か杉浦武三郎か。
騎馬は飛ばしてきた。その前面に、町角の天水桶が突然転倒して、凄まじい水をぶちまけ、幾つかの手桶をけたたましく散乱させた。
馬は驚いて棒立ちになる。馬上の侍は前輪にしがみついた。偶然か故意かわからぬまま、馬を鎮めるのに、苦心している前に、影はあらわれた。
「十年前の怨み、霽らしに来た」
もしも、その騎馬が杉浦武三郎だったら、手をひくだけである。杉浦も無謀に斬りかけては来まい。城之介には、それだけの計算があった。無益の殺生をすることはない。そのためにも、宅次に自白させることで、仇を権力の壁からひき剝がそうとこころみたのである。
「城之介か！」
馬上では怒りと憎しみの声が放たれた。
「三輪重左衛門、ゆくぞ」
城之介は一跳した。抜き討ちの一刀が膝を掠った。
馬が驚いて、また棒立ちになった。三輪には刀を抜こうか、用意の拳銃をとり出そうか、一瞬の迷いがあったのである。
その一瞬が、三輪に危機を招いた。拳銃を摑み出した。飛びはねる馬上なのだ。引金に指をかけたまでは、記憶があった。眼前に、刀が閃いた。馬上提灯が跳び、その淡い明りを白刃は反射している。
三輪重左衛門は、次の瞬間に、からだの半分が、すっと軽くなったような、重心を失ってよろめいた。がばっと馬上に突っ伏していた。
かれの拳銃を握ったままの右手が、宙へ飛んだ。
勢いあまった尖先が馬を傷つけたらしい。馬は狂ったように嘶いて走り出していた。
「ぬ！　待てえ」
城之介はあとを追った。
が、四五間走っただけであきらめた。所詮、狂奔する馬には追いつけない。
神奈川奉行所支配組頭の片腕を斬ったのだ。追及はますます厳しくなるだろう。
城之介は呆然と、騎馬の走り去った闇を見送っていたが、この騒ぎで、近所が起き出さないうちに、安全な場所へ身を隠さねばならない。踵をかえそうとしたとき、
「待ってんか」
と、声がした。
濁み声であった。咄嗟に、その声の主が、どこにいるかわからなかった。声は軒下の暗がりでしたのである。
「柊城之介はんやな」

「――だとしたら？」
「お願いしたいことがありますねん。ちょっと、来とくなはれ」
「おれに……」
「はあ、詳しゅ言うたら、あんたはんの懐中にな」
「なに！」
「懐中の……それ、手帖や、黒と赤の」
　この男、何者か。待ち伏せされたはずはない。偶然だろうか。
「――何者だ」
「御存知の……」
　くっくくく、と、鳩のように声は笑った。が、姿はまだ見せないのである。
　馬上提灯が地上で燃えている。その火明りからも、姿を隠している。深い軒下の、出窓の陰にいるらしかった。
　上方訛りの強い、その言葉には、聞きおぼえがあった。
　城之介は思いだした。港崎町遊廓の五十鈴楼で口をきいたことがある。
　あのときも、手帖を売ってくれとか、しつこく言ってきた。
「――そうか、思いだしたぞ」
「さよか」
「変なときに、変な化物が出る、河内屋とか申したな」
「図星や、おぼえていてくれはったか」
「忘れたい顔だ」
　蟇のような顔を思い描いた。貪欲を絵に描いたような顔であった。
「そっちゃで忘れはっても、こっちでは忘れまへんね、さあ、入っとくなはれ。愚図愚図しよったら、役人衆が来まんがな」
「お前に用はない」
　城之介は立ち去ろうとした。
「ひつこい御方や、こっちに、用がおまんのや」
「手帖は売り物ではない」
「売った方が、得だっせ。死んだら一文にもならしまへんで」
　河内屋惣七は、軒下から出て来た。右手に拳銃が鈍く光っているのが、燃え尽きかけた提灯の火明りに見えた。
　三輪重左衛門の片腕が投げだされている。その手は拳銃を握っていたはずであった。素早くもぎとったのであろう。
　偶然にしては、河内屋はついていた。河内屋の店の近くだったことを、城之介は失念していた。
「撃ちまっせ」
　声は相変らずへらへらしているが、商売のためには何処までも冷酷になれるのが、こうした男の特徴なのだ。
「――命中るか、な」

「撃ってみまひょか。ハマの商人は、ピストーロくらい、誰でも扱いまんのや。本牧に試し撃ちするところがおます。そこで、さいなァ二百発も撃ちましたやろか。弾丸くらい安いもんだすさかいな」
「――よかろう、撃ってみろ」
　城之介は、おのれの懐中の拳銃をとり出す隙をうかがいながら、
「さぞ、派手な音がするだろうぜ」
「おっと、懐ろ手をしたら、あきまへん、そこにも、これと同じものがありそうでんな」
　さすがに、目が利く。
「なあ、わいは商人や、取引しまひょ。あの手帖、売っとくなはれ、金なら二十両でん三十両でん出しまっさ。悪い取引やおまへんやろ」
「そうだな……それほど欲しければ、くれてやってもいい。だが、おれは威されて、従うのはいやだ」
「へえ、御気性はわかってまっさ。ほなら、こいつは蔵いまひょ」
　意外に、すんなりと納めて、
「来やはりまっか」
「案内せい」
　どうせこうなったら、どこかへ行かねばならないのだ。これまでの問答も、限度だったのである。三輪重左衛門が役所へ駆けこめば、町名主や火消したちが叩き起され、虱つぶしの捜索がはじまるのだ。
　すでに、城之介が河内屋の耳門から入るか入らないかに、騒ぎが聞えてきた。
「こっちだす」
　河内屋は用心深く、心張棒をしっかりとおろすと、行燈を下げて、先へ立った。
　広い店の土間を通り抜けて、中庭へ出た。
　どこへゆくのかと思っていると、磯臭い臭いのする土蔵の中へ入っていった。海産物などを扱っているのか、その積荷などの隙間を通って、梯子段を上った。
「ここなら、わからしまへんで」
　行燈の明りの中に、城之介は意外なものを見た。叫びこそ洩らさなかったが、思わず棒立ちになった。

夜の訪問者

土蔵の二階である。昆布や海苔や干物など雑多な荷物が置いてあるので磯臭い。そんなところに、女がいようとは考えられなかった。思いもしなかったことだった。女体が横たわっていた。

それも裸だった。

夜具を敷いただけの上に、若い軀が放心したように横たわり、ぼんやりと焦点の定まらぬ眼をむけた。

「――お由か」

城之介の問いに応えようともせず、少女は、疲れたように手を伸ばして、着物をとろうとした。

せめて胸と下半身を蔽いたいのであろう。まだ十三か十四の肌であった。

健やかで張りのある肌は硬く尖った乳房といい、下腹部の翳りのうすさといい、少女の嫩さを残していながら、蕾のほころび始めた噎せるような生気とでもいいたいものを放っていたのである。

「どうしたことだ」

城之介は眉をひそめ、河内屋惣七をふりかえった。

蟇のような顔を笑わせて惣七は、お由が蔽ったばかりの着物を無情に引き剝いだ。

「はははは、ええ眺めでっしゃろ」

「……」

「血を拭いてやったところやねん」

「血を？」

「へえ。馬丁の宅次の血を……馴れぬことをやると、へまをしますよってにな」

驚いたか、と言わんばかりの河内屋惣七の顔だった。

（この女が……）

城之介は、あの黒い影を思いだした。

小柄という話だったが、まさか、お由とは思わなかった。

暗闇に潜んでいて宅次を刺す機会を狙っていたのか。

おえんを殺した男が、宅次であることに気がついていながら、奉行所には口を閉ざしていたのであろう。

おえんの復讐をするほど、お由は恩を感じていたのか。

居留地に来て、それほど経っていない田舎の少女である。

開港地の汚濁に染まるには純朴すぎたようである。

「――そうか、宅次を刺したのは、お前だったのか」

城之介にしてみれば、せっかく捕えた生証人だった。

掌中のものをさっと鳶にさらわれたようなものだった。

口供書きをとって、仇を権力の壁から引き剝がす――その目論見が、これで駄目になった。

「しょおへんわな。そっちゃにも仇、こっちゃにも仇、仇討ちは、早よ手ェ出した方が勝ちやさかいな」

「――やむを得ぬ」

河内屋の論理には納得できないものがあったが、いまさら、文句を言ってもはじまらない。

お由は少女らしい一途さで、宅次を刺したのだ。城之介の立場を説明しても、もはや繰り言になるだけだった。

「さよか、ほんなら、お由のことは、かめへんな」

河内屋は、ふたたび懐ろから六連発の拳銃を取り出し、城之介に向けたのである。

「おれはかまわぬが、お前のほうで随分かまっているようだな」

「へへへへ、そない皮肉は言いっこなしにしまひょ。男が女を好きなんは当り前やねん」

「弱い女を威して、快楽を貪るか」

「こら痛ッ……へへへ、せやけど、この肌は、まだ味見してまへんねや、血ィ拭いてやって、これからやろう思うたところに、あの音や、それで飛び出してみたら……」

「幸い、ジョーを見たというわけか」

「さいでんね。私がツイとる証拠や、ちゃんとピストーロも、片腕が握っとってん。これでれいの手帖を貰えという、お告げやねん」

「買うのではなかったか」

「へえ、タダほど安いもンはおまへんよってな」

「タダほど高いものはない、とも言うぞ」

「さよか。ほなら、買いまひょ、一両だっか、一分だっか」

仮面を脱ぎ捨てた感じだった。

河内屋の厚くふてぶてした顔は、蟇の本性をあらわしたように、押しても引いても動かない強さをあらわにしていた。

「早よ、決めとくれやす」

と、城之介の逡巡を見てとって、惣七は図に乗った。

「せっかく、こない娘の肌が私を待ち焦がれてんのや、取引済ませて、しとうまんがな。いつまで待たせせんのは殺生やで」

「よかろう。では、売ろう」

肚裡をきめたように、城之介は言った。

「ほ。売ってくれはります？　なんぼやねん」

「百両で、どうだ」

「そら高い」

「高くはあるまい。きさまの儲けは千両以上にもなるはずだぞ」

「……」

「なぜ、きさまがあの手帖を欲しがるか調べてみた。きさまの女房か娘が、あやまちを犯したというのなら、わかる。それなら、タダでくれてやってもいい。だが、これに記さ

れている女の名は、きさまとは無縁だった……」
「十両出すよってに……」
「手帖の欲しい理由さ。きさまは、これを証拠に、強請をはたらくつもりだったのだろう。商売がたきや、邪魔になる役人を威してな」
「二十両なら、よろしいやろ」
どこまでも吝い惣七だったが、意中を見抜かれた以上、しかたがないと思ったのか、
「よっしゃ、清水の舞台から飛び降りた思いで、百両、出しまっさ」
「金を見てからの話にしよう」
用心ぶかい河内屋惣七であった。
一たん土蔵から出ていったが、大きな鍵をおろすことは忘れない。土蔵は扉が二重になっている。
「お由といったな、なぜ、こんなところに来たのだ。宅次を刺して、おえんの仇討ちをしたのはいい、どうして、ここへ逃げこんだのだ」
城之介は着物を着るように言い、事情を訊ねた。
「はい……ほかに行くところがありません」
「しかし、河内屋がああいう卑劣な奴とは知らなかったのか」
「おえん姐さんの家に奉公するようになったのも、こちらの旦那の口ききだったんです」
家は根岸の農家だという。口減らしの意味もあったのだろう。河内屋惣七が請人になっているというのだ。大人の世界がわからない少女には、ほかに逃げてゆく場所がなかったのだろう。
おえんが目をかけてくれた、というだけで、その怨み霽らしをするという激しい気性は、その表情や姿態からは考えられない。優しい朴訥な顔立ちだった。平凡な、どこにでもいそうな娘なのである。
「逃げた方がいい」
「……」
「河内屋がどんなやつか、おれとの話でわかったろう」
「ええ、でも……」
「あいつに下駄を預けたら、骨までしゃぶられるぞ」
少女の迷いを見ると、城之介は、ふと自分の立場をふりかえって苦笑した。
（おれのことだけでも精一杯なのだからな、他人のことにかまっているゆとりはないのだ）
おせっかいだった。かれ自身が、隠れ場所を捜さねばならないのだ。
土蔵の鍵をあける音がした。
「好きなようにするがいい」
城之介は階段の降り口に立った。

右手が懐中に入っている。
行燈をかかげてのぼりかけた河内屋は目を光らした。
「こないところで、撃ちはしまへんやろな」
「――どうかな」
「ピストーロの音たてたら、そっちゃの損でっせ。私はかめへん、土蔵に入った盗ッ人を撃ったことにする。死体を見たら、菜ッ葉隊の捜してはるお訊ね者」
「……」
「青緡一貫文の御褒美どころやない、ニュース・ペーパーに惣七の顔が出まんね。こら、えらいこっちゃ」
「生きている顔か死体か、まだわからぬぞ」
「威しても無駄や。こっちに後ろ暗いところはこれっぽっちもおまへんさかいな。お由かて、勝手に飛びこんできたんや」
「……」
「どうだす、どう見ても、私の勝ちだんね。商いにかけては、なんちゅうても河内屋惣七や。黒と赤の手帖、二冊で百両……ボロい取引や、そない思いまへんか」
城之介は無言でお由をふりかえった。
決心がついたのか、お由は帯をしめなおしている。
土蔵の二階である。一部吹き抜けのようになっていて、不安定な中二階の構造であった。物があげられるように階段も幅が広い。
「さあ、手帖をおくなはれ、百両耳を揃えてお渡ししまひょ。おっと、左手でそろっとピストーロを出して、こっちゃに寄越さなあきまへんで。念には念だんな」
城之介は拳銃をつかみだした。
銃身のほうをつかみ、無造作に投げおろした。
拳銃は階段の下のほうに落ち、河内屋は左手の行燈をそこへ置くとほっとして、拾おうとした。
その刹那、城之介の手は、脇差を抜きとるや、投げ打っていたのである。拳銃を拾いあげて、ふり仰いだ河内屋の右腕のつけねに、ぐさっと刺さった。
引金を引くだけの力も余していない。ぽろりととり落す。
これはいうまでもなく、三輪重左衛門の拳銃だった。
城之介の棄てた拳銃を左手でつかんではいたが、持ちかえるのに、数弾指の間があった。そこへ疾風のように城之介は駈けおりている。おりざまに抜き討ちの一刀が掬い上げるように、河内屋の胸から顔を、両断していた。
左手の指を引金にかけたまま、河内屋は血みどろになって、ぶっ倒れた。
城之介は拳銃をとりあげると、そのまま外へ出てゆこうとした。
「――待って」
お由が駈けおりてきた。
「あ、あの……」

階段の下では、河内屋の大きなからだが、もがいている。断末魔のもがきであった。夥しい血が流れていて、行燈の明りのなかで、気味悪く光っていた。
お由は、血の中に足を踏みこむことが出来ずに、迷っているのだ。
城之介は一人立ち去ろうとしたが、お由のその姿を見ると、やむなく手を貸していた。
「こんな血が恐くて、よく人を刺すことが出来た」
「あの……夢中で、あたし」
「余分なことをしてくれた。まあ、済んだことはしかたがない。早く逃げた方がよい」
片手抱きにしたお由のからだは意外に軽い。
土蔵から出ると、邸内の気配に耳を傾けたが、幸い、誰も気がついた様子はない。
表の方では、人が起きだして、ときならぬ事件に騒いでいる。役人たちも駈けつけてきたのだろう。
城之介は裏へ抜けた。お由もついてくる。
こちらの通りはまだ騒ぎが伝わっていない。
「何処へゆくのだ」
城之介は振りかえった。その冷たい視線に、お由は思わず足を止めている。
「あの……」
「おれと一緒だと、ろくなことはないぞ。居留地では、この身を容れる場所もない」
「でも」
「お前が宅次を殺した下手人とは、誰も知らぬ。素知らぬ顔でいた方がいい」
「――でも、行くところが」
「根岸の家へは帰れぬのか」
「明日にならないと……町名主の書付を頂いてからでないと、関門が通れません」
「そうか、今晩だけ隠れているがいい。駒形町に戻っていたらどうだ」
「でも、あの家は」
おえんが犯されて殺された。そこに十三歳の娘一人で夜を過すのは、さすがに耐え難いのであろう。
無言で城之介は歩きだしていた。
普通だったら、おえんの家も、町内で何かと面倒を見る。うるさいほど、立ち入ってくるはずだった。
それがこの夜、騒ぎは運上所に移っている。
宅次が何者とも知れぬ影に刺殺されただけでなく、奉行所支配組頭三輪重左衛門が襲われて右腕を斬られた。
この騒ぎのもとが、ジョーこと柊城之介であるのは、調役並の志賀延次郎の口から、みんなに知れわたっているは

ずだった。
宅次を生証人とした城之介の態度から見て、城之介の行動が、ただの殺人鬼や物盗りではないことは、延次郎には理解されたのではないか。
だが、かれは所詮、下役にすぎない。力説することは、三輪のような上役に対して難かしい。
城之介を認めることは、上役を否定することになるからだ。おそらく、保身しか考えてはいまい。自分がついていながら、宅次を刺殺されたことだけでも、かれの落度は免れないのである。
城之介は、しかし期待しなかった。
十年前から、虚しい夢は見ない。人生に期待することは、失望を招くことだと身にしみている。期待がなければ、失望はないのだ。志賀延次郎のような小心者に期待はかけられない。宅次の口供書きがとれなかった以上、別の手段を考えるだけのことである。
お由を怨むこともない。
それが運命なら、四面楚歌の中で、道を見つければいい。
駒形町は、運上所に近い。
いうなれば燈台下暗しだった。駈り出されてきた町内の者や、番人たちで広い居留地と町家の警戒に当る騒ぎを尻目に、城之介は、おえんの家で手足を伸ばしていた。
暗闇が恐いといって、行燈を有明にしていたが、それでもなお、眠れないといって、お由は、夜具をひっぱってきた。
「お傍に寝かして下さいな」
甘えるように言った。
「三畳では、とてもあたし……」
「よいとも、こっちへ寝るがいい」
少女はうれしそうに、掻巻の中に腰をすべらせた。気のせいか、あふれるような色気があった。あんな裸身を見たからだろうか。
城之介は、その想いを払いのけた。それよりも、高島織部の他の女は何処にいるのか。その役人との交遊なども知りたかった。
お由は眠れないとみえ、寝苦しそうに寝返りを打ったり、もぞもぞしている。
「――お由」
と、声をかけると、待っていたように振りむいた。眸が輝いている。
「聞きたいことがあるのだ」
「ええ、あたし」
意外だった。この少女が、どうして、そんな大胆なことが出来るのか。掻巻をはねのけて身を起すと、
「入れて下さいな」
止める間もなく、城之介の蒲団に入ってきたのだ。

夜気は冷えていた。冬の夜なのだ。少女の無邪気な振舞と見てよいのか。それとも、不安がさせた行動だろうか。そのどちらかにちがいない。城之介は色情を忘れようとした。

　せまい蒲団の中では、どうしても肌が触れあわずにいない。

「困ったやつだ」と、城之介は、故意に子供扱いして笑った。「おえんに、こうやって抱かれたのではないか」

　冗談だった。照れ臭さを誤魔化すための言葉だったが、お由は、ええ、と顔をあげ、はっきりした口調で言った。

「お大尽の来ないときは、いつも……」

　また城之介は、裸身を思い浮べている。

　そっと抱いた少女の肌の肉づきが、しっとりと快い感触で、いやでも、成熟した、おんなを感じさせずにはいなかったのだ。

「お姐さん、優しくしてくれました」

「……」

「だから、あたし……お大尽の来ない夜が愉しくて……」

お由は悲しみがこみあげてきたように肩を顫わせ、ぐいぐいと城之介に肌をすりつけてくる。

　若い肌の臭いが、男を平静でおかない。抱きしめた手が、自然に下へおりてゆくのを押えようがなかった。

　おえんとお由が、女同士で、どういう愛撫をしたか、城之介には想像もつかないことだったが、その女二人のからみあいは、想像するだけでも、かなり強烈に欲情を刺戟するものだった。

　意外な成熟の肌も、そのせいだったろうか。

　むろん、そうしたことを、忌わしいとか、蔑む気持は、城之介にはない。人生の愉楽を、他が蔑むことはない。そのおえんが殺されたことに復讐心を抱いたのも、わかるような気がする。そうした仲であることを抜きにしては、ただ奉公人の身分であれほど思いきったことをするなど考えられないことだった。

　若い肌を愛したい想いに抗いながらも、織部のことを聞こうとする気持から、やはり離れてゆくのを、どうしようもなかった。

「——おえんがいなくなって、淋しいだろうな」

「ええ、でも……」

　仇を討ったのだから、とでも言うのかと思うと、

「いいんです、もう、城之介さまがいらっしゃいます」

「何を言うのだ。おれは、お訊ね者だ」

　城之介の手はとまっていた。

「あたしだって、人殺しですわ」無邪気とも思える言葉だった。「城之介さまは冷たくて、恐いようだけど、本当はお優しいのね」

「よせ。明日のない男を好きになってもしかたのないことだ」

「いいんです。だから、だから、だから……」

　狂ったように、お由はからだをすりつけて来るだけではなく、自分から着ている物を脱ごうとした。

「ね、城之介さま、お由を、嫌いじゃないんでしょ。ね、好いて下さらなくてもいいの、嫌いでなかったら……」

「待て」

　城之介が制したのは、女の息吹きに圧倒されたからではない。この深夜に、表の格子をはげしく叩く者があったのである。

酔いどれ船

　お由がもっと成熟していたら、城之介はすでに交わっていたかもしれない。世間の風俗や習慣を無視して生きてきた城之介は、良識に囚われることはなかった。欲望が起れば、抱く。お由のほうでそれを望み、情感が盛り上れば、官能の疼くままに行動するにちがいなかった。

　城之介が行為を圧えていたのは、お由を少女と見ていたからである。その肉体の意外な成熟を知ったものの、急速に欲情に駈られるものではなかった。

　世間知らずの少女には、城之介の圧えた感情が好もしくうつるのだろうか。自分から着ているものを脱いで、身をすり寄せてきたのである。

　もしも、そのとき、表の戸を叩く者がなかったら、城之介はお由と歓びを倶にしていたろう。

「おえんさん、おえんさん」

　表の声は、あたり憚らず叫んでいる。

「——誰かしら……」

　お由は眉をひそめた。

「いまごろ来るなんて」

「おえんを呼んでいる。死んだのを知らない男だ」
ハマの人間なら噂は聞いているはずであった。新聞もすでに二種類発行されていたが毎日ではない。週刊と旬刊であり、新聞から得ようとすれば、ずっと遅れることになる。
だが、限られた地域だから噂の拡がるのは早い。
日本人なら、知らないものはあるまい。
「すると……」
二人は期せずして耳をそばだてた。
おえんさん！ と呼んでいる声も、そう思えばアクセントがおかしかったし、格子戸を叩くのも、かなり乱暴だった。
「異人か？……」
異人がどうして、おえんを訪ねてくることがあるのか。異人街に隣接した駒形町ではあっても、こんな夜遅くにくるとは考えられなかった。
城之介のその不審にも拘らず、お由は身を起していた。
「知っている者か」
「いいえ、わかりません。でも、出ないと、近所の人が」
騒ぎを聞きつけてくる。そうでなくても興味を持っている時なのだ。開港地の人情は乾いていた。同情や憐愍よりも、好奇心をまずはたらかせるのである。大尽の囲い女というだけでも同情は少ない。むしろ妬みからくる憎しみの方が強い。
普通なら、こうして潜んではいられない。城之介が片腕を斬り落したりお由が殺人したことで、運上所（税関）は大騒ぎになっている。役人の眼も世間の眼も、そちらへ向いているおかげだった。
だが、運上所はここから遠くはない。騒ぎが大きくなれば、役人たちも駈けつけてくる。お由はそれを慮ったのであろう。
「いま、行きます」
着物をひっかけて、帯をしめるのもそこそこに出ていった。
城之介も起きでている。万一を考えたのだ。四面楚歌の居留地なのだ。甘い考えに浸るには危険が多すぎた。
「おえんさん、おえんさん」
まだ、表では連呼していた。
「はい……どなたさま？」
お由が格子戸の心張棒をはずす音がした。
夜の訪問者は、何やらべらべらと喚きだした。異人だったのである。英語だとわかった。お由は驚いて、駈け戻った。その異人は酔っていたらしい。お由のあとを追って駈け上ってきた。靴を穿いたままだし、山高帽をかぶったままだった。
「おえんさん、どこ、おえんさん」
フロックコートを着て、ネクタイをしめた紳士風であっ

た。鼻下の赤い髭が濡れているのは、酒を喇叭のみしていたのであろう。
「お由、知っている男か」
「はい、あの、二三度……姐さんのところに」
「面倒になったな」
城之介は男の腕をつかんだ。
『おえんは居ない。帰って貰おう』
ふいに流暢な英語でたしなめられて、男は眼を丸くした。
『私はキャメロン、ジョン・キャメロンだ。英船アーミスチス二世号の船医をしている。ミス・おえんを訪問したのに、この家で男性に逢うことは思いがけない。お前は誰だ』
べらべらとキャメロンはまくしたてた。酔っているから、とめどがない。背丈はそれほど城之介と変らないが、馬鹿力がある。手に皮鞄を持っていたが、かれの言葉を信じるとすれば、それは医療器具が入っているのであろう。
『夜中の訪問は失礼だろう』と、城之介はやりかえした、
『おえんは居ないし、帰るしかあるまい』
『黙れ、夜中に来たのは初めてじゃない。おえんは愛情深い女だ。いつでも喜んで迎えてくれたわい』
いつでも――おえんは高畠織部の来ない夜は、こうした異人と遊んでいたのか。城之介はあらためておえんの一面を知らされた思いだった。
キャメロンは口髭をふるわせ、真っ赤な顔で喚きたてた。
『おえんを出せ、きさまが隠したのだろう。やい、きさまは、おえんの何だ』
酔っているから始末に悪い。乱酔の癖もあるのだろう。キャメロンは殴りかかってきた。皮鞄を叩きつけてくる。
「面倒だな」
斬るほどの相手ではない。城之助は一撃を水月にくれてやると、へなへなと崩れ折れた。
「おけがは、城之介さま」
「なに、たかが酔いどれだ。表の戸は閉めたか。こいつの始末をせねばならぬ。表へほうり出してもいいが、正気づくとまたやってくるだろう」
「では、番屋へ突き出して……ああ、それでは城之介さまのことが知れてしまいます。まあ、どうしたらいいかしら」
「縛りあげるか」と、城之介は笑って、
「一番いいのは、海岸へ連れていって、潮水で冷やしてやるといいのだが……」
冗談のつもりだったが、城之介の脳裡に閃いたものがあった。
片腕を斬られた三輪重左衛門は、瀕死の苦しみのなかで、
「ジョーが、ジョーが……」
と、呻いていた。

出血を止めることが先だった。漢方の外科では難かしい。斬り落された手を拾って来い、と命令されて小者がすっ飛んでいったが、むく犬が咥えていくのを見たという者があって、しょげかえって、戻ってきた。運上所は混乱していたのである。神奈川奉行所支配組頭という身分で、こうした不祥事ははじめてだった。

これまで異人が過激な攘夷浪人に斬られても、こうした大騒ぎはしたことがなかったから、異人に皮肉られてもしかたがなかった。

『あいにくですな。先生は江戸へお出でになって留守ですよ』

居留地三十九番館のゼェームス・カーチス・ヘボンの医療所へ駆けつけた役所の者は、そう断わられて、顔色を変えた。

「冗談じゃァない。ストーン先生でなきゃあ、助かるものも助からねえ。見殺しにするんですかい」

役人たちは激昂した。一々言葉を通弁しなければならないのが、こうした場合には、まだるこしい。

『しかたがない。是非にと仰有るなら、江戸へお迎えにゆくしかありますまい』

馬車で迎えにいっても、明日の昼すぎになる。道が悪いし、神奈川のあたりで先日の豪雨に道路が崩れたという話だった。それでも他に方法がなければ、そうするしかなかったのである。

「とにかく、迎えにゆけ。そのあとで手当のことは考えるのだ」

同役の杉浦武三郎はその手配をしてから、

「ストーン先生ほどの人ではないにしても、外科のうまい医者はいないのか」

誰も心当りがない、と言った。

ヘボンの片腕として、ベンジャミン・ストーンの名前も知られていた。

神学博士で医学博士のヘボンは安政六年、クララ夫人を伴って来日したが、その崇高な使命感に打たれて、ストーンは一商船医だったのだが、居留地にとどまり、よき片腕として、日本人の治療に当っていたのである。

この少し前、ヘボンは日本語を習得して、日本人の助手岸田吟香とともに、和英辞典を完成したが、活字がないために印刷のため上海へ渡っていた。この秋九月に離日していたのである。

三輪重左衛門は運が悪かった。

ヘボンや岸田がいない上に、ストーン先生までがいない。江戸へ、老中某の眼の治療に招かれたというのだ。

とにかく血止めだということで、焼ゴテで血管を収縮させたし、煎じ薬などを飲ませたが、誰も自信を以って当れるものはなかった。

「とにかく、探せ。公使館に頼んで見ろ、入港した船などにも、船医がいるはずだ」

そして手わけして問い合せたあげく、アーミスチス二世号に船医がいることがわかった。

「キャメロンといって、腕は確かだそうですが、船にはいないということで」

「馬鹿者が、ハマ中を捜すのだ。港崎町もだぞ、一刻の猶予もないのだ」

「へえ、ですが、その公使館や大きな商会では、話をするのも、小面倒で」

通弁が少ない。しかたがなかった。片言なら話せる杉浦も、この際、貴重な存在だった。

杉浦がフランス公使館に出かけた直後、そのキャメロン医師がやってきたのである。

山高帽にフロックコートで皮鞄を手にしたかれは、残った老人や手伝いの女たちに、そう名乗って、

「重傷だから、船で治さねばならない。手術の器械や薬が、船にある」

と、言った。早口の英語に、たどたどしい日本語で、それでもどうにか、老人にもわかった。

「直ぐに運ぶがいい」

と、かれは言った。

運上所に残っている者は少なかった。誰も、この山高帽の異人が、キャメロンでないことを知る者はなかった。城之介の混血を思わせる風貌とフロックの似合う体型が、疑いを抱かせなかったのである。

運上所は、二つの波止場に近い。ただちに舟へ運んで、漕ぎだしたのだが、付き添って来ようとする小者を、

「大丈夫」

と、追い払った。

船頭一人である。だが、城之介はあくまでも異人を装って、

『アーミスチス二世号、あれだ』

ひときわ大きい英船を示した。

だけではなく、その商船の下へつけると、

『役人だ。神奈川奉行所の者が来たのだ、上げてくれ』

と、呼びかけている。

先に甲板へ上ると、役人が重傷を負っていることを述べ、キャメロン医師に治療を頼みに来たと言った。港に碇泊中は、乗組員は殆ど上陸していて、数人が留守番しているだけだった。

『キャメロン先生はいねえ。あの酔いどれが、船にいるわけがねえ』

そういう居残り組も、酔い痴れて、どろんとした眼をしていた。

『そいつは困った。とにかく、患者を上げてくれ、運上所

の役人だから』
役人というのがきいた。どこの国の港でも、税関につむじを曲げられては、出港にも差しつかえる。
船員たちは、わいわい言いながら、三輪重左衛門を、船へ上げると、医務室へ運びこんだ。
『ところで、お前さんはハマに長いのかね』
『混血だ。父が阿蘭陀人だ』
城之介はいい加減に応えた。どうせ一時のことなのだ。船員たちの酔眼には充分、納得できる返事だったのである。
『キャメロン先生を捜してきてくれ。多分、港崎町の遊廓だろうから』
重傷を負った役人の治療のためにキャメロンを捜しにゆく、といえば大義名分が通るわけだ。
キャメロンは探しても見つかるはずはない。おえんの家に縛り上げて柱へ括りつけてあるのだ。
『役所にスギウラという役人がいる。病人が逢いたがっている。すぐくるように伝えてくれ』
スギウラ、スギウラ、と復唱しながら、船員は降りていった。

杉浦武三郎は思わぬ事件に巻きこまれたことに驚いていた。
運上所から志賀延次郎の名で使いが来たのがはじめてある。むろん、柊城之介が捜索中の者であることは知っている。その男と三輪重左衛門とはどういう関係にあるのか。
三輪が襲われたのも、ただ、役人というだけではないことを、志賀延次郎に聞いて驚いたのである。
公的な生証人にもならなかったし、宅次のもらした程度では、三輪の過去を知ることもできなかった。
「何かある……それも、重大なことだったようです」
志賀は、自白をとれなかったことを残念に思っていた。
「他へは口外するな」
同役のよしみがある。性格的には好きになれない三輪だったから、殊更庇いだてする心算はないが、同役である以上、役人には庇いあう伝統的な悪風がある。
(罪を犯しているとすると……おれは庇わぬ)
杉浦は、おのれにそう言い聞かせた。
医者を捜すのに熱中したのは、その事実を知るためにも、生かしておかねばならなかったからである。
留守の間にキャメロンという医者があらわれて運んでいったというのも意外だったが、三輪が、かれを名指したのは願ってもないことだった。
一つの不審は、船員たちの言葉と食い違ったことである。
『あいつはジョン・キャメロンじゃねえ、阿蘭陀のカルストっていう医者さ、混血のね』

その言葉は幸い、杉浦の耳には判然としなかった。船員は酔っていたし、まさか城之介がキャメロンのフロックを着て変装したであろうなどとは、想像の外だった。
杉浦は供を一人連れただけで、小舟に乗った。
「――旦那、妙な夜でござんすねえ」
小者は夜風に身を竦めながら、
「馬丁の蛸助が殺されたり、三輪の旦那が片腕斬られたり、こうやってえげれす船に真夜中に行く段になったり」
「恐いのか」
「へえ、いえね、寒いんでさ、なにもあっしは、これくれえ、へえ、ですが、こんな真夜中に、へ、もう間誤間誤してちゃ夜が明けるかもしれねえ」
夜の中で、一番暗いのは、暁前だという。港の夜風は冷たい。この冷たい風に吹かれていると、頭が冴えてくるようであったが、杉浦には、事情がまだよく呑みこめないのだった。
ただ、柊城之介がここ数日にわたって居留地でとっている行動には、何か納得できないものがある。
はじめの容疑は、不逞な攘夷浪人ということだった。
もっとも、この時代、体制に反対する浪人たちは〝攘夷〟を標榜していたし、攘夷浪人の名のもとに、断罪することが、簡単でもあった。
(だが……あいつは違う)
これまでの殺傷の次第は、考えるほど奇妙だった。
「――仇討ちと言ったな」
「へ？」
小者はびっくりしたように振り仰いだ。
「いや……独り言だ」
志賀延次郎と錯覚したのだ。
城之介が、〝父母の仇討ち〟と言ったという。
それなら、納得がいくような気がする。
(だが、三輪が……)
〝十年前の長崎〟、たしかに、三輪は、そのころ長崎奉行所につとめていたという。あまり話したがらないので、詳しい様子はわからない。
これまで、殺傷された者とどんなつながりがあるのか。
瀕死の床で三輪重左衛門が逢いたいというのは、そのことを饒舌る気になったのではないか。
「孝助、そちはこのまま帰れ」
「へ、へえ」
「一刻ほどして迎えに来い」
こう言い捨てて、杉浦はアーミスチス二世号に上っていった。
甲板には、フロックに山高帽の男がいた。
「杉浦さんか」
はっきりした日本語だったのである。

「む……おぬしは」
「オランダ医者カルスト、とおぼえていて貰おう」
「ふむ……混血かね。達者な言葉だ」
「長崎で生れた」
「なに!?」
杉浦は瞠目して、暗い影を見つめた。
「ジョー……ではないか」
「……」
「城之介か」
「柊城之介がおれだとすれば、おぬしは、捕えねばならぬ」
「む、ジョー、城之介ならば」
「オランダ人ということにしておこう、この船ではな。冷静に三輪の言葉を聞いて貰いたい」
「どこにいる」
「船室だ。来てくれ」
フロックの背中を向けて、城之介は先へ立った。
背後の杉浦武三郎が、どういう行動に出るか、まるきり疑っていない。
(斬れる!)
と、思った。
奉行所役人の根性だろうか。いうまでもなく神奈川奉行所は、江戸の町奉行所などと違って盗賊や不逞浪人の詮議ばかりが仕事ではない。
いうなれば外国奉行の出先機関のようなもので、外交折衝が多い。いわゆる不浄役人とはその性質を異にしている。
杉浦が、斬れる! と思いながら、手が刀にいかなかったのは、城之介のその平然たる態度に威圧されたからかもしれない。
斬るよりも、捕えるのは、なお難かしいのだ。杉浦は、この男を阿蘭陀人と思いこもうとした。事実を知ることのほうが先だった。
「ここだ」
城之介は船室に導き入れた。
「さっき、気がついたところだ」
三輪は眼を瞠き、入ってきた杉浦を見上げた。額に冷たい汗が浮き、唇には色がなかった。
「——おれだ、杉浦だ、わかるか」
「——うむ……」
「おぬしの話を聞きたい。十年前の話だ。長崎でのことだ。宅次を知っていたのだな」
「阿蘭陀代官高島織部の手先だ」
城之介が念を押すように言った。
「た、宅次が……」
「おぬしのことを饒舌った」
杉浦はとどめを刺すように言った。

「十年前のことを聞きたい。おぬしの口からだ。城之介に狙われる理由だ。話すがいい、そのほうが、おぬしも気持が楽になる」

船火事

血は溢れていた。応急手当をしただけの傷口からじくじくと血泡が吹きだしては、その泡が幾つも重なって潰れ、とろりと重い液体になって、繃帯の上を滴り落ちる。せまい船室の中には異臭がたちこめていた。三輪重左衛門の呻きが、さらにその異臭をかき乱し、重苦しいものにしているのだった。
「——話せ」と、杉浦はその同輩の苦悶から目をそらさずに言った。「十年前のことだ。長崎で、何をした?」
「な、なにも……」
三輪は呻きの中で、吐き出すように言い放った。
「何もせぬ、何もせぬ、おれは、何も知らぬ」
「卑怯な!」
まさかこの土壇場になって三輪がそこまで卑劣に振舞うとは思ってもみなかったことである。城之介はかっとなった。
「それでも武士か、三輪、きさま……」
じろりと杉浦は目をあげて、
「オランダ人がその科白は面妖だろう。おぬしはオランダ

人のはずだ、この船にいるかぎりな」
「柊城之介ならどうだというのだ、おれはただ真実を知って貰いたいために、おぬしに来て貰った。ことわっておくが、けちな役人根性をおこして、捕えようなどと思うまい。役所は、明日から支配組頭を二人失うことになる」
　その間も、三輪は呻き声をあげていた。激痛が全身を襲い、時々、息が笛のように細く絶え入るようになるかと思うと、また、地獄の底から揺りあげてくるような唸り声に変った。
「──三輪、事実を話すのだ」
「ううむ、うう……」
「長崎で何をした。城之介の怨みを買うようなことを」
「う、うう……知らぬ」
「城之介に十年間もつけ狙われていたのは、わけがあるだろう」
「ない、何もない……」
　もう、三輪は死を予知していたのかもしれぬ。
　多量の出血で、意識が朦朧としてくると、そのまま、奈落へ落ちてゆく虚脱感が甘美なものにすら思えて、
「死ぬのか、おれは、死ぬのか」
「三輪、しっかりしろ、城之介が、なぜ斬った？」
「し、知らぬ、こいつは……辻斬りだ……ううッ」
「辻斬り？」
　杉浦は眉をひそめた。その眼を、三輪は見かえした。残忍な期待が、あぶら汗の吹いた顔を歪め、ふふふと地獄の笑いを吹きあげた。
「そ、そうじゃ、辻斬り……ふふふ、こいつが、下手人、じゃ……」
「三輪、城之介は仇討ちだと言っている。おぬしに非があれば、告白することだ。武士らしく……」
　だが、断末魔を迎えた三輪には、侍としての教養や誇りより、おのれを死に至らしめた者への憎しみだけが支離滅裂な言葉を吐かしている。
「その男に武士らしい性根をもとめるほうが無理だろうな。武士だったら、あのような卑劣なまねはしなかったろう。こやつは、ただ上役に取り入るためにのみ、おれの母を殺す手伝いをした」
「……」
「出世のためだ。金のためもあったろう。父母を殺したあとの家財を没収して、懐ろを肥やした。それが許せるか」
　杉浦は返事に時間をさくのも惜しいように、三輪の表情を見守っていた。
　白状させることが出来ないのなら、おのずからなる表情で黒白を判断するしかなかった。
　だが、苦悶に歪み、ひくひく急しい呼吸をしている表情からは、反応を読みとることが難しかった。

　十年という歳月は、良心を麻痺させてしまうのか。悪業も遠い過去へ風化され、漂白され、すでに罪意識はなくなるのか。それが、執拗に怨念を叩きつけてきた柊城之介への逆恨みになっていたのかもしれない。
「三輪、おい！　三輪……」
　杉浦は手をかけた。
　とろりと焦点の定まらぬ眼が、しかし城之介の方をむき、それから杉浦へ戻された。
「……斬られた……おれは、斬られた……」
　そしてその語尾が吸いこまれるように細くなり、はたりと絶えた。三輪の左手は、杉浦の衿をしっかりと摑んでいた。
「──死んだ」
　杉浦は身を起して、その手をもぎ放した。
「斬られた、と言った」
「……」
「おぬしにな」
「オランダ医者カルストにか」
「柊城之介さ。否定はしないだろうな」
「城之介は母の仇を討った。それだけのことだ」
「仇討ちかどうかは、こちらで決める」
　杉浦はふいに手をのばして、城之介の腕をつかんだ。
「運上所に来て貰おう、役人殺しだ」
「よしたがいい」
　静かに城之介は言った。
「おれはこの船ではオランダ人カルストだ。放せ」
「このまま連れてゆく」
「出来るつもりか」
　城之介は、つと身をひいた。固くつかんでいたはずが、すっとはずされた。あわてて伸ばした手が、フロックの布地に触れただけで、次の瞬間、杉浦は音を立てて床に転がっていた。
「きさま！」
　身を起しざまに抜刀しようとした杉浦の目の前に拳銃が擬されていた。
「よせ。どうせおれにはかなわぬ。このまま、引き取って貰おうか。それともどちらかが死ぬまでやるか」
　三輪重左衛門は死んだ。仇の一人には違いなかったが、身分のある者だけにその証言はかなりの効力があるはずだった。
　かれの口が封じられた以上、別の手をつかまねばならなかった。
「杉浦さん、おれはあんたを話のわかる人物と思った。高く買いすぎていたようだな」
「話のわからぬ男でな。運上所役人などしていると、随分、

賄賂が入ると思うだろうが、私には効かぬ。この場合でも同じだ。私は納得しないことには手を出さぬ」
「それでいい、情状酌量してくれとは言わぬ。だが、もう少し頭がいいと思ったのさ。三輪が嘘を吐いているのが見抜けなかったのか」
「おぬしが正しいと信じるなら、役所に堂々と出てくることだ。三輪のような男ばかりではないぞ」
　城之介はそれに諦めの首を振った。
「おれは十年前から、人間を信じていない」
「……」
「特に役人を、な」
　城之介は拳銃をしまっていた。が、杉浦が刀の柄に手をかければ、すぐにも銃口がかれの胸を狙って火を噴くにちがいなかった。
「あんただけは、役人ずれのしていない人だと思ったが、どうやら見込みちがいだったようだ」
「証拠だ。仇討ちとしての証拠がない以上、ただの殺人と見られてもしかたはあるまい」
「そう見るのは自由さ。だが、あんたがおれを辻斬りと見ている以上、ここから出すわけにいかない」
「なに！」
「証拠か？　その証拠を見つけるまで、ここに入っていて貰おう」
「うぬ！」
「腰のものも邪魔だな」
「……」
　屈辱をおぼえながら、杉浦は腰の両刀を鞘ごと抜きとった。
　城之介の手並はこれまでの十数人に及ぶ死傷者で立証されている。刀を合わせて、まず勝目はない。刀でも勝てないのに、拳銃では尚更だった。
「おれが戻ってくるまでだ」
　城之介は部屋を出ると、水夫を呼んだ。役人を閉じこめたから、鍵をかけてくれというと、水夫はラテン系らしい陽気な声をあげて喜んだ。こうした連中には絶対的な役人不信と憎しみがある。
　奪いとった大小は、甲板に出ると木片でも捨てるように、海へ投げ棄てた。
『おーい、何を投げやがったんだ』
　下から怒鳴ったやつがいる。
　ボートが着いたところだった。大小はその数メートル横に落ちたのである。
　さっきの水夫たちが戻ってきたのだ。港崎町へでも行って、一晩中どんちゃん騒ぎでもしているかと思っていたのだ。水夫は三人、女が一人いた。
『拾って来たぞ、女を拾って来たぞぅ』

　酔い痴れた声で、がやがや騒ぎながら上ってきた。
　女が暴れないように、両手をスカーフで縛っていて、屈強の男たちだから担ぎあげたのである。
『医者のキャメロンはいなかったがね、代りにこんな獲物があったぜ』
『海岸通りで見つけたのさ。女一人でね、うろうろしているから連れてきたんだ』
『男が欲しそうな顔だった。年増だからな、こいつも神さまの思召しだ。いい思いさせてやろうってんだ』
　口におしこまれていた半布が、もがくうちに、はずれて落ちた。
「助けて」
　女は叫んだ。
「お願い、助けて」
　いかにも人妻風であった。まだ若い。よくはわからなかったが、二十五六ではなかろうか、青眉の細おもてが品のいい武家の若妻であった。
　彼女は、城之介を見ると、すがりつくように叫んだ。
「お願いです、助けて下さいまし」
　日本人とわかったのだろうか。山高帽をかぶってフロックコートの似合う背恰好は、日本人離れしていて、暗いところだと、異人にしか見えないはずだ。
　理不尽な水夫たちに手籠めにされて、藁にもすがる気持で、フロックの紳士に救いをもとめたのだろうか。
　三人の水夫たちは、この美しい獲物に有頂天になっていて、城之介のことなど気にもかけないようだった。
　城之介は目をそらした。
　見知らぬ女だった。関わり合う気持はない。敵の多い身なのである。これ以上、敵を作りたくなかった。城之介は縄梯子の方へ行った。
　そのとき、騒ぎを聞いて船室から出て来た片眼の男が、
『一寸待て』
　と気色ばんだ声でいい、カンテラを掲げて、首をひねるように見た。
『その服は……どうも似ているようだと思っていたが、コートもネクタイも、ぜんぶ、キャメロン医師のものじゃねえか』
　素ッ頓狂な声で叫んだのである。
『なんだって、おい！』
　三人がうしろ耳に聞きつけたほど、その声は大きかった。
『こいつ、キャメロンの服を着てやがるぜ、そうだ、ネクタイから靴まで、あの酔いどれ医者のものだ』
『ほんとうか、おい！　シャツを見せな』
　女をほうり出して、三人は戻ってきた。
『何から何までキャメロンのものだって？　中身だけが違うのか。どこで入れ替ったんだ』

『一体……奴は何者だ』
『おい！　お前は』

　荒くれ男たちである。イカリや女の顔や、陰部を克明に描いたのや、愚劣な刺青が自慢の海の男たちであった。命知らずの無法者揃いだ。十八世紀から十九世紀の前半にかけては、地上の食いつめ者だけが海へ出た。罪を犯した者も船へ乗るなら恩赦になるという慣習さえ、英国にはあったのだ。

　それだけ海は危険とされていた時代である。命がけの職業は、人間を荒んだものにするのはしかたがない。

　悪酔いしている連中だ。怒鳴っているうちに眼が据わって、昂奮してきた。

『野郎！　そいつを脱ぎやがれ』
『キャメロンをどうしたんだ、畜生、キャメロンを殺ったんじゃねえか』
『そうだ、殺って服を奪ったんだ』

　ぱっと一人がとびかかった。身を躱して足払いにかけて倒す。残りの者がポケットから大型ナイフをとりだすのが、カンテラの明りにきらりと光った。

　それだけなら、まだ城之介は拳銃を出す気にはならなかったろう。刀があれば峰打ちで叩き伏せることが出来るのだ。つい今しがた杉浦の大小を海中へ投げ棄てたのが早まった、と残念に思ったのだ。

　だが、片眼の男が、何やら喚くと、ぱっとカンテラを投げつけて拳銃を抜きだすのが見えた。とんできたカンテラを左肘で払いのけるや、城之介は一瞬前に抜き撃ちに発砲していた。

　たしかに命知らずだった。あるいはオランダ人との混血を装った城之介の端正な風貌が、この荒くれ男たちには歯ごたえのない優男に見えたのかもしれなかった。

　片眼の男が撃ち倒されても、連中はひるまなかったのである。

　一人が、倒れたやつの拳銃をもぎとって、撃とうとした。これも二発目をもろに喰ってのけぞり倒れると、その濁煙を裂くように、大型ナイフが突きかけてきた。

　三発目がこの男の鼻柱を砕いた。カンテラが割れ、ぱっと燃え上った火明りに男の頭が凄まじい血を噴くのが一瞬、見えた。

　さすがに、残りの一人は、突きかける勇気を失った。

　ぱっと身を翻す。船室のなかまを呼びにゆこうとした。そこに、恐怖に蒼ざめて腰が抜けたように坐りこんでいる女を見ると、楯にするつもりか、手をかけた。

　四発目は、この男の頭を貫いている。金髪が逆立ち、酒樽を転がすように甲板に倒れて転がった。

「助けて！」

　女は身を起して駈け寄ってきた。裾がみだれ、内腿の白さが夜の火明りに嬌めかしい。

　時ならぬ銃声に驚いて、とびだしてきた男を五発目が撃ち倒した。そいつは凄い音を立てて梯子段を転げ落ち、つづいてあがろうとした連中をこそぎ落すことになったらしい。

　あと一発残っているはずだった。

　城之介はその拳銃を女の手に押しつけるように持たせると、

「出てきたら撃て」

と言った。撃ち方を教えているひまはない。

「逃げろ、まだ、下には何人かいる」

促して、水夫の手から拳銃をもぎとった。

　これはずっしりと重い、新式の多連発短銃であった。大きさは普通のコルトと大して変らない。銃身も四寸ほどだが、蓮根式のくるくる廻る弾倉はなんと、十以上もあった。

　これで連発されたらひとたまりもなかったところだ。

「降りろ、早く」

　愚図愚図している女を急がして、城之介も、縄梯子を伝わっておりる。

　下にはボートがある。オールを握るのははじめてではない。長崎で何度かのった。博多の網元の家にいるときに和船は毎日のように漕いだから、要領はわかっていた。

　甲板ではカンテラの火が死体の衣服にうつり、燃えあがっている。銃を手にして漸くあがってきた連中も、このなかまの死体と、船火事に仰天して、追撃するどころではなかった。

　地上と違って、船火事はもっとも恐ろしい。あわてて用意の水をかけたり、大騒ぎしている声から、しだいに二人のボートは離れていった。

　丁度同じころ、波止場の方から漕ぎ寄せてくる小舟があった。

「なんでえ、何が起ったんだえ、あの火は……」

　不審の独り言で、櫓を操っているのは孝助だった。

　杉浦がこのアーミスチス二世号に呼ばれてくるとき、孝助に迎えにくるように言っていたからであった。

　甲板の火は大したものではない。船から二十メートルも離れると、海は暗く、すれちがっても顔もわからない。

　孝助が漕ぎ寄せてくるのを見て、城之介は針路を変えた。ボートをずっと南東へむけた。

　居留地の沖を海岸通りと平行して進んで、大岡川に入っていった。

　この間、城之介は殆ど口をきかなかった。

　偶然から助けることになったが、はじめはその気はなかったのだ。他人のトラブルに介入する気はない。自分のことだけで精一杯の身が、他人の運命に容喙する贅沢は許さ

れない。
　あのとき片眼がとびかかって来なかったら、この女とは縁が生じなかったはずなのだ。
（偶然に助けたのだ。それだけでいい）
　なまじ女が、細おもての春信の美人画にあるような容姿だったことが、城之介を拒ませた。
　所詮人妻だし、面倒が増えるだけであった。
　むしろ、はっきりと、最初から助ける気がなかったことを言明して、感情のまじわりを打ち切っておきたいようなものだった。
　城之介のそんな気持がわかったのか、女も口をひらかなかった。
　舟の中で身をかがめて、舷側にしっかり摑まったまま、まだ動悸が鎮まらないようだった。
　その無口なところが、谷戸橋をくぐるときは幸いだった。
　この谷戸橋の南袂には、関門がある。居留地への出入りの者はきびしく調べられる。以前の浪人者の姿ではないから、もしも誰何されても、流暢な英語で応えれば、役人にはわからない。山高帽にフロック姿では、充分誤魔化せるはずだった。
　幸い、発見されることなく、川を遡ってオランダ舟大工の船渠に入った。ここだったら、上にあがることが出来る。
　城之介は女を促して舟大工屋敷から道へ出た。外から入るのは面倒だが、出るのは簡単だった。
「ここで別れよう」と、かれは冷たく言った。「今夜あったことはお互いに忘れた方がいい。断わっておくが、御礼を言われるほどのことはしていないのだ」
　そのまま、背をむけたのへ、女は追いすがった。
「あの……あたくし、困ります。やはり助けて頂いたのですから。せめて、お名前を」
　城之介は舌打ちした。
「余計なことだ。私もそなたの名は聞かぬ。そなたも忘れてくれ」
「いいえ、それでは武家として礼を失しますもの。主人に叱られます。あたくし……」
　止める間もなく、女は名乗っていた。これは城之介を愕然とさせるものだった。
「神奈川奉行所支配組頭、三輪重左衛門と申す者の妻でございます」

襲撃

（この女が!?）
　城之介は愕然とした。
　運命の偶然は屢々意地の悪いことをする。おのれの手にかけた三輪重左衛門の妻を、その直後に助けることになろうとは、あまりにも皮肉すぎる。
「——三輪の？」
　思わず聞きかえしていた。
　これに、にこりと慎ましい微笑がかえってきた。
「はい。御存知でございましょうか」
「いや……名前は聞いておる」
　神奈川奉行所支配組頭といえば、横浜では非常な権限を持っている。居留地でも知らぬ者はない。
　オランダ人に窶した城之介は、あいまいに言葉を濁した。
　むろん、父母の怨みは三輪重左衛門個人へのものであり、家族にまで及ぼす気はない。
　長崎奉行所にいたとき、三輪は独身だったはずだし、あの事件はこの妻女にはむろん無関係のことだ。
（三輪が斬られたことを、知らないのか）
　城之介は凝っと妻女を見た。たとえ洋服を着ていても、城之介の風貌を耳にしていたら、一抹の懸念を抱くのではないか。
　だが、何も知らないらしく、
「いずれ、主人より御礼に伺いましょう、お宿はどちらでございましょうか」
「その必要はない」
　城之介は言葉寡なに言った。
「私は……間もなく出港する」
「それは、お名残り惜しゅうございます、わたくし、主人に叱られます。せめてお名前なりとお聞きしないでは」
「忘れてくれ。私もそなたの名は聞くまい」
「あ、申しおくれました。わたくし、幸江と申しまする」
「——聞かない方がよかった」
　これ以上、関わりを持てば、またこの幸江をも殺さねばならぬことになるかもしれない。
　三輪の死は、すぐにも居留地にひろまるはずであった。
　船内に閉じこめた杉浦武三郎が役所に戻ってくるのも時間の問題なのだ。
「別れよう。私のことは忘れるがよい」
「でも……」
「そなたの、ためだ」
　その言葉が、どれほどの重みを持っていたかは、半刻と

経たないうちに、幸江にもわかることなのだ。
城之介はそれきり、背をむけて歩きだしていた。
フロックコートの背には、女性の心を近寄せない羅紗地の厚みがあった。
(混血なのかしら)
幸江は暫く見送っていたが、踵をかえして役所の方へ歩きだした。
幸江は娘を連れて江戸へ帰っていたが、三輪のことが心配だった。殆ど愛情を持てない男だった。三輪に嫁した幸江は『女大学』の教訓通りに、夫に仕え、子を産み育てた。役人の妻として完全なつもりであった。浮気などしたこともない。古風な武家に生れて、ただ固く貞淑を絶対なものと教えられ、疑いをさしはさむこともなかった。
三輪との間は、きわめて普通の夫婦仲といえよう。愛を口にすることもなかったし、また武家にあっては、当然のことだった。夫に仕える、それが女の道とされていた。夫が港崎町の遊廓に泊ってくることがあっても嫉妬するほど感情は昂らない。愛のないところに妬みもない。
「暫く江戸に参っておれ」
以前から、寡黙な夫であったが、突然、こう言いだしたときも、それ以上の説明はしなかった。
理由を聞くことは許されない。夫がそういうからには、必然的な理由があることであり、女子供の容喙を許さない。武家社会の伝統と因習が命じているのだ。
以前だったら、幸江は、それ以上何の疑いも抱かなかったろう。重左衛門のこの日頃の挙動が、はじめてこの貞淑な妻に疑惑を起させた。
いうまでもなく、それは城之介が居留地にあらわれてからのことなのだが、長崎での一件など知る由もない幸江には、女の感情でしか、ものを考えることができなかった。
(ほかに女が出来たのかもしれない)
単純にそう考えた。
悋気は慎むものと教えられてはいても、疑惑の雲が黒く胸にひろがると、幸江は落ち着かなかった。ふいに役宅に戻ったのも、叱責を覚悟の上であった。忘れものをとりに戻った、という口実も用意してきたのだが、その必要はなかった。
女中のお加代がおどおどしているのも幸江の疑いを深くした。ただ彼女には女中が夫に抱かれたとまでは考えられなかったのである。下役の志賀からの使いが来て出ていったというのも言葉通りには信じられず、ふらふらと海岸通りへやってきたのだ。その姿が、夜ではあったし、酔い痴れた水夫たちには、いかにも男に飢えた女に見えたのかもしれない。

『玄徳、客だよ』
呼ばれて少年は、女の乳房から顔をあげた。
あの清国人の街の阿片窟である。いま相手をしている女は時々ここへやってくる。貿易商の女房という触れ込みだったが、名前は明かさない。阿片を吸うだけではなく、その快感をさらに深めるために、玄徳を抱く。
女のように細く白い少年の手と、花のような唇が、陶酔に導くのだ。長年阿片を吸っていながら、肉体が衰えていないのは、女盛りのせいもあろうが、阿片そのものよりも、男との戯れのほうが楽しいせいかもしれない。分量を多く過さなければ、阿片ほど人生を富ませてくれるものはなかった。分量が増えるにしたがい禁断症状との悪循環が甚くなるのは周知のことだが、清国の閨房秘事には、その制馭の方法が詳述してある。
少量ずつを用い、増量せずに、途中で休む。連日つづけずに、忘れたころまた初心のようにして味わうことが秘訣とされる。この人妻はなぜかそれを心得ていた。色情が強いだけに、丁度いいのかもしれなかった。
玄徳が顔をあげると、
「もっと……」
と、頭を押える。豊かな年増の肉体が弾んだ。陶酔に浸って耳は聞えないようであった。
この女は、阿片を吸いながら、玄徳に愛撫されることをいつも望んだ。全裸で寝牀に横たわり、足の先から、それこそ指の股から舐めさせる。足の指から脛、腿、臀部、背中をのぼってゆくころ、快感が女体をうごめかせるのであった。
腹ばいになっていたのが、身を横にする。そうすると玄徳は、また足の先から、こんどは前を舐めて這いのぼるのだ。
馴らされていた。金払いがいい客であった。
『玄徳、お客だ』
と、また聞えた。
玄徳は身を離そうと思ったが、女の手が放さない。
すると、誰か部屋に入ってきた。二人の男だった。
「玄徳……おめえか」
男は荒っぽい口調で言った。
「はい……」
玄徳も裸だったのである。女が何か言ったが、この闖入者はじろりと凄い眼をむけて、黙っていろ、と一喝した。
「玄徳、用がある。来な」
と、顎をしゃくった。
「着るものを着てだ」
と、次の男も言った。
腕まくりして、あたりを睥睨している。地廻りという感じだった。二人とも匕首を呑んでいることを、晒の腹巻か

らのぞかせているのだ。
　この阿片窟では、十数人の客が吸飲できるようになっている。もうもうと煙がこめて、異臭に閉ざされた暗黒の部屋である。阿片癮者たちは、この連中が入ってきたことに驚いて、身を起した者もいたが、大半は、どろんとした眼を向けているだけで、恍惚の中に浸っているのだった。
　男たちは、玄徳がろくに着終らないうちに急きたてて、
「出な」
と、小突いた。
　華奢な玄徳のからだは、逞しい男たちには、容易に一ひねりできるものだった。
　玄徳には、まるで見当もつかない連中なのである。恐怖で足が竦んだが、男たちの態度には、脱出を許さないものがある。
　上にあがると、意外にも、その連中のなかまが他にも六人ばかりいたことである。
「こいつが玄徳か」
「なるほどな、生っ白い餓鬼だぜ」
「その面を撫でてやんな」
　威しだったのだろう、一人が匕首を抜いた。
「話ァそれからのほうが早いようだ」
「玄徳、おい玄徳」
「はい……」
「聞きてェことがある。へんに隠しだてしやがると、ザクリといくぜ」
「――は、はい」
　玄徳はもう生きた心地はなかった。恐怖で真っ蒼になっていた。
「城之介というやつのことだ」
「……」
「城之介は何処にいる」
「あ、あの……知りません」
「何だと！」
　数人が喚いた。
「やい！　童、舐めるんじゃねえ、隠しやがるとどういうことになるか」
「おれっちはお役人たァ違うんだ、地獄とは隣り合せに住んでいるんだ。ここが南京の巣だろうと、驚くこっちゃねえ、うぬが白状しねえなら、叩き毀して焼討ちかけるくれえ、屁のかっぱだ」
「上州、こんな餓鬼に啖呵をきってもはじまらねえ、チット痛い目を見せてやんな」
「へえ」
　上州と呼ばれた男は、腕に前科の刺青のあるのを、むしろ自慢げに見せびらかすようにして、
「野郎、腕をへし折ってくれるぜ」

　玄徳の右腕を掴んだ。
「し、知らない、知らないんです」
「吐きな」
「知らない、何も知らない」
「この野郎」
　腕を折るのはあとまわしにしたか、ぱしっと、頬に平手打ちを喰わした。
　ひいィッと悲鳴をあげて、玄徳は泣きだした。
　深夜だったが、この騒ぎに、どこからともなく、ぞろぞろと人が集まって来た。いずれも清国人たちである。屈強の男もいれば、女もいた。子供もいたし、老人もいた。中には棍棒を持ったり、肉切り庖丁を持ったり、青竹を持っている者もいた。
　ぐるりとまわりを取巻いたが、この居留地の清国人たちは、もともと暴力的な連中ではない。上海や厦門や澳門などから、異人に従って来た料理人や勘定人などで、無頼漢は少ないのだ。
　居留地の治外法権は清国人には適用されないのである。国家同士の通商条約が交わされていないから、あくまで、清国人たちは、その仕える主人の権利の陰にいるのだった。したがって一つ間違えば本国へ送り還される。
「やいやい、なんだ汝らは」
　半数ぐらいが匕首を抜いた。
「こちとらァお上のお手伝いだ、へたに踊りやがって、くらやみ坂で汚ねえ首を獄門にされねえようにしろ」
「そうだとも、いいか、城之介って野郎はお尋ね者だ。そいつの居場所を知っているこの餓鬼を吐かせようってんだ。邪魔を入れやァがると、汝らも同罪だぞ」
　こんなせりふのどれくらいが、清国人にわかったろう。日本語を解する者も多くはない。
「兄貴、場所が悪い、この餓鬼ァ部屋へしょっ曳いていって、ゆっくりと吐かせやしょう」
「連れてゆけ」
　兄貴分の男は、顎をしゃくった。
　それを見ると、清国人たちは何やら喚いて、得物をふりあげたり、女子供は急においおい泣きだしたりして、前を塞いだ。
　不穏な空気だった。ある意味では弱い清国人たちが、こういう集団の動きを見せると、異様な粘り強さで、梃子でも動かぬものを感じさせるのである。
　何十人いるか、ぞろぞろと出てきた連中のあとから、あとから増えるようであった。
　匕首をかまえながら、睨みつけて、
「やい、おれっちを何だと思う、要蔵部屋のお兄いさんだぞ、汝ら、要蔵部屋を相手にするつもりか」

太田新田の埋立て以来、横浜の関内に勢力を張っている鈴村要蔵の人足たちだった。
沖仲仕は、殆ど、この太田の要蔵部屋で占めている。前に書いたように、豚屋鉄五郎の、豚鉄にも子分が多いが、人数からいえばこちらの方が多い。
この連中を敵にまわしたら、関内には住めない。
要蔵部屋と聞いて、清国人たちはぎくりとしたようだった。
波濤を超えて出稼ぎに来ている連中だし、清国人のいわゆる華僑には、同郷意識がある。が、玄徳を守ろうとする気持はそうしたものだけではないようであった。
「さあ、来な」
玄徳をひきたてて外へ出た。
石畳が敷かれた細い路につめかけていた連中が、ぱっとひらいた。
そのとき、町角にいた男が走ってきた。
「いたぜ、こっちに来やす」
「なに、城之介か!?」
「へえ、フロックに山高帽の……」
この一角だけは、これだけの人が立ち騒いでいても、居留地は眠っていた。
要蔵部屋の子分たちは、町角に分散して見張りをしていたのであろう。
その注進を受けるとみんなは色めきたった。
玄徳を捕えていた男も、手を放して、匕首を抜き放った。
「殺しちゃいけねえ」
と、兄貴分が言った。
「手にあまったら殺してもいい、が、なるたけ、捕えるんだ。その方が手間賃も多くなる」
「へえ、なぜだんね」
「なぜもくそもあるものか、そうなっているんだ。つまらねえことを聞くんじゃねえ」
やくざたちが長脇差を持つのは、この関内では許されていない。表向きは人足たちなのだし、居留地では刀をもっとも恐れている。
「どこだ、城之介は」
「へえ、二十九番と三十番の角をこっちにめえりやす」
「そうか、見失うんじゃねえぞ」
もう玄徳なぞ、どうでもよかった。
人足たちは塀に沿って走った。
「間違いねえだろうな」
「へえ、あの野郎が異人に化けて三輪の旦那を船に連れてゆくのを見た者がいやす。いえね、あとからわかったことなんだが、あいつが城之介の変装なら、へえ、目印が出来たようなもんだ」
「あいつピストーロを持っていやがるんだ。七連発だった

ら、七人はお陀仏だ。そのつもりでいろ」
「死んじゃァ間尺にあわねえや、兄い、こいつァいい手間になるんでござんしょうねえ」
「安心しろ、部屋頭が請負った仕事だ。間違いなんてあるわけねえ、せっかくの仕事を、ドジを踏んでよそへとられねえようにしな」
「合点だ」
よほどいい金になるらしかった。これだけ多勢を動員するのだから、報酬が少なくては、割に合わない。どこからその金が出るのか。
喧嘩馴れた連中であった。遠廻りして、左右から背後を遮断し、袋をしぼるように、輪をちぢめてくる。役人のところへ注進にゆく様子がなかったのは、あくまでも、これは儲け仕事と割りきってのことであった。
(城之介に知らせなければ)
玄徳は走っている。
解き放された玄徳は、群集の中に逃げこむと、小路から小路を抜けて、城之介へ急を知らせるべく走った。いくら城之介が拳銃を持っていても、そして剣を持たせたら強いことは目のあたり見て知ってはいるが、とても、この人足たちの人数にはかなわない。
阿片窟に乗りこんできたのは、十人たらずだが、角々に待機しているのを合わせると、三十人以上はいたろう。
フロックコートに山高帽の異人姿になっているのでは、刀は持たないはずだ。拳銃だけでは、この人数を相手にできない。
命知らずの人足たちなのだ。横浜御開港景気で、諸国からあぶれ者たちが集まって来ている。
浪人崩れもいるし、島帰りもいる。どうせ前科の一つや二つある連中なのだ。拳銃で驚く手合ではない。六人七人仆されてもひるむことはない。むしろ血の匂いに勢いづいて、襲いかかってくるだろう。
町角を曲ろうとすれば、見張りがいた。
玄徳は、屋敷の中に塀を乗り越えて入り、庭を突っ切って、隣家に入り、さらに、裏路へ抜けた。
口笛が聞えた。
それは玄徳も何度か聞いたことのあるアメリカの民謡だった。
フロックコートに山高帽姿が、居留地の通りに動いていた。玄徳が飛び出そうとしたとき、がらがらと車輪の音が聞えてきた。馬車だ。この道にくるようであった。あの馬車が通りかかれば、人足たちは襲撃をやめるかもしれない。
そう思ったが、城之介の姿は、小路を曲った。
(いけない!)
玄徳は走り出た。
「ジョー、待って!」

叫んだとき、隠れていた連中が一斉に城之介に襲いかかる物音がした。乱れた足音と、怒号と、叫びと。
　待って……と、玄徳は走った。走りながら叫んだ。涙声になっていた。
　小路をまわったとき、蝟集した人足たちの影と、地上に横たわった男の姿が見えた。
「――なんでえ、もろい奴だ」
「へえ、口ほどにもねえ、兄い、さあ連れてゆきやしょうぜ」
「ひっ担いでゆきな」
　馬車の音は近づいてきた。馬につけた鈴がさわやかに鳴り、小路の入口でとまった。
「――やったか」
　馬車から声がした。
「こっちへ連れてくるがいい、まだ息があるかね」

誤殺

もろい。
　叩き伏せた無頼者たちが、そう感じたほど、〃城之介〃はもろく、殆ど抵抗らしい抵抗もなく地上に長々とのびていた。
　匕首を抜いていた者も、道中差を隠し持ってきた者も、手持無沙汰になって、
「こんな奴に、十何人も斬られたのけえ、面を見てくれべえ」
「山高かぶりさえすりゃ異人に化けられると思ったら大間違いだ」
「シャッポを脱がしてやれ」
「へえ」
　一人が木刀の先で乱暴に山高帽をはねのけた。
　みんなは一瞬、眼を疑った。帽子に隠れて見えなかったのだが、ばらりと乱れた髪は栗色の短いものだったのである。
「人違いだ」
「なんでェ、城之介じゃねえのか」

　馬車の男は、そのとき、苛立っておりて来たところだった。昂奮した無頼者たちは、この男の言葉に耳を藉す余裕はなかったのだ。
「これさ、城之介ではなかったと」
　姿を見せた男は頭巾をかぶっていた。無頼者たちをかきわけて、のぞきこむと、
「顔をこっちにむけちゃらんな」
　自分では手を触れようとはせず無頼者に命じている。
　なんだこの野郎は、と、肩を怒らした奴もいたが、兄い分のが袖を引いた。
「お、旦那でござんすか、どうも失敗を踏んだようでござんす。こいつァ日本人じゃねえ」
　今夜の仕事の手付金を貰ったのだろう兄い分はぺこぺこしている。
　一人がもがいている犠牲者の髪をつかんで、顔をねじ向けた。
「違う！……こげな男やなかばい」
　がっくりと落胆して頭巾の男は、舌打ちしながら、馬車の方へひきかえした。
　痛みで歪んだ顔は、鷲鼻の異人だった。眼には恐怖があった。フロックコートと山高帽という、ただそれだけを目印にしたための人違いだったのだ。
「旦那、旦那」
　あわてて兄い分は追ってきた。
「なんな、あげな間違いしてしもうて、どげんするつもりな。あとのことな知らんばい」
「へえ、へえ、あんな異人なんざかまうこたァねえ。城之介は二三日中に、片をつけやすから」
「駄目だね、あげなヘマばするごたるふうじゃ、安心して任せられんたい」
「旦那、そいつァ話が違やしねえか。わっちの方も多勢使っているんだ、手間ぐれェ出しておくんなさい」
「城之介を殺したらな。はじめからそげん言うたはずじゃ」
　頭巾の男は舌打ちして、馭者に馬車をやるように命じた。
「旦那、そいつァ……」
「請負いちゅうことは、そげんことじゃなかかい。殺ったら来い、くれてやるけんな」
　馬車は走りだした。
「畜生、吝い野郎め」
　兄い分は唾を吐いた。
「やいやい、何をぼんやり突っ立ってやがるんだ。さっさと消えろ」
「へえ、手間にゃならなかったんですかい」
「てめえらが失敗を踏むからだ。城之介の野郎を探せ、もっと手を狩りだしてこい。博奕をしているやつは盆を蹴返

して連れてこい。女郎を抱いている奴ァ水をひっかけて叩き起せ。どうでもこうでも、城之介を探すんだ」

「へえ、それでも、ただ走り廻っていたんじゃどうにもならねえ、やっぱり」

「そうだ、あの餓鬼ァどうした、南京の色餓鬼よ」

「玄徳のやつ……」

見まわしたが、そこらに見当らない。

「やっぱりあいつが知っているんだ」

「探せ、まだ遠くへは行ってはいない」

その玄徳は、しかし、もう数町かなただった。馬車のうしろに飛び乗っていたのである。

(ジョーを殺させようとしたやつ。頭巾をかぶっているけど、あの声は聞いたことがある)

突き止めなければならない。城之介を狙う者は多いが、今度のように、太田部屋の無頼の輩(やから)を多勢動員して襲わせるなど、はじめてだった。

(誰かしら、珊瑚(さんご)大尽ではない、とすると……)

高島織部ではない。織部が両手に手裡剣を受けて傷ついているのは知っている。

この男は両手に傷など見えなかったのだ。

馬車は本町通りを走って一軒の店の前で止った。

馬車の音を聞きつけて、店の者が出てきた。

「お帰りなさいまし」

「腹が減った。茶漬が食いたか」

まるで散策から戻ったような調子だった。

玄徳はその間に馬車の下にもぐりこんでいる。馬車は横手から中へ入れられた。この店が、肥前屋勘兵衛のものであることを玄徳は知った。

そのころ、柊城之介は侍姿にもどっていた。

フロックコートと山高帽を捨てて、いつもの着流しにかえると、やっと、自分に戻ったような気がした。

「異人の姿は窮屈でいかん」

と、笑った。

おえんの家である。お由は無事な城之介の顔を見て、いそいそと酒の支度をした。

「いや、酒はよい。それより、おまえは居留地から出た方がいい」

「でも……」

城之介の傍にいたい、と口に出来ない悲しさで、お由は嗚咽(おえつ)した。

「夜があけたら、用事があるようなふりで根岸へ帰るがよい。あとのことはおれが始末する」

医師キャメロンは縛ったままにしてあるのだ。

お由の手には負えない。城之介は夜明けまで一眠りした。

眼がさめてみると、もうお由はいなかった。城之介への想

いは、一刻でも早く断ち切ることがうしろ髪を引かれないことだと、諦めたのであろう。陽があがって、言葉を交わせば、一層、切なくなる。夜が明け、関門が開かれるとすぐお由は根岸の家へ帰っていったのだ。お由も宅次を殺しているし、城之介も追われる身であった。お互いの気持がどんなに燃えようと世の常の男女のように倖(しあわ)せはもとめられないのではないか。

城之介には、まだしなければならぬ仕事が残っていた。

キャメロンの縄(なわ)を解いてやると、

『どこへでもゆけ』

と、洋服を投げてやった。

『わしは、一体どうしていたのかね、なぜ縛られているのかね』

キャメロンは、昨夜の酔態を、まるきりおぼえていないようだった。

『帰るがいい、船では心配しているだろう』

よほど飲んだのだろう、宿酔(ふつかよい)のどろんとした眼で、キャメロン医師は洋服を着ると、まだふらついている足で、出ていった。

それと殆ど入れ違いに、

「ジョー」

と、声がした。

勝手口だった。玄徳の顔がのぞいていた。

「どうした、よくおれがいることがわかったな」

「――いま、見たよ、あの……」

玄徳はもどかしげに首を振った。

医師キャメロンのフロックと山高帽姿を昨夜の誤認の事件と結びつけて考えたのか。

「おえんさん、死んだ。ここ空家だから」

あんな事件のあとだから、誰も気味悪がって近寄らないだろう。城之介の隠れ家には丁度いい。

そういうふうに考えたらしい。城之介は苦笑した。

「ジョー、危ないよ、太田部屋で探している」

「太田部屋……人足たちが」

「肥前屋勘兵衛が、金を出している」

ありそうなことだった。役人が頼みにならないとなると、無頼の者たちを傭ったのであろう。

あの連中が、金のために城之介を狙うとなると、油断はできない。

これまでのように、役人たちの眼だけ気をつけていればいいのと違い、どこから見られているのかわからないのだ。

「勘兵衛、いま家にいる」

と、玄徳は言った。

斬りにゆくなら、早く、と教えたのだろう。

「そうか、だが、昼間は動けぬ。夜まで待とう」

肥前屋勘兵衛も事件に深く関わり合っている。

下手人の一人であることは間違いない。もう、城之介は仇討ちの名目をはっきりさせることをあきらめていた。かれがただの狂気の殺人者ではないことを、下手人の告白というかたちで、公にしたかったのだが、宅次の死と三輪の死がそれをあきらめさせた。

（いまさら、公にしたところで、どうなろう）

　役人を斬ったのだ。理非曲直をはっきりさせるには、封建の世は無情であった。

　仇討ちといっても、容易に認められるものではない。三輪のように、死の間際まで強情に告白を拒む奴にあっては、真実を云々しても無駄だった。

（おれは、斬る。誰も信じてはくれなくても、仇を討つ。討ちさえすればいいのだ）

　そのために居留地に潜入してきたのではないか。

　日が暮れてから城之介はおえんの家を出た。

「おまえは帰れ、巻き添いにしたくはない」

「いや」

　と、玄徳は首を振った。

「行く、一緒に」

「帰るのだ。おれと関わり合っては、ろくなことはないぞ」

「父親の代りだよ」

「――お前の父親がどうしたのだ」

「玄徳、同じ名だよ」

　そうだったのか。長崎の王が、居留地にいったら玄徳を訪ねるがいい、と、親切に教えてくれたのが、玄徳の父親だったのか。

　父親はこの夏に死んだという。長崎の王から手紙が来て、城之介のことがわかったという。

　玄徳は、それらのことを知ったことで一層、城之介のために尽す気になったのだろう。そういう信義は清国人の伝統的なものなのだ。

　疑問が、一つ解けたと思うと、城之介も胸の閊えがおりたようであった。

「手助けしてくれるのは有難いが、城之介は追われているのだ。お前までいのちを失うことになる」

「いいよ」

　短い言葉の中に真実がこもっている。

「勝手にしろ」

　好意を嬉しく思いながらも足手まといにならなければいいがという心配があった。

　昨夜の今夜だ。居留地には、所々に、赤隊の姿が見えた。英国の兵隊である。赤い軍服のせいでそう呼ばれていた。町同心や番屋の者も提灯を掲げて、警戒している。この中を突っ切るのは容易ではなかった。

「いいことがある」

　玄徳は、すぐ戻ってくるから、と言って走りだした。

　昨夜の様子では、太田部屋の連中が、玄徳を探しているかもしれないのだ。どこにいったのか。

　やがて馬車の音が聞えてきた。馭者はあのトムという黒人だった。

　肥前屋勘兵衛はしかし、その夜、高畠織部の家に行っていたのである。

　これは見舞いを兼ねてのことだった。

「どげなふうですな、手の傷は」

「いかん、化膿したようじゃ」

　織部は両手の繃帯をとり替えさせていた。

　手裡剣が、手の甲から掌にまで突き抜けたのだ。重傷だった。腫れあがっていた。

「ひどい目に逢うたものよ。ま、いのちがあったのが目っけものじゃが」

「城之介の隠れ場所を突き止めるのも、今日明日のうちですたい」

「ばかに自信のある口吻じゃの」

「へえ、ちょっと手ば拡げましたけん、埒があきますたい」

　肥前屋勘兵衛が、こう自信あり気な顔を織部の前で見せるのは、はじめてのことであった。

「ふむ、よほどの手をつこうたな」

「へえ、まあ……」

「だが、あの城之介は、甘く見ると、わしのように怪我をするぞ、若いがどうして、中々のやつじゃ」

「そりばってん、数でいきますとたい」

「……」

「手の内ば明かしまっしょうか。太田部屋の連中ば使いましたとたい」

「なるほど、人足どもか」

「へえ、どぶ鼠ば使えるとな、野良猫が丁度よかでっしょうが。これで城之介も逃げられまっせん」

　トムの馬車に身を潜めて肥前屋に走った城之介は主の居間に忍び入った。

（居ないのか……）

　失望は軽いものだった。居なければ帰ってくるのを待てばよいのだ。

　勘兵衛の居間は凝ったものだった。絨緞を敷き、ロココ風の家具を置いて、飾りものなどにも、贅を凝らしてある。その部屋の中から、城之介はあの幻燈板を発見している。

　お仙の幻燈板と同じものだった。

　ただ違うところは、この中に写った男女の中で、肥前屋勘兵衛の顔だけが、削りとられていたことだった。

「やはり、な。自分の顔は削って、ほかの奴の証拠を握っておく、ということか」
相互に、弱味を握ることで、密告を防ぐ。その方法だったのだろう。
「この幻燈板が証拠になる」
お仙のものは、城之介の手にある。某所に隠してある。これと合わせれば、一層証拠として確実になる。
勘兵衛はその命とりの証拠を、実に無造作に手文庫の中に入れていた。まさか城之介が侵入してくるとは思わなかったのか。
あの用心深い河内屋が斬られたのを考えると、必要以上の警戒をしなければならないはずであった。
城之介が幻燈板を懐中にしたとき、階段に足音がした。洋燈の灯が上ってきた。
勘兵衛の妻女であった。部屋の中に入ってくると、手文庫をとり上げた。
（しまった……）
この幻燈板がなくなっているのがばれる。
中をあらためようとはせずに妻女はそれを下げておりていった。
（――日をあらためた方がいいかもしれぬ）
と、城之介は思った。
あの幻燈板一枚から、かれの侵入が察知されたら、逃げられなくなる。肥前屋に一矢も報いずに、苦境に立たされる。
そのとき、階下で大きな声が聞えた。肥前屋が帰ってきたようであった。
笑い声が聞えた。上へあがってきた。
「やれやれ、あの珊瑚どのが、両手をまるきり使いものにならんけん、悄気ようというたらなか、ははは、人間、怪我すると……」
「あの、ちょっと、お聞きしたいことが」
妻女がつづいてきた。疑問は、あの幻燈板のことではないか。
肥前屋は酔っていた。手をふって遮った。
「明日、明日。戸閉りばよくして寝なならんたい」
「あの、幻燈板を……」
「幻燈？　なんな子供のごたることばっか言うて、幻燈大会のあるときにゃ、連れてゆくけん、戸閉りばせんと。あ、それよか、茶ばいれてきんさい」
妻女はあきらめておりていった。
城之介が屏風の陰から出たのは、その後である。
「肥前屋」
「あっ、あんた……」
「留守の間に、貰うもの貰った」
これでもぴんとこなかったようである。

「幻燈板だ」
「え！」
「証拠の品だ。おれの母を殺したな」
「げっ……な、なんば言いんしゃる。わしはそげんこと……」
「宅次から聞いている。おれの母を首吊りに工作したな」
「な、なんごとな、あの蛸助め、法螺ばっかり」
「死ね」
もはや問答しているひまはない。城之介は抜刀した。
勘兵衛は大きな卓子のむこうへ逃れた。城之介は椅子を蹴倒すや、腕いっぱいに伸ばして叩きつけた。が、椅子の背を斜めに切り落しただけである。
「ま、待って、待っちゃんなさい」
「いまさら……」
「ほ、本当ば言う、本当たい、わしはなんもしちゃおらん、あれな高畠さんが……」
どこまで卑怯に振舞うつもりか。
「こ、ここに証拠があるたい、ほら、いま見するばい」
がたがたと戸棚をあけて、何かつかみだした。と思うと、これは白鞘の脇差だった。やにわに抜き討ってきた。
身をひねって、これを払いのける。鏘然と冴えた音がした。一度きりであった。脇差は、勘兵衛の手から離れて飛び、天井に突き刺さっている。
手がしびれて、勘兵衛は身を翻した。その背に、白刃が閃いた。
勘兵衛は、窓に手をかけたまま、ずるずると崩れた。
「いまなら、助かるぞ、肥前屋」
「た、助けちゃんなさい、あ、医者ば、呼んで……」
「おれの母を殺したな」
「ただ、ちょっと……ちょっと、脚ば引いただけですたい」
「やはり、きさまだったのか」
怒りにふるえる城之介の血刀が、勘兵衛の胸を突き刺そうとしたとき、
『刀を捨てろ』
と、背後で怒鳴る声がした。銃剣を擬した赤隊が立っていた。そして、そのうしろに妻女も。
「城之介さまと仰有いましたね、刀より鉄砲の方が早いでしょう、あきらめたほうがよろしゅうございます」
「撃て、勘兵衛も死ぬだけだ」
「いいえ、お助けしようと言っているのですよ」
「なに!?」
振りかえった眼に、肥前屋の妻女は、媚びるように笑いかけたのである。

その英国の兵隊はまだ若い男だった。銃剣を突きつけて、いまにも引金を引きそうにわなわなとしているのだった。

『刀を捨てろ、ローニン』

思いがけない手柄に昂奮していた。居留地で連日のように起った殺人事件の、容疑者として、みんなが血眼になって探しているローニンに違いなかった。

『ジョー、そうだ、ジョー刀を捨てろ』

『撃ってみろ、赤隊野郎、おれよりこの男が先に死ぬ』

城之介の刀の尖先は肥前屋勘兵衛の胸に押しあてられている。

赤隊を呼んできた妻女だけが、妙なうす笑いを浮べているのだった。

「――城之介さま。ここで殺し合いをしても無駄事でございましょう」

「無駄事？　おれは母の仇を討つ。そのために来たのだ」

「もう、仇討ちは済みました」

妻女の言葉は冷たい。

美しいが冷たい顔であった。なまじ整っているだけに、細く高い鼻梁(びりょう)も、切長の眼も、細い眉毛も、そして、とがったうすい頤(おとがい)も、情の温かさをおよそ感じさせない。痩せたからだで撫で肩だし、いかにも着物姿を品良く見せるに違いないが、男の心をとらえる魅力がなかった。

言葉も丁寧で、それだけに、陶器の肌ざわりがある。

「御覧遊ばせ、もう死んでいます」

他人事のように妻女は言った。

肥前屋勘兵衛は、まだ胸を波打たせてはいたが、その眼は虚(うつ)ろで、唇も動いていながら、もう声もないのだった。

城之介が浴びせた一刀は、さして深くなかったはずだが、年齢のせいもあったのだろう。

もう虫の息だった。

「まだ、死んではいない」

「ほほほほ、死んだも同じようなもの。城之介さまは、人殺しということになりますね」

けらけらと、妻女は笑った。

「母の仇を討ったまでだ」

「ほほほほ、証拠がありますまい。第一このえげれすさんが見ているじゃありませんか」

「……」

「なんと申し開きをしても、人殺しの罪は消えますまいね。でも……」

うすい唇の端に皮肉な笑いがうつろって、

「わたくしの証言があれば」

「なんと」

「勘兵衛が、わたくしには打明けていたということにします。長崎でのことを」

「……」

「そうすれば、仇討ちということが、申し開きができましょう」

「どういうつもりだ」

「ほほほほ、別段の仔細はありませぬ。ただ……」

「ただ？」

「わたくしの望みのものを、頂戴できれば」

この交渉の間、英国兵は、銃剣を突きつけたまま、どうしていいかと迷っている様子だった。

「何を望むのだ」

「手帖でございます。ショーメット夫人の」

そうか、この女もか。

異人との乱交パーティのメンバーの一人だったのか。その名前がショーメット夫人の遺(のこ)した手帖に記されている。城之介が所持している以上、いつ明るみへ出されるかしれない。夫の死よりも、そのことのほうが心配だったのであろう。

夫の勘兵衛の死にも、冷たい表情を変えることがなかった理由も、それで判然としたことだった。

「そんなに気になるか、乱行したことが」

「あの手帖を下さるなれば」

妻女はくりかえした。

「所詮、浮気だけのこと、亭主が死んでしまえば、誰も咎(とが)める者はあるまい」

「そうはまいりませぬ。女の身なれば世間ていがございます。肥前屋の後家として、これからも生きてまいらねばなりませぬゆえ」

「貞淑な後家としてか」

かわいた声で城之介は笑った。

「ところで、そなたのいうようにうまくいくか、この、赤隊は手柄をたてた気でいるぞ」

「手帖さえ下されば、逃がして差し上げます」

いかにも自信あり気であった。

「ここには、ない」

「ま……」

失望と怒りが、冷たい顔に青い炎を燃えたたせたようであった。

「ある所に預けてある」

「……」

「おれが死ぬか捕えられたら、ジャパン・タイムスに持ちこむよう話してある。おそらく横浜中が沸くことだろう」

「そんなことになったら……生きておれませぬ」

本音が出た。店が大きく、顔が広いだけ、恥をかく率も多いのだ。肥前屋の後家として、銭箱を踏まえ采配をふるう希望を抱いているとしたら、たしかに打撃にちがいなかった。
「逃がしてあげます。だから、わたくしに返して」
「そうだな、約束してもいい。だが、この男をどうする」
これに対して、妻女が言ったのは、思わず耳を疑るような、冷酷なものだった。
「斬ってしまえば、よろしゅうございましょう」
それだけでなく、こう言った。
「こんな兵隊は金に汚のうございますから。お金をあげるといえば、油断します。そこをお斬りになれば」
鼠とりでも仕掛けるような調子で言うのだ。
いかにも女のやり方らしい、そんな術は、城之介の好まぬところだった。

口先だけではなかったのである。妻女は流暢な英語で、この男と話がついた、と、言った。
『お金で、片をつけることにしました。あなたには十ポンドあげます。それで見なかったことにして下さいな』
貿易商の妻で駆け引きには馴れているとはいえ、鮮やかなものだった。
当時の英貨で十ポンドといえば大金である。若い兵隊は急に、緊張を弛めて、銃剣をひいた。
「お金を出すふりをしますから、その間に斬って下さいな」
「いや……」
城之介は刀をおさめていた。
「そんな卑怯な真似が出来るか」
「殺すか殺されるかでございましょう。よろしゅうございますね」
顔は笑っていたが、眼は、凄いほど冷たい光を湛えていたのである。
『陛下にお金があります』
と言って、先に立ったのは、英国兵のうしろから斬り易いように、と、配慮したつもりか。
だが、城之介には、かえって抜刀する気にはなれぬことだった。
黙って見送った。
(――内面如夜叉か……恐ろしい女だ)
居留地という新しい地帯は、日本の伝統や風習の破壊者もしくは改革者として出現していた。
眼を瞠るような先進諸国からの文明の移入口だった。それはしかし、合理性を唯一のものとする新風とともに、こうした女たちをも産んだのであろうか。
階下で悲鳴が起った。

洋銀が散乱した中で、英国兵がもがいていた。金を勘定するために銃剣を置いたのを、妻女がとって刺したのである。
「――呆れたな」
「お前さまの代りに」
細い眼が挑んでいる。こういう女の性は常識では考えられないようであった。
「手帖のためといえ」
「どこにあるのでございます?」
英国兵がもがくたびに、血が紅い蛇のように流れ、強い臭いを放った。
「駒形町だ」
「え!?」
「手帖が隠してある」
「――参りましょう。どこへでも参ります……手を洗って参りますゆえ、お待ち下さいまし」
「馬車で待っている」
トムの馬車が裏にとめてある。城之介が乗っていると、待つほどもなく、妻女は出てきた。
何をしていたのか。駒形町へ着くまで無言だったが、家の前で馬車からおりると、
「夜明けまでに帰らないと」
と、意味あり気に、上眼づかいに城之介を見て、
「大変なことになりますから」
「あと始末のことか」
「いいえ、城之介さまのこと」
「……」
「勘兵衛を斬ったのも、えげれす兵を刺したのも、城之介さまだと、書置きしてきました」
抜け目なさを誇るように言うのだった。
「夜が明けると女中が私の部屋に来ます、あの死体と書置きを見て、番屋へ飛んでゆくに違いありませぬ」
「なるほど、おれに手枷をはめたつもりかもしれないが、そいつはあまり役に立たないようだ」
城之介はむしろ蔑みをあらわにした。
「もう何人斬ったか知れぬ。ここで一人や二人、死人が増えたところで、どうということはない」
「でも……」
この女が仕組んだのは、保身のためだったようである。
城之介には、この女をどうとかしようという気持はない。
黒い手帖が欲しければくれてやってもいい。
街々には、役人だけでなく太田部屋の無頼者たちが、眼を光らしていた。
馬車も何度かとめられた。そのたびに妻女が顔を出して、
「肥前屋の者でございます。急用で港崎町へ参る途中なので」

と、声をかけた。
肥前屋といえば、知らぬ者はないのだ。
あ、御寮さんで、へえ、港崎町へ、旦那のところですかい、へっへへへ、御寮さんも大変だあな、へへ……と、下卑た笑いで通してくれた。
この女の機転がなければ、城之介はおえんの家に辿りつくまでに何人斬らねばならなかったかわからない。
おえんの家は無人になっている。
中へ入ると、灯をともしてから、城之介は天井裏から黒皮の手帖をとりだした。
「あ、それを……」
思わず手を出す女へ、
「急ぐことはない」
「でも」
「まだ、名前を聞いていなかったな」
「――登勢、でございます」
年齢は三十を少し過ぎただけだと言った。すぐに名前が目に入った。女は年齢を気にしすぎる。少しではない。三十六歳となっている。
肥前屋の女房としては、むしろ若すぎるくらいのものだが、女の意識というものは、夫の年齢はどうでも、常に自分が若く見られることとしか考えない。
「そなたの名前が、不倫の証拠になる。そうだな」
「――はい」
「約束だ、破ってしまうがいい」
城之介は、その頁を引き裂いて、お登勢に渡した。
「これでよかろう」
「あの……手帖を」
「これは渡せぬな。ほかの女の名前が書いてある。そなたにとっても、不必要なものだ」
乱交のときは、たいてい仮面をつけるなり、灯を消すなりしていた。
女たちは、お互いの名前を知らないようなシステムになっていた。
それがショーメット夫人の内職を繁昌させた所以だった。
絶対に秘密が守れるとしたら、人妻の殆どが、浮気をしたい願望を持っている。
他の土地と違い、この居留地は、解放的な異人の恋人や夫婦の行為を眼にしたり、耳にしたりして、なんとはなしに、人々は、かなり自由の愉しさをもとめる素地ができていた。
他の土地では、長崎をのぞいて、男女が手を組んで歩いたり、街頭で口を吸いあうなどということはない。
農村などでは驚天動地の出来事だった。
こうしたことも、それが日常になれば、誰もまじまじと見つめたりしない。

この土地で、そういう表情をしていると、軽蔑されるのだ。そこまで定着したとき、すでにハマの男女は性的にかなりの自由を持っているといってよかった。
ただ、日本女性の美徳というものは、表むきには残っていて、世間の声はやはり一夫一婦の原則を踏まえていた。自分たちのことは棚にあげて、世間の表面に浮びあがった不倫の行動を糾弾するのである。
自分が遊んでいればいるほど、それを隠そうとして、呪咀し、侮蔑する。
お登勢は、渡された頁をちらりと一瞥すると、そこに書かれたおのれの名前に、忌わしい記憶が浮んだように、顔を振って、千々に破り捨てた。
「これで取引は済んだな、お登勢」
「はい」
このことだけが、ずっと気がかりだったのであろう。
破り捨てると、おかしいほど、お登勢の表情は柔らいで来ていた。
あの英国兵を刺し殺し、城之介と駆け引きするほどの女とは思えない、静かな女になっていた。
どちらが真物で、どちらが贋物とはいえない。それが女だともいえる。お登勢は女の気狂いじみた情欲を持ち、そして財産にもいのちにも、強い執着を持っていた。
「頼みがある」
「――どのようなことでございましょうか」
悪夢が去ったあとに、お登勢は肥前屋という大店の、抜け目のない後家の貌が出た。
「外の奴らだ」
「……」
「勘兵衛から頼まれた人足どものことだ、勘兵衛が死んだ以上、もはや無駄骨だ。そう言ってくれ」
「はい」
と、まるで主人の命令を聞くように、素直に頷いたが、
「申しましょう、わたくしは、城之介さまを殺めたとて、一文も出す気はございませぬゆえ」
「頼むぞ、奴らがうろうろしさえせねば、役人ぐらい、どうにでもなる。江戸から別手組の連中が入って来ているようだが、なに大したことはない」
「仰せのように致しますと、わたくしには、何を頂けますかしら」
冗談めかしてはいるが、ふてぶてしい中年女の顔には、梃子でも動かぬしたたかさがあった。
「――金か」
「いいえ」
と、微笑みは美しいのである。こういう女の駆け引きは、城之介の不得意とするところだった。

「城之介さまのおからだ」
「なに!?」
「ねえ……そんな恐ろしい顔はしないで。一度でよろしゅうございますの」
「……」
「抱いて下さいましな」
はっきりと中年女は言った。
「一度きりで、いい思い出にします。もう、後家になっても、二度と、あんな馬鹿な真似はしたくないのでございます」
「……」
「おかしなものですわね。いままで主人がいて、その眼を盗んで、どこの馬の骨かわからない異人と抱きあったり、ふしだらを重ねましたけれど」
口先だけではなく、自分でも、その心境の変化が不思議なように述懐するのだった。
「こうして、後家になってみますと……まだなったばかりですけれども、束縛がなくなった喜びなど、一向に感じませぬ。亭主のいる間は、いっそ死ねばよい、海にはまりこんだり荷物の下敷きになったりして、死ねばよいと、そんなことをいつも思うていましたものが、ほほほほ、何やら、薩張りしたというよりは、これからは、わたくしがしっかりしなければ、肥前屋はやってはゆけないと」
「——色より金というだけのことだろうな」
「そうでしょうか、その色でございますの」
と、凝っと城之介の眸に見入って、
「あなたさまが、ほしい」
「……」
「一度、抱いて頂けば、それだけで……充分でございます。その思い出だけで、もう、他に男は……」
「金儲けに精出すというわけか」
城之介は立ち上って、帯をしめ直した。
「せっかくだが、その申し出は受けられぬ」
「え、あたしをお嫌い?」
「らしいな」
ずばりと城之介は言った。
「おれも、そう話のわからぬ男ではないつもりだが、そなたを抱く気はせぬ」
これ以上、手きびしい拒絶はなかった。
女にとっても、これほどの侮辱は受けたことがなかったのであろう。
お登勢は、口を小さくあけて、唖然としたように見ていた。
その切れ長の眼はみるみる潤んできた。が、それを洩らすようなことがなかったのは、やはり、年齢だったろうか。
お登勢は立ち上り、

「ほほほほ、振られましたのねえ、あたくし」
と、自嘲するように言った。
「城之介さま。女を御存知ない」
表の方へ歩きながらであった。
「いいえ、若い娘は、お遊びになっても、わたくしたちの年齢の女は」
「……」
「女の性は、業でございます、これはと思った殿御に、……それもたった一回のお情けがほしかったのに、手きびしいお言葉は、あんまりでございます」
「勘兵衛の仇を討つか」
「いいえ、そのような……わたくしは、わたくしの怨みをお霽らし申しまする。そうですわね、外へ出て、太田部屋の人に申しましょう、勘兵衛は殺ったと」
「……」
「その代り、登勢がいると」
女のそうした態度は、全く、城之介の意表を衝くものだった。
「手間賃は登勢がお払いしますと。ほほほほほ、それで充分でございましょうね。喜んで、城之介さまを探すにちがいありませぬ」
「——探す?」
「ええ、怨みはあっても、ここを教えるようなことはしませぬ。自然に、誰かが突き止めるまで」
嫉妬に狂うそこらの女とは違うのだと言いたいのであろうか。
お登勢は戸口のところで振りかえった。
「こうなったら、やはりえげれす兵殺しも城之介さまに負担して頂くしかありませぬ。百人が百人、女のあたしに出来ることではないと、信じるでしょうから」

廓に斬る

女が動物的な姿勢をとるほど、高畠織部は快感をおぼえた。
港崎町の遊廓へ来ても、岩亀楼や五十鈴楼では遊ばず、二流三流のところを用いるという隠れ遊びだけに、虚飾を好まず、官能の快を貪ることでは人後に落ちない。
高畠織部の体軀は逞しく、容易に疲れをおぼえない。二日も三日も流連して、花魁たちが悲鳴をあげるほどだった。
両手の傷は麻酔で痛みを柔らげていたが、やはり、ずきずきした。
『完全に痛みをなくすのは危険が多い』
と、アメリカ人の医者は、モヒの増量を肯んじなかった。
両手の甲を短剣が貫いたのである。激痛はくりかえし来て、腕を痺れさせた。
「ドクターば呼べ」
織部は荒々しく叫ぶが、使いが行っても三度に一度しか来ないのだ。
痛みをまぎらすには、酒も不可といわれている以上、女しかなかった。長崎にいただけに、織部は阿片の害を知っている。阿片戦争のことなども、知識になっている。
「唇ばつかうとたい」
裸になって命じる。
江戸の吉原もそうだが、花魁は虚飾で作りあげられた存在だけに、寝間でも男の気に入るような技巧はあまりつかわない。
この港崎町のように異人が多く、繁昌していれば尚更だった。
毛むくじゃらの動物的なからだの異人にしてみれば日本女性の肌の柔らかさ、美しさはそれだけでも価値なのだ。
高畠織部は、しかし、贅沢に要求した。裸で寝そべり、女にあらゆる技巧を要求する。
足の裏から、ふくらはぎをのぼり、ふとももから臀部へと、唇と舌を這わせることを命じる。
それも、ただ舐めて辿るのではなく、間歇的に、吸っては放しながら、印を捺すようなリズムで這いのぼる。馴れぬうちは、何度もやり直させる。織部の皮膚は厚く、容易に官能の喜びを齎さなかった。
「もっと上手にやらんかい、そげなことでは、痛みが消えはせんたい」
仰向けになると、女に啣えるように命じる。痛みのために萎んだものが使用にたえるほど硬くなるには、女の唇が一つでは不足だった。一人の女が疲れ果てると、別の女の

生新な唇をもとめた。
「そ、そげんたい、もっと、咬むごと、吸うごとせんな」
両手は使えない。だらりと投げ出したままの織部のからだの上で、女は身をもんでいる。
女の方は、男のものを弄んでいるうちに、耐えられないほど欲情しているのに男が役をなすに至らないのだから、焦りで、肌を火照らせている。
「もうよか」
「え？」
「容れてよか」
漸く熱く屹立したものを、女は裡にゆるゆると容れる。
そのときが、織部の幸福な瞬間だった。
女にたかめられ、熱したものが入ってゆくと、甘美な感覚が四肢にひろがって、痛みを忘れた。
これからの四半刻が、織部を快楽の淵に遊ばせるというときだったが、
「――お客さま、お客さま」
襖の外で遣手の声がした。
「なんだ、せからし（煩）か」
「あの、お医者さまのお出でなしたので」
「要らん」
怒鳴ったが、すぐ、
「待たしとけ」
と、言い直した。
女の乳房が躍っている。花魁もいつしかすべてを脱いでいるのだった。織部は目をほそめ、
「よか、よかばい……」
と、咽喉を鳴らした。
医者はアメリカ人のアレキサンダー・M・ウエッダーといい、外科医だが、博奕好きの女好きで、上海から流れてきた男だった。
『人を呼んでおきながら何たることだ』
赤い顎鬚をぼりぼりかきながら、いきまいて、
『女はどうした、わしにも女を抱かせろ、それがドクターに対する礼儀というものだ』
どうせ珊瑚大尽の織部につければいいのだから、楼主も吝いことはいわない。
売れない女をあてがう。ウエッダーは皮鞄をほうりだして、サケを飲み女を抱いた。
かれは、いま、英国兵の傷の手当をして来たばかりであった。衣紋坂の裏で英国兵が二人斬られた。二人とも致命傷であった。
（ローニンのジョーという無法者のしわざという話だが……大したやつだ）
この狭い居留地に英国の赤隊だけでなく太田陣屋のフランス兵などもいて、不逞のローニンを捜索している。

その厳重な捜査網の裏をかいて、忽然とあらわれては、兇刃をふるい、風のように去る。
　その変幻の出没が、部外者の眼から見れば鮮やかというしかなかった。
　この居留地に来ている外人の大半は本国を食い詰めた者たちだった。本国の体制のワクに入りきらず、はみ出したあぶれ者である。
　その放縦な血は、無法者というだけでひとつの共感を抱くのだった。
　かれの外科医の腕前でも、あざやかな日本刀の斬り口は、惚れ惚れした。
　その傷口を縫合して、怪我人を助けることが出来ないのは、外科医の敗北なのだが、むしろ、ウェッダーはその敗北を快いほどに感じていたのである。
　城之介がその赤隊の二人を斬ったのは、遊廓に入ろうとして、誰何されたからだった。
　末広町の裏に小川が流れている。その土堤づたいに、人目をさけて港崎町へ近づいたとき、その二人に誰何された。斬るしかなかった。二人とも瞬息に一太刀ずつ浴びせられて仆れている。
　五間の濠を渡るのに、城之介は小舟を用いた。
　高島織部が遊廓に来ていることを突きとめると、やはりこの廓内で斬る方が容易であった。
　廓内では、英国兵も奉行所の役人もやはり行動を制限される。廓名主の権限は幕府から公認のものであって、岩亀楼の佐藤佐吉の発言力は小さくはない。
　お座敷に呼ばれている時刻であった。
　あたりを憚って呼んだが返事がない。
「――雪乃」
「雪乃……」
　城之介は天窓からすべりこんだ。
　一度、ここから出入りしたので勝手がわかっている。
　小蝶もいない。二人とも売れっ妓なのであろう。城之介は酒を探して飲みながら待つことにした。
　ここにも度々迷惑をかけているが、
（これでおしまいだ）
　高島織部を討てば、横浜での仇討ちは終る。父の仇はまだ判然としないが、それを突き止める前に、もう城之介がこの土地に潜む余裕はなくなっている。
　太田部屋の鈴村要蔵の子分たちから、英仏の兵隊まで、出張ってきては、こうやって生きているのも不思議なくらいだった。
　神奈川奉行所の役人とその手先である町々の番太郎や、豚屋鉄五郎の身内などでも、敵にまわして楽な相手ではなかった。

　居留地も町も、関内外あげて、城之介を探しもとめているのだ。
（織部を斬る！）
　残された行動はそれだけであった。
（奴を斬ったなら、それでこの土地ともおさらばだ）
　そのつもりだった。
　雪乃が戻ってきたのは一刻ほどしてからである。
「まあ、城之介さま！」
　雪乃は驚愕するとともに、喜びをあらわにすがりついてきた。
　座敷着が、すっかり板について、見違えるばかり、綺麗になっている。
「心配かけたようだ」と、微笑して女のからだを受けとめると、「どうやら、まだ生きている。まだ死ぬわけにはいかぬ。雪乃、今夜は、どの青楼に行ったのだ」
「ええ、五十鈴楼だけなんですけど」
「疲れているだろうが、聞きだして貰いたいことがある」
「ええ、どんなことでも」
「珊瑚大尽だ。奴がどの青楼に来ているか。今夜来ているはずだ。奴は小見世ばかりで遊ぶという。探してくれぬか」
「はい。すぐわかると思います」
　座敷着のまま、雪乃はまた外へ出た。
　左褄をとってすらりと立った姿は、艶やかだった。小蝶のところへ来て、廓芸者のイロハから習って、短い間に、人気も出ていたらしい。
　だいたい織部の行くところは、きまっている。
　金浦楼、出世楼、金石楼、戸咲楼などで、そのなかのどれかに違いなかった。
　遊女屋に遊びに来ている客を探すのは、普通では難かしい。見世のほうでも、簡単に洩らしたりはしない。
　が、廓芸者が探しているのだと、茶屋の方でも安心する。ひいきの旦那に呼ばれている場合もあるのだ。
　すぐ戻ってくると思ったが、雪乃は意外に手間どった。
　二三軒まわったところで、英国兵たちにからまれたのである。
『よう、別嬪だぜ』『俺が先だ』『唾をつけたのは、俺じゃないか』『カードで決めようぜ』
　がやがや騒ぎながら、雪乃を摑まえ、抱きすくめている。
「放して！」
　もがいたが、袖を摑まれ、帯に手をかけられると、自由がきかずに、雪乃は、助けてエと悲鳴をあげた。
　まさか遊廓の中でこんな乱暴をされるとは思いがけなかった。第一、こんなに異人の兵隊が廓の中に入りこむなどということも、嘗てないことだった。が、剣付き鉄砲のものものしい兵隊でも遊びにはくる。

武装で入ってくるなど、常態ではない。
「旦那、やめておくんねえ」
廓火消しや、廓役人などが飛んできたが、軍服のいかめしい壮漢たちばかりだ。手がつけられず、まわりではらはらしながら、非難するばかりだった。
「これじゃァ、お雪さんが可哀想だ」
「なんとかしねえか」
「なんとかって、おめえ、亀吉の二ノ舞はできやしねえ」
この秋口に、フランスの水夫が暴れたことがある。関取の鹿毛山長吉がそいつらを叩きつけたが、ナイフを抜いて襲ってきたので鳶の亀吉が鳶口で殴りつけて一人を即死させた。長吉は所払いされ、亀吉は戸部くらやみ坂の刑場で死刑になった。
異人の乱暴には、幕府は寛容を以って臨んでいる。日本人は殴られ損、蹴られ損で我慢するしかない。誰も死刑にはなりたくないから、手が出せないのだった。
「隊長さんはどうした、通弁を呼んで来ねえ、野郎どもが来ているんじゃァ隊長さんもいるはずだ」
「あれえ早くしねえと攫ってゆかれちまわァ」
その隊長は上で、高畠織部と密談していたのである。
織部は歓を尽したあと、ウエッダーにモヒを打って貰い、痛みを忘れていた。
「城之介を撃った者には、私から賞金を出す。三百両だ。ほかに隊長さんには百両。どうだね、今日明日中に、けりをつけて貰いたい」
むろん通弁を中に立てての交渉であった。
隊長は中尉だったが、気軽くオーライと、返事した。
『百両の方を忘れないでくれ。それとも手付として半金貰えれば尚いいのだが』
と、図々しいことを言った。
それでも、高畠織部にしてみれば、生命の代償として安い。かれは手代に五十両持って来るように走らしている。
そこへこの騒ぎだった。
「どうしたことな。何が起ったとな」
町の者たちがこの戸咲楼の男衆にかけあっているところだったのである。
通弁から聞いて、中尉は早速、兵隊たちを叱りとばした。
『女を放してやれ、きさまら懲罰だぞ』
美い女だ、と思ったのは中尉も同じである。
だが、さすがに、織部は不審を感じている。
「お雪という芸者がな、ふむ……」
「お大尽がどこの青楼に来ているかと、聞いてまわっていたそうで。連れて参りましょうか」
「わしに逢いたかとなら、逢うちゃるとが功徳ばいな」
戸咲楼に高畠織部がいるのを突き止めた雪乃は、小走り

に小蝶の家へ戻った。
小蝶がまだ戻っていなかったのは、客と遠出したのかもしれない。特別に花代さえ出せば、そうしたことも大目に見られるのだ。
「——城之介さま、いましたわ」
雪乃はまだ喘いでいた。
「戸咲楼です、赤隊の隊長と話を……」
「そうか、忝ないぞ」
城之介は身を起した。そのとき、戸外に靴の音が聞えた。
『オユキさん……』
異人だった。城之介は、その靴音と同時に拍車の音を聞いている。サーベルを外へ蹴るようにして歩くので、将校の足音には特徴がある。
『オユキさん……』
優しげな呼び方が、しだいに焦って喚きになってきた。
『おい、出て来ないか、オユキ、用があるんだ』
その背後から、中尉、と呼びかける声があった。
『中尉、御機嫌だな』
驚いて、蒼い眼が振りかえった。その眼には人影は見えなかったのである。
中尉は耳を疑った。
『誰だ、誰か……そこに居るな』
『戻ろう、中尉。珊瑚大尽が呼んでいる』
『え!? 誰だ』
たしか暗がりで、その声はした。
中尉は二三間、声のした方へ進んでみた。が、影も見えなかった。聞き誤りではない。
『おい、何処にいる』
『ここさ……』
ふいに、耳もとでその声は言った。愕ッとなって、中尉は拳銃を皮ケースから抜きとろうとした。その手の甲が、ひやりとした。白刃が触れていた。
『あっ、きさま?……』
『騒がないほうが、お前の為だろうな。歩け』
城之介は促した。
『——ジョー？ そうだな、お尋ね者だな』
『歩け』
『どこへ？……きさま、逃げられはせぬぞ』
『黙ってゆくほうがいい、ここの異人墓地に埋められたくなかったなら、だ』
『ジョー！』
『斬られたいらしいな、中尉』
静かなだけに、城之介の言葉は、凄みがあった。脇差のするどい刃が、中尉の脇腹にあてられている。すっと、僅か動いただけだったが、緋ラシャの上着が剃刀でひいたように、裂けた。

『止せ、乱暴するな』
『わかったらしいな。それでいい、一緒に行こう』
『ど、どこへ……』
『きまっているではないか、中尉、いままで、お前が会見していた相手だ』
『珊瑚大尽……』
『ジョーを捕える話か？　殺す話か？　幾らで請負った？』
『――知らん』
『とぼけるな。あの男が、無駄話をするため、遊廓に呼ぶはずがない。頼まれたと睨んだぞ。殺しの依頼だ。おい、中尉、英国駐屯兵はいつから殺し屋になった』
『知らん、そんなことは知らん、珊瑚大尽とは、ちょっと、その……』
『花魁をとりあった仲というのではあるまい、行け』
戸咲楼の裏口から入った。
兵隊たちは表のほうで群れていたのである。
珊瑚大尽の織部は、雪乃を連れ戻すように、この青楼の亭主に言いつけたばかりのところだったのである。
そこに突然、城之介と中尉が入ってきたのだ。
「ジョー……城之介か」
「せっかくだが、織部、命を貰いに来た。母の仇をここで討つ」
まだ、この場には、医師ウエッダーもいたのである。
（この男か）
あの斬れ味を思いだして、灰色の眼を瞠いて見た。
『ジョー、君かね、ジョーというのは』
城之介はこれを、じろりと振りかえっただけで、
「織部、抜け」
「こ、この手では……」
「刀が持てぬか、拳銃ならどうだ」
「……」
織部はしかし、自信なさそうに指を動かしてみた。
『ジョー、それは無理だろう、この患者の両手が完全に恢復するには、一月以上はかかる』
『おれは待つ必要をみとめない、このまま叩っ斬ってもいいのだ』
そう言いながらも、しかし、無抵抗の者を斬るのは、城之介には出来ないことだった。
「待て、城之介」
織部は腰を浮かした。
城之介が一歩踏みだす。隙に、中尉がからだごと襖を倒して廊下へ転がり出た。
拳銃をひき抜いて撃つ。カチッと音がした、が、弾丸は飛ばない。入っていなかったのか、不発か。城之介は踏みこんでいる。脇差だったのが、尖先を届かせなかった。中尉は拳銃を投げつけて、サーベルを抜いている。

火花が散った。サーベルが折れるような悲鳴をあげた。その瞬間にも、城之介は振りかえっている。織部は逃げだしていた。その背へ、脇差を投げる。
中尉がはね起きざまに、斬りかかった。曲ったままのサーベルである。城之介は身をひねって刀を抜き合せるや、織部を追った。中尉が追いすがってきた。
「面倒な」
振り返りざまに斬ろうとしたとき、拳銃が火を吹いた。
悲鳴がつんざいた。サーベルを振りおろそうとした中尉が、棒立ちになって、胸をおさえ、一瞬、静止したと見えたが、そのまま、枯木を倒すように、どうと倒れたのである。
硝煙の中に医師ウエッダーが、呆然と拳銃を握っていた。城之介を狙ったに違いなかった。僥倖といおうか、皮肉な結果だった。最初不発だったのが、中尉の不幸であり、二発目は正常に作動したのも、かれの運命を決したのである。城之介は、織部を追うのに、この銃口に背をむけたが、三発目は空撃ちの音もしなかった。城之介は猛然と、織部に追いすがった。

囮

無抵抗の者を斬る気にはなれぬ。たとえそれが、仇であっても、柊城之介には斬れない。高畠織部に追いすがったのも、むしろ、第三者の拳銃が、かれを駈りたてたといっていい。銃口に背をむけることによって城之介は非情になれた。危機感は緊張を強い、情を凍らせる。
城之介は織部に追いすがり、「待て」と、喚いた。「織部、それでも武士か」
織部は不正で得た金を資本にして、商人になりきって、何年になるか。
多少でも、しかし武士の虚栄が、かれに残っていたことが、命とりになった。
織部は振りむいた。
その恐怖と、憎しみにひき攣った顔と向きあった刹那、殺意が城之介の胸を突きあげた。
白刃は、叩きつけられた。一度、二度、高畠織部の大きな首が、皮一枚を残してがくりと胴から垂れた。
（討った……）
十年目の仇討ちがなったという感激とともに、何か虚し

いものが胸を掠めた。
「これで、母の仇は、討った」
おのれに言い聞かせるように、城之介は呟いた。
「あとは父の仇を」
その手がかりは、全くなかった。両親を殺された身では、片親の仇を討っただけでは不十分だったが、それでも、ひとまず、目的を達したという、充足感は免れなかった。
城之介は血刀を拭って振りかえった。
意外にも、医師ウエッダーは、拳銃を持った手を、だらりと下げたまま、放心したように見守っていた。
『どうした、撃たぬのか』
城之介は意外すぎたあまり、口にしている。
『おれを撃てば、賞金が貰えるぞ』
『ノウ』
『その拳銃は、故障が多いらしいな。それでは撃ち損ねるというわけか、先生』
『そうじゃない、そういうわけじゃないのだ、ジョー』
あわてて、ウエッダーは手を振った。
『君の悲壮な行為に感動したのだ』
『……』
『そうなんだ、ジョー。私ははじめて、日本の武士を見た気持だ。君のような男を殺させないために、この拳銃は故障することになった』

オーバーな表現は国民性なのだろうが、ウエッダーは感動を、目や口や、表情の全部を費やして、いや、それだけでは足りずに、両手を、からだ全体を動かして、力説するのだった。
『私はそう信じる。神は見ているのだ。そうだとも、たとえば、この拳銃は、君を生かしておくために故障になった。たとえ、私の頭にこうむけても、玉は眠りを貪るに違いないことを、私は信じる』
銃口をひたとこめかみに押しあて、ウエッダーは引金を引こうとした。
『止せ』
思わず、とめた。とたんに、カチリと爽やかな音がした。
ウエッダーはにこりとした。
呆れた男だ。そこまで信じられるものだろうか。
『買いかぶらねえ方がいい、偶然が重なっただけだろう』
『そうだ、この中尉を撃ったのも、私ではない。運命が、かれを死なせた。それだけのことだ』
ウエッダーは断末魔の中尉を医者らしくもなく、冷やかに見守っていた。
戸咲楼の裏口から出た城之介には、しかし、まだ疑問が残っていたのである。
ウエッダーの運命論には、どこか空疎なものがある。あの拳銃は、中尉をまともに狙ったのではないか。

だが、その思いは、すぐにうち消された。中尉を殺してまで、城之介を助ける気持になったとは思えなかった。そこまで自惚れることはできない。城之介がこれまで知っている異人たちは、どんなに日本を愛し、日本人に親しみを持った者も、西欧人というだけで、胸襟の開き方が違った。それは紅毛碧眼同士の体臭の呼びあうものと解釈するしかない。国を超えた親近感がある。文明国同士ということか。
ウエッダーの言葉の中には、日本のさむらいへの賞讃があったが、城之介の孤独の心は、これを受け入れようとしなかった。いまかれがもとめているのは、休息とすべての桎梏からの解放だった。

表向きは廓芸者は、客と寝ることはできない。そのために遊女がいるのだからあくまでも芸者は芸で、座持ちをするのがたてまえであった。
もっとも、たてまえは、どこにでも裏がある。芸者も、廓内でこそ、三弦や笛や太鼓や踊りが本職でも、一足出れば、客に抱かれるのは自由で、ただ、玉を十二本つけて手続きしさえすればいい。一本が二朱だが、これは一時間の玉。十二本といえば、三分で、これに祝儀を二分つけるから一両一分。腕のいい職人の一月分の稼ぎにひとしいから、高い遊びである。
港崎町の遊廓で遊ぶのは景気のいい商売人が多く、麻の大財布に銀貨などざくざく入れたのを、丁稚や手代に担がせてくりこんでくるという有様だから、他の世界とは違う。
小蝶をその夜、連れ出したのは、
「豚屋の旦那」
と、呼ばれている、豚屋鉄五郎。
居留地の豚や牛の肉の需要を一手に賄って、大儲けしている男である。前にも度々述べたように、こうした開港地の景気は、一つ当ると巨富が積める。豚鉄はもともと豚殺しからまたたく間にのし上った男だから、子分たちを多勢擁し、いろいろと手を出して、勢力を築いていた。
太田新田の埋立てにはじまり、沖仲仕などの権利も一手に摑んでいる鈴村要蔵部屋との対立勢力であった。
この豚屋鉄五郎こと豚鉄は、小蝶に惚れこんでいる。これまで、気前よく、祝儀をはずんだりしていたが、小蝶の方では、
「何さ、豚鉄なんか」
と、啖呵をきって、
「あたしゃ、こう見えても江戸っ子なのさ、神田ァ講武所芸者の育ちだからね、四ッ足なんざァ、憚りさま、口にしたこたァござんせんのさ」
居留地で四ッ足を食べるのが、新しがり屋たちの自慢だが、小蝶は平気で江戸っ子を通している。
そんな意地を張るところが、豚鉄にはかえって好もしい

のか、
「気に入ったぜ、寝間でも、その調子でやってみな、そのほうが、抱き甲斐があるってなもんだ」
　ぽんと祝儀に払ったのが五両。
「一ト晩だ、来な」
　人間的には嫌いでも大金にはやはり心が動いた。
　小蝶は、その夜すっかり、きすぐれていたが、半分、自棄のようなところもあった。
　豚鉄は女房が面倒だから、居留地の異人館に連れこんだ。ドイツ人夫妻が一時上海に渡っていて、留守なので、清国人の使用人が留守番している。
　こいつを半分威しで、半分金を摑ませたのだ。
「四ツ足嫌いのおめえでも、寝台で一ぺん抱かれりゃ、豚好きになるわな」
「いやだよ、こんなところは」
　小蝶は寝台に押し倒されると、抵抗した。
　五両で、ついふらふらとなったが、洋館の雰囲気が、酔いを醒ましてしまった。
「いやだったら、こんな……」
　寝台で、寝たことはない。況や男に抱かれたこともない。
　妙にふわふわしているし、床よりも、ずっと高いのが無気味だった。
　それだけでも、我慢がならないのに、豚鉄のからだが、黒い仁王様のようで、情感も何もない。
　扉を閉めると、豚鉄は、すぐに帯を解き素ッ裸になった。
　黒いからだは筋骨隆々として、刀傷やら、匕首の傷やら、あるいは豚に嚙まれた傷もあるかもしれない。その上、あっちこっちに、およそ美的とは正反対の、こまかい刺青がある。
　女の生首や、桜の花に短冊や、そうかと思うと、雲があって、雷さまが彫りかけのままだったり、妙なところにウンスンカルタの剣があったり、とにかく、汚れた壁の落書きのような、てんでばらばらの刺青は、ただきたならしいだけだった。
　この男の無教養さと野獣性が、小蝶には、がまんならなかった。
「いやだよ、いやだったら、何をするのさ、放して」
「やい、いまさら、何を言いやがる。五両払ったんだ、五両で買ったてめえのからだだ。つべこべ吐かねえで、裸になりやがれ。五両出して買った以上、今夜ァ何がなんでも、おれの思い通りに」
「ちぇっ、五両がなんだい、五両、五両って大きな顔をするんじゃないよ。たった五両くらい、何さ」
　抗ったが、男の力にはかなわない。帯を解かれ、座敷着を剝ぎとられ、もう、それ以上、脱がせる間が待てないのか、豚鉄は、咽喉を鳴らせて、飛びかかり、寝台に押し倒

した。
　こういう男は、若いときから、女を犯しつけている。普通なら、抱き竦めて、唇を吸ったりしてくるところを、やにわに両肢を抱いて倒すと、股裂きのようにぐうっと左右に押し開くのだ。いかに貞操堅固な女の膝が固いといっても、これでは守りようがない。
　豚鉄の股間には、すでに正視できないほどのたかまりがある。かれのほうは異人館で芸者を犯すことに、異常な興味をおぼえているのだった。
「いやですったら、お願い、親方さん、堪忍して」
　勢いのよかった小蝶の声が、弱まって哀願するような調子になった。
　どんな女でも、股が裂けるかと思われるほど下肢を左右に押しあけられては、意地も張りも失ってしまう。
「ねえ、堪忍して、五両は、お返ししますから、あ、あ……いやっ！」
　男の荒い鼻息を内股に感じて、小蝶は、思わず、はしたない声を洩らしてしまった。男の燃えるような、どろどろに濁った視線を恥ずかしい部分に感じると、どうしようもなく下半身が萎えてゆくようであった。
「おねがい……親方さん」
　と、あえぐ声も力を失ってきた。
　豚鉄は、それを待っていたように、のしかかってきた。
「いいとも、楽しませてやら、たっぷりとな。この豚鉄さまから離れられないように、味を教えてやらあな」
　そのとき、邪魔な音がした。
　親方、親方、と、声がした。子分の声であった。階下で待っているはずだったのである。
「親方……悪りいが」
「何だ、いまごろ」
「ちょっと……その、ちょっと都合が悪りいことが」
「なんでえ、そこで吐かせ」
　せっかくのところを邪魔されて、豚鉄はいきり立った。
　子分のほうは弱りきっている。
「いけねえんで、その、お内儀さんが、へえ……いま、こっちへ来なさるって」
「な、なんだと！」
　これには、さすがの豚鉄も愕然として身を起した。その隙に、小蝶は、寝台から、転がり落ち、襟をあわせた。もう少しで、男を容れるところだったのである。女体は、あいうかたちになると弱い。観念したところに、思いがけぬ救いの手だったのである。
「お咲が、おい、ほんとうか」
「へえ、いま、平七の野郎が、先触れで来やがったんで」
「何が先触れだ。ちぇッ、どうして、ここがわかったんだ。くそっ、いめいめしい、追い帰せ。何とか言って追い帰

せ」
「そいつァ駄目だ、親方、親方の前だがね、お内儀さんときたら……」
「やい、何だ、何が言いてェのだ」
「へえ、親方よりおっかねえ。お内儀さんは、かっとなると、尻っぺたをお出し、とくるからね」
「やい！ うぬらのうす汚ねえ尻を」
「焼火箸でお仕置でさァ、真っ赤に焼けたやつで、ジュッとやられると、十日は歩けねえ」
「あいつら、鼻欠け（夜鷹）を買ったむくいだと思っていたが、そんなことをしやがるのか」
「だから、親方、逃げておくんなせえ、わっちも尻に帆かけやすで」
　そうでなくとも、城之介に荒されたあとなのだ。豚鉄は、逃げ支度をはじめた。

　女房のお咲には豚鉄も弱い。小蝶を閉じこめて置くように留守番の清国人になにがしか握らして逃げだした。
　それを待っていたように、若い男が入ってきた。
「さっきの女は、どこにいるね」
「あ、あんた、だれ」
「なァに、名乗るほどのこたァねえ、親方がね、よそへ連れてゆけってんだ。それでおいらが……頼むぜ」
　小粒銀を握らした。
　清国人は、とぼけた顔で掌で躍らせると、歯にあてて、ちょっと噛んだ。清国では、贋金が横行しているから、噛んでみるだけで、真贋の区別をつける者が多い。
「謝々」と急に相好を崩して、中へ招じた。
「早くしてくんな、南鐐銀が贋のはずァねえじゃねえか」
　若い男は舌打ちして、うしろを見た。
　その男は、豚鉄の身内のような口吻だったし、そこらに見かける一寸崩れた町人の恰好で、別段、さっきの連中と違いはない。
　だが、小蝶を伴ってこの異人館を出ると、足早に、路を曲り、
「安心しなせえ、豚鉄の身内じゃねえんだ」
「え？ それでは」
「ある人に頼まれやしてね。まあ、すぐにわかりまさ、ちょいと急いでおくんねえ、あの豚屋が来るといけねえ」
　そのある人、というのが誰かわからないうちに、小蝶は一軒の家に連れこまれた。それは衣紋坂の近くの駕籠甚の家だった。
「あの、あたし、廓に帰らなくちゃあ」
「へえ、すぐに送っていきまさ。その前にちょいと、文を書いて貰いてェので」
「文を？」

「へえ、ちょっとね、小蝶さんが、ここにいなさるってことさ、それだけでいい」
　とにかく救けて貰ったのだ。拒めなかった。言われた通り、書いた。芸者だから、平仮名しか知らない。小ちゃう、と最後に書いたのは、言われたわけではなかったが、そういうふうに書くものだと思ったからである。
「ああ、これでいい、一寸、待っていておくんなさい」
　ところが、その男が出てゆくと、入れ代りに、巨きな男が二人入ってきた。
　小蝶は、ぎょっとなった。二人の人相が、険しかったからだ。が、男たちは、あいまいな笑いを浮べて、
「恐がることはねえ、なにもしねえよ」
「暫く、騒がねえでいて貰いてえのさ」
　そして、一人が小さな骰子をとりだし、博奕をはじめた。五文十文の小便博奕である。
（何かしら、どうしたのかしら、あの手紙を……）
　豚鉄の身内ではないことは確かだった。だが、それだけにまた、一層無気味だった。
　小蝶が立ったり坐ったりしているころ、その手紙を持った男は、芸者長屋の小蝶の家へ来ている。お雪の雪乃が出ると、
「小蝶姐さんをお預かりしていやす。旦那お一人でお出でになっておくんねえ」
　雪乃に言った。口上だと言うのであろう。奥に城之介がいるのを承知しての言葉だった。
　場所は、太田部屋の辰巳小屋という。
　町外れの埋立て地のあとに飯場がある。その一人であろう。
「まあ、小蝶姐さんが」
「計られたな……しかし、誰であろう」
　城之介は、敵の姿を思い浮べた。織部をはじめ、母の仇は次々と斬った。逆恨みされることも覚悟の前である。相手が誰かということであった。
「あの若い衆は、太田部屋の人です」
　いつか見たことがある、と雪乃は言った。祭礼のとき部屋のかんばんを着込んで若い者を怒鳴りちらしていたから、間違いない。
「――辰巳小屋といったな。行けばわかるだろう」
　小蝶を囚われたままにしてはおけない。雪乃のことや、かれ自身、こうやって、世話になっている。その泣き所をよくもおさえたものだ、と思った。
「――でも、ここを出ると、すぐ目立ちますから、お役人に」
　戸咲楼での惨劇が、大門前の警戒を一層きびしくしたのは、いうまでもない。
　廓内での捜索には、惣名主の方で反対した。

この間も、大山鳴動して、鼠一匹もとれなかったではないか、というのである。
「ここは、そこらの岡場所とは違うのじゃい。大公儀お宥しの異人接待場所だからな。一人や二人の殺しで、大門を閉められますか」
ほかの青楼のおやじたちも同感だった。
「一人や二人死んでも、多勢のお客さまの方が大事じゃがな」
大門を締めたり、客調べがきびしくなると、自然と、客はよりつかなくなる。どうせ泥棒だろうが人殺しだろうが、こういう商売は金さえ持ってくる客なら、
〃お大尽〃
なのである。
「――舟がある」
裏の葦の間に突っ隠してある。
「あたしも御一緒に」
と、いうのをなだめた。
「こいつァおれの仕事だ。小蝶は帰って来れるようにしてやる」
城之介は、小舟に身を潜めて、濠を渡った。
暗い夜の闇だけが頼みであった。助けるも助けぬも、役人たちの目に触れたら、おしまいだった。
(誰だろう?)
そこまで、頭をはたらかして、呼び出した者。
小蝶の家とガンをつけたのは、的確であった。普通なら、そのまま、奉行所へ注進すればよいことなのだ。
(おれに怨みを含む者だ。ただ逮捕させるだけでは、憎しみが霽れぬというやつだ)
考えるのも、しかし、面倒くさかった。
物陰を拾って、辰巳の小屋へ近づいた城之介は素早く飛びこんだ。
博奕をしていた若い者が三人、物音を怪しんで、長脇差をつかんで立ち上った。
「だ、誰でえ」
「わしだ」
「鷲も鷹もここにはいねえ」
むやみに斬りかかってきた奴がいる。一合と交えずに城之介はこれを斬り伏せて、
「小蝶が捕まっているのはどこだ。案内しろ」
どうせ牢などあるはずもない、と思ったが、おぞけをふるった子分が、襖の方を指さして、ふるえている。
城之介が一歩近づいたとき、
「驚いたことでしょう」と、冷たい女の声がした。むろん城之介へ語りかけたのである。
「珊瑚のお大尽が斬られましたね。お雪というひとが、聞いてまわっていたそうだから、あなたさまは、そのお雪さ

んの長屋にいると狙いをつけました」
「――誰だ、そなた」
「もうお忘れでございますか。ほほほほ、小蝶さんが遠出したのが、運の尽きでございますね。私には、太田部屋の方々が手を助けて下さいます。夫の仇討ちを仕りとうございます、城之介という、憎い男を……討ちまする」
静かな声音の底に、憎しみの炎が、めらめらと燃えているのが感じられ、城之介は襖を隔てたまま佇んだのである。

死の盃（さかずき）

女の静かな声音には記憶があった。この猥雑な居留地で、その声に接したときは、意外すぎたほどだったのである。
(幸江か!?)
三輪重左衛門の妻であった。
三輪は、城之介が片腕を斬って、死に至らしめている。偶然のことから、幸江を救う結果になったが、そのとき、さすがに城之介は名乗ることができなかったのだ。
「――そなたか」
その幸江が、策を弄して城之介をおびき出す。
夫の仇を討とうというのだ。城之介が三輪を斬ったのは、母の仇ということが判然としたからだ。元兇の高島織部も討った。
母を犯し、自殺に見せかけた上で、家に放火する、という残忍な行為への十年目の復讐だったのである。
毫も恥じるところはなかった。
「――そうか、そなたが、おれを討つのか」
城之介の慨歎に応えるように襖がひらいた。
粗末な人足たちの飯場では、その部屋だけが幾分ましな

造作になっていたが、それでも、そこに坐った品のいい人妻には、あまりにもふさわしくなかった。
　やはり幸江だった。
　あの白い細面をまっすぐに、こちらにむけて、坐っていた。
　切れ長の眸は、城之介を正視しながら、ただ、怨みだけを燃やしている。英船アーミスチス二世号に誘拐されたのを救われたことも、忘れているようであった。
　もっとも、城之介とのことがなければ、三輪と生き別れになることはなかったのだから、そのことを感謝する筋合いではないかもしれない。
　幸江には、刃物も飛道具もなかった。きちんと両手を膝に置いているのである。
　この女性にどうして城之介が討てるだろう。
「――あいにくだが、私は討たれてやるわけにはいかぬ」
　城之介も対坐して言った。
「母の仇はあらかた討ったが、まだ父の仇が残っているのだ」
「そのようなことは、わたくしの知ったことではございませぬ」
　冷たく澄んだ声であったが、思いがけなく、しぶとさを感じさせる言葉だった。
「三輪が何をしたか、わたくしの嫁ぐ前のことなれば、知らぬこと。わたくしは武士の妻として、夫を討たれては黙しているわけにはいかないのでございます」
「よかろう、左様なれば、立ち合うのもよい。だが、遠慮はせぬぞ」
　むろん、この女性一人を斬るのに、どれほどの手間もかからない。ただ、この辰巳小屋が、鈴村要蔵の太田部屋だということである。
　人足の元締めで、ハマの夜はこの勢力が支配している。
　幸江と太田部屋とどういう関係か知れないが、小蝶をさらったのも、太田部屋だとすると、容易ならぬものがあった。
　話している間も、人相のあまりよくない連中が、出たり入ったりして、ひそひそ私語したり、威嚇するような視線をむけて、時々、故意に匕首の音を立てたりした。
　明らかに、かよわい女性への加勢であり、不逞浪人のジョーへの牽制であった。
（また何人か斬らねばならぬのか）
　人足たちは無謀だ。単純な連中が多い。
　幸江への同情であろうか。三輪が生きているうちは、役人への憎しみの方が多かったにちがいない。それが三輪の死とともに、転換したのだろうか。
　それとも――
（どちらにしても、同じことだ）

　斬るか、斬られるか、剣を抜けば、その先はかれ自身にもわからないことだ。
　それに、お尋ね者というハンデがある。
　こうやって話していることにせよ、安心はならないのである。城之介の腕前を知れば、お上の権威を借りようとするにちがいない。誰か一人、番屋に走れば済む。神奈川奉行所の役人たちは咽喉を鳴らして、襲撃してくるだろう。
「――相手をするまえに」
と、城之介は言った。
「おれを呼びだす囮にした者を放してくれぬか」
「あの芸者を」
「そうだ、小蝶という者だ。おれとは何の関係もない」
「そうでしょうか」
「あれは、雪乃の……」
「お雪さん、でしたね。お雪さんとは、関係が深いと仰有る……ほほほほ。わかっております。すぐに、廓へ帰れるようにとり計らいましょう」
　幸江は近くの男に、はっきりとした言葉でそうするように言った。
「――これでよろしいでしょうか」
　幸江はにこりとした。さっきの、ひきつるような笑いではなく、これですべてが思い通りにゆくという安らぎに似たものが、その表情を美しいものにしていた。
「――わたくしと、果し合いをして下さいましょうか」
　あらためて幸江が言ったとき、微かな疑惑が浮んだのである。
　果し合いとは、何を意味しているのであろうか。城之介を見る眼に、あの憎しみの炎がなくなっていることに気がついたとき、幸江の細面に匂うような微笑がひろがって、
「幸江は、あなたさまと、剣を交えようなどと大それたことは考えませぬ」
「……」
「所詮は、蟷螂の斧、女の細腕で、何ができましょう……それに万が一、万にひとつも、あなたさまがわたくしに負けて下さったとしても、わたくしには、刺せませぬ」
「……」
「わたくしが、あのいやらしい異人たちに手籠めになりかけたところを、あなたさまは助けて下さいました。でも、夫を死なせたのも、あなたさま」
　瞼がふるえ、眸が潤んで、いっぱいに涙が盛り上ってくるのを、城之介は瞶めていた。幸江は何を言おうとしているのか、少なくとも、かれに救い出されたことに感謝しているのは間違いなかった。
　その感謝と憎しみの相剋に悩んでいたのであろうか。
「わたくし、考えました。武士の妻らしくない果し合いと、

お蔑みなさいましょうとも、わたくしには、ほかに方法はないのでございます」
「申されるがよい」
「お受け下さいますか」
「受けよう」
このとき、城之介は、あのウエッダーの言葉を思いだしている。
——運命がかれを死なせた。それだけのことだ……。
剣を以ってしても、拳銃を撃ち合っても、結果はそれでしかない。可能性の多寡の違いだけである。
城之介は、父母の仇を討つことが、かれの人生に課せられた運命だと信じて行動してきた。これまで、多くの危難をくぐり抜けて来ることが出来たのも、かれの使命が終っていないからではないか。
非力の幸江は恩讐の板ばさみに悶えながら、ハンデのない勝負を挑もうとしているようであった。
「——あれを」
と、背後を振りかえって、幸江は命じた。
「用意のものを持って来て下さい」
そこに運ばれたのは、切子硝子のコップだった。同じものが二つ。
中は葡萄酒らしい。同じ分量が入っていた。
「わたくし、西洋のお酒を飲んだことがありませんの。これがはじめて」
「わかった。一方に毒が入っているのだな」
「はい」はっきりと幸江は答えた。「どちらかに……どちらかを飲むと、一人が死なねばなりませぬ」
お盆も丸い。幸江は話しながら、静かに廻している。お盆を廻しただけでは不足のように、コップをあちこち入れ代えた。何かのゲームでもしているように、微笑すら含んで、楽しげであった。
「わたくしが先にとっては、不公平でございますわね、あなたさまが、おとり遊ばせ」
こうした幸江の態度は、太田部屋の男たちには予想外のことだったらしい。
小屋の中には、二三十人の人足たちがいたが、日ごろの威勢はどこへやら、固唾をのんで見守っているのだった。
幸江の姿は、誰の目にも、品のいい人妻であり、どんな男にも、一打ちで倒せる、楚々とした姿だった。その細いからだのどこに、この度胸があるのだろうか。
コップに毒を入れさせたのも、もとより、幸江は見ていないのだ。彼女自身も運命の手におのれを委ねていた。
「——おもしろい」
と、城之介は笑顔で応じた。
「しかし、幸江どの、この勝負は、おれの勝ちだ」
「——そうかもしれませぬ」

「おれには、まだせねばならぬことがある」
「……」
「人間の運というものは、勢いの赴くところに従って、塞がれも拓かれもする。おれには毒がまわって来ない」
こう言い、無造作に城之介はコップをつかんだ。
「ためしてみましょうね」
仲のいい夫婦が異国の酒を愉しんでいるような姿であった。
二人は、殆ど同時にコップをあけている。
のみくだしてから、一瞬の沈黙があった。幸江はすぐにもとへ戻っていた。
「弱い女でも、死ぬことを覚悟すると、何でもできるものでございますわね」
幸江は、のみ干したあとのコップを静かに盆の上に置いて、
「あのとき、救けて頂いてから、御一緒にバッテイラでもどってきて……ええ、あのオランダ舟大工の屋敷の前でお別れして……そして、運上所までくる間……あの、僅かな時間が、幸江には、いままでに、一番、倖せな時間でございました」
「……」
「ええ、そうなんです。運上所に来て、そして、それから、あのことを聞いて、そうして、夫の死体が船から戻ってくるのを見たとき……わたくし、あんまりな皮肉な運命に、泣きました。なぜなら、あのときほど、嬉しくて、倖せな時間など、これまで、一度も味わったことがなかったのですもの」
話している言葉が、しだいにもつれて来て、顔色が変ってきた。
「幸江どの！」
「いいえ、いいんです……城之介さま。もっと聞いて」
幸江は甘えるように言った。人妻なのに、若い娘のように感じられた。
「そうなんです、あたし、三輪に嫁いだのも、親の決めたことでした、年寄りを安心させるために、あんな男の妻になって……一度でも、嬉しい気持になったことはありませぬ」
「……」
「それが、あなたさまとのあの時間……お別れするのが、惜しかった……ええ、あのあと、いつか、お逢いできる日を楽しみにと」
語尾が、ひくっと、笛のような音に変って、幸江は崩れ折れた。
「幸江どの」
思わず、城之介は手をのばして、抱き起した。
「幸江どの、しっかりするのだ」

「城之介さま……あたし……」
何か言おうとするのだが、言葉にならず、わなわなと顫える唇が、しだいに色を失ってゆくのが、はっきりとわかった。
「医者だ、早くせい」
城之介は、狼狽する男たちに叫んだ。
「あの医者がいい、アメリカ人の医者だ、早く呼んでこい」
「アメ公の？　へえ、何てェ野郎で」
「港崎町にゆけばわかる、戸咲楼だ。アレキサンダー・M・ウェッダーだ。顎に赤鬚がある男だ」
「へえ、合点だ」
「急げ、毒をのんだと伝えろ」
それからほかの連中が間誤間誤しているのを叱りつけて、てきぱきと命令した。
「水を沢山のませるのだ、早く……」

医者の赤鬚を見ると、城之介は入れ代りに小屋から出た。混雑にまぎれて姿を隠そうと思ったのだ。
（おれは死なぬ……）
幸江の心情を掬む気持はある。が、いまの城之介に何がしてやれよう。運命はかれにいのちを永らえさせた。残りの仇を討つために、城之介はまだ死ねないのだ。

「――旦那」
うしろから跟けてきた影がある。
「ちょっと、旦那……」
影は一人ではなかった。二つ、三つ、五人、と数えた。
冷える夜だった。初冬の港は、夜気が肌を刺し、風は耳を剪るようであった。
その冷たい闇の中から湧いたような影である。五人は自然と取り巻くようなかたちになった。
「――旦那、城之介の旦那……」
「何の用だ」
「へえ、わかっているじゃァござんせんか」
「……」
「旦那ァお尋ね者だ。恐れながらと訴えりゃァ、御褒美に与るんだ。そうじゃァござんせんか」
「そうだとしたら」
「へへへ……そこがそれ、魚心ありゃ水心と言いやす。え、ものは相談だ、なあみんな」
他の四人も、愛想笑いをした、が、片手は懐ろへ突っこんでいる。匕首の柄を握っているらしい。
「きさまたちは太田部屋の者か」
「へへへ、どうだかね」「どこの部屋だって」「どこだっていいやな。わっちらはお尋ね者じゃァねえってことさ」
「チットくれェの悪いことはしますがね、旦那のように殺

しはやらねえのさ」
小悪党たちだった。強請たかりは日常でも、大きなことはやらぬ。表向きは人足だとか馬丁だとかだろう。小さな悪事にまで奉行所は手がまわらないのでお目こぼしをいいことに、横行しているのだ。
「ねえ旦那、一人頭十両、出しておくんなさりゃ、余分なことはいいませんぜ」
「たったの五十両、それで旦那ァ助かるんだ」「でなきゃァ……」
その威しの言葉が、城之介の怒りを誘った。
「でなきゃァ、何だ」
「へへッ、首の座でんね。戸部のくらやみ坂の刑場が、旦那の首を待っているってね」
「そいつが見物できねえようにしてやる」
袖が翻った。一人がのけぞるのを見ると、みんな匕首を抜き放った。こうしたことには馴れた輩であった。抜くと同時に、からだごとぶつかってくる。血の異臭も、なかまの死も、この連中には何の制馭剤にもならなかった。手加減を許さぬ激しさだったのである。匕首が袖を掠め、城之介の血刀は、二人目を斬ると同時に、背後から襲ってきた奴を殴った。殴るつもりではなく、身をひねって、一颯したのだが、相手が近づきすぎていたので、鍔が頬げたを殴りつけることになった。匕首は腋の下を抜け、掠り傷ではあったが、城之介の肌を傷つけている。
手がからんだまま、どどっと、よろめき走った。これを蹴放して、四人目を斬り伏せた。一人になったことで、さすがに、恐怖を感じたように、残りの奴は、身をひくと、距離を保って、
「ようし、役人を呼んでやる、役人を」
「呼べるものならな」
広い太田新田の原である。多少の声を張りあげたところで、大したことはない。
そいつは匕首を城之介に叩きつけると、韋駄天のように駈けだした。草履を蹴あげるように脱ぎ捨て、狂ったように走ってゆく。
追うことはない。そのひまに、ここから少しでも遠ざかることであった。
この連中が太田部屋の者だとすると、ますます身辺は危険になってくる。
まず、廓へもどって、小蝶が実際に帰っているかどうか、確かめねばならない。
城之介のために、とんだ巻き添えを食ったことだ。
だが、廓へもどることはできなかった。神奈川奉行所御用の提灯が、幾つも見え、町々の会所の名を書いた提灯も宙を飛び交って、いつの間にか、かれは、遠巻きに包まれていることを知ったのである。

（逃げられぬか）

血を拭っておさめたばかりの白刃にふたたび命を託さねばならない。町の者も役所に駈り出されて、

〃御尋ね者のジョー〃

の狩人に加わっているであろう、恩賞目当てとばかりはかぎらない。この人々を斬っても何の意味もないのだ。

このあたりで身を隠すところといえば、城之介のよく知っている場所は、豚鉄の家くらいのものであった。

末広町の豚鉄の納屋に入ると、相変らず、豚や牛の肉がぶら下っていた。いつぞや、ここで豚ならぬ死体の肝とりを見たことがある。

脳味噌と生肝をとり出して高価に売るのも、豚鉄のサイドビジネスだった。豚も人間も、死んでしまえば、鉄五郎には同じだというわけか。そこらの壁や床に飛び散ってこびりついている血のあとや、肉のかけらは、だから、豚のものか人間のものかわからなかった。

城之介は納屋の隅に目立たない場所を見つけて一眠りすることにした。ここならば、外の騒ぎも入って来ないであろう。誰だって、この異臭は好きになれない。その安心感がある。

話し声が聞えてきたのは、うとうととしかけたばかりのところだった。

「――ジョーが、太田部屋の若い衆を、ほんとうかえ」

女の声だった。

「へえ、十人ばっかし斬ったそうで、騒ぎでさあ」

「あいつなら、やるだろうよ。だけど、ジョーもおしまいだねえ、太田部屋の人足たちがみんなで探しだしたら、蟻一匹這い出ることもできないだろうね」

「へえ、ここらが年貢の納めどきってわけでさ」

「ジョーのことはそれでいいさ。ところでうちの親方が芸者を異人屋敷に連れこんでナニしたってのは、本当かえ」

これは、お咲だった。

あの色きちがいといった方がいい中年女の浅ましい姿を、城之介は思いだした。少年の玄徳を抱いて、狂っていたあぶらぎった肌を思いだした。

「――へえ、小蝶といいやしてね。で、ですが、お内儀さん、あっしが洩らしたなんてェことは、親方には」

「ああ、言やしないよ。そうかい、小蝶かい。畜生！　小蝶か、なんだい、知っているよ、大したことはない女さ」

「へえ、へえ、お内儀さんと比べりゃ月とすっぽんで」

子分はお追従しながら、腹の中では、すっぽんはこの婆ァだな、と嘲っているようであった。

「ああ、憎らしい。畜生、どうするか見てやがれ。三公、そいで、その手配をしやがったのは、誰だえ、松吉か、米か、六か、え、知っているだろう」

「そ、そこまで知らねえんで、へえ」

「じゃァ、小蝶はいま、どこにいるんだね、え、そいつを……」

城之介は暗がりで身を起した。

「――お咲、それをおれも聞きたいところだ」

と、ゆっくりと近づいていった。

豚屋火事

その瞬間の、お咲の顔といったらなかった。まるで脳味噌を抜いたあとの死体が歩いてきたかのように、愕然となって、口もきけずにいた。

豚屋の若い者も、これは反射的に懐ろの匕首をつかんだが、やはり凍りついたように動けなかった。

たったいま、城之介の悪口を言っていただけに、そこに突然あらわれた姿が、まるで、悪夢のようにかれらにはうつったのかもしれない。

「――どうした」

と、城之介は笑いながら言った。

「お咲、顔色が悪いぞ」

「――ジョー……」

「そうだ、太田部屋の人足たちの手に余ったらしいな」

「……」

お咲は、瞠目したまま、じりじりと、あと退りしていた。

隙を見て逃げようとしているのだ。

「お咲、騒がぬほうが、身のためだろうな」

「え、ええ、それは……」

「知っているはずだ。きさまは、おれを売った」
「旦那、それは、あたし……いいえ、あたしじゃない、げ、玄徳が」
「玄徳は、人を売らぬ。おれの目を節穴だと思うか」
　両手は遊ばせているが、いざとなると電光の速さで刀が走り出る。その凄絶さを知っているだけに、お咲は、からだが硬くなって、頸までが動かないような感じだった。
「おい、そこの……」
　と、若い者のほうへ、一瞥を投げて、
「三公とか称ったな」
「へえ、へえ、三次で」
「小蝶のことを饒舌っていたな。小蝶のいるところを教えて貰おうか」
「へえ、それがねえ……」
　三次は首を竦めながら、城之介の顔色を窺っている。言ったものか、どうしたものかと、こす狡く思い迷っているようだ。
「どこだ」
「へえ、それが、ちょっと……」
「知っている口吻だったぞ。何処にいる、吐いて貰おう」
「し、知らねえ」
「知らなければ、それまでだ」
　城之介の顔が、ふっと笑いを過らした。
　刹那、袖が翻った。腰間からすべり出た白刃が三次の肩先を打ち割るかと思われた。
　が、それは三次の悲鳴をあげさせただけで、ひたと、肩の上で制止した。
「きさまらに言わせれば、どうせ、城之介のいのちは、旦夕に迫っているらしい。それなら尚更だ、地獄へ供連れしてやろう」
「ま、待っておくんなさい、し、知ってまさあ、ちょっとだ。へえ、ちょいと小耳にはさんだだけで」
　へなへなと、刃の下に三次は坐りこんでしまった。
「言え、早く」
「しゃ、三味線屋で」
「あの、末広町の、か」
　いつぞや、役人の小田切源内を斬ったところである。三味線作りの猫の皮を剝いでなめしていた親父の顔を思いだした。
「三次、嘘はもっともらしく、吐くものだ、その首がよほど惜しくないと見えるな」
「ほ、ほんとうなんでさあ」
「小蝶は太田部屋の者が圧えていた。三輪重左衛門の妻女の頼みでだ。おれとの話がついて、小蝶はかえした。廓へかえしたはずだ」
「へえ、それでわかりやした。そんとき帰さなかったんで

さ」
「なに!?」
「太田部屋の奴らのするこった、一筋縄でゆくやつらじゃねえや」
「……」
「狂った時圭で、二時をさして三時をうちやがる。十二時に合わせといた針が逆廻りするのだって珍しかァねえので」
「おれを瞞したというのか」
「へえ、そうでげしょうねえ、たしかに三味線屋に連れこむところを見たんでさあ」
　三次の言葉は、信じかねるものだったが、白刃が肩で光っているのだ。その姿勢で瞞せるほど、度胸のある男ではあるまい。
「三次、豚鉄をここへ呼んでこい」
「へ、行ってもいいんですかい」
「へんな真似をすると、このお咲のいのちがない」
　城之介の刀は、お咲の胸もとへ突きつけられていた。
　だが、このとき、すでに、この納屋は豚鉄の身内に包囲されていたのである。
　お咲と三次の挙動を怪しんだ哥兄分が盗み聞きさせようとして、城之介の出現を知ったのである。
「どこから入りやがったか」
　豚鉄はにんまりした。
「どこからでもいいやな。どうせ舎利にしてしまうんだ。赤隊に引き渡すか、御奉行に御注進といくか」
　とにかく、逃がさねえようにするんだ、と、遠巻きにさせた。
　掌の中にお尋ね者が転がりこんでこようとは、あまりにも思いがけなくて、豚鉄はいい智慧が浮んで来なかった。
　せっかくの好機だから、出来るだけ高く城之介を売りたいという気持だった。
「すっかり固めやした。もう、いくら城之介がからくり変化をつかっても、逃げ出せるもんじゃござんせん」
「からくり変化はよかったな。だが、お奉行所に訴人するよりも、うち倒してふんじばったほうが、恩賞もでっかいだろうぜ」
　欲を出すと限りがない。
　この思案の間に、城之介は怪しい気配に気がついていたのである。三次を小蝶のところへやろうとして、ふと、気がついた。
　じろりと、お咲と三次を見やって苦笑した。
「どうやら、話が妙なことになったようだ」
「え!?」
「おまえたちと一緒に死ぬことになりそうだ」

豚鉄は豚肉牛肉ばかりでなく、いろんなものに手を出している。生糸の相場も海産物も、それから鉄砲弾薬、なんでも利のあるものなら、首を突っこんで、半ば強引に利権を得た。買占めもやる。品物の少ないときは、一船分、荷揚げもせずに押えておくだけで、儲けがある。

その商品の火薬を吝しみなく、納屋のまわりに積み上げさせた。

「いいか、お咲をなんとかうまいこと言って、呼び出してこい」

「へえ、なんといえばいいんで」

「そこァ考えろ、ジョーの野郎に気どられねえようにすることだ」

米と呼ばれる子分は、納屋に近寄っていった。

「――姐さん、どこですィ、お出でになりやせんかい、姐さんえ……」

返事があった。入っておいで、とお咲の声がした。

むろん、この男も、城之介の人質になっただけだった。

「どうだ、お咲、一緒に心中するか」

「いやですよ、あたしゃ」

「おまえが嫌といっても、豚鉄のほうは一緒に焼き殺すらしいな」

豚鉄にしてみれば、お咲など、一緒に死んでしまったほうがいい。いくらでも港崎町にゆけば美い女がいることだと、気が変ったようであった。

「親方、そいつァいけねえ、三公や米も入っているんだ」

「馬鹿野郎、間誤間誤しやがるから、いけねえのだ。火をつけてしまえ」

そこへ馬を飛ばして来た者がある。

「鉄五郎、何があったのだ、出入りでもはじまるのかと、近所で驚いている。この有様ァどうした」

下役や岡っ引を引き連れた奉行所支配組頭の杉浦武三郎だった。

「あ、旦那ですかい、いえね、大したことじゃァねえんだが……」

言葉を濁したのは、まだ恩賞と名誉を一人占めにしたいからだった。

金は多いほどいいが、城之介を捕えるか斬るかすれば、関内で名実ともに顔役になれる。太田部屋の連中が乗り出しているというから尚更であった。

「この有様は、少々の喧嘩とも思えぬぞ、隠すな」

杉浦武三郎は、役人の中でも目はしが利いているし、真面目な男だ。

納屋のまわりに積み上げた火薬の樽や箱に目をつけた。藁や蓆などをかぶせてあるのは、人目を避けるのと、燃え易いためだ。

武三郎がそのほうへ歩いてゆくので、もう隠せなかった。

「旦那、実ァ……あいつらしいんで」

「なに！　城之介か」

「へえ、なにね、はっきりたァわからねえんですが、へえ、あいつかもしれねえ、それで……」

「なぜ、役所に知らせぬ」

「はっきりしねえものを、御注進して恥をかきたくなかったまでですさあ。御覧の通り、あっしには野郎どもが多勢おりやす。とっ摑めえてから、御注進しても遅かァありますめえ」

「ともかく、そやつ、曳きだせ」

悪いところへ来やがった、と豚鉄は横をむいて舌打ちした。

中には、お咲と子分二人が、人質にとられてしまっている。

まともに交渉しても、向うは命知らずで腕が立つ、お咲などは足手まといになるばかりなのだ。

なまじ、役人に出張って来られては、お咲たちを犠牲にしても、と思いついたのが、ふり出しにもどってしまう。

「なんてェことだ」

いまいましくなって、ぺっと唾を吐いた。

杉浦は聞き咎めてふりかえった。

「全くだ、どうして、城之介がここへ潜んだのか。太田部屋の者が何人か斬られたばかりだ」

「へえへえ、なまじっか広すぎる納屋を持っていると大迷惑でさあ」

納屋という語感からくる感じとその造作は相違がある。倉庫といったほうがいいようであった。広いし、中の設備も、重い肉をぶら下げる鉤の下った梁なども、金にあかして、がっしりしたものが作られていた。

杉浦は恐れげもなく、納屋に近寄っていった。

「旦那、大丈夫ですか」

岡っ引などは十手を持ったまま、足が進まなくなって、うわずった声をあげるのを、

「どうした、待っておれ」

と言い捨てて、入っていった。

「城之介、いるか、わしだ」

異様な臭いに、杉浦は、むっと顔をしかめた。

豚や牛ばかりでなく、人間の生胆をぬきとって売る。そんな場所だけに、血の臭いだけでなく、内臓の腐った臭いが、壁にも柱や梁にもしみつき、目までちかちか滲みるような異様な場所であった。

「――城之介」

杉浦は、さらに踏みこんだ。

そのうしろ耳に、城之介の返事が聞えた。

「よく来たな……」

やはり、いた。杉浦は振りかえりざまに刀に手をかけて

いた。
「やるか」
　城之介も静かに手を添えて、
「おぬしが来ようとは思わなかった」
「奉行所の役人として、おぬしを捕縛せねばならぬ」
「そうか、おれの言葉は信じないというのだな」
「そのことは別だ。仇討ちの如何ではない、おぬしは多勢の者を殺めた。その罪は見逃せぬ」
「役人として、か」
　城之介は微かに笑った。失望の翳りが白い面を彩って、杉浦は憎もうとして憎めないおのれの気持を愛しむような気持で抜刀していた。抜刀することで、心のふんぎりをつけたようである。
「来い！　邪魔の入らぬところで決着をつけよう」
　杉浦は対等に斬り合う心算のようであった。
「よかろう、おぬしを斬りたくはないが止むを得ぬ」
　この男だけは教養もあるし、わかってくれると思ったのだ。
　だが、そうした望みを抱くのも、今の城之介には贅沢なことに違いない。
　二本の刀身が間合いをとって対峙した。
「――杉浦」
「命乞いか」
「いや……この勝負、せっかくだが、おれのものだ」
「黙れ」
「おぬしの腕は確かだ。が、おれのほうが何人も人を斬っている。おぬしは、生胴も試したことはあるまい」
「黙れ！　負けはせぬ」
「道場ならば。だが、斬り合いは、所詮、馴れだ、肉と骨は、巻藁の手応えとはずいぶん違うぞ」
「言うな！」
　かっと咽喉を鳴らして杉浦は斬りこんだ。
　刃が交わった一瞬、ほの暗い屠殺場に火花が散った。キーンと響く音の余韻を曳いて、両者は入れ違っていた。互角と見えた刃交ぜだったが、双方とも、はっきりと腕の差が確認できたのである。そのことが一層、杉浦を焦らせることになった。冬にも拘らず、杉浦の額には膏汗がねっとりにじみ、一筋二筋、目の上へ滴ってきた。
「杉浦、退け、おぬしの敵ではない」
「なにを！」
　ふたたび床を蹴って、飛びこんだ。が、床は豚の血で濡れていた。杉浦はよろめき、刃にまるきり力がなかった。
　斬れば、斬ることが出来た。城之介が敢えて刀をひいたのは、杉浦に憎しみが持てなかったからである。
　この斬り合いの隙に、お咲は、逃げようとしながら、膝

ががくがくして、走れない。二人の子分たちも、男のくせに顫えあがって、まるっきり役に立たないのが、お咲には腹立たしかった。
　その間に、しかし、戸外では騒ぎが起っていたのである。
　赤隊の兵隊と太田部屋の人足たちが様子を怪しんで押しかけてきていたのだ。
　赤隊の方はそれでも言葉が通じ難いから、あしらい易かったが、人足たちはそうはいかなかった。
「――城之介にちげえねえ」
「おい、汝ら、隠しているのだろう」
「恩賞を一人占めにしようなんて、ふてえ奴だ」
「そうとも、こちとらァ、さっきなかまがやられたんだ、復讐しねえことには、腹の虫がおさまらねえ」
「あの納屋に隠れているのなら、斬り込もうぜ」
「危ねえ、危ねえ、何しろ凄い腕のやつだ」
「いっそ、焙りだしちまえ」
　止めるひまはなかった。
　人足たちは、莚や藁束などを見て、いい焚物があるくらいに、軽く考えたようであった。
　火薬樽や箱などの上にかぶせてあるのが、火を誘うことになった。
　提灯の火を移した奴がある。
「危ねえ、火薬だ」
　爆発はしなかったが、ぱっと物凄い勢いで炎が吹き上った。
　火は忽ち、次から次へと、火薬に引火して、たちまち、豚屋敷は炎に包まれてしまった。
「逃げろ、危ねえ」
「馬鹿！　お尋ね者がいるんだ」
「そうだ、お役人も入ったのだ」
「助けなきゃあなるめえ」
「火事ァ火消しにまかせておきねえ」
「こちとらあ、お尋ね者を打ち殺して、賞金にありつかにゃあ」
　火と煙はその騒ぎも包みこんでしまうように、あたり一面を舐めて、なおも、どんどん、飛火してゆく。
　この猛火をくぐって、城之介は逃れ出ていた。
　いつぞやの、小舟に乗った裏口から、飛び出したのである。
　杉浦もお咲も逃れることができたかどうかわからない。
　最初の凄まじい火薬樽の火が吹きこんだだけでなく、そこら中油でねとねとしているのだから、火の廻りは早かった。
「杉浦、勝負はこれまでぞ」
　刀を叩き落して、城之介は身を翻したのである。
　この末広町は、新開地のヨコハマの中央から西がいわゆる関内の日本人街で、その居留地寄りにある。中央の運上

所から駒形町の前を通って真直ぐに丑末に吉原道が走っていた。道の両側は沼地だったが、杭を打ちこんで、水面へ貸長屋を建ててあり、色々な商人が借りて商売をしていた。
仮小屋だから、火のつきが早い。まずこの貸長屋が、めらめらと燃えて、折からのつむじ風に、右も左も炎を飛ばされて燃えだす。
むろん、町内にはそれぞれ火ノ見櫓があって、ジャンジャンすり番が鳴り、火消しがえんたちが竜吐水をがらがらと曳きだし、鳶口や手鉤を摑んで走ってくる。
火事に季節もないものだが、それでも冬場の火事は特に悲惨であった。
寒空というのに、火魔は容赦なく猛り狂い、手当りしだいに舐めつくし、あらゆるものを焼き尽さずにはおかない勢いで、炎がのびてゆく。
炎は北へ走って大田町、五丁目、四丁目と舐め、弁天通にも火の手が延びるし、東は、駒形町から、運上所、居留地にもひろがってゆく気配だ。
まず、城之介が考えたのは、小蝶の安否だった。
(おれのために……)
雪乃とは深い仲だが、小蝶には、ただこちらが世話になりっ放しの関係で、その上、迷惑をかけることになってしまったのだ。
(どうしても助けねば)
炎と煙をくぐって三味線屋に走った。まだここまでは焼けていなかったが、夜干しした猫の皮に火ノ粉が舞いおちてきて、異様な臭いをあたりに撒き散らしていた。
城之介は抜刀をひっさげて飛びこんできている。
「おやじ、小蝶姐さんはどこだ」
猫の皮を両手一ぱいに抱えて間誤間誤していたおやじは、
「な、なんじゃい、小蝶も小猫もあるかいな」
「芸者だ、小蝶だ、ここに押しこめられていたはずだ」
「あ、その姐さんなら……」
火事騒ぎで、見張りの三ン下奴が二人とも走り出た隙に逃げたらしい、という。
城之介はほっとすると同時に、雪乃のことを思った。
外へ出ると、凄まじい黒煙が星空を蔽いつくし、巨大な炎の舌が吹きあげて、その熱気だけでも、髪が焦げそうに熱い。
火消しの水や鳶口では、もはや収拾の出来ない大火事の様相を呈していた。この炎が末広町を焼き尽し、衣紋坂の高札前から思案橋を越えて、港崎町に襲いかかるのは、もう時間の問題だった。
「城之介、待てえ」
杉浦が髪を乱して、追ってくるのが見えた。

炎の河

陰暦十月二十日の暁闇である。地は凍てつき、夜気は冷えていた。が、時ならぬ火が居留地を焼き、忽ち暁を熱気と阿鼻叫喚の地獄に変えた。後に豚屋火事といわれる幕末最大の火事になったのである。
豚屋鉄五郎方から出火したのも、ヨコハマにとって不幸だった。たまたま関内の中央にあって、炎が南へ延びれば居留地、西へ走れば港崎町遊廓、北へ飛べば関内の日本人の商家、というふうに、どちらへ向いても大火となる要素があった。
これが西へだけ延びていれば、駒形町と運上所に役宅の幾つかを焼くだけで消えたかもしれぬ。火は風を呼び、風は得たりやとばかりにつむじを巻いて、縦横無尽に火ノ粉を飛ばし、火竜の舌を魔性のように、四方八方を舐めさせて、荒れ狂った。
豚屋のある末広町は、吉原道に沿った細長い町だ。これが忽ち火の蛇となって人々を路上と田圃に放逐したのである。
煙が唸り、火炎の呻きと和して、頭上を渦巻いて走るかと思えば、突然、逆巻いて、路上へ吹きつけ、逃げまどう人を一瞬に煙に巻きこむ。
阿鼻地獄、叫喚地獄の凄まじさは、昨日までの浮かれきった開港地への天の鉄槌かもしれない。墨銀が音をたてて散乱し、財布は二重革にするという、景気をひとり誇っていたヨコハマの有頂天も、ここに終止符を打つかと思われた。
この猛火の跳梁の中で、なお、杉浦武三郎をして、柊城之介を追わしめたのは何であろうか。
神奈川奉行所の支配組頭という肩書への忠誠か。
城之介への怨みか。
「待てえ、逃さぬぞ、城之介」
刀をひっさげて、執拗に追跡してくるのだ。
「ええい、しつっこい」
城之介は相手にする気にはなれなかった。
父母の仇を討つためにこの土地へ来たかれにとって、役人の眼はただわずらわしいだけだった。
「待てえ、そやつを捕えろ」
その声に数人が応じた。こんな混乱の中でも役人根性というか、町内の取締りや番屋に関係している者には、是非の判断よりも、そういう言葉に直ちに反応する性質があるのかもしれない。
「やい、待ちやがれ」

「うぬか、この火事の張本人は」
こんな際だ。追われていると見れば、早呑み込みするのもやむを得ない。
「邪魔するな、のけ」
城之介は刀の峰で打ち倒した。一人は倒したが、一人は身を翻したと思うと、手当りしだいに何か足もとに投げつける。
町内の者が避難しようとして持ち出して、そのまま捨てて逃げた道具類が往来に山積みされている。
それを机といわず、文筥から鏡台、次から次へ投げつけてくる。自棄も手伝ってのことであろう。一人や二人ではなく、わけのわからぬ奴までが、一緒になって投げつけるのだ。
そうやって阻まれているうちに、杉浦が追いついてきた。
「観念せい、城之介」
「たわけな。この大火事に、きさま、どこまでお役大事にはたらく気だ」
「火事は一時のことだ、やがて消える」
「消えたときは、ヨコハマは全滅していようぞ」
「それでもいい、おれは神奈川奉行所の役人として」
「たわけ！」
こういう融通のきかぬ男を相手にしていては、雪乃を助けにゆくことはできなかった。
「ゆくぞ、杉浦」
もはや問答のひまはない。城之介は猛然と斬りこんだ。
腕が違った。人を斬ったキャリアの差も大きい。杉浦は手がしびれ、辛うじて逃れたが、散乱した木箱に足をとられてよろめいた。黒煙がひとかたまり、唸りをあげてかれらを包みこむ。視界を阻まれながら、白刃が白刃を嚙んで、鏘然と哭いた。
城之介は、この中で一刀をおくりこんでいる。殆ど、盲滅法だった。闇と煙がその効果を判然させなかったが、しかし、杉浦の悲鳴が聞え、斬撃の手応えはあきらかに骨を断ったそれであった。
そのまま、城之介は衣紋坂を走った。
もう火は港崎町の屋根や桜の梢にも舞いおり、そこここに、炎を吹きあげていた。
遊女たちも客もぐっすり寝込んだころであった。早発ちの客、夜半に帰った客は別として、ここは流連が多い。ほんとうに遊女たちが眠るのは、午前の四時ごろから昼前までである。この眠りの時刻に火を発したのだから、遊廓はそれこそ寝耳に水だった。
ひとつには、このヨコハマはもともと寒漁村だったのを、沼地を埋め立て、葦を刈って波戸場をこしらえたりしたほどで、いうならば水は多い。海と川に取り囲まれた異人居留地で、火の心配は少なかった。

火を消す水に不自由はしないと思われていたのである。
事実、水は豊富だった。だが、消火には人手が要る。火を消すのに水が役立つのは、初めのうちである。猛火になってしまっては、竜吐水くらいでは、それこそ、篝火に蚊の涙、でしかなかった。
もう少し遅れたら、城之介は大門の橋を渡りきることはできなかったろう。遊廓の中にいるのは、遊女と客ばかりではない。男女の芸者もいれば、茶屋の者がいる。弁当屋もあるし、それぞれの見世ではたらいている老若男女など、二三千人の人数だった。
火事だ、豚屋が火事だ、末広町が燃えてくるぞ、という叫びで、眠りを覚まされた男女が、手まわりのものをかき集めて、それっと逃げだしたところだった。
欲を張って荷物を持って出ようとするから、混雑は凄まじい。はじめのうちはそれでも、大門から橋を渡りきって、衣紋坂の高札場から田圃の方へ逃げだした。この連中は命びろいしたが、あとになった者は出ることが出来ない。
遊廓は、埋立ての田圃の中に作ったもので、広さは、いまの横浜公園そのままの四角いものだった。まわりは濠を掘って、娑婆と隔絶している。これが、大火事の際のいのち取りになった。
ちゃんとした橋は、大門にあるだけの一方口で、〝左と後ろは深い沼、右は海で六尺計り隔て波除けの畷があって、夫れへ撥橋が一ツ在ったのが非常口〟だったから、袋の中から、一遍に飛び出そうとするようなものだった。
——今思い出してもぞっとするのは、大門の左側に三階建の富士見楼というのがありまして百二三十人も女郎衆が居ました。太夫職は皆三階に部屋を取っていたのですが……ゆっくりと寝込んだときの火事で、殊に火元は近いしひどい大風でしたから、火元のまだ焼け切らないうちに廓は一面の火になったというくらいでしたから、富士見楼では、それ火事だというと二階の者を起しに廻っているうちに、もう下へ火がついたから三階へ起しに行くことが出来ない、三階の太夫たちは物音で目をさましたが、下は一面の火の海でどうすることも出来ず、ただ泣き叫んで、手すりから彼方をのぞき、此方をのぞきしてうろうろしている。下では鳶の者がきっと助けるから沼の方へ飛び降りろと騒いでも、思いきって飛び降りられなかったと見えて、ただヒイヒイと泣き叫んでうろうろしているうちに、髪の毛へ火が移ると、その太夫衆がきりきりと回って遂に焼け死んでしまいましたが、実に凄いとも恐ろしいとも申し様がなかったと鳶の吉と申す人の話でして……
火の回りの早かったことと、周囲が濠と沼で、逃げ道が細すぎたことが、悲惨な結果になってしまったのだ。

城之介は、人波をかきわけて、芸者長屋へ急いだ。
泣き叫び、喚きたてる声が、漸くうすれてきた夜の色の中で満ち満ち、方角も何もわからないような混乱だった。
早くゆかなければ、雪乃も小蝶も、この混雑の中で、離れ離れになってしまうにちがいない。城之介は人波からやっと抜けて、見おぼえのある小蝶の家へ飛びこんだ。
「おう、雪乃！」
「ああ、城之介さま」
「間に合ったな、さあ、逃げるんだ」
雪乃は身一つで小蝶のところへ世話になったのだから、自分の財産などないが、小蝶には、着物や髪のものが沢山ある。
幾つもの風呂敷包みにして、持ち出そうとしていたので遅れたのだ。
「そんなものを持って逃げられはしないぞ」
「そうかしら、でも」
「思いきりよくするのだ、いのちだけ助かるようにするのだ。第一、もう大門からは出られない」
「え！　それでは、撥橋の方は」
「そっちも難かしいだろう」
「では」
「とにかく、出ろ、早く」
着物は持てない。小蝶は髪のものだけ包みこんだものを、手首にくくりつけた。
外へ出ると、もう、火ノ粉の舞い落ちてくる中で、泥のような流れが、衝突したり渦を巻くように、雪崩れていた。中で刀を振りまわしている奴がいた。またそれを荷物で殴りつける奴もいる。
助かりたい一心の人間たちが、遊廓の中で半狂乱になっているのだ。昨夜の歓楽がまださめぬところに、この地獄だった。普通の街の罹災者ではない。遊廓という特殊地帯での奇禍だけに、人々は一層、狂ったようになっている。
同じ焼け死ぬにしても、遊廓の中で死んだとあっては、親にも子にも、一族にも世間にも、見っともなくてならないという気持が日本人にはあるし、異人たちにしてみれば、一刻も早く、居留地へ戻って整理しなければならぬものがある。船乗りたちは、散々、水で苦労してきて、大地を踏みしめたら、遊女の熱い肌で灼かれたいと思ったのも、この炎では、やりきれない。やっぱり船がおれの家だとばかり、帰るのに焦っているのだった。
「こうなったら、しかたがない。濠を泳ぎ渡るしかない」
「あたし泳げません」
と、雪乃はかれの腕にすがりついたまま、泣き顔を見せた。
「あたしだってさあ、芸者が泳げるものかね、海女じゃあるまいし」

「とにかく、濠のところへ」
と、ゆこうとするのを、
「金比羅さまのほうへ、みんな行くじゃないか」
大門を入ったまま、桜並木を突き当った左が岩亀楼だが、この突き当りが濠を穿ったときの泥を盛り上げて、小高い丘になり、金比羅さまを祀ってある。日ごろ芸者や遊女が信心している。
讃岐の金比羅さまを勧請してきたのであろう。
そのせいであろうか、数十人が、御社も見えぬくらいにそこへ集まって、騒いでいるのだ。
小蝶がそっちへ走りだしたので、しかたなく、城之介と雪乃もそちらへ向った。
金比羅さまのうしろは深く広い濠で、むろん橋はない。が、一人の異人が小舟を操って来て、乗せようとしている。
その小舟は、城之介が用いて、葦の間に突っこんで隠していたものである。
末広町を焼く火が、あるいは、小舟を照らし出したのかもしれない。
「あわてるな、順々に乗るのだ」
城之介は叱咤したが、もう耳を藉すどころではない。衣紋を乱し、髷が崩れた女たちは、先を争って雪崩れていた。
遊廓の建物には、あらかた火がついて、猛火が、渦を巻き、ごうっと、唸って、かれらを包みこもうとする。三方を火で包まれて、一方しか逃げ道がないとすれば、それもしかたはなかったが、秩序のない逃避行は、徒らに混乱を増し危険が増えるばかりだった。
『静かに、あわてないで、順々に』
と、異人が大声で制しているが、かれらの耳には聞えない。聞えても何を言っているかわからない。理解しようとしないのだ。
どんどん小舟に飛び移る。せいぜい乗っても十五六人――それも、それだけ積めば、ちょっと動いても、舟が沈むにちがいない、そんな小舟なのに、あとからあとから見境なく、乗りこんだのだ。
四五十人はいたろう。たまったものではない。風はあるし、舟の動きは自由にならぬところへこの大人数だから、もろに転覆してしまった。
女たちは海中へ投げ出されると、それきりだ。犬かきもできない。何しろ冬のことだから、厚着している。必要以上に金糸銀糸の打掛けなどを着込んできている花魁もいる。いざとなっても、やはりお職の矜持というか、その誇りがあるのだろう。あるいは、欲だけか。
どちらにしても、重い衣裳が、かえって水中で手足の自由を失わせることになって、命とりになってしまった。
投げ出されても、男たちなら、なんとか、数間のところ

を岸へたどりつく。中には、そんな女郎たちに抱きつかれてもろとも沈んでしまった者もいる。
この舟をまたもとへもどして水をかい出し、漕ぎ寄せる。
『こんどは十人ずつだ、何度も運ぶのだから……』
言いもあえず、また、どっと押しかけてくる。こうなると、もう動物と同じだった。ただ恐怖が、彼岸へと駈りたてた。
人数が多ければ同じことだ。ふたたび舟は転覆した。こうして三度もひっくりかえり、そのたびに何十人かが溺れている。
「愚かな、何といえばわかるのだ」
城之介は、腹立たしく、情けなくなった。が、無理もないのだ。風は容赦なく火ノ粉を舞わせるし、岩亀楼を焼く炎が、髪や着物に燃えうつる。中には泳げもしないのに、濠へ飛びこんだ女も多い。それも出来ない者は、着物を脱いだり、袖をひき千切って水に浸して、頭からかぶって、火を避けるというふうだった。
「さあ、こうなればしかたがない、飛びこむぞ」
その城之介の言葉で、小蝶は身を翻している。
「もう大分、すいたようだよ、撥橋の方に行こうよ」
濡れ片袖を頭にかぶって、ひきかえしたのだ。
「小蝶、そっちは駄目だ」
両側の娼家は、燃えさかっている。桜並木もばりばり音を立てて燃えているのだ。その間を走るのは無謀というしかない。
「お姐さん、待って」
雪乃も止めたが、小蝶はもう憑かれたように走っていってしまった。
家の棟が崩れて、火柱が天に沖した。桜の樹が道をふさぐように、太い梢を焼き落す。小蝶は通りぬけたか、それらの下敷きになったか、わからない。
「ああ、お姐さんが……」
「しかたがない、こっちにも火がつくぞ、飛び込もうぞ」
城之介は雪乃を抱いて、濠へ飛びこんだ。
まだ濠の中には、助けをもとめて、水を叩いている女が多い。それらの手を振り切るのは、辛いことだが、数人に抱きつかれては、ともに溺れてしまう。
片手泳ぎに、泳ぎきって岸へ上って、城之介はほっと一息ついた。雪乃を無事に救ったことで肩の荷をおろしたような気持だった。
こうしたときは非情になるしかなかった。
岩亀楼や五十鈴楼など大厦高楼が崩れ落ちるごとに、舞いあがる火ノ粉がみんなの頭の上に落ちてくる。
もう火は運上所を焼き、居留地を火の海にしていた。
夜は明けていたが、ヨコハマの空を蔽った黒煙と炎は、熄む気配もなく、どこまでも火の舌を延ばしていた。

どこまでもといっても、このヨコハマは、海と大岡川とに劃られているから、水を越えて類焼する危険は少ないと見てよかった。隣接した聚落は、谷戸橋向うの元村だけであり、吉田橋の先にはまだ、大きな町造りはなされていない。ずっと吉田新田がひろがり、さきごろまでフランスお傭い士官による三兵訓練の陣屋あとが築地の崩れそのままに残っているだけだった。
もはや、こうなったら、ヨコハマは全域、灰になるしかなかった。因みに、この遊廓で死んだ男女は五百人近かった。
「これで、おれも、ヨコハマを立去ることが出来る」
と、城之介は笑った。
「運上所が焼けたら、おれのこの土地での行状を記したものは、一切、灰になってしまうにちがいない」
「よかった、城之介さまはただ、仇討ちをなさっただけですもの」
「邪魔をする奴は斬った。役人でも、だ。こちらにしてみれば、役人もやくざも同じことなのだが、権力の座にある者は、そうはとらぬ」
「……」
「不遜で、不逞な輩と思うだろう。おれは、科人として、追いまわされることだろうが、それも、役人どもが生きていて記録を再生する記憶力があればの話だ」
太田新田には数千人の人々が逃げてきて、泣いたり、放心したように、坐りこんでいた。
その間を縫うようにして、城之介と雪乃は歩きだした。
ヨコハマ開港以来の大火事になっていた。役所も居留地も関内も、すべてが焼けたということは、政治の権力も組織も、一時的にせよ、壊滅したにひとしかった。
城之介の桎梏は解かれたといってよかった。
だが、その安心は早かったようである。群集の中から、あいつだ、という声が聞えたと思うと、イギリスの赤隊が数人、剣付鉄砲を光らして、ばらばらとまわりを取囲んだのである。
『ジョー！　お尋ね人のジョーだな』
恐れ気もなく、城之介は雪乃をかばって、この連中を見廻している。
『その通りだ、柊城之介だとしたら、何だ』
『逮捕する』
『またか……こんな際にまで、そういうたわごとをいうとは、えげれすという国の軍は、よほど頭の悪いやつばかり揃っていると見える』
『黙れ、女王陛下の軍を侮辱するのか』
『馬鹿だから、馬鹿といった。君らの隊長はどこにいる？　無実のおれを追うより、お救い米の握り飯でもくばったほうが、赤隊のためだろう』

中の一人が、その口に鉛玉をぶちこんでやろうか、と言った。赤隊は六人。煤で汚れた顔に眼ばかりが、青いのや灰色のや、とりどりに光って見えた。

武士の盃

『――これだけ多勢の人間が焼け死んでいるというのに、まだ殺し合いをしたいのか』

柊城之介には、この英国の兵隊たちを相手に斬り合いをする気がなかった。

新開地ヨコハマの繁栄と景気に終止符を打つ大火事の最中である。黒煙は空を蔽い、熱風が吹き荒れ、火ノ粉が舞い、家も樹木も焼けていた。

日本家屋ばかりでなく、異人たちの誇る洋館も、燃えていた。低い日本家屋と違って、洋館は二階建でも天井や屋根が高い。その燃えあがるさまは凄まじく、潮風が高みの炎を囂々と吼え狂わせて、炎の刷毛で撫でてくるのである。

港崎町遊廓をめぐる濠割では、まだ助けをもとめる声が悲痛に渦を巻き、そこここを男女が馳せ交って、子は親を、妻は夫を探して、喚き叫んでいた。

子供が泣いていても、誰もかえりみる余裕はなかったし、火事場泥棒が、他人の品物を担いで走っても、咎める親切もなかった。

たとえ、無頼の者が女人を強姦していても、人々は見過

して走ったろう。その火炎地獄の中で、英国の赤隊が城之介へ迫ってきたのは、ただに容疑者逮捕という低次元のものだった。

『おれを狂犬のような攘夷浪人と同じに思っているのか』

雪乃を背後に庇って城之介は懐中に手をさし入れた。指がピストルに触れた。

『きさまらの国でも仇討ちはあるだろう、権力に抵抗するには、こうするよりほかになかったのが、理解できないのか』

英国兵たちは、青い眼や灰色の眼を見合せて、逡巡したが、この混乱の中でもかれらには、手柄を樹てるという功利性しかなかったようである。

『ローニンのジョーを捕えれば、階級が上るぞ』『勲章ものだ、うまくいきゃ、ロンドンに帰れるのだ』『そうだ、何か手柄を樹てなければ、いつまで経っても、こんな極東の小島で暮さねばならん』『やれ！　こいつ捕えなくてもいいのだ。殺したっていいのだ』

攘夷浪人の異人斬りにおびえている居留地の連中にしてみれば、たしかにローニン狩りは手柄になる。城之介の行動が、たとえ仇討ちであろうとも、居留地の人間が恐怖したのは事実なのだ。城之介を逮捕あるいは殺すことは、英国領事や条約国居留民を安心させ喝采させることになるかもしれぬ。

が、すでにその居留地も、ヨコハマ全部が、壊滅状態になってきているのだ。

『おれと殺し合うまえに居留地の女子供を助けたらどうだ』

城之介が懐中のピストルをつかみながら、一抹の懸念があったのは、さっきの濠を泳いだときのことだ。ピストルは濡れていても、雷管の場合には発射が出来る。が、万一のことがある。もしも発射できなかったら、それっきりになる。

たしか、弾丸は六発こめたままであった。

英国兵は六人――一発の無駄弾丸も許されない。ここで、ピストルをつかみ出すことは、一か八かの賭になるのだ。

自分一人ならば、英国兵の群れの中に飛びこんでしまえば、長い鉄砲に比べて有利であることは事実だが、雪乃が危険だった。

その危険を冒す気にはならなかった。

『お前たちは、居留民の保護のために来ているのではないか。火事から助けだすのが役目だろう』

説得しながら、城之介は、じりじりと、あと退りしていた。火事の場から遠ざからねばならない。居留地にいればこそ、英国兵に特権がある。

猛火はますます狂おしく、居留地を焼いていた。さすがに、英国兵たちも、そちらが気がかりになったようである。

運上所も火に包まれているし、書類が焼けてしまえば、城之介の問題も打ち切られてしまうだろう。
二三人が、顔を見合せ、踵をかえした。
残りの者は未練気に、舌を鳴らし、足踏みしていた。
どちらをとるかと、迷っていたらしい。が、洋館の一つが焼け落ちて凄まじい轟音とともに火炎を中天に噴きあげるや、どどっと群集が雪崩れ、阿鼻叫喚が、ひときわ突風のような烈しさで、かれらに襲いかかった。
この熱の渦が、赤隊を決断させたといえる。
一人が、憑かれたような顔で、きっと城之介を見た。
『……』
何か叫んだ。
何と言ったか騒音にまぎれて聞きとれない。
が、その表情と鶏の叫びのような金属的な声は、狂人のそれを思わせた。平凡な人間でも、発作的な狂気に憑かれることがある。あの眼であり、あの声だった。
咄嗟に城之介は、雪乃を突き飛ばしている。
「危ない！」
殆ど同時に、その男の銃剣が火を吹いた。視界が真っ赤になった一瞬、焼火箸で貫かれたような激痛を、左肩に感じていた。
城之介は、おのれのからだが、独楽をまわすように一転するのを知ったが、右手は反射的に懐中のピストルを摑みだし引金を引いていた。
激痛と衝撃で目が眩みかけたが、赤隊の強烈な色彩が、その咄嗟の間にも、目標をあやまらせなかった。
連発が効果を発揮した。硝煙の中に赤隊の怒号と叫喚と罵声と――辛うじて発砲した者もいる。が、これは、城之介の頭上を高く、虚しい弾丸を飛翔させたにすぎなかった。
四発撃ったのが、確実に四人を斃した。
「城之介さま！」
「逃げるんだ、雪乃」
混乱が幸いだった。先に踵をかえした連中は、この銃声に気づいたかどうか。
鮮血を滴らせて、城之介は走った。雪乃も走ってくる。
「谷戸橋も混雑しているぞ」
向うから、そんな声が聞えてきた。
群集は狼狽し、逡巡し、逃げ道を失っていた。
「とにかく川べりまでゆけ、少しでも火から遠ざかることだ」
大岡川が囲繞している居留地の南の端に出たとき、対岸の元村の者たちが、小舟を出し、梯子や板を渡して、急造の川橋を作っているのが見えた。
「行け、雪乃」
「城之介さまは」
「おれのことは心配するな」

執拗に赤隊の連中が追ってくるのが見えた。
弾丸はあと二発しか残っていない。
「行くんだ。根岸に行って、お由のところを探せ。世話くらいしてくれるだろう」
「でも、城之介さまは」
「あとから行く。行けたならば」
行けたなら……そうだ、城之介の人生には、いつも不安がつきまとっていた。暗い道であった。道標のない藪を進むような危険が行手に潜んでいた。その人生にとって、約束は無意味であった。
僥倖に望みを托すしかない道なのである。城之介は群集の中を縫って走りだしていた。
火から逃げ惑う群集の中を、城之介は谷戸橋の方へ走った。
赤隊の目をそらすためであった。雪乃から引離すため、火の中を突っ走ったのである。
赤隊はいままでいたなかまが、あっという間に殺されたことで怒りに狂っていた。
『撃て、彼奴、逃がすな』
滅茶滅茶に撃ってきた。その逸れ玉で傷つき倒れる者もいた。
城之介はこれを狙い撃ちに倒した。が、二発きりである。
二人を倒したあとにはピストルは役に立たなかった。
オランダ舟大工の屋敷が崩れ落ちたのが、しかし、城之介の姿をかき消すことになった。
もう谷戸橋は逃げ出す人々でごったがえしていた。大半は異人たちだった。いうなれば異人たちの逃げ道は、この橋か、海上しかなかった。
『ジョー』
海岸通りで呼び止められたのである。赤鬚が見えた。アレキサンダー・M・ウエッダーである。医者である。火傷を負った者たちの手当をしていたのである。
『まだ生きていたのか』
『あいにくと、死神は離れたようだ』
と、城之介は笑った。
『そっちを持ってくれ』
怪我人の頭の方を抱えると、城之介に足の方を持って貰い、ウエッダーは、バッテイラに運びこんだ。
『あの船だ』
沖に浮んでいるアメリカ船に、赤鬚の顎をしゃくった。
火と煙に汚れ煤けて、誰もが、目ばかりを光らしていた。手柄を争う兵隊でなければ、城之介に敵意を抱く者は、すでにいなかった。
居留地が、ヨコハマがすでに修羅の火炎地獄になっているのだ。

柊城之介の心を苛んでいた修羅は、居留地の人々のすべてを蔽い、バッテイラやはしけの上から、茫漠とした眼を向けているだけだった。

『ヨコハマは消えた』

と、ウエッダーは言った。

『ジョーも消えた方がいいだろうな』

『……』

『復讐だと言っていたが、そいつは終ったのかね』

『半分だけな』

『半分やれば上出来だ』と、ウエッダーは面白そうに笑った。『人生の目的は半分達成できれば、いうことはないさ』

『そうだろうか、日本人とアメリカ人は違うようだなドクター。おれは一度心に決めたことは、中途で止めぬ』

『しつっこい男だ。はははは、私はそんなジョーが好きだ』

からだの半分が、知覚を失っているようであった。

城之介は左肩の傷口を、海水で洗った。痛みはふしぎと感じなかった。未完の復讐に終止符を打つような黒煙と火炎は、海上から見るヨコハマを全く蔽い尽していた。

その酷薄な炎の下に、あの華麗で貪欲な日本の中の異国、ヨコハマ居留地の姿は埋没されてしまった。

文明の流入とともに、虚飾と偽善が横溢し、真実は失われ、巧言が満ちた。淑徳は嘲りに汚れ、淫楽が淳風を侵した。嘗て松籟の音に漁師が安らぎを得た静寂さは、けたたましい喧騒に毒され、金貨銀貨が、その響きで、人間を翻弄するようになった。

寂びた美や、静かな愛や、含羞の情緒とでもいったような日本人の徳性は、後進性の名のもとに、一蹴され、欲望を剝きだしにした醜悪さを是認する街が出現した。

居留地は通商条約による開港と、それに伴う異人の対日貿易の拠点であったが、世界中から流れ者あぶれ者が集まったのだ。本国では生活できないような食いつめ者たちが大半だったといえる。

そうした連中の行動挙措までが、文明と錯覚したところに、ヨコハマの誤ちがあった。洋館や洋燈や馬車を文明と呼ぶなら、それに随伴した卑猥さ、野獣性、侵略性の悪徳もまた、文明の持つ必然として許容されねばならないものだったろうか。

それらの矛盾を孕んだ街は、ひたすらに燃えていた。

その炎は、すべての悪徳を燃焼し尽し、美しい炎でもって浄化するもののごとくに見えた。

豚屋火事の混乱の中から脱出した柊城之介の消息は、アメリカ商船トムソン号に収容されたことまではわかっている。

機帆船トムソン号の船上で決闘が行われたことが目撃者

によって後に語られたが、それが浪人ジョーこと柊城之介の消息の最後になった。

この居留地の火事では、海上への脱出者を大小の船舶が収容するのは、国際的な慣例でもあったため、誰かれのきらいなく、収容され、船内は混雑をきわめていた。

この中に、玄徳と黒人トムの姿が見えた。

「ジョー、助かったよ」

玄徳が真っ黒に汚れた顔で、とんできた。

白も黒も黄いろも、あらゆる人種の坩堝のように、一緒くたの船内であった。恐怖がさめず、不安におどおどした顔や疲れきって、ものもいえない男女が、ごろごろと鮪のように横たわっていた。

上半身裸で、黒光りした肌の黒人が近づいてきたと思ったら、これは馬車を乗りまわしていたトムであった。

『トムか、馬車でエドへでも逃げたのかと思ったぞ』

城之介は黒光りの鋼鉄のような肌を呆れたように見た。

『馬車は他人のものだね』

と、トムは白い歯を見せて、けけけと笑った。この男には、惨禍の翳りはない。

『このからだはおれのものだね』

ぱっしぱっしと、胸を叩いた。小気味いい音がした。逞しい五体さえあれば、どこにいっても食えるという原始的な自信が、黒人を支えているのであろう。

「ジョー、ヨコハマが無くなる」と、玄徳には、おびえがあった。

「ナガサキ、帰るか」

長崎！

そう考えたことはなかった。長崎は故郷ではあるが、城之介には、哀しい記憶の方が強い。

「長崎か……」

首を振って、

「おれは戻っても、何もない」

しかし、それは玄徳にしても同じだったのである。

「アメリカ、行くか」

長崎が駄目なら、亜米利加、と右隣りか左隣りかというような、きわめて気楽な調子だった。

城之介は、江戸か博多へ身を落ちつけるつもりだったのである。

無造作にそう言われて、

(なるほど、おれたち日本人とは違うのか)

あらためて思った。

華僑の玄徳にしてみれば、ヨコハマもサンフランシスコも同じだったろう。長崎から一転して太平洋を越える話にも、なんの矛盾もなかったのだ。

黒人の強さ逞しさ、華僑の生活力と風媒花のような粘着性、それらの持つ生命の実在感の相違を、城之介は疲労の

底で想った。
舷側に騒々しい声をひびかせて、ひどく肥満した赤鼻の一見英国人と見える男が上ってきた。
ひどい目にあったぞ、これだから、野蛮国は嫌だというのだ、こんな目にあうくらいなら、貧乏してもロンドンでお茶を飲んでいるほうがましだった、一体、消火道具もないとは、奉行所の役人どもは何をしていたのだ……そんなことを早口に喚き散らして、公使館領事館の焼失は、全部日本政府に弁済して貰わねばならんと、一人でいきまいているのだった。
領事かその下くらいの身分なのだろう、傲慢な感じに、心ある者は眉をひそめた。
四五人の部下がついていたが、この男の尊大さにブレーキをかける者は一人もなかった。逆に、甲板の一部をあけるように、船員に命令していた。
大小の荷物をかかえた雑多な人種が、このジョンブルの眼には、野良犬の収容所のように見えたかもしれない。
『だいたい、犬と東洋人は、石炭置場に寝るものと決っているのに、どうしてここにいるのだ、黒いの黄いろいの』
『そうだ、その死にかけた犬どもを退かせろ』
唾を吐かんばかりの英国人たちのこういうときの顔は、どの顔にもついている亜麻色や赤茶けた鼻髭顎鬚が威嚇の道具立てだということを暴露したようなものだった。
船長が抗議したが、それも、所詮はおざなりだった。米国人と英国人に共通の大国意識が、馬脚をあらわすのに時間はかからなかった。
『黄色と黒は船底に行け』
船長の意を体して、船員が犬を追いたてるように手を振った。
他に日本人は見えなかった。華僑と黒人だけであった。そうした差別に憤る者もいない。
城之介は黙って立ち上ると、
『みんな、そのままにしていろ、同じ人間ではないか。いや、ここはまだ日本なのだぞ』
それから、つかつかと、肥満した赤鼻のジョンブルの前へ進み寄った。
大小を帯した城之介の姿に、さっと畏怖の色が掠めた。かれを〝ジョー〟だと知るには、みんな動顚していたし、お互いに汚れきっている。役人こそ月代は伸ばしていないが、儒者や医者は総髪や茶筅髪が多く、また無頼な連中には月代のむさい者がいる。すぐにローニン・ジョーとは思いあたらなかったようである。
かれらが畏怖したのは刀だった。
が、城之介は刀に手をかけなかった。部下の一人が抜きだしたピストルを手刀の一打ちでとりあげるや、弾倉をあけて、弾丸を全部捨てた。そして、一発だけ、こめた。

どうなることかと、誰もが、瞠目していた。別の奴がこれはライフルだったが、持ち直したところへ、ぱっと山高帽がとんできて銃口にかぶさった。
これは、医者のウエッダーだった。
『帽子かけにしては妙なところにあるようだ』と、皮肉にかれは言った。それから、『そいつに穴をあけないでくれ、傷口を縫い合せるというのは、大変なことだからな』
これで機先を制されたのである。
城之介はピストルに一発こめるや、蓮根弾倉をくるくると廻した。それで、しかし、ジョンブルを狙うのではなかった。
くるりと一転して銃身をつかむや、かれの手に押しつけたのである。
『先におれを撃つがよい』
平然として言い放った。
『但し、五回だ』
『五発も!!』
『チャンスは六回に一回。五回は、きさまが引金をひいていいぞ』
『……』
『おれの目の黒いうちは横暴を許さぬ。五回、引金をひけ。だが、それでおれが死ななければ、最後の一発は、おれがきさまを撃つ』
運を天にまかせた。死地をくぐり抜けてきた城之介である。運がなければ、最初の一発で死ぬ。
(それでもいい、やることはやったのだ)
この船上で、城之介の刀法がいかに巧妙でも、一人で数十人を斬りまくって勝つことは難かしい。同じ死ぬならば、九死に一生を得られる運に頼るほうが賢明であった。
他の異人たちも、先進国の優越感は持っていたとしても、事態がここまで発展すれば、冷静さをとりもどすに違いなかった。
『さあ、やれ』
城之介は帆柱を背にして立った。
赤鼻のジョンブルは、うつつにピストルをかまえはしたが、顔面は真っ蒼になり、手がぶるぶる顫えていた。
『どうした、撃て』
城之介は微笑した。
『撃てないのか、きさまの方が有利だぞ、勝ち目は五対一だ』
城之介は空を見た。ヨコハマを焼く煙は天空を蔽っていた。その空のもとで、城之介は死ぬべきいのちを、奇蹟的に免れてきたのだ。かれの復讐行為が、天人ともに許さざるものだったら、六孔の中の一発が、かれのいのちを断つだろう。
(それでいいのだ)

逆らって渦巻き流れていた。

涼しげな微笑であった。

　勝負はついた。一度の撃鉄の音も起すことなく、終った。船室からでてきたプラチナブロンドの老人が、絹半布でかぶせるようにして、ピストルを奪いとったのである。

『止めるがいい、これは殺人だ』

　もうそのときはジョンブルはあの傲慢さとは別人のように、大きなからだを間誤間誤させて、このいいときに来てくれた仲裁人に感謝したい気持になっていた。

『わしも言いすぎたようだ、火事で気が動顚していたのだ、水に流してくれ』

『それは、あのジョーに言うがいい』

　城之介と知っていたのである。ウェッダーが立ってきて、老人を紹介した。アメリカ人の船主だということであった。

『君のことをいろいろ聞きたい。船室へ来てくれないか』

　老人は言った。城之介は急に疲れを感じた。このまま、崩折れてしまいそうな安堵の疲労だった。

『美味い酒があるよ』老人は柔和な微笑を浮べて言った。

『決闘のあとの一杯はいいものだ。この国にはサムライの盃という言葉があるそうじゃないか、来給え』

『馳走になります』

　城之介は船室の入口で居留地をふりかえった。あらかた焼け尽したように、火勢は衰えを見せていたが、冬の空を蔽う黒煙はなお湧きだしてはむくむくと盛り上り、潮風に

装画　原田維夫

城之介非情剣（じょうのすけひじょうけん）―一人（ひとり）ずつ順々（じゅんじゅん）に―　定価六五〇円

昭和四十八年四月十日印刷
昭和四十八年四月十五日発行

著者　早乙女貢
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話東京（〇三）二六〇―一一一一・振替東京八〇八番
印刷　東洋印刷株式会社
製本　神田加藤製本

（乱丁、落丁本はお取替え致します）

天下の美女　山口瞳

人それぞれの心の奥に秘めたものをデリカシーと羞恥心とで語る私小説風コント集五十二編。男でなくては分らない喜びと悲しみがキラリと光る男性自身シリーズ七冊目。　四三〇円

敵討ち　池波正太郎

ゆえなく殺害された仇をもとめて雌伏すること十数年、親の敵を晴らす必殺剣！　敵討ちを主題とする「上意討ち」「逆転」「刃傷」「激情」等七編を収める傑作時代小説集。　四八〇円

泰平の底　―主水湯女（もんどゆな）ごよみ―　早乙女貢

権力の走狗となるのを嫌って野に下り、繁栄に酔う泰平の世の底辺にあえぐ弱者のために破邪の剣をふるう主水の活躍を、濃厚なエロティシズムをまじえて描く。　五五〇円

かげろうの館　―ルイス・ド・アルメイダの手記―　田岡典夫

戦国のころ、領国を奪われ、瀬戸内海戸島に再起をはかる土佐の王一条兼定。島におこる愛と裏切りの噴炎を、イルマンの手記の形式で描く波瀾万丈の長編。　五五〇円

にっぽん三銃士（上・下）　五木寛之

会社がナンダ！　家庭がナンダ！　女がナンダ?!　七〇年前夜ゲバルトの季節に、東京を蒸発した戦中・戦後・戦無の三代がくりひろげるズッコケ日本放浪。痛快ユーモア長編。　各五五〇円

花神（全四巻）　司馬遼太郎

近代日本の黎明期、彗星のように忽然と現われて、一介の村医者から倒幕軍の総司令官となり、日本全土に〝維新の花〟を咲かせていった男、大村益次郎の奇運の生涯！　各五三〇円

